沖縄県文化財調査報告書　第16集

知　花　遺　跡　群

１９７８年3月

沖縄県教育委員会

知　花　遺　跡　群

1978年3月

沖縄県教育委員会

目次

はじめに…… (1)
Ⅰ　知花遺跡群の範囲確認調査…… (2)
Ⅱ　知花遺跡発掘調査概報……(15)
Ⅲ　竹下遺跡の発掘調査……(99)
おわりに…… (153)

知　花　遺　跡　群

はじめに

知花遺跡群は沖縄市知花の西方，琉球石灰岩丘陵上にある。1960年6月4日多和田真淳・金城盛雄両氏によって発見され，沖縄新石器時代中期を中心とする時期の遺跡として知られている。

1962年8月，採石工事が進行したため，当時の琉球政府文化財保護委員会の事業として，多和田真淳・高宮廣衛・嵩元政秀・新田重清らによって，発掘調査が行われた。その結果，この遺跡は丘陵北半部にいくつかの地点に亘って分布し，時期も沖縄前期を含み中期を中心とし，さらにグシク時代遺跡も形成されていること等が明らかとなった。しかしながら，その内容については今日まで，久しく発表の機会が得られなかったのである。

その後，この一帯はひき続き採石工事が集中的に行われ，かつての丘が内部では巨大な凹地を形成するほどに，その様相が一変してしまった。数年前に採石は終了したものの，今度はその跡地に諸設備が建造されるようになった。また，沖縄縦貫道の南進道路候補路線としても検討されているようである。

このような状況の中で，知花遺跡群の範囲を明らかにし，基礎資料を整えることによって，その保存の措置を講ずることが必要となった。そこでこのほど文化庁の補助を得て，範囲確認調査を行うこととなったのである。

今回の調査によって，従来知られていた知花遺跡群のすべてが壊滅していることが判明し，一方丘陵南半部に新たにグシク時代遺跡の存在することが確認された。(竹下遺跡と命名した）。

そこで，ここに三つの項を設け，まずⅠにおいて範囲確認調査による現況を報告し，次にⅡにおいて1962年に行われた知花遺跡発掘調査の内容を紹介し，さらにⅢとして，竹下遺跡の発掘調査の報告をしたい。各項の執筆責任は次のとおりである。

はじめに	安里嗣淳	（沖縄県教育庁文化課専門員）	
Ⅰ	同　上		
Ⅱ	高宮廣衛	（沖縄国際大学教授）	嵩元政秀　（興南高校教諭）
Ⅲ	安里嗣淳	（人骨は佐野一琉球大学教授が担当）	
おわりに	同　上		

また石器の石質同定については，沖縄県立博物館学芸員大城逸朗氏にお願いした。貝の分類・集計表作成は花城潤子氏の多大な御協力を得，最終的な種の同定については県立那覇高校教諭の知念盛俊氏にお願いした。土器・石器等の遺物の実測・トレースは平安秀子・東江千恵子氏の多大な助力を得，さらに平安氏には該報告書作成作業全般を通じてお世話になった。

ⅠとⅢにおける範囲確認調査，竹下遺跡発掘調査にあたっては，沖縄市教育委員会社会教育課長幸地清祐氏・社教主事仲本朝彦氏にひとかたならぬお世話をいただいた。また，沖縄市婦人会の津嘉山喜代子氏（山内在）・金城幸子氏（宮里在）・新崎タケ子氏（知花在）らには作業員の手配その他種々面倒をみていただいた。ここに記して，以上の方々に心から感謝申し上げる次第である。

Ⅰ・Ⅲにおける調査メンバーは次のとおりである。

調査員　安里嗣淳　　調査補助員　大城洋子，花城潤子

発掘作業員　美里在　金城幸子，喜納初子，新垣千枝子，中村和枝

諸見在　吉本政子，　山里在　津嘉山喜代子

知花在　新崎タケ子，栄野比静子，栄野比ミツ子，栄野比ツル，仲嶺美代子

西銘栄子，比嘉和子，吉田光子，仲村秀子

Ⅰ　知花遺跡群の範囲確認調査

(1) 知花遺跡群の位置

知花遺跡群は，沖縄本島中部地区内陸部の略中央部に位置する（図Ⅰ－1）。　沖縄市知花の城畑原・松本の竹下原一帯にある，独立石灰岩丘陵上の縁辺部又はその小崖下に遺跡は形成されている。この一帯は広大な石灰岩台地となっており，その中に石灰岩の小丘や丘陵が点在し，あるいは細長く延びている。知花遺跡群のある丘陵も，それらの中のひとつである。

沖縄戦以前まで，この丘陵の西側に「白川」と通称される屋取（ヤードゥイ）部落があり，知花の本部落とはこの丘をもってひとつの区切りとしていた。

この丘陵はかつては畑や，樹木の茂る林であったが，戦後大規模な採石工事が行われ，今では丘の輪郭部にわずかにその名残りを留めるだけである。岩肌がムキ出しとなり，雑草が繁る荒涼とした地形に変わっている。（図版Ⅰ－1・2）

丘の西側約4百メートル付近には，「アカイズマー」と称される水量豊かな湧泉がある。先史時代にも湧いていたのであれば，おそらく水源として利用されたであろう。また丘の北側約3百メートル付近は，比謝川の中流域にあたる。この川伝いに西海岸へ通ずることができる。この川より北側は広大な林が展開する。

遺跡群の存在する丘陵上からは，東に金武湾・中城湾（いずれも太平洋），西に東支那海を望見できる。標高は70m前後が平均的な高さである。この丘陵を含めて，知花から胡屋へと断続的に延びる丘陵地帯には，その縁辺や崖下にいくつかの先史・原史遺跡が分布している。

(2) 範囲確認調査の経過と結果

知花遺跡群の範囲確認調査は，かつて多和田真淳氏が発見された地点の，再確認作業を主として行うこととした。氏によれば，この丘陵の北半部の西端・北端部に，沖縄中期を中心とする遺跡が，東端部にはグシク時代遺跡の存在が確認されている。

ところが，前述したように，かなり長期に亘る採石工事のために遺跡は破壊され，地形も変形してしまった。したがって，かつてのような明瞭な遺物包含層はもはや見当らず，岩盤が露出していたり，巨岩塊が集積されていたりというような状況である。（図版Ⅰ－3Ａ）

調査はこのような地形にいくつかの試掘ピットを設けて実施した。（図Ⅰ－2～4）。

以下，地点別にその現況と試掘結果を述べる。

(イ) 丘陵北半西・北端地点（1962年の発掘調査地点）

この地点は，Ⅱにおいて報告する1962年における発掘調査地点である。この一帯は殆んどが採石によって岩盤まで削られて，現在では土の堆積はみられない。前記発掘においてＡ～Ｄ地点に分けてあるので，それに従って現況を記述する。

Ａ・Ｂ地点は遺物包含層の存在した頃は，丘の中でさらにわずかに高くなっていた。現在では岩盤まで削られ，中途で採石工事が放棄されたため，巨岩塊が集積されたままである。かつての遺物包含層は剥ぎ取られ，おそらくこれらの巨岩塊の下に埋没しているのではないかとみられるが，確認する術はない。（図版Ⅰ－２）

図Ⅰ－1　知花遺跡群の位置

C地点は採石によって十メートル余の断崖となり，さらにそこへ巨岩塊が集められている。隣接して屹立していた尖塔状の岩山だけは，現在でも残っている。（図版Ｉ－３Ａ）

D地点は岩盤まで削られたうえに，その北端には小崖下に至るまで岩塊や小礫土が寄せ集められている。この地点だけは発掘が可能と思われたので，丘の北縁端に一ケ所（図版Ｉ－3B），その小崖下に二ケ所（図版１－４），試掘ピットを設けた。（Ｉ－２図参照）。ピット㋑・㋺はいずれも採石工事で押し寄せられた土石層であり，遺物包含層は確認できなかった。ピット㋩は採石工事区域ではないが，地表下30センチ程度で赤土地山となり，遺物包含層は存在しない。

(ロ) 丘陵北半東端地点

かつてグシク時代遺跡の存在したところで，この丘陵北半部ではさらに高くなった微高地であった。現在でも高位置にはあるが，やはり採石によって岩盤まで削られており，遺物包含層はすべて失われている。一部にごくわずかながら自然地形の小崖が残され，その小さな岩陰に石棺に納められた人骨が現存する。

この小崖上にかつてグシク時代の遺物包含層が小規模に存在し，青磁や扁平の石斧が採集されている。また微高地一帯の赤土には，沖縄中期の土器片が散見できた。

試掘は小崖上と下とで各一ケ所実施した。（Ｉ－３図参照）。ピット㋥（図版Ｉ－5 B)は30～40センチ程で赤土の地山となり，遺物包含層は存在しなかった。ピット㋭（図版Ｉ－5A）は３メートル余もの深さの土石や岩塊が，採石工事で寄せ集められた層であった。沖縄中期の土器片をわずかに含む。おそらくこれらの土石は，微高地を削平するとき，この縁端部に押し流したものであろう。

(ハ) 丘陵南半（竹下原一帯）

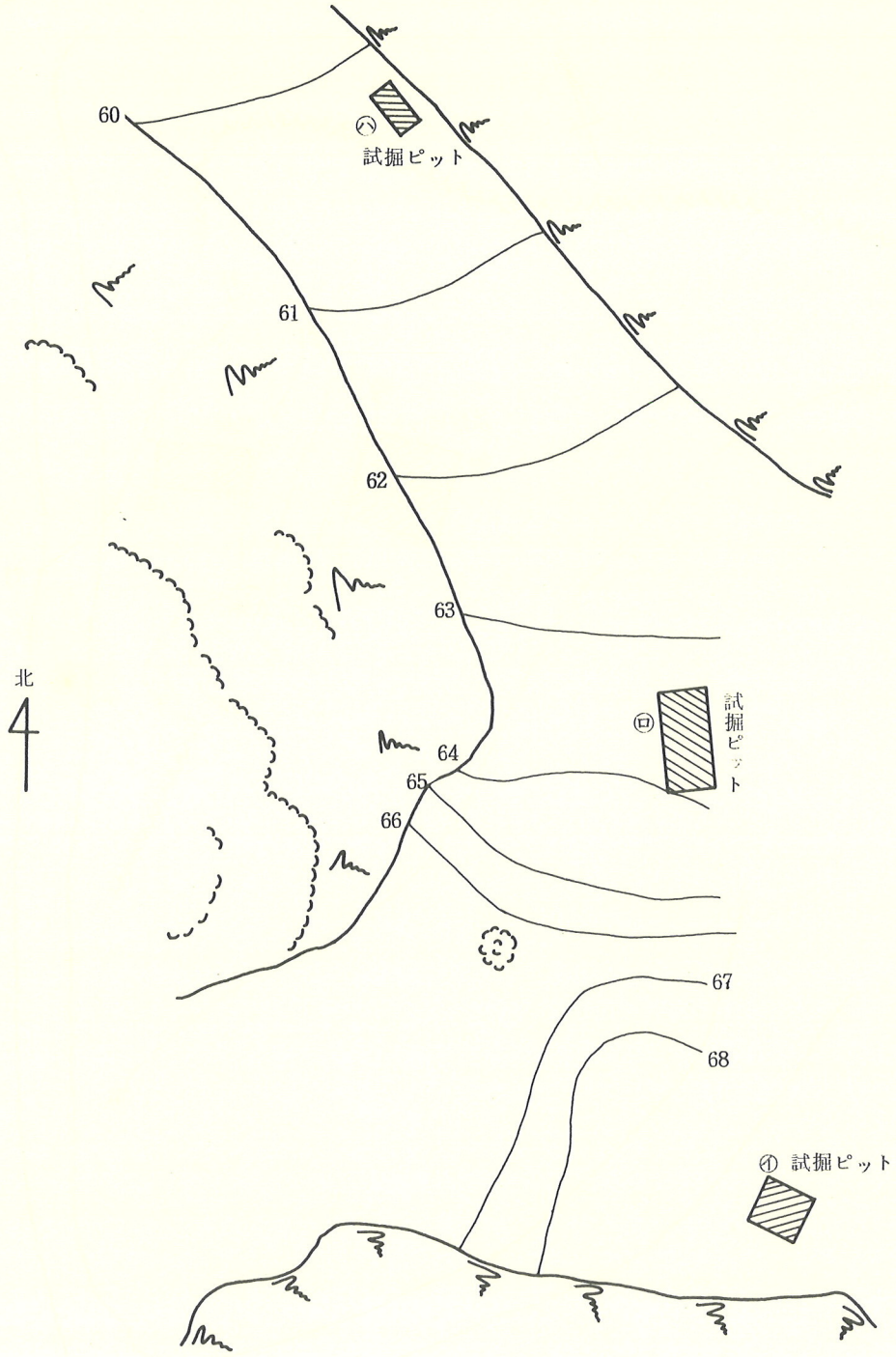
前述の北半地点より約６百メートル南方の丘である（図版Ｉ－２），竹下原に属し，最頂部には測量三角点が設けられている。試掘調査は，この丘陵上に開口する洞穴（拝所）の前庭部，頂上の三角点付近（拝所）および東端崖下（竹下遺跡）において実施した。（図Ｉ－４参照）。

洞穴前庭部（ピット㋬）は表面で土器片が一片採集されたが，試掘の結果は小礫土の堆積であった。（図版Ｉ－6 A)。この一帯も採石工事が行われたので，工事の際に堆積した層である。

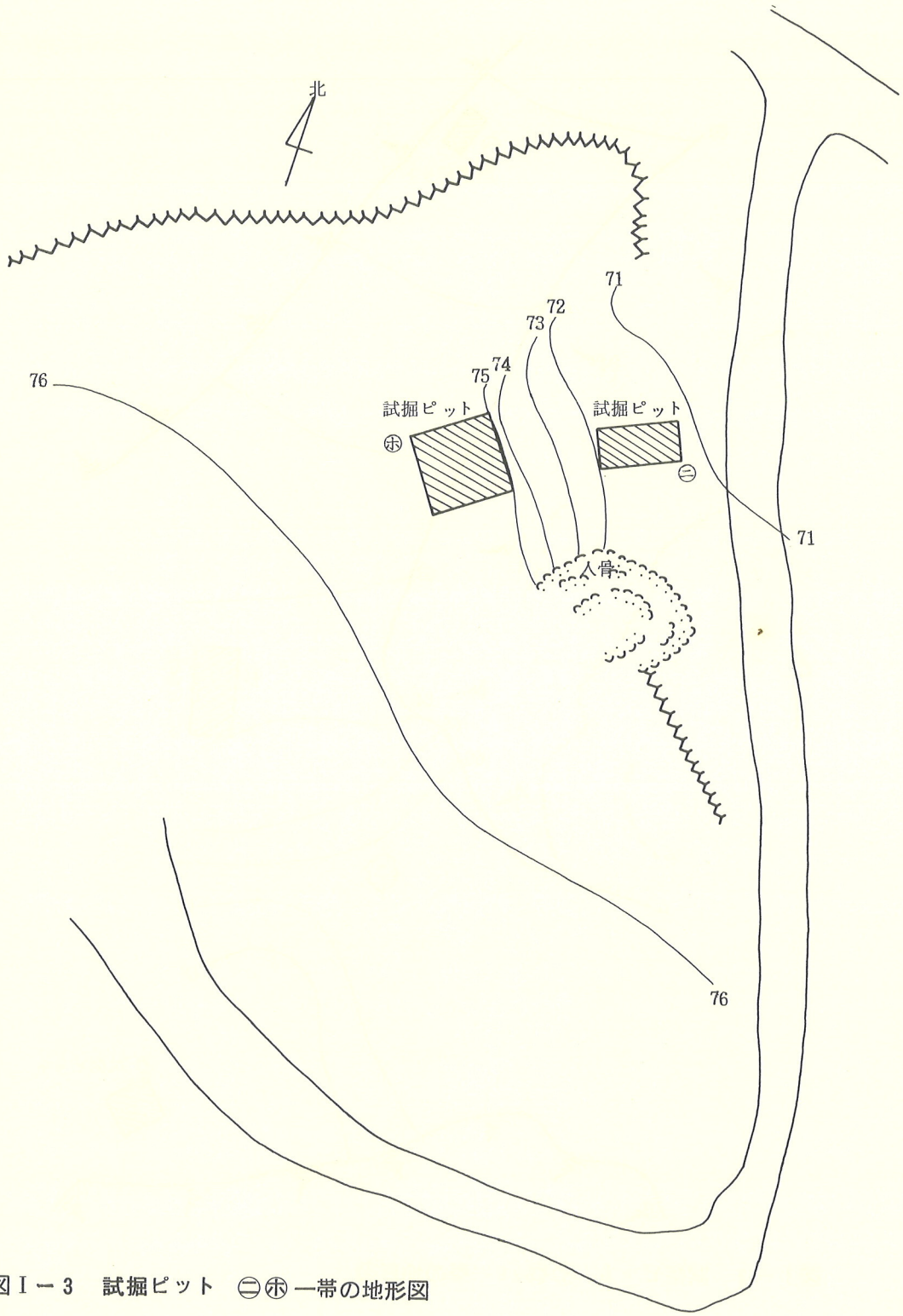
頂上三角点付近（ピット㋣・㋠）は，㋣が15センチ程で赤土地山となり無遺物層であった。㋠は拝所区域内になるが。グシク土器の細片が数片得られた。明瞭な包含層とは言い難いが，この頂上拝所一帯にグシク時代遺物の散布が予想される。

この丘陵南半の中央部は，採石によって二十余メートルの深さの凹地となり，現在そこには８の字形のモーテル（自動車旅行ホテル）が建っている。このモーテルの東側に東面する崖縁があり，採石による地形改変を受けることなく，現在でも林となって残っている。

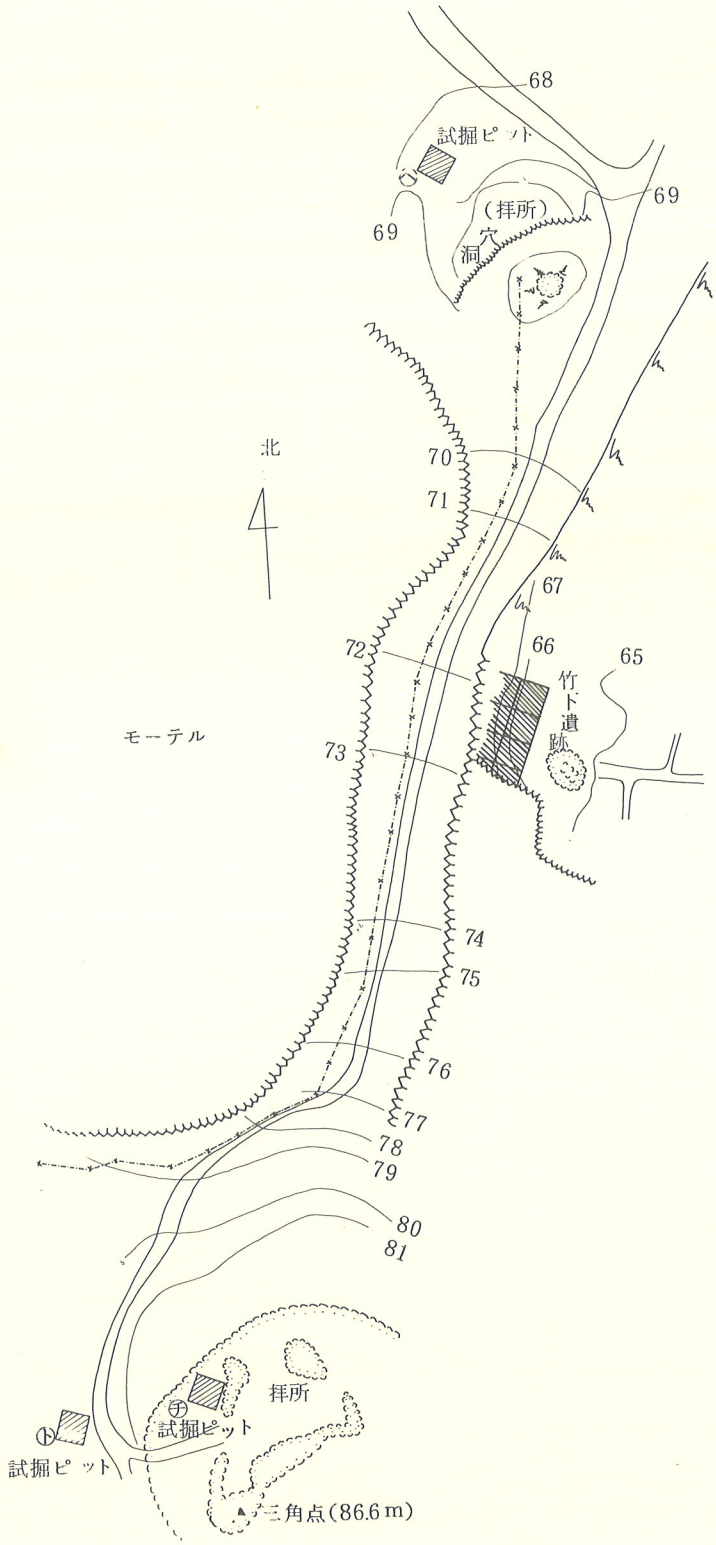
竹下遺跡はその崖縁の約５メートル崖下に形成されている。崖壁に沿って斜方向に遺物包含層が堆積した，きわめて小規模な貝塚の如く思われた。調査の後半はこの竹下遺跡の発掘調査を行ったので，その内容についてはⅢに特に項を改めて報告することにしたい。



図Ⅰ－2　試掘ピット　㋑㋺㋩一帯の地形図



図Ⅰ－3　試掘ピット　㊁㊀一帯の地形図



図Ⅰ－4　試掘ピット　㋑㋥㋒および竹下遺跡一帯の地形図

(3) まとめ

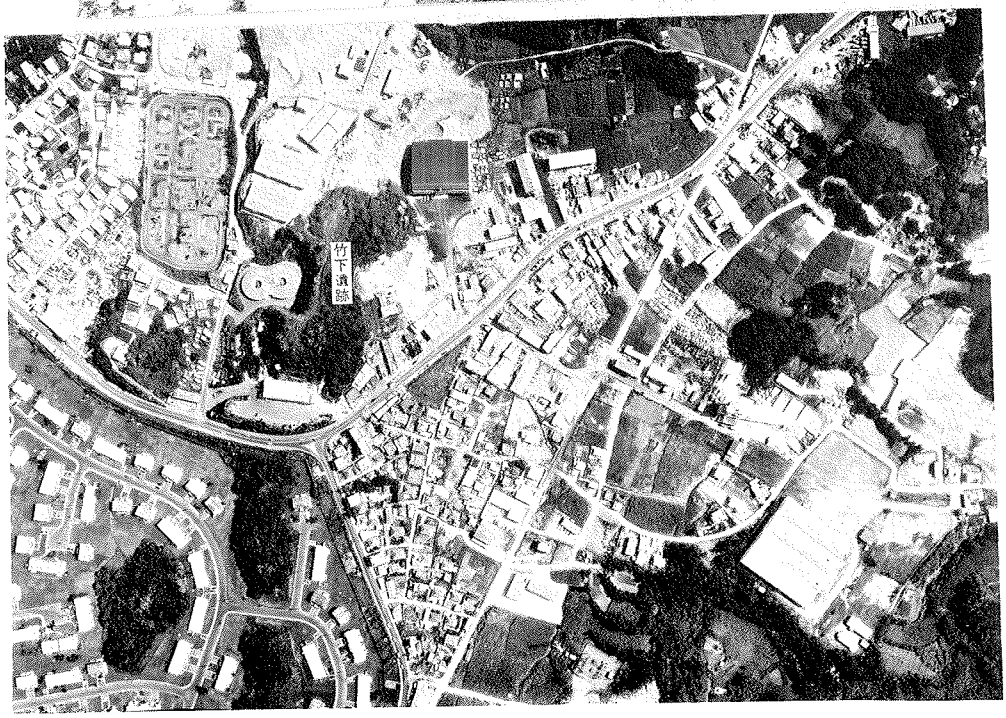
以上範囲確認調査の内容を述べてきたが，周知の遺跡としての知花遺跡群はすべて採石工事によって破壊されたものと判断される。また，丘陵上の殆んどは，遺跡が存在しないものと判断される。

しかしながらこの独立丘陵の東縁斜面及び崖下一帯の林地は，未だ表面踏査程度の概観であり，遺跡が存在しないとは断定できない。この東縁崖下の一角で新たに発見された竹下遺跡の存在は，そのことを物語っている。また丘陵南半の試掘ピット㊀に隣接する洞穴は，かつて沖縄における洪積世人類遺跡分布調査が行われたことはあるものの，表面観察にとどまっており，試掘は行われていない。さらに竹下会館の構内西側には巨大なタテ方向の洞穴があり，未調査である。

したがって将来予想される沖縄縦貫道南進道路等，開発計画の策定にあたっては，これら崖下や洞穴の調査を詳しく行う必要がある。

なお，北半西端の既知の遺跡については，巨岩の下に遺物包含層が押し流されている可能性もあり，当該地域の再開発の際には注意を要する。

（安　里　嗣　淳）

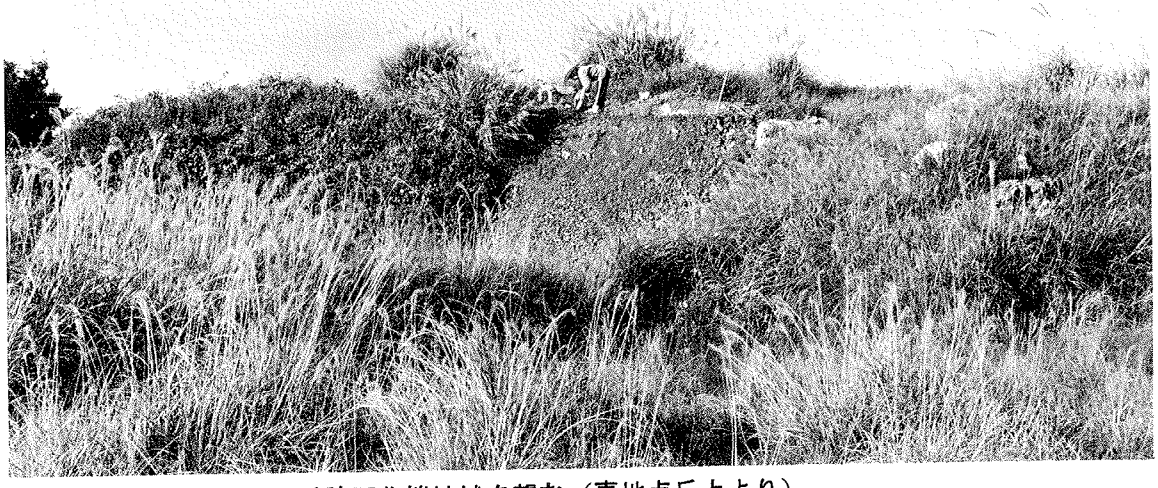


図版Ⅰ－1　知花遺跡空中写真

図版Ⅰ—2　南半丘より北半丘の知花遺跡群を望む

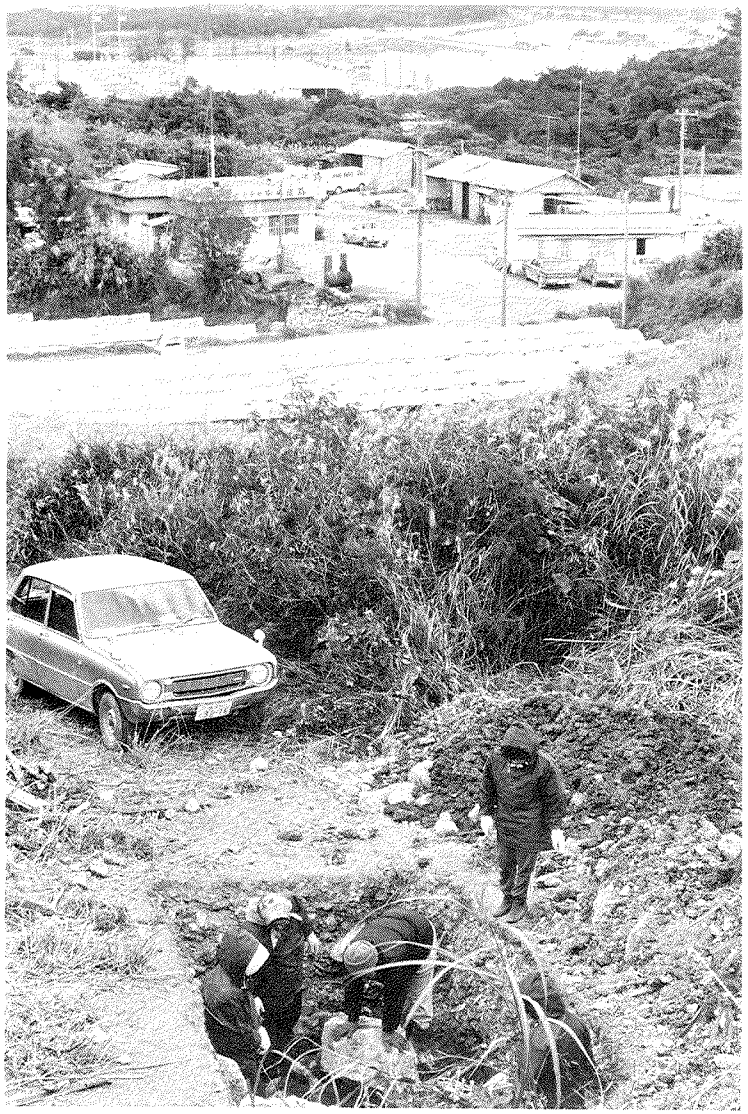
A

B



図版　Ⅰ—3　A　丘陵西北端地域を望む（東地点丘上より）
　　B　西北地点試掘ピット㋑

A



図版　Ⅰ－4　A 西北端　　試掘ピット㊐

B

B　西北端　試掘ピット㊅

A

図版　Ⅰ—5　A 東地点　（小崖上）試掘ピット

B

B 東地点　（崖下）試掘ピット

A

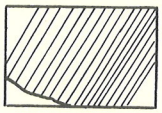
B

図版　Ⅰ―6　A 南半丘陵上ビジュルガマ前庭部　試掘地点
B 竹下遺跡（南半丘陵東崖下）

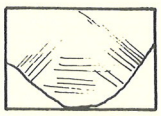
II　知花遺跡発掘調査概報

多和田　真　淳
高　宮　廣　衛
新　田　重　清
嵩　元　政　秀

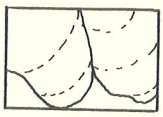
Ⅱ－33・34図 石器実測図説明



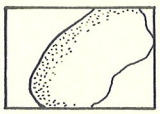
研摩面



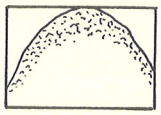
研摩痕



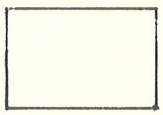
剝離痕



敲打痕



打撃痕



自然面

目　　次

本文目次

(1)　はじめに……(19)
(2)　調査経過……(20)
(3)　調査地点および出土遺物……(23)
イ）A地点……(23)
(一)　宇佐浜式土器……(24)
(二)　カヤウチバンタ式土器……(27)
(三)　室川上層式土器……(27)
(四)　室川式土器……(27)
(五)　大山式土器……(28)
(六)　奄美系土器……(28)
(七)　有文土器……(29)
(八)　胴　　部……(30)
(九)　底　　部……(30)
(十)　A地点Aトレンチの出土土器と表採資料……(31)
ロ）B地点……(31)
(一)　層序……(31)
(二)　土器……(31)
(三)　小結……(35)
ハ）C・D地点……(36)
ニ）石　器……(39)
(4)　おわりに……(40)

表目次

Ⅱ－1表　A地点ピットD（東・西）出土の土器一覧表……(26)

挿図目次

Ⅱ－ 1図　知花遺跡の位置……（21）
〃 2図　知花遺跡一帯の地形図……（22）
〃 3図　宇佐浜式土器の肥厚口縁断面（25）
〃 4図　B地点試掘ピット断面図……（32）
〃 5図　C地点試掘ピット断面図……（37）
〃 6図　A地点ピットD東・第Ⅱ層出土土器（44）
〃 7図　A地点ピットD東・第Ⅲ層出土土器（45）
〃 8図　〃　〃（46）
〃 9図　〃　〃（47）
〃 10図　〃　〃（48）
〃 11図　〃　〃（49）
〃 12図　〃　〃（50）
〃 13図　A地点ピットD西・第Ⅱ層出土土器（51）
〃 14図　〃（52）
〃 15図　A地点ピットD西・第Ⅲ層出土土器（53）
〃 16図　〃　〃（54）
〃 17図　〃　〃（55）
〃 18図　〃　〃（56）
〃 19図　〃　〃（57）
〃 20図　〃　〃（58）
〃 21図　〃　〃（59）
〃 22図　〃　〃（60）
〃 23図　A地点ピットD西・第Ⅳ層出土土器（61）
〃 24図　〃　〃（62）
〃 25図　〃　〃（63）
〃 26図　A地点Aトレンチ出土の土器および表採資料…（64）
〃 27図　B地点出土土器……（65）
〃 28図　C・D地点出土土器……（66）
〃 29図　〃……（67）
〃 30図　〃……（68）
〃 31図　〃……（69）
〃 32図　C・D地点出土荻堂式土器……（70）
〃 33図　石器実測図……（71）
〃 34図　〃……（72）

図版目次

図版Ⅱ－ 1　知花遺跡の航空写真……（73）
〃 2　知花遺跡の遠景……（74）
〃 3　A地点Aトレンチ設定風景……（75）
〃 4　A地点ピットD・E……（76）
〃 5　A地点ピットDの層序……（77）
〃 6　C地点近景……（78）
〃 7　A地点ピットD東第Ⅱ層出土の土器…（79）
〃 8　A地点ピットD東Ⅲ層出土の土器……（80）
〃 9　〃　〃……（81）
〃 10　〃　〃……（82）
〃 11　〃　〃……（83）
〃 12　A地点ピットD西第Ⅱ層出土の土器…（84）
〃 13　A地点ピットD西第Ⅲ層出土の土器…（85）
〃 14　〃　〃……（86）
〃 15　〃　〃……（87）
〃 16　〃　〃……（88）
〃 17　〃　〃……（89）
〃 18　A地点ピットD西第Ⅳ層出土の土器…（90）
〃 19　A・A地点ピットD西第Ⅳ層出土の土器 B・A地点Aトレンチ出土の土器および表採資料（91）
〃 20　B地点出土の土器……（92）
〃 21　C・D地点出土の土器……（93）
〃 22　〃……（94）
〃 23　〃……（95）
〃 24　D地点出土の荻堂式土器……（96）
〃 25　知花遺跡出土の石器……（97）
〃 26　〃……（98）

Ⅱ　知花遺跡発掘調査概報

(1)　はじめに

知花遺跡は沖縄市字知花城畑原に所在する遺跡群の総称で，先史・原史両時代の遺跡で構成されている。本遺跡は1960年，金城盛雄氏と筆者の一人多和田によって発見（註1）されたが，当時すでに遺跡の大部分は採石工事によって破壊され，なおも工事は急ピッチで進行中であった。そのままいけば，いくつかの遺跡は調査を経ずして完全に消えてしまう。このことを憂えた多和田は遺物保存のための調査を痛感し，いろいろ努力された結果，2年後の1962年，琉球政府文化財保護委員会（現教育庁文化課）の事業として調査を行うことになったのである。

本遺跡は沖縄本島の中央部（Ⅱ－1図）に位置し，直線距離で東海岸（太平洋）まで約5㎞，西海岸（東シナ海）まで約7㎞，琉球石灰岩の発達した地域に営まれた内陸部の遺跡で，標高は約70ｍである。

本地域では終戦直後から大規模な採石工事が行なわれてきた。この工事が遺跡発見のきっかけをつくったわけだが，発見者の一人である多和田の報告（註1）によれば，前記諸遺跡のうち2遺跡は貝塚，他の2遺跡は遺物包含地で，前者は地荒原貝塚や平安名貝塚に類似し，後者の一つは晩期（原史時代）に属し，他の一つは晩期貝塚につながる土器を出土する遺跡といわれる。今回の調査は損壊の著しい，いわば壊滅の危機に瀕している遺跡を優先したが，結果的には後述のようにA地点（現行編年の中期）に力を注ぐことになった。

われわれが調査を開始したとき，遺跡の存する石灰岩丘陵の中央部は図版Ⅱ－1・2の写真にみられるようにほとんど採石し尽され，工事は周辺部へ向って破壊の爪を拡大しつつあり，石灰岩上の自然堆積層であるマーヂ（赤色土）は丘陵の東北側にわずかに認められた程度で，北西側では採石前の採土作業がほぼ終っていた。今回調査を行ったのはこの採土地域に残る遺跡群である。この地域でA～D4地点の遺物層を認めたわけだが，A地点以外は遺物包含層の最下部がわずかに残っていた程度で，発掘作業も1日足らずで終了した。包含層が比較的保存されていたのはA地点である。しかし，このA地点も南側および東側は採土作業で大きく削り取られていた。この地区は表土が厚く採石には不向きで，最終的には採掘から免れるはずであった。われわれは包含層の状況を調べるため南端部において試掘を行ったが，台風の通過など天候に恵まれず，予定の範囲を完了することができなかったのは残念である。本文では前記A～D4地点の調査結果について報告する。

調査に際し，区長の池原豊吉氏は快く公民館を宿舎に提供されたばかりでなく，作業進行の面でもいろいろとご配慮を頂いた。 心よりお礼を申し上げたい。また，発掘にあたっては玉城盛勝（琉大），大嶺浩位（明治大），西平功・我那覇精一・崎原孫吉（以上沖大），新城邦広・玉那覇善秀（以上興南高校）ら7君の援助を得，石器の石質については県立博物館学芸員の大城逸郎氏に同定をお願いし，実測図の作成にあたっては大城慧・岸本義彦・盛本勲・平安秀子4君の手を煩わした。心より感謝申し上げる次第である。なお，報告書を作成するについて県教育庁文化課の安里嗣淳専門員より寄せられた格別のご好意を忘れることはできない。併せて感謝申し上げる次第である。

なお，本遺跡の発掘調査については，1962年度の考古学年報（註２）にその概要を掲げた。本概報は高宮と嵩元が分担執筆した。

(2) 調 査 経 過

発掘調査は1962年７月28日（土）から１週間の予定で実施したが，台風の通過や遺物包含層が予想以上に厚かったこともあって予定の期間内に終了することができず，延期に延期を重ね，後述のように８月12日（日）まで続行した。

調査はまずＡ・Ｂの２地点より開始した。Ａ地点東端部はブルによってすでに表土は剝ぎ取られており，いたるところ基盤の石灰岩が露出（図版Ⅱ－３のイ・ロ）していたが，この採土地域南端部では未だ土層が若干の厚みをもって残っており，包含層が残っているかどうかを確めるため，まずこの地域を試掘することにした。削平部の中央に１×９ｍのトレンチをほぼ南北方向に設定し，これを２ｍ毎に区分し，南より北へＡ－１～Ａ－４のピット番号を付し，北端のピット（１ｍ四方）をＡ－５とした（図版Ⅱ－３のイ）。試掘は最も期待されたＡ－１よりはじめたが，土器片を少量出土しただけで，遺物包含層は認められなかった。そこでこのトレンチ（Ａトレンチと呼称）の調査を中止し，Ａ地点西方に残る未撹乱地域を調査することにした。この地域には本来の表土層の上に採土時の混礫土が１～２ｍほど盛られており（図版Ⅱ－３のイ・ロの右側の混礫土層），まず，この盛り土を取り除くことにした。しかし，調査員が少なく，他の地点の作業も急がねばならなかったので，人夫２人を雇い除去作業にあたってもらう。図版Ⅱ－４のイは混礫土層除去前のＡ地点南面で，同図版ロは同層除去後の写真である。

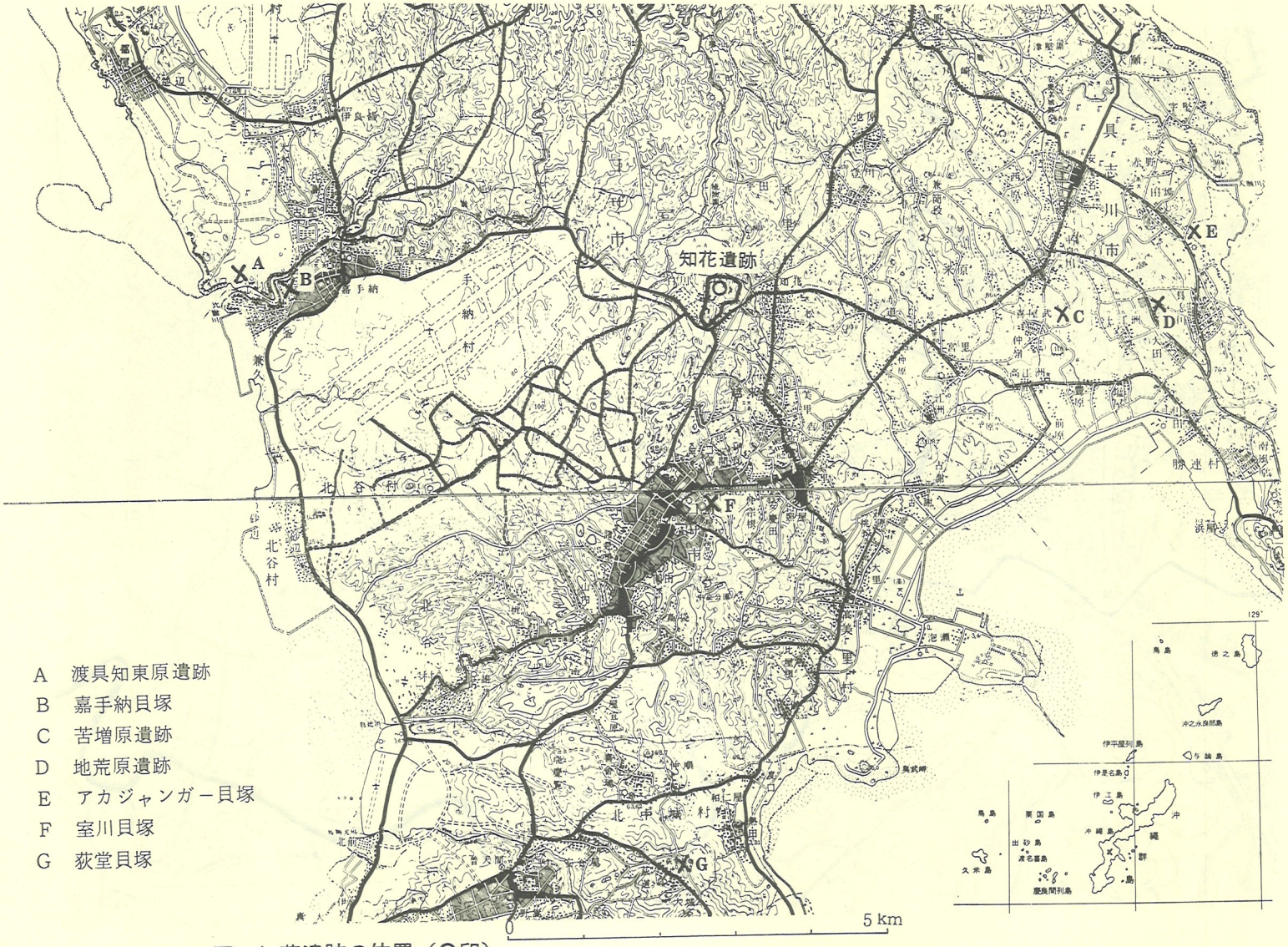
Ｂ地点はＡ地点北側の採土地域内にあり（図版Ⅱ－１），遺物包含層は前述のように基盤の石灰岩の上にわずかに残っている程度であった。１×２ｍの試掘溝を設け調査を行ったが，層が薄かったため，半日程で終了した。以上が調査初日の作業であった。

翌29日はＡ地点の表土剝ぎを進める傍ら，Ｃ地点の調査をはじめる。Ｃ地点もすでに壊滅の状態にあり，残存の包含層はきわめて薄く，数時間で調査は終った。そのため作業員の一部をＤ地点に移したが，Ｄ地点も破壊し尽され，岩石の間に残る包含層を調査する程度で，作業は日没までには完了した。

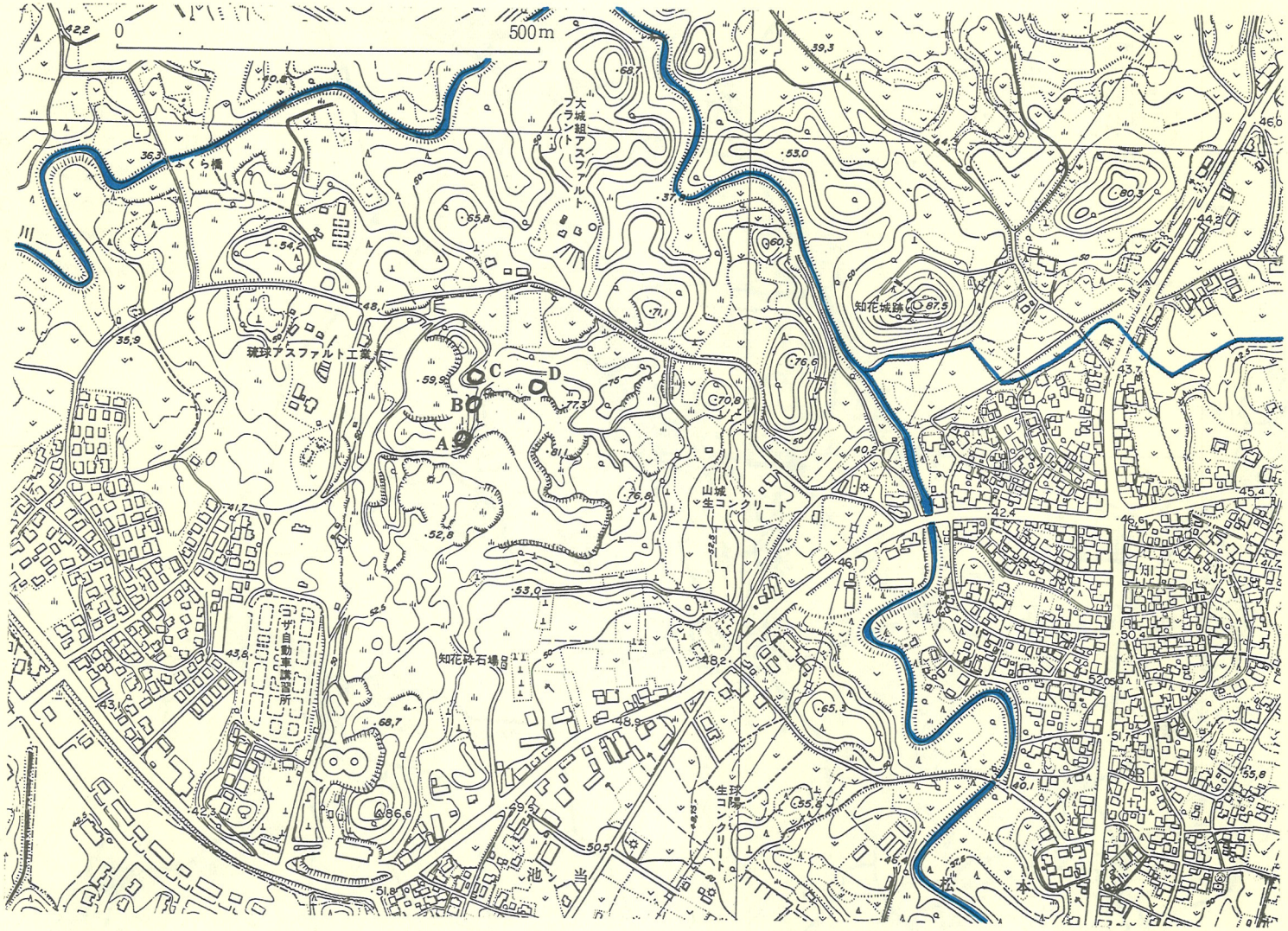
他方，Ａ地点では人夫による盛り土の除去作業が続いており，残りの調査員も全員これに加わったが，層が予想以上に厚く，しかも土が固く，作業は遅々として進まない。この作業の終了したのが７月30日の夕刻で，調査予定期間の前半を表土除去作業に費してしまったわけである。

７月31日は台風９号ノラ接近，翌８月１日沖縄本島通過。したがって，この２日間は発掘作業を中止し，公民館で遺物の整理を行う。８月２日は台風の余波が残っていて，午前中は公民館で遺物の整理。午後２時より発掘再開。前にも述べたように調査は当初１週間を予定していたが，台風の襲来や盛り土が予想以上に厚かったこともあって，予定が大幅に狂い，隊員にお願いしてさらに２日間残ってもらうことにした。調査はこうして８月５日の午前まで続けられたが，予定の範囲を終了することができず，残部を新隊員によって行うことにし，午後は宿舎に引き揚げ，解散した。

８月６日は作業員確保に奔走し，翌７日，第２次調査隊を組織して夕刻知花公民館着。そして



Ⅱ－１図　知花遺跡の位置（○印）



Ⅱ－2図　知花遺跡一帯の地形図　（A～Dの○印はそれぞれの地点）

翌８日より作業再開。

調査はＡ地点のピットＤ・Ｅを中心に行ったが，土が乾燥したマーヂ（赤色土）のためきわめて固く，作業は捗らず，しかも時間は容赦なく過ぎていくという状態で，やむなく試掘範囲を縮小することにする。そのため，ピットＥの西半部は第Ⅱ層面，そして同東半部とＤの東半部は第Ⅲ層面を15㎝掘り下げた段階で中止し（図版Ⅱ－５のイ），ピットＤ西半部で第Ⅲ層以下の調査を行うことにした。第Ⅳ層は基盤の赤色土層（地山）で，上部15㎝では遺物が散見されたが，以深では皆無といっていいほど激減した。最終的にはこの地山層の一部をさらに50㎝掘り下げ，以下に遺物層のないことを確め（図版Ⅱ－５のロ），８月12日全作業を終了した。

さて，次項で今回の調査について報告するが，その前に調査員一同心からお詫びせねばならないことがある。それは報告書の作成が大幅におくれたことと，調査後十数年の年月が経過したために資料の保存管理面で若干のミスを生じ，一部正確な報告が行えなくなったことである。

その一つは，本遺跡で石鏃という貴重な遺物が１点採集されたが，行方が分らなくなってしまったことである。この資料はチャート製の，ポイントの部分を１㎝ほど残す，基部の欠損した打製の石鏃で，完形品ではないが，沖縄では稀有に属する資料であり，高宮が預ることになって，沖大時代ずっと資料展示ケースに展示保管してきた。1972年，高宮が沖縄大より沖国大に移るに際し，他の遺跡の遺物とともに厳重に梱包，移送したが，その後の行方がつかめない。沖国大に届いていることは間違いないと思われるので，発見された段階で改めて報告したいと考えている。

次はＣおよびＤ地点の遺物が混ってしまったことで，遺物は興南高校で整理を進めていたが，保管室でボヤがあり，幸にして遺物の紛失はまぬかれたものの，両地点の遺物が識別不能となってしまったことである。本文では止むを得ずＣおよびＤ地点の遺物を一括して報告することをお許し頂きたい。

他のもう一つのミスは登録台帳の紛失によるもので，Ｃ・Ｄ両地点以外の遺物はすべてナンバーが付され登録を終えたことは明白だが，台帳が見当らないために出土地点や層位を示し得ない石器が数点ある。遺物は県立博物館で整理され，保管されてきた。登録台帳も同館に保管されていたが，旧館から新館への移転の際に紛失したものと思われる。おそらく博物館内の整理棚のどこか片隅に紛れ込んでいるものと思われ，今後も引き続き発見に努力したいと考えている。出土地不明の石器についても台帳が発見された時点で，改めて報告するつもりである。以上の点につき，あらかじめお詫びを申し上げたい。

(3) 調査地点および出土遺物

イ） Ａ地点

前項（調査経過）でもふれたように，Ａ地点では，まずブルによる削平部に１×９ｍのＡトレンチを設け試掘を行なったが（図版Ⅱ－３），遺物包含層が認められなかったので，このトレンチの調査を中止し，Ａトレンチの西側にＤ・Ｅの２ピットを新しく設けることにした。Ａトレンチの西側は図版Ⅱ－３のロでもみられるように一段と高くなり，芒で覆われていた。芒の下は120～140㎝の，採石の際の不要な礫土が堆積し，これを除去後（図版Ⅱ－４のロ），

DとEのピットを設けた。Eピットは第Ⅱ層30㎝掘り下げたところで中止，発掘作業はDピットに集中した。2.5 m×3 mのこのピットを東西に分けて掘り下げた。採石の際に持ち込まれた礫土の下は，採石前の表土であり，この表土は約1 mの厚さとなり，土器や石器片も僅かながら含まれ，後世の陶磁器片も出土した。表土(第Ⅰ層）の下は未撹乱の3層からなり，第Ⅱ層が暗褐色土層で厚さ25～30㎝，第Ⅰ層に比較して遺物の出土も急増してくるが，土器片は相変らず小破片のみである。第Ⅲ層は褐色土層で遺物の出土は更に増加してくる。この層は約45㎝の厚さとなっている。最下の第Ⅳ層は黄褐色土層で遺物の出土は急激に減少し，約15㎝の深さ以上になると遺物の出土も無く，この無遺物の土層を一部50㎝掘り下げてみると琉球石灰岩の岩盤となっていた。

このDピットの遺物出土状況の特徴点は次の通りである。

① 表土から最下層までほとんど獣・魚骨や貝殻がみられなかった。

② 出土した土器片は8,479片の多数であったが，すべて小破片で完全に原形を復元できるのは一片もなかった。

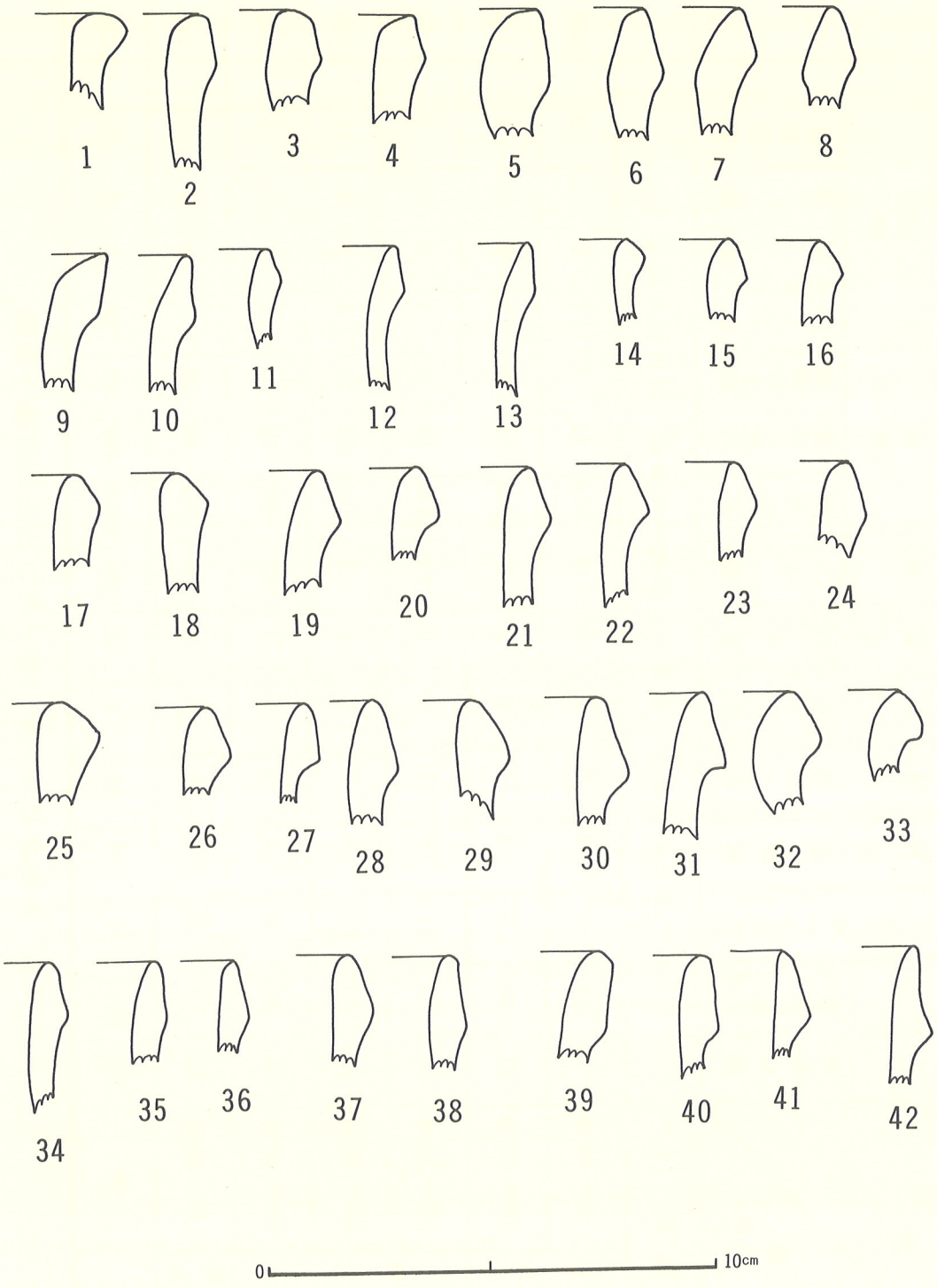
③ 土器は宇佐浜式土器やカヤウチバンタ式土器が主体で，下層になるに従ってそれらより古式の有文土器片が増加する傾向がみられる。

④ 面縄東洞式，嘉徳Ⅰ式などの奄美系土器も下層の方に若干みられる。

(一) 宇佐浜式土器

口縁部断面が三角形またはその変形に肥厚する土器で，86片出土した。しかし，胎土，焼成，色調などがこれと同じで，口縁部が肥厚しない土器もⅡ－1表で示したように262片出土し，肥厚口縁土器の3倍余もあった。口縁部の肥厚を特徴とする宇佐浜式土器の肥厚の形状はⅡ－3図のように変化に富み，2～4の四角形，6～9の菱形，16～31の三角形，35～42のように肥厚が小さく有段状になるものがあり，カマボコ形は一片もみられなかった。小破片の口縁部から，その土器の器形まで言及するのは不安があるが，深鉢形の尖底土器が多いと言えそうである。保存状態が悪いため，全体的に器面は原面を留めているのは少ない。胎土混入の細砂粒が器面に出てザラザラとして手ざわりが悪く，中には割れ目が磨滅して口唇部と見間違うもの，文様が不鮮明になっているのもある。胎土には石英などの砂粒が混入しているのが殆んどで，中には5㎜位の大きなものまで含んでいる。この混入物は次に述べる室川上層式土器以外の土器には，その多少の違いはあるが含まれている。色調は全体的に明るく，黄橙色，黄褐色，褐色などが多い。

肥厚口縁土器には，無文土器と有文土器とに分けられ，筆者の一人高宮は前者を宇佐浜式，後者を地荒原Bと仮称してきたが（註3），これは再検討を要することが指摘され，本稿では一括して宇佐浜式と称しておいた。有文土器は86片中4片で少なく，その文様はⅡ－9図3，5，Ⅱ－15図8，Ⅱ－23図16の4片で，いずれも三角状に肥厚する外面に単篦による横捺文である。Ⅱ－21図1も口縁部の肥厚する土器片であるが，その形状は特異なもので，石英など砂粒の混入があり，焼成，色調も他と変わらないが，力強く肥大した口唇部が朝顔状に大きく開いた土器，残念ながら小破片のため頸部，胴部への繋がりは不明である。



Ⅱ－3図　宇佐浜式土器の肥厚口縁断面

型式 / 出土層序		宇佐浜式 肥厚口縁	宇佐浜式 肥口しない口縁	カヤウチバンタ式	室川上層式	室川式	大山式	奄美系土器	有文土器	胴部 宇佐浜式	胴部 室川上層式	胴部 前期的土器	底部 尖底	底部 丸底	底部 平底	底部 形状不明	
第Ⅰ層表土		土器の小破片，石器片，後世の陶磁器片が僅かに出土															
第Ⅱ層暗褐色土	0～15 cm	7	19	4	2	0	0	0	0	514	42	8	1	0	1	0	598
	15～30 cm	18	58	6	3	1	0	0	2	1,348	69	18	3	0	0	3	1,529
第Ⅲ層褐色土	0～15 cm	19	90	11	8	1	0	0	13	1,444	94	14	6	0	1	2	1,703
	15～30 cm	15	69	13	6	7	1	0	2	3,314	198	21	2	1	0	16	3,665
	30～45 cm	17	21	3	11	2	1	5	40	397	54	9	4	0	3	6	573
第Ⅳ層黄褐色土	0～15 cm	10	5	2	1	6	0	1	5	325	35	20	0	0	1	0	411
総計		86	262	39	31	17	2	6	62	7,342	492	90	16	1	6	27	8,479

Ⅱ－1表　A地点ピットD（東・西）出土の土器一覧表

(二) カヤウチバンタ式土器

国頭村のカヤウチバンタ貝塚出土の「外部口縁有段」の土器を多和田が命名した型式（註4）である。このカヤウチバンタ式は一般的に言って宇佐浜式土器と共伴して中期遺跡の土器を二分する程のもので，本遺跡でも宇佐浜式土器に次いで39片出土している。口縁部の形状以外はその胎土，焼成，色調などは宇佐浜式土器と変わるところはない。この型式にも無文と有文の土器があるが，有文はⅡ－19図１の一片のみで，この口縁部断面になると宇佐浜式土器との識別に迷う一片である。幅広の単篦による横捺文がつけられ，器面はザラザラとして，色調は褐色。この型式にはⅡ－９図20にみられるように，ゆるやかな山形口縁の土器も僅かながらみられる。前述した宇佐浜式土器の中の肥厚しない口縁土器中の小破片や，後述する有文土器の小破片には，有段の特徴的な部分が欠落したため，このカヤウチバンタ式土器に含めることが出来なかったものもあると考えねばならないだろう。

(三) 室川上層式土器

室川貝塚の上層を代表する土器の一つで，ポーラスな器面はこの土器の著しい特徴。胎土は泥体質で，焼成は悪く，きわめて脆弱。器色は黄褐色のものが多い。普通，テンパー（胎土混入物）はみられない。しかし，観察される場合は石灰岩であることが多く，稀に石英を含むこともある。器形は尖底ないしは底径の小さい平底の深鉢形。口縁部がカヤウチバンタ式や宇佐浜式のような肥厚を示すものでも，上記の特徴を具備するものは，当分これに含めておく。室川上層式土器は，かつて那覇市の天久遺跡（註５）や具志川市の苦増原遺跡（註６）などでも出土をみたが，室川貝塚の調査によると宇佐浜式に先行する土器のようである。

Ａ地点では室川上層式の口縁部が31点，胴部破片が492点出土している。Ⅱ－７図１，Ⅱ－11図８，Ⅱ－12図16，23，24，25，Ⅱ－17図14，Ⅱ－19図10，Ⅱ－20図７，Ⅱ－21図５，Ⅱ－22図12，Ⅱ－23図７，15，Ⅱ－25図４などがその口縁部破片である。中でも有文は４片のみで，Ⅱ－７図１は先端の尖った工具によって肥厚部の上面と側面に刺突または押引きした文様をもち，浅い凹文が肥厚部に接して横引きされている。黄褐色土器。Ⅱ－12図16は隆起帯上に刻目を，上方に斜行沈線，下方に押引き文をめぐらしている。Ⅱ－23図７は斜行沈線をもつ土器で，外面は黄橙色,内面は薄褐色。15は口唇部器形からみれば次の室川式土器に属するが，器面はアバタ状を呈し，混入物もみられない。口唇上面と口縁に沿って単篦による横捺刻文がある。茶褐色土器。この室川上層式土器の出土状況は口縁部，胴部共に各層からむらなく出土しており，Ⅱ－25図４のように第Ⅳ層にもみられる。

(四) 室川式土器

壷形と深鉢形があり，前者は稀少。深鉢形は口唇部を誇張（口縁部を肥厚させるなどして幅広い口唇を形成）するところに大きな特徴があり，いろいろのタイプがみられる。口唇部を全然誇張しないものもある。石灰岩を多量混入するのもこの土器の特徴の一つで，器色は明るい褐色のものや，やや黄味を帯びたものなどがある。焼成は後者が良く，前者はもろい。有文と無文があり，前者の場合，口頸部に施文するのも一般的である。大山式に後続する土器とみら

れる。室川貝塚の報告書が刊行されれば，この土器の特徴もよりはっきりするであろう。

本地点では17片の口縁破片が出土した。そのうち5片は有文破片である。本地点出土の室川式土器はすべて石英を含んでおり，その点で室川貝塚出土のものと異っている。このような混入物の相違は，一体何を意味するのか。つまり，地域差を示すのか，あるいは時代差を示すのか，現在のところ不明である。当初，本地点のものを類室川式とし，室川出土のものとの相違を強調すべきかと考えたが，資料が不十分なので，当分，室川式に含め様子を見てみたいと思う。

Ⅱ－7図2，Ⅱ－9図4，Ⅱ－10図2，7，8，Ⅱ－14図4，Ⅱ－21図4，Ⅱ－23図14，Ⅱ－24図7，8，Ⅱ－25図1，2，5が室川式土器である。5片の有文片は4片とも口唇上面または外面に単篦で横捺するもので，Ⅱ－23図14の1片は頸部にも斜行する沈線文がみられる。Ⅱ－7図2は口唇の縁に刻目をつけた土器で，一見弥生前期の土器を思わせるもので，黒色で焼成もよい方である。この室川式土器は下層に多く出土している。

(五) 大山式土器

大山式土器は刃部が3～5㎜の幅広の工具で口縁部に横捺刻文を施すもので，Ⅱ－9図2，Ⅱ－12図17がそれである。Ⅱ－9図2は口縁に沿って三帯の横捺刻文をめぐらしたものである。色調は褐色，焼成は良く胎土には石英の砂粒を含む。Ⅱ－12図17は色調は茶褐色，口縁近くに幅広（5㎜）の単篦をⅡ－9図2と同じく左から右へ横捺してある。以上のような口縁部の小破片のみで大山式と断定するのは危険であるが，便宜上ここに含めた。Ⅱ－12図19も文様は類似するものであるが，胴部の小破片で識別は困難である。

(六) 奄美系土器

本稿で奄美系土器としたのは，これまで奄美諸島で特に出土が多く，盛行し，型式名などが設定されている土器（註7）で，そのすべてが彼地から伝来されたという意味でない。Ⅱ－12図21，Ⅱ－23図9，10，12，13，Ⅱ－24図6などである。Ⅱ－12図の21は幅14㎜の凸帯（両側が欠落しているので確かでないが）上に幅7㎜の刃先をもつヘラ状工具で垂直に刺突しそれをくり返していく。あたかも短沈線を縦位に並べたように見える。色調は茶褐色，胎土に石英などの砂礫が多めに含まれている。Ⅱ－23図の9，10は刃部が三角状に尖った工具で施文された土器で，面縄東洞式に含めることができるであろう。9は器面の磨耗が著しく，不鮮明でザラザラとしている。工具を器面から離すことなく連続的に押し引きしている。薄褐色で胎土に石英の砂粒を含む。10は施文が深いため，両側の無文の器面が凸帯状となっている。12は口縁に沿って爪形文が左から右へと刻されている。茶褐色で石英の砂粒を含む。類例品は沖縄諸島には少なく，奄美諸島の嘉徳Ⅰ式に含まれるものであろう。13は多和田が面縄第一式と呼んできた土器（河口貞徳氏は喜念Ⅰ式と名付けている）である。この土器も奄美諸島に出土の多い土器で，みみずばれ状に微隆した凸帯に接して両側に点刻文をつけたもので，その点刻文は対をなしているところから，二叉状の工具による施文と思われる。色調は灰褐色，石英を含む。頸部から肩部にかけての破片と思われる。Ⅱ－24図の6は面縄東洞式土器で，器面の磨耗が著し

く，不鮮明である。左から右へと二条の爪形文が深く押し引きされ，溝状を呈している。口唇上面にも爪形文が刻されている。灰褐色で石英などの砂粒の混入は少ない。

(七) 有文土器

(一)～(六)の項で述べた土器以外で，本遺跡では古式の文様をもつ土器を一括して本項で述べることにする。

有文土器はⅡ－1表で知ることができるように，下層に比較的多い。総数62片が出土している。有文土器の色調は全体的に宇佐浜・カヤウチバンタ両式土器に比較して暗く，茶褐色を基調に暗褐色，灰褐色，褐色などである。胎土には石英などの砂粒がこれまで述べてきた土器に比較して多めに含まれている。焼成は悪く，文様が磨耗し不鮮明な土器もみられる。本項の土器は大部分がその形態や文様構成などより伊波式，荻堂式，大山式などの破片と思われるが，破片が小さいため分類が困難である。したがって，ここでは施文工具からみていくことにする。

㋑ 二叉状工具による文様

5㎜前後の刃部が二叉状の工具による施文で，沖縄前期前半土器の伝統的な文様が描出される。工具を持つ手加減で，点刻文，連点文，短沈線文，長沈線文などが生まれ，これらの相互の組合せによって種々の文様が構成される。Ⅱ－12図1・2・8・9・11，Ⅱ－15図4・7，Ⅱ－23図1・3・4・5，Ⅱ－24図3などである。Ⅱ－12図1は口縁より5㎜下に孔が穿かれ，更に二条点刻文が施されている。2は磨耗が著しいが，二条線文土器。8・9も口縁近くに二条点刻文をもつ土器。11は二条の上部が欠落した土器片。Ⅱ－15図4は口唇上面に二条短線文を配し，外面に沈線文を施してある。7は二条点刻文土器で，色調が灰色なのは注目してよい。Ⅱ－23図1は波状口縁の部分で，口唇上面に二条点刻文，外面に二条線文をもつ土器。3は山形口縁の破片で口縁近くに二条点刻文をもつ。4は口唇上面に二条点刻文，外面に連点文がみられる。5は口縁近くと思われ，二条点刻文が深く刻みこまれている。

㋺ 鉛筆先端状の工具による文様

鉛筆先端状の工具で土器面に斜めに押し引きし，それを連続的にくり返して行くと一条の点刻文または連点文となり，器面に刻した工具を器面から離さずに横引きすると沈線文となる。その工具先がシャープであれば細線が，鈍ければ太い沈線となる。Ⅱ－9図1，Ⅱ－12図の3・4・5・6・7・13，Ⅱ－15図の1～6，Ⅱ－23図の2・4・6・11，Ⅱ－24図の1・2・4などがある。

Ⅱ－9図1は灰褐色で工具を器面から離さずに押し引きした文様。Ⅱ－12図の3は丁寧な沈線文，5・6・7は太めの沈線で，いずれも器面が磨耗して不鮮明である。Ⅱ－15図1は薄灰色で二条の沈線に短斜線を配している。2はシャープな沈線文をもつ灰黒色土器。3は点刻文に二条の沈線文がみられる。黒褐色土器。4は口縁近くに沈線文，口唇土面に二条の平行短線が刻されている。5は縦に点刻文を配した類例の少ない土器。Ⅱ－23図の2は太めの沈線と点刻文の組み合わせで，黒褐色。4は口唇上面に二条平行点刻文，口縁に沿って一条の点刻文を施す。6はシャープな沈線文土器。11は小破片で文様の構成は確

かでないが，三本一組の沈線文が十字形にその端をそろえた土器片，灰黒色で石英などの混入物が多く，器面はザラザラとしている。Ⅱ—24図の1は二条の沈線文に斜行沈線を配している。器外面は黒褐色，内面は茶褐色の土器。

㈥　刃部が幅広のヘラ状工具による文様

大山式土器の文様はこの工具によるもので，口縁近くの横捺刻文と器形は深鉢形で口縁部が平坦であることが特徴的であるが，ここではその範ちゅうに入らない土器について述べる。Ⅱ—12図18は刃部幅3㎜の工具を口縁に沿って浅く押し引きした土器片，Ⅱ—19図3は山形口縁で外反の著しい土器に横捺刻文が左から右へつけられている。Ⅱ—23図8もこの工具による文様で，口縁が山形状をなす土器で，山の頂部の破片で口縁に沿って浅く三条の横捺文がみられる。胎土に石英を含み，色調は褐色。

㈦　凸帯・条痕文・外耳土器

Ⅱ—12図15は低くなだらかな隆起帯をもつ土器で，隆起帯上に横捺文を施し，下方に縦位の沈線文を配した土器，形態的にⅡ—12図16も凸帯をもつがこれはアバタ状を呈するので室川上層式に入れた。Ⅱ—24図5も凸帯をもつ土器で，凸帯に沿って上下に横捺刻文が左から右へとつけられている。

Ⅱ—12図22，Ⅱ—22図7は条痕文をもつ土器，Ⅱ—12図22は口縁近くの条痕文で，黒色，焼成良好。Ⅱ—22図7は荒い条痕がみられ，凸帯か，それとも口縁部の破片なのか確かでない。胎土には混入物もなく焼成も良い土器片である。

Ⅱ—20図9は径約6㎜の横位の孔がていねいに穿かれ，いわゆる有孔外耳の土器片で，胎土には石英を含み，色調は灰黒色。

㈧　胴　部

胴部破片は7,924片と多数出土したが，いずれも小破片のみである。他の中期遺跡でもみられる現象であるが，このように多数出土しても，1個たりとも完全に器形の復元できるものはない。これら胴部小破片を胎土，焼成などから大まかに宇佐浜式，室川上層式，前期的土器に分類してみると，Ⅱ－1表のようになった。全体の92％余が宇佐浜式（ここではカヤウチバンタ式も含めた）で占められている。室川上層式が6％，前期的土器としたのには大山式も奄美系土器も含まれるが，これは1％余と僅少である。

㈨　底　部

本遺跡出土の底部は51片で，尖底16片，丸底1片，平底6片，形状不明品が27片である。

中期になると尖底が平底より多くなることは他の同期の遺跡でもみられることがあるが，本遺跡でもそれは例外でない。

Ⅱ－6図18，Ⅱ—11図10・11，Ⅱ—18図7・8・9，Ⅱ—20図10・13などが尖底の形状が明瞭なものである。全体的に言って底部にしては厚さが薄く，Ⅱ—20図10・13などのように丸底に近い形状がみられ，胴部への立ちあがりが緩やかである。これらの尖底が，どのような形態の土器のものか，本遺跡ではすべて小破片のみなので把握することはできなかった。

丸底はⅡ—20図14の1片のみであった。色調は灰褐色，胎土には石英などの砂粒が多量に含み，それが器面に露出しザラザラとしている。

平底はⅡ－8図16，Ⅱ—25図9などである。Ⅱ－8図16は器面の磨耗が著しい底部。Ⅱ—25図9も小破片でこれも器面が磨耗している。黒褐色で石英などの砂粒の混入物がみられる。第Ⅱ層上部出土の平底(Ⅱ－1表）は小破片のため形状ははっきりしないが，室川上層式に属するものであり，他の前期的特徴を有する平底はすべて第Ⅱ層以下で出土した。

(ｲ) A地点Aトレンチの出土土器と表採資料

前述したように最初に試掘を進めたトレンチで，南北方向に1×9mを設定したが，すでに遺物包含層は採石工事で削りとられた後の基盤層であった。僅かに南側のピットから土器片の出土がみられる程度であった。Ⅱ—26図が出土土器（2と9の二片）と表採土器である。

1は二条平行点刻文が二対刻されている土器，器面は磨耗が著しくかろうじて文様をとどめている状態。褐色で，石英などの砂粒を含んでいる。2は口唇より斜行の沈線文がつけられている。黒色で石英などが器面にみられる。3は口縁近くの破片で，短沈線が横位に走っているが，おそらく上方にもこれと同じ文様があったろう。4も磨耗が著しく，文様は不鮮明であるが，一本の沈線の下に四本の斜行沈線が走っている。褐色で器面はザラザラとしている。9は小孔を両面から穿とうとして中途で止めた形跡がみられる土器。口縁部と思われるが，磨耗がひどく確かでない。器面には石英などの混入物が露出していてザラザラとしている。10は尖底，A地区出土の尖底では最も厚みのあるものである。11は平底，径5.5㎝。12は小破片で確言はできないが，横位の外耳土器片と思われる。色調は薄褐色，胎土に石英を含む。13も表採品で，これはグスク時代のフェンサ上層式土器片。コブ状に口唇部が肥厚している。

ロ) B地点

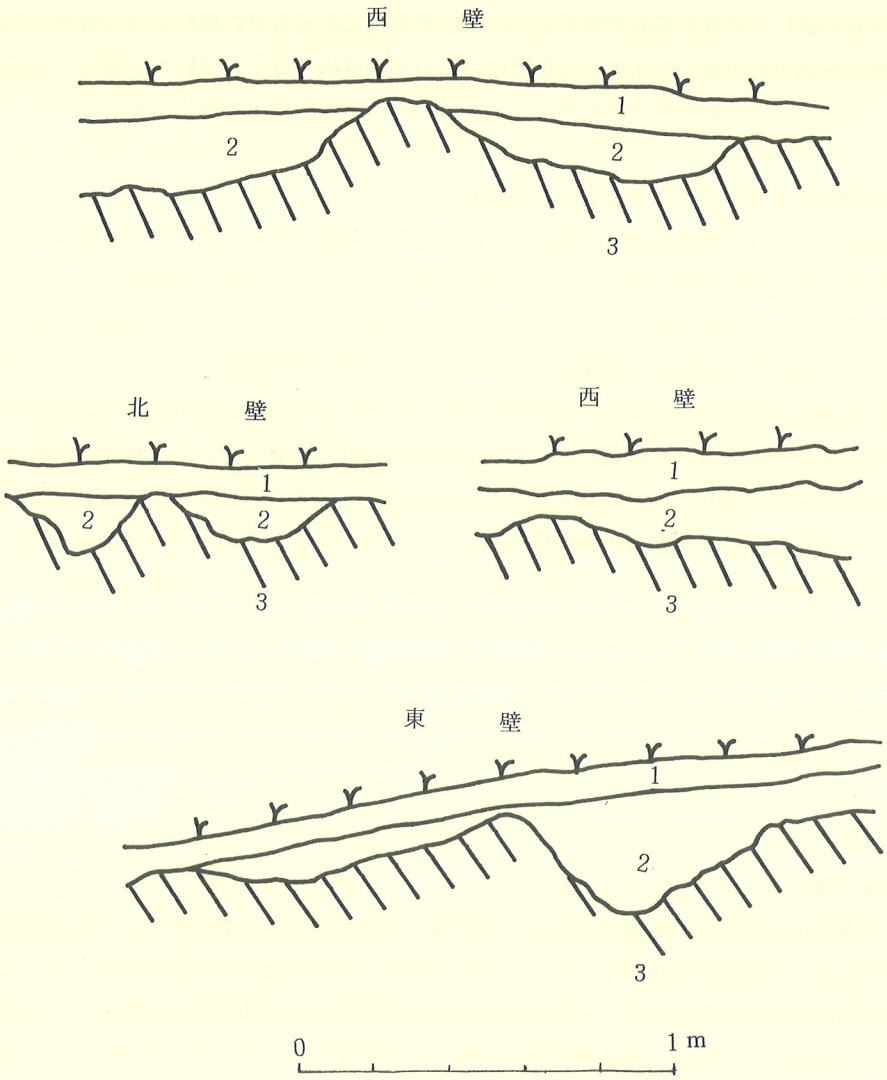
(ｲ) 層　序

B地点はA地点の北方数10mのところに残っていた遺物包含層である。この地域はA地点東縁部とともに採石の前準備として，すでに石灰岩上の赤色土が取り除かれていた。採土の際，遺物層の大部分も除去され，岩盤上面の起伏の間にわずかに暗褐色土が残っている程度であった。B地点一帯では，まだ人夫が鍬で岩盤の露出作業を行っており，発掘の余地の若干残っている地域を選定して1×2mのピットを設け，試掘を行った。

層序は3層からなる。第Ⅰ層（表土）は採土後に被覆の行われた礫混りの赤色土層で，本来の表土層とは異なる。人工品は含まれていない。第Ⅱ層は暗褐色の遺物包含層で，貝類は見受けられなかった。しかし，獣魚骨は少量検出された。採土を免かれた包含層は全般的に薄かったが，未撹乱なので，出土遺物は信頼できると考える。最も厚い箇所で30㎝，大部分は20㎝以下であった。第Ⅲ層は基盤の石灰岩である(Ⅱ－4図）。

(ﾛ) 土　器

B地点では300点余の土器片が出土した。そのうち器形や文様などの特徴で型式の判明する



1　礫混り赤土土壌
2　暗褐色土壌
3　基盤石灰岩

II －4図　　B地点試掘ピット断面図

のはⅡ—27図（図版Ⅱ— 20 ）の19点だけで，伊波式か荻堂式あるいはそのいずれかに属するものばかりである。同図１～８は口縁部の外反の程度や施文手法等により伊波式に属し，９～14は施文手法，文様構成等から伊波式に含めてよいと考えられるもの，15～18は文様帯下半部の破片であるが，鋸歯文の認められることから荻堂式と考えられるものである。19は伊波式か荻堂式か不明のもの。出土量が少ないので,以下各資料について，その特徴を記しておく。

１は山形口縁の破片である。山形隆起の直下では７本の縦位沈線が認められる。この沈線は２条を一組とするようであるから，４組の沈線が施されていたものと思われる。山形突起下では３組施されるのが普通であるから，本標品は１組多い例であろう。縦位沈線の右側には点刻文の一部が認められる。叉状工具による点刻文が口縁にそって２組施されていたものと思われる。以下の文様は不明である。沈線は浅く，点刻文は比較的深い。口唇部にも叉状工具による点刻文が認められるが，口唇部全体に及んでいたか否かは不明である。器壁は山形突起部で若干厚く，頸部で薄い。山形口縁部での外反はゆるやかで，口径は胴の最大径より大きいと思われる。胎土には石英の微砂粒が多量含まれているが，稀に３㎜を越すものもある。器色は表面は暗褐色，裏面は茶褐色。器面はナデによる調整が行われたものと推察されるが，器面摩耗のため確言はできない。焼成は悪く，脆弱である。

２も山形口縁の破片であるが，山形頂部を欠失する。山形突起下では２条を単位とする２組の縦位沈線，その右側では点刻文の一部が認められる。口唇部にも点刻文が施されていたようである。沈線は浅く点刻文は相対的に深い。破片が小さく外反の程度は不明であるが，１に準ずるものであろう。本標品の上端は粘土帯接合部で破損しているところから，平口縁の上に，一部粘土を追加して山形頂部を形成したものと思われる。胎土には石英の微砂粒が含まれているが，稀に２㎜を越すのも認められる。表面は暗褐色。器面は両面とも摩耗し，器面調整の痕跡は見られない。焼成は悪く，脆弱である。

３は口縁の破片であるが，口唇部を欠く。そのため突起部における外反の状況は不明。対の点刻文が縦位に２列，横位に３列認められる。この種の土器では上段，下段とも横位の文様は２列施されるのが普通であるが，この点，本標品は少くとも３組認められ，特殊なケースといえよう。器面は著しく摩耗し，原形をとどめない。点刻文は比較的深く施文されたと思うが，辛うじて文様のうかがえる状態である。したがって器面調整の方法や器色など不明である。焼成は悪く，胎土には石英粒を多量混入する。

４は口縁の破片で，対をなす点刻文が口縁にそって２組施されている。以下は空白部を形成するようであるから，文様帯の中段を無文のまま放置する例であろう。口唇部は無文のようである。文様帯の部分はナデによる調整が行われている。器色は表裏とも暗褐色。他の土器に比べると焼成はやや良い。胎土には多量の石英粒が含まれ，チャートの砕片らしいものも若干見受けられる。

５は山形口縁の破片であるが，頂部を欠失している。山形突起の部分ではゆるやかに外反している。２点を１組とする連点文が，同図３と同じように３列認められる。連点文の押し引き手法は「引き」の方が幾分長く，伊波期に特徴的な手法で，荻堂期の小刻みの連点文と異なっている。口唇部がわずかに残っているが，文様は認められない。表裏ともナデの調整が行わ

れている。器色は明るい茶褐色。胎土には多量の石英粒を混入する。焼成は悪く，脆弱である。

6も口縁部の破片である。口縁にそって対の点刻文が1列，その下方に叉状工具による羽状文の一部がみられる。文様はシャープである。口唇部にも点刻文が施されている。文様帯の部分はナデが行われているが，裏面は摩耗のため不明。器色は表面は暗褐色，裏面は明るい茶褐色，胎土には石英粒が多量含まれている。焼成は他の土器に比べると比較的良い。

7は文様帯の部分が肥厚する例で，肥厚部に3列の点刻文（2点1組）が認められる。熱田原（註8）や隅原（註9）でわずかながら出土をみた凸帯文土器の部類に属する標品かとみられる。だとするとこの破片は文様帯下端部の資料ということになる。器面は大部分摩滅してしまっているが，わずかに残る器面には擦痕をナデ消した形跡が見受けられる。現器面の器色は暗褐色。焼成は悪く，多量の石英粒を混入する。

8は山形に移行する部分の口縁破片である。口縁部には2条1組の短沈線の一部がみられる。口唇部は無文である。この土器も全面摩耗のため，器面調整の方法など不明。焼成は悪く，胎土には多量の石英粒を混入する。

9は口縁の破片で，わずかに外反している。口縁部には太めの刺突文が水平方向に2列施されている。この文様は叉状工具ではなく，1本の棒状工具を使用したために，上下の刺突文の間隔が一定していない。口唇部は無文である。表面は著しく摩耗しているが，裏面では本来の器面が若干残っており，擦痕をナデ消したあとがわずかに残っている。現在の器面は表裏とも暗褐色。焼成は極めて悪く，脆弱である。多量の石英粒のほか，チャートかとみられる砕片もわずかに含まれている。

10は胴部の破片で，上端に点刻文の一部が認められる。おそらく文様帯下端部の破片であろう。施文は比較的深い。表面は全体的に摩耗しているが，裏面では僅かに横位の擦痕も認められる。焼成は悪い。比較的薄手の土器で，多量の石英粒を混入する。中には径5㎜前後の石英もみられる。表面は茶褐色，裏面は暗褐色。

11は頸下半部から胴上部の破片で，上方でわずかに外反する。全面著しく摩耗し，辛うじて文様を残している。横位に施される文様は叉状工具による短沈線である。施文部位は頸部と考えられる。だとすると，文様の配置は荻堂式に近い形態となる。きわめて脆い土器で，多量の石英と少量のチャートを混入する。

12は胴部の破片で，横位の点刻文および器壁の弯曲の状況から，文様帯下端部の資料と考えられる。点刻文は比較的長めである。器面は摩耗した部分が多いが，本来の器面を残す箇所ではナデの手法が観察される。器色は暗褐色。焼成は悪く，脆弱で，石英粒をかなり含んでいる。

13も胴部の破片で，12と同様，文様帯下半部の資料である。点刻文は若干深い。表面は摩耗しているが，裏面では斜め方向の調整痕が見受けられる。器色は暗褐色，きわめて脆く，多量の石英と少量のチャートを含む。

14は頸部の破片である。上下に短沈線文の一部がみられる。短沈線文間に形成される空白部は典型的な伊波式土器に比べると狭い。器面は表裏ともナデられ，擦痕は認められない。器色は暗褐色，多量の石英と少量のチャートを含む。焼成は他の土器に比べると若干良い。

15は文様帯下端部の破片である。最下段の鋸歯文だけが残っている。鋸歯文は叉状工具によ

って施文されている。表裏ともに斜め方向の擦痕が施されている。胴部は本遺跡の他の土器に比べると幾らか厚い。器色は暗褐色。焼成は普通。多量の石英のほか少量のチャートを含む。

16は頸部の破片と考えられるものである。幅2㎜ほどの単箆を用いて施文している。横位の文様は押引きしながら直線を描くが，鋸歯文は短沈線を組合わせている。これらの文様はいずれも浅く描かれている。表面はかなり摩耗しているが，器面調整に際してはナデの手法を採用したかとみられる部分もある。器色は暗褐色。焼成は普通。多量の石英，少量のチャートを混入する。

17は文様帯下半部の破片と考えられるものである。表裏面ともかなり摩耗している。文様は横位の点刻文の下方に叉状工具による鋸歯文を描いている。点刻文は深く，鋸歯文は浅めである。摩耗した器面は両面とも茶褐色。多量の石英，チャートなどを混入する。焼成は悪い。

18も文様帯下端部の破片で，全面著しく摩耗している。ただし，裏面ではナデを採用した箇所がわずかに残っている。器色は明るい褐色。多量の石英を含有するが，チャートも比較的多い。焼成は悪く，脆弱である。

19は胴部の破片である。表面は摩耗著しく，ために文様は消えかかり，裏面は石灰分附着のため，器面観察が困難である。本標品の上部には2条1組の沈線が水平方向に施されている。この沈線は軽く押し引きしながら描かれている。下方では斜行の沈線がかすかに認められるが，これが鋸歯文を構成するのか，あるいは綾杉文の一部なのかは不明。器色は暗褐色。焼成は悪く，脆い土器で，石英粒を含有する。

平底の破片とみられるものは7個あるが，20はその中で形状のうかがえる唯一の資料である。底径推算6㎝の平底である。底部からの立上りはゆるやかに外弯するタイプで，前期の典型的な平底である。器色は茶褐色，他の土器より焼成はやや良い。胎土には石英のほか少量のチャートがみられる。他の6個もこれに類するものとみられる。

次に胴部破片について述べる。大小あわせて283個の破片が出土したが，ほとんどが著しく摩耗しており，焼成時の器面を残すものは2％に満たない。したがって，一見したところ中期（縄文晩期相当）の胴部と間違えそうである。器色は以上に述べた有文資料と異なり，明るい褐色のものが多い。器面摩耗のものが大部分を占めるため器壁の正確の厚さは知り得ないが，現資料でみると8㎜前後のものが一般的であったと思われる。胎土には比較的多量の石英を混入し，それにチャートを少量混えるものもある。焼成は一般に不良で，胎土は有文・無文を問わず粒子は粗い。

㈢ 小　結

以上，有文破片，底部および胴部についての観察を記した。本地点採集の土器はすべて破片で，復元可能のものはない。そのため，器の大きさや，器形・文様などの詳細を知り得ないが，口縁破片でみるかぎり，壷形は含まれてなく，伊波式，荻堂式とも深鉢形に属し，底部はおそらく平底であろう。文様は口頸部に施され，叉状工具を用いたものが多い。B地点の土器は一般に焼成不良で，脆弱なものが多く，類例遺跡のものに比べて，器面の摩耗したものが目立つ。このことは遺跡の土壌と関係するのか，技術上の問題なのか，今後，検討を要する問題である。

Ⅱ—27図1～8は先にも述べたように伊波式に属する資料である。同図3・5の2点は横位の点刻文や連点文が3列認められる特殊なもので，出土例はきわめて少ない。同図6は横位の点刻が1組だけで，以下，羽状文となっている。このように点刻文を1組だけ施すのも稀であるが，類例は数遺跡で知られている。同図7の凸帯文土器も類例の少ない資料である。

9～14の資料は伊波式に含めてよいと考えられる土器である。9は叉状工具を用いずに棒状工具で施文したところが他と異なっている。しかし，口縁部の外反の状況や施文手法は伊波式の範疇内にある。同図11は短沈線文を，一定の間隔を置いて水平方向に施文する例で，施文部位が頸部であることから，同種の文様に終始する例かとみられる。同一文様を一定の間隔を置いて水平方向に施す例は荻堂式の特徴の一つである。そのことからこの土器は荻堂式に属する可能性もある。同図14は文様帯中段，つまり空白部の上下の間隔が典型的な伊波式に比べると狭くなっている。荻堂式に近い時期の所産かもしれない。

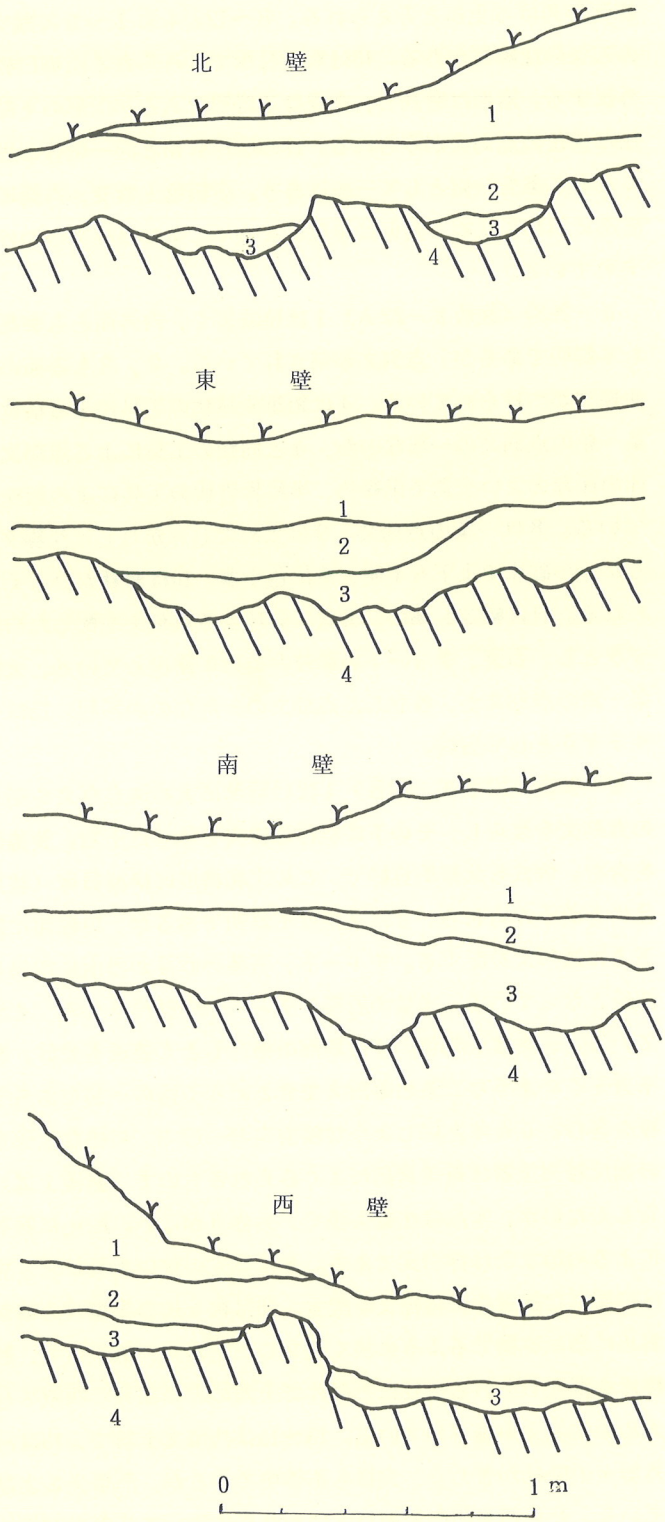
同図15～18は荻堂式としたが，17の鋸歯文は点刻文と組合わされており，このような例は少数ながら熱田原貝塚でも知られている。したがって，伊波期の所産とみることも可能である。

以上の特徴から，本地点の最下部は伊波式から荻堂式にかけての時期に比定することができる。本地点が大山式あるいは宇佐浜式の時期まで存続したかどうかは，堆積層上部がすでに壊滅してしまったために，知ることができなかった。

ハ）C・D地点

B地点の北方60m，屹立する琉球石灰岩の岩場，採石などでわずかに残されたところに2m×2mの試掘ピットを設けた。これがC地点のピットである。Ⅱ—5図のように表土は採石の際の廃棄物の石灰岩礫土で覆われていた。西北側では包含層が露出していた。この礫土の下に遺物の包含する暗褐色土層があり，厚いところで30cm余あった。その下は無遺物の赤色土層や基盤の石灰岩となっていた。このC地点の東方80mのところ（D地点）にも1m×1mのピットを設定した。ここもC地点と同じく包含層は浅く，試掘のみに終わった。しかし土器の出土は多かった。残念なことに，このC・D地点の遺物は整理中に火災にあい，その出土層序は不明となった。ここでは「C・D地点」の遺物として報告することにする。C・Dの両地点はいずれも前期土器の包含層であった。

Ⅱ—28図（図版Ⅱ— 21 ）は刃部が二叉状の工具により施文された，いわゆる点刻文と連点文をもつ土器である。1～6は口縁近くに二条（一組）の点刻文を巡らす土器で1・2は同一個体片と思われ，文様，色調とも同一，類例品は伊波貝塚（註10）や具志川島遺跡群（註11）に多い。1は山形口縁土器で，口縁に沿って点刻文を配している。口縁部の上面観からすると，山形頂部で角ばる，いわゆる上面観は四角状となる土器で，これと形状，文様の類似品が具志川島遺跡群第一次発掘調査報告書中（註11）の第30図1の土器である。口縁近くの点刻文の下は大きく無文帯を設け，下方は点刻文で締めくくっている。3～6も同類の土器であろう。口縁近くの二条の点刻文である。小破片なので1のように頸・胴部の文様の有無は不明である。7は口唇部に刺突文をもち，口縁近に二条の連点文が土器中央部から右側につけられている。色調は褐色で胎土に砂粒が多量に含まれ，器面は内外ともザラザラしている。口縁部のカーブからして1のような口



1　茶褐色土層（含石灰礫）

2　暗褐色土層（遺物包含層）

3　赤色土層（無遺物層）

4　基盤石灰岩

II－5図　C地点試掘ピット断面図

縁部が角ばる土器と考えられる。8～12ともに1～6に類する土器で，9は点刻文の下方に縦位の二条の沈線文がある。13は荻堂貝塚でもみられる山形口縁土器で，茶褐色で山形部でわずかに外反する。器面は磨耗し，文様は不鮮明であるが山形の下部のみに縦位の連点文をつけ，その両側は横位の点刻文がみられる。17の破片も13と同一個体と思われる。14は短沈線文土器で，少なくとも二条を一組として三組はある。赤褐色土器で，内面には條痕がみられ焼成は良好。15は口唇部に斜めに沈線，外面は単篦によって二条の横捺文がつけられている。16，18は点刻文がつけられている。

Ⅱ－29図（図版Ⅱ－22Ａ）1は焼成悪く，内外面とも磨耗が著しくザラザラとしている。文様も不鮮明であるが，点刻文が刻されている。2，3も器面の保存が悪くザラザラとしている。短沈線文がつけられている。4は鉛筆先端状の工具による横位の長沈線文がみられる。5，6は二条一組の点刻文の一部なのか，4と同類の工具による点刻文なのか上部が欠落して不明。7は器面の保存のよい土器で黒褐色，半截竹管状の工具による短沈線文土器。外器面に調整痕をとどめている。8は一条の点刻文。9は太めでしっかりした沈線文をもつ土器片で，有段状をなしているが，小破片で上下も不明，茶黒色土器。10は磨耗がひどく文様も不鮮明であるが，点刻文と思われる。11は幅3.5㎜の二叉状工具による点刻文を配した口縁部。12も器面の磨耗がひどくザラザラとし，石英，チャートの砂粒が器面に露出している。文様は連点文。13，14も磨耗のため二条一組の点刻文か，独立した点刻文の一群なのか不明。15は一条の短沈線がみられるが，器面はザラザラとして脆弱。

Ⅱ－30図（図版Ⅱ－22Ｂ）1は口唇部に太めの点刻文を刻し，口縁に接し，それに沿って一条の点刻文を巡らし，その下に斜行沈線文を飾った土器。黄褐色で，胎土には石英など多量の砂粒を含む。焼成も比較的良好で，この文様構成は伊波貝塚（註10）や室川貝塚（註12）などの出土品にも若干みられる。2は文様は不鮮明であるが，口縁部に細かい二条の点刻文，連点文を施し，下方に綾杉文を配する。チャート，石英の砂粒が器面に露出している。3は三条一組の鋸歯文が二段となっている。多量の石英，チャートの砂粒を含み，それがザラザラする程に器面に露出している。色調は灰褐色。4は器面の保存もよく焼成も良好。荻堂式土器によくみられる文様帯の下方をこのような二条の鋸歯文でまとめる土器の一部であろうか。茶褐色で胎土に石英などの砂粒を含む。6も4と同じような鋸歯文の一部で，粗雑な沈線文である。焼成は比較的に良好。7の細沈線文土器は奄美諸島によくみられるもので（嘉徳Ⅰ式），沖縄の前期でも後半になると珍らしくないが，本品は沈線も浅く，力強さがない。胎土に石英などの砂粒を含む。8～11は単篦による横捺または押引文である。8は篦先の狭い工具による施文で，連点文状となっている。9は口唇と口縁近くに横捺文を配す。10は幅4㎜の単篦（刃部がやや凹んでいる）によって横位と斜めに器面を撫でるように浅く施文した土器片，黒褐色で，胎土には多量の石英，チャートの砂粒片を混入している。12は小破片で土器のどの部分か明瞭でないが，凸帯状に肥厚した部分まで太めの沈線文が施されている。13～15は凸帯文土器で，13は凸帯に沿って沈線文を施す。14は内外器面の磨耗が著しく，文様も不鮮明であるが，凸帯上および凸帯に沿って横捺刻文がつけられている。15も器面の磨耗がひどいが凸帯に沿って爪形文が横捺されている。器面に石英やチャートなどの砂粒が露出している。

Ⅱ—31図（図版Ⅱ— 23 ）1～4は爪形文土器片。いずれも爪形は箆先の尖った工具によるもの。1，2は面縄東洞式で1は口唇部，口縁近くに右から左へと深めに刺突がちに爪形を横捺している。色調は灰褐色で，胎土には石英などの砂粒を僅かに混入。2は4㎜の厚さで薄手。爪形文がところ狭しと刻されている。胎土は1と同じ。3，4は嘉徳Ⅰ式土器で，いずれも爪形は浅い。沈線文が3は爪形文の上部に，4は中央部に横位に見られる。2片とも胎土に石英などの砂粒が少量含み，3は黄褐色，4は灰褐色。5は斜行する沈線と連点文とを組合せた土器（嘉徳Ⅰ式），口唇部にも点刻文がみられる。胎土には石英などの砂粒を含み，色調は褐色。6は上部に幅広の横捺文と連点文を施し，その下にシャープな斜行沈線文を配している。色調は茶褐色で胎土には石英などの砂粒が少量含まれている。

7～13は底部，平底で底径最小で5㎝，最長で8.2㎝。

Ⅱ—32図（図版Ⅱ— 24 ）1・2は大形の口縁破片より復元した深鉢形土器。いずれも荻堂式土器で，1は口径11.3㎝，高さ約15㎝，幅6㎜の二叉状工具による施文で口縁に沿って二条の短沈線文を二組巡らし，その下を二条の鋸歯文でまとめている。典型的な荻堂式土器で，焼成もよい。暗褐色で胎土には多量の石英，チャートの砂粒を含んでいる。2は口径10.2㎝，高さ約16㎝（波状頂部まで），波状口縁の深鉢形土器。単箆による横捺文と二叉状工具による鋸歯文を交互に配置したもので，胎土には石英などの砂粒を含むが，比較的精選されている。色調は茶褐色，整理中の火災のため現在は黒褐色となっている。

ニ）石　器

本遺跡出土または表面採集した石器はⅡ—33図（図版Ⅱ— 25 ）とⅡ—34図（図版Ⅱ— 26 ）に示した。

Ⅱ—33図（図版Ⅱ— 25 ）1は石けん状の扁平な凹石。中央部にザラザラとした敲打痕の凹みがあり，その周囲の器面は，磨石として石皿上で長期に使用したため滑めらかな面をとどめている。さらに凹石の上下，左右の縁にも敲打痕がある。裏面は大きく欠落し，研磨面が僅かに残っているのみである。石質は細粒砂岩，表採品。2は敲石と言うべきか，器面には敲打痕をあちこちに残しているが縁部には研磨面がみられる。四分の一程は欠失しているが，敲打器として，時には磨石などと多目的をもった石器であろう。3，4，5は扁平小型利器で，3は刃部幅1.7㎝で両刃，頭部は僅かに欠損しているが完形品と考えられる。両面とも自然面を残している。石質は砂岩（A地点ピットD第Ⅲ層出土品），4は3個中最も刃が鋭く器体も薄いが，刃部の一方が欠落し，頭部も破損している。刃部は研磨されているが，その他は自然面のままである。石質は結晶片岩（A地点ピットD第Ⅳ層出土）。5は刃幅2.7㎝で両刃，両面とも研磨されているが頭部は欠落している。石質は結晶片岩（A地点ピットD第Ⅱ層出土）。6は器面の凹凸が多く不定形な石器，一部に研磨された平面があり，その反対側には敲打痕がみられる。さらに敲打のため凹められたと考えられる凹みが二カ所にあり，ところどころ欠落しているのは石槌として使用中に欠損したためであろうか。重さ560㌘，石質輝緑岩（A地点ピットD第Ⅲ層出土品）。7は石皿の一部破片と考えられる。縁部には整形の際の敲打面がみられ，中央部へ凹みと思われる傾斜をなしているが，その面は荒い剥落痕が残っている。石質砂岩。Ⅱ—34図（図版Ⅱ— 26 ）1は良

質の石材（輝緑岩）を使用した片刃石斧，器面はよく研磨し，整形されている。裏面はフラットな面で，この部分は研磨されてはいるものの，整形の際の打痕が未だ残っている。刃部は中央部から大きく欠落している。器面に整形中の擦痕などがわづかに見られる（表採品）。2は表裏面とも研磨痕があるが，刃部が大きく欠落している。両端は定角とまではいかないが，一部研磨痕がみられる。石質は砂岩（A地点ピットD第Ⅱ層出土）。3は小形両刃石斧，長さの割に刃部が幅広い。研磨されているが，全面アバタ状の整形時の敲打痕が残っている。この種の小形石斧は仲宗根貝塚その他からも出土しているが，嘉徳遺跡（註13）からも多数出土している。石質結晶片岩。4は刃部が大きく欠落し，僅かに研磨面もあるが，打製石斧を思わせる程に全面は剥落痕である。石質緑色片岩（A地点ピットD第Ⅱ層出土）。5は良質の石材（輝緑岩）製の片刃石斧の刃部の破片，破損部外の刃部はよく研磨されている（A地点ピットD第Ⅱ層出土）。6もよく研磨された扁平な片刃石斧の刃部破片。石質は砂岩（A地点ピットD第Ⅱ層出土）。8も同じく両刃石斧の刃部破片，研磨されよく整形されているが，風化したのか条痕がみられる。石質は砂岩（A地点ピットD第Ⅱ層出土）。9も全面よく研磨され，側面も定角に整形されている。石質は砂岩（A地点ピットD第Ⅱ層出土）。10は石斧の頭部，側面は定角に整形し全面よく研磨されている。石質は砂岩。7は刃部は研磨し成形しているが，全体的に自然の礫を利用し，そのままの面を残している。刃部は大きく欠落している。石質は結晶片岩。11は大形の石斧の頭部，表裏面に若干研磨痕を残しているが，基部は大きく剥落痕がみられ，両側面には敲打痕もとどめている。

(4) おわりに

以上，本遺跡の出土遺物および調査の概要を記した。今回，採石場内の4地点において試掘調査を行ったが，すでに述べたようにB～Dの3地点はほとんど壊滅の状態にあり，わずかに遺物包含層最下部の状況を調査し得たに過ぎない。

A地点もすでに一部は破壊されていた。しかし，上記4地点の中では最も損壊の少い地域であった。遺物包含層の状況を調べるため，丘陵南端部で一部試掘を行った結果，未撹乱の文化層が良好な状態で残っていることを知った。

層は4枚認められた。第Ⅰ層は表層で，土器片のほか，後世の陶磁片も若干出土した。第Ⅱ層以下は未撹乱であった。土器は奄美タイプを除いて，7型式（伊波式，荻堂式，大山式，カヤウチバンタ式，室川式，室川上層式，宇佐浜式）認められたが，本地点の土器はすべて小破片で，復元可能なものはなく，そのため型式分類上不明なものが多い。以下に本地点の主要な土器について略述する。

有文土器としたものには伊波式や荻堂式に含めてよいとみられるものも若干あるが（Ⅱ-12図1～9など），大半は型式決定が困難である。そのため本文では有文土器として一括したが，それらの諸特徴からみて，大部分は伊波式から大山式の範疇におさまるものと考えられる。これらの土器は第Ⅱ層以下にみられたが，特に第Ⅲ層下部に集中していた。

大山式，室川式そして宇宿下層式に属するとみられる土器も第Ⅲ層下半部に集中する傾向がみられた。大山式と確認できたのは2点だけであるが，これは標品が小さく，荻堂式と区別するのが困難なためで，前述の「有文土器」の中には当然，大山式も含まれているものと思われる。し

かし，全体的には少ないという印象を受けた。室川式土器は比較的多かった。本地点の室川式土器はテンパーとして石英を含んでおり，その点，室川貝塚出土のもの（石灰岩や貝ガラ片を含む）と異っている。テンパーの相違が何を意味するかは，今後の課題である。

以上の土器は縄文後期に比定してよいであろう。本地点で第Ⅲ層下半部に集中してみられたことは，これらの土器の古さを物語っているものと思われる。

カヤウチバンタ式，室川上層式，宇佐浜式の3型式は各層に比較的ムラなく見受けられた。室川上層式と宇佐浜式土器はほぼ縄文晩期に比定できると考えるが，カヤウチバンタ式土器は後期中葉から晩期に対比される比較的長期にわたって行なわれた型式であり，細分編年が迫られているが，資料が未だ十分整っていないので，本文では具体的検討を保留した。

ところで，上記各型式の出土状況から，A地点は伊波式以後，宇佐浜式に至る期間営まれた遺跡とみていいだろう。しかし，各型式の出土量をみると宇佐浜式が圧倒的に多く，また他の中期遺跡同様，貝塚を構成していないことから，本地点の主体は宇佐浜式の時期にあったといえる(われわれの今回の試掘地点は，前期遺跡の末端遺物散布地に,中期遺跡の中心部あたりが重なった地域とみられる。第Ⅲ層下部における前期土器と中期土器の混在は，末端部における状況の一例を示しているものと思われる。以上は高宮の見解であるが，これに対し執筆者の一人嵩元は残存説をとる。つまり，第Ⅲ層下部の前述の状況を前期土器の使用が一部中期の時期に及んだと見るのである。文化は変化の過程において急激に消失したり，大きな断層をもって変るということはあり得ないから，一部は次の新らしい段階にも引き継がれるという，いわゆる残存のあることも確かである。したがって，嵩元説を理論的に否定する理由は何もなく，あるいは現に一部引き続き行なわれたものもあったかと思う。ただ，A地点の場合，一般的にはどの解釈がより事実に近いか，両者の相違については本報告書提出までに意見の統一を行うつもりでいたが，煮詰るところまでいかなかったので，おのおのの見解を列記することにした。残存説については，上記の理由から私も全然否定するものではないが，より確実にするためには住居床面など原位置の確認できる状況が望ましいと思われる）。

さて，次はB地点であるが，先述のように壊滅の状態にあり，遺物包含層の大部分はすでに取り除かれていて，岩盤の上に黒色土層の最下部がわずかに残っている状態であった。そのため本地点の下限は知り得ないが，最下部に含まれる土器は伊波式と荻堂式だけであり，上限をおさえることは可能である。

C地点については，残念ながらどの土器をもってC地点のものとすべきか，前述のようにD地点のものと混ざってしまって摘出できる状況にないが，C・D地点のものとされる土器についてみると，伊波式，荻堂式，同期の奄美の土器以外は見られず，また，C地点が貝塚を構成していたことから，上限は矢張り縄文後期に比定すべきかと考える。

また，D地点については嵩元がⅡ—32図2の荻堂式土器の出土を確認しており，占拠期間の一端をおさえることは可能である。

以上のように前記諸遺跡のうち，A地点の開始期については執筆者間に見解の相違はあるものの，他の地点が伊波・荻堂期に開始されたことは明らかであり，同じ時期の遺跡が数10mの距離をおいて同一丘陵上で営まれていたことになる。このように類例遺跡が隣接しながら複数存する

ことは前期（貝塚時代）では珍らしく，コミューニティー研究上重要な遺跡であったと思われる。しかし，われわれの調査時点ではB～Dの3地点はすでに壊滅の打撃を受けており，その意味で，この3地点の出土遺物はそれこそ貴重な資料であったにもかかわらず，C・D地点の遺物がその資料的価値を凍結されてしまったことは返すがえすも残念である。

次に奄美諸島との交流であるが，本遺跡で検出された奄美の土器は面縄東洞式，嘉徳Ⅰ式，喜念Ⅰ式など種類は限られている。これらの土器を宇宿貝塚の分類に従ってみると，すべて宇宿下層式の時期に属するものであり，縄文後期における交渉を物語るものであろう。ただ，喜念Ⅰ式は沖縄側の観点からすれば，貝塚時代中期(縄文晩期)の所産ともみられる。 いずれにせよ，奄美土器の出土量はきわめて少く，交渉が密であったとはいい難い。

以上の諸地点は，沖縄本島の前期遺跡の中では最も内陸部に位置する遺跡である。現在判明している本島内陸部の新石器遺跡で，最古のものは室川下層式を出土した室川貝塚である。室川下層式土器は曽畑式に引き続いて行なわれた土器とみられるから，沿岸地帯から内陸部への最初の移動は縄文前期末のころ行なわれたものと推察される。

室川貝塚への移動の基点の一つとして読谷村の渡具知東原遺跡は最も有力な候補と考えられる。東原遺跡の曽畑層では，若干室川下層式土器も発見されている。室川貝塚は内陸部の遺跡ではあるが，どちらかといえば太平洋岸に近く，直線距離で太平洋岸まで約3㎞,東シナ海まで約5㎞である。そのことから距離的に近い太平洋岸地域（泡瀬海岸）からの移動も考えられないことはないが，現在までの資料は太平洋岸基点説に不利で，同地域では室川下層式以前の遺跡が発見されていないばかりか，地形的見地からすれば，将来も発見の可能性は薄いように思われる。

それからすると距離的には泡瀬海岸より遠いが，渡具知東原は有力なベースの一つである。渡具知東原と室川を結ぶ交通路として比謝川の利用が考えられる。比謝川水系の一つの支流は室川貝塚の近くを流れている。当時は河川を利用しての内陸部開発が，ジャングルにおおわれた陸路より安全で，便利ではなかったかと推察される。

知花遺跡群も比謝川水系の利用できるところに位置しているばかりでなく，これを利用すれば室川より渡具知東原に近い位置にある。したがって，附近に伊波・荻堂以前の遺跡があっても不思議ではないが，これまで報告がないところをみると，あるいは採石によって湮滅してしまったのかもしれない。

〔註〕

1. 多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念補遺」文化財要覧1960年版　琉球政府文化財保護委員会

2. 高宮　廣衛「沖縄県美里村字知花遺跡」　日本考古学年報　15，1962年版

3. 高宮　廣衛「いわゆるカヤウチバンタ式および宇佐浜式土器について」　沖縄国際大学文学部紀要社会学科篇　2－1，1974

4. 多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」　文化財要覧1956年版　琉球政府文化財保護委員会

5. 高宮　廣衛「天久遺跡」　那覇市の考古資料　那覇市史資料篇　1－1，1968

6. 「苦増原遺跡」　沖縄県具志川市教育委員会　1977

7. 河口　貞徳「奄美における土器文化の編年について」　鹿児島考古　第9号　1974

8. 高宮　廣衛・C. W. ミーヤン「熱田原貝塚の土器」　沖縄国際大学文学部紀要社会学科篇　1－1，1973

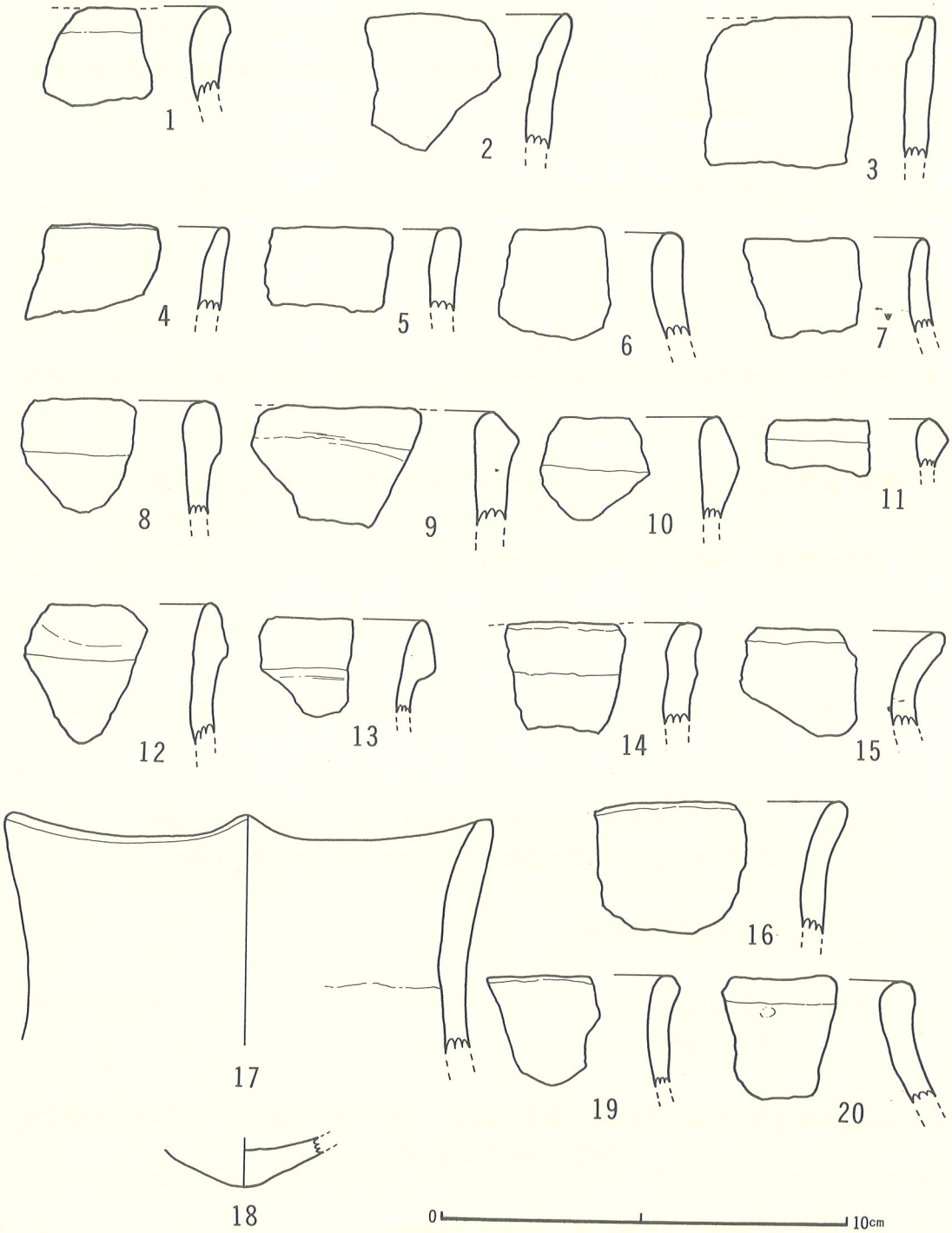
9. 高宮廣衛・比嘉春美・岸本義彦・宮城利旭・中村愿・山田正・吉本直子・上原静「具志川市隅原遺跡発掘調査概報」　沖国大考古　創刊号　1976

10. 大山　柏「琉球伊波貝塚発掘報告」　1922

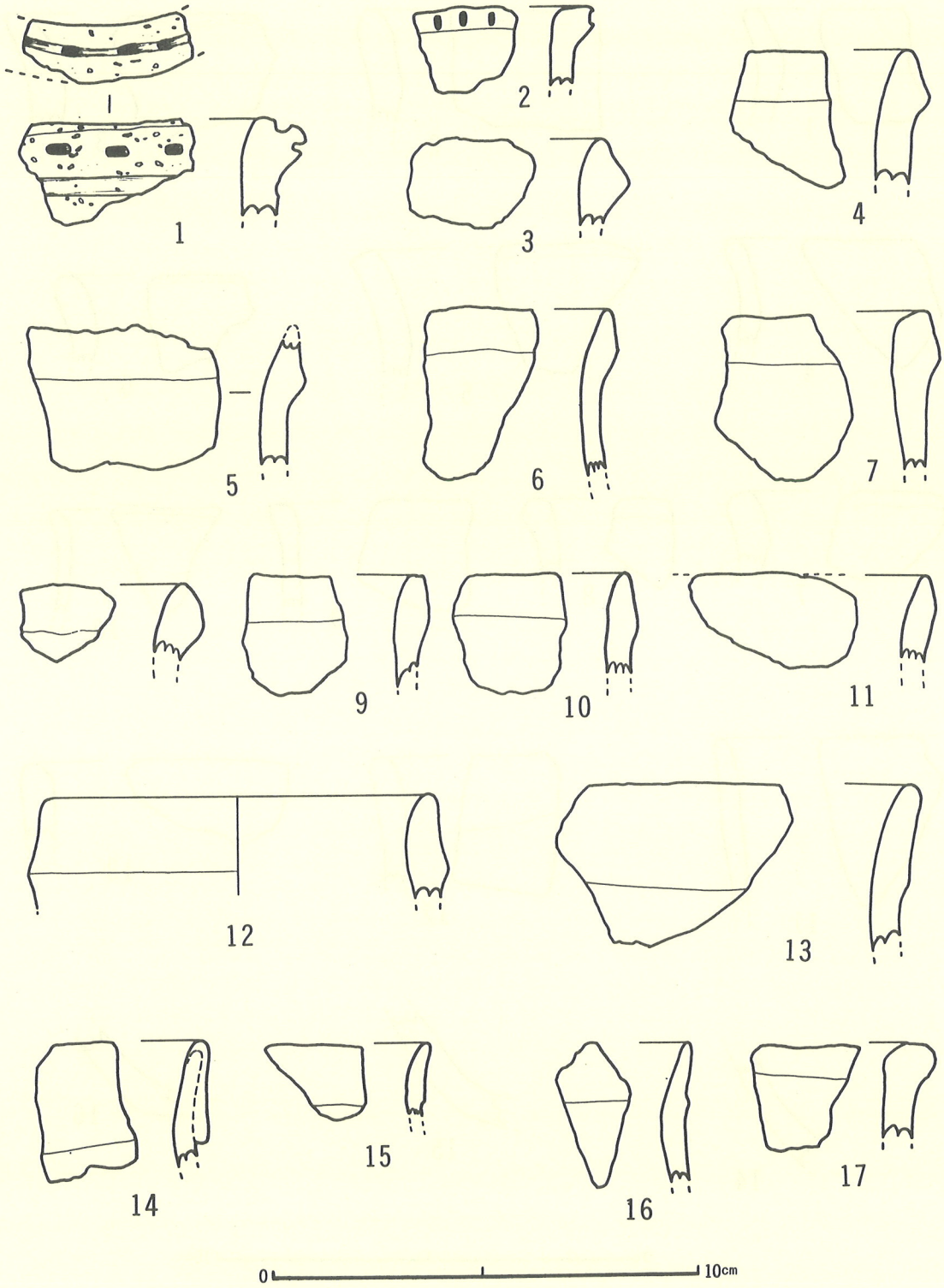
11. 「具志川島遺跡群発掘調査報告書」　第1次（1977），第2次（1978）　沖縄県伊是名村教育委員会

12. 高宮　廣衛ほか「沖縄市室川貝塚発掘調査概報」　沖国大考古　創刊号（1976），同第2号（1978），沖縄国際大学文学部考古学研究室

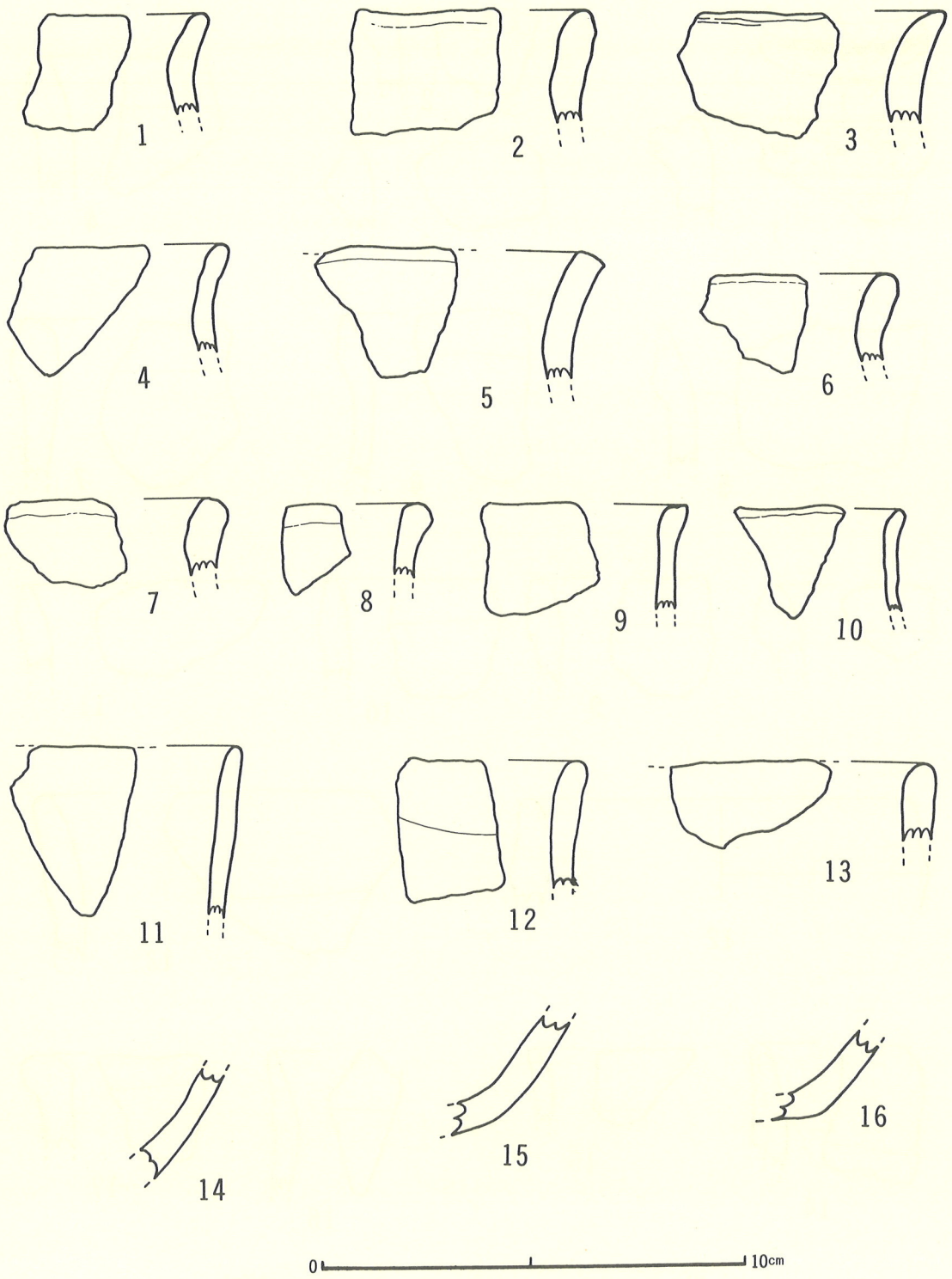
13. 河口貞徳・上村俊雄・多々良友博・平島勇夫・肱岡隆夫「嘉徳遺跡」　鹿児島考古　第10号　1974



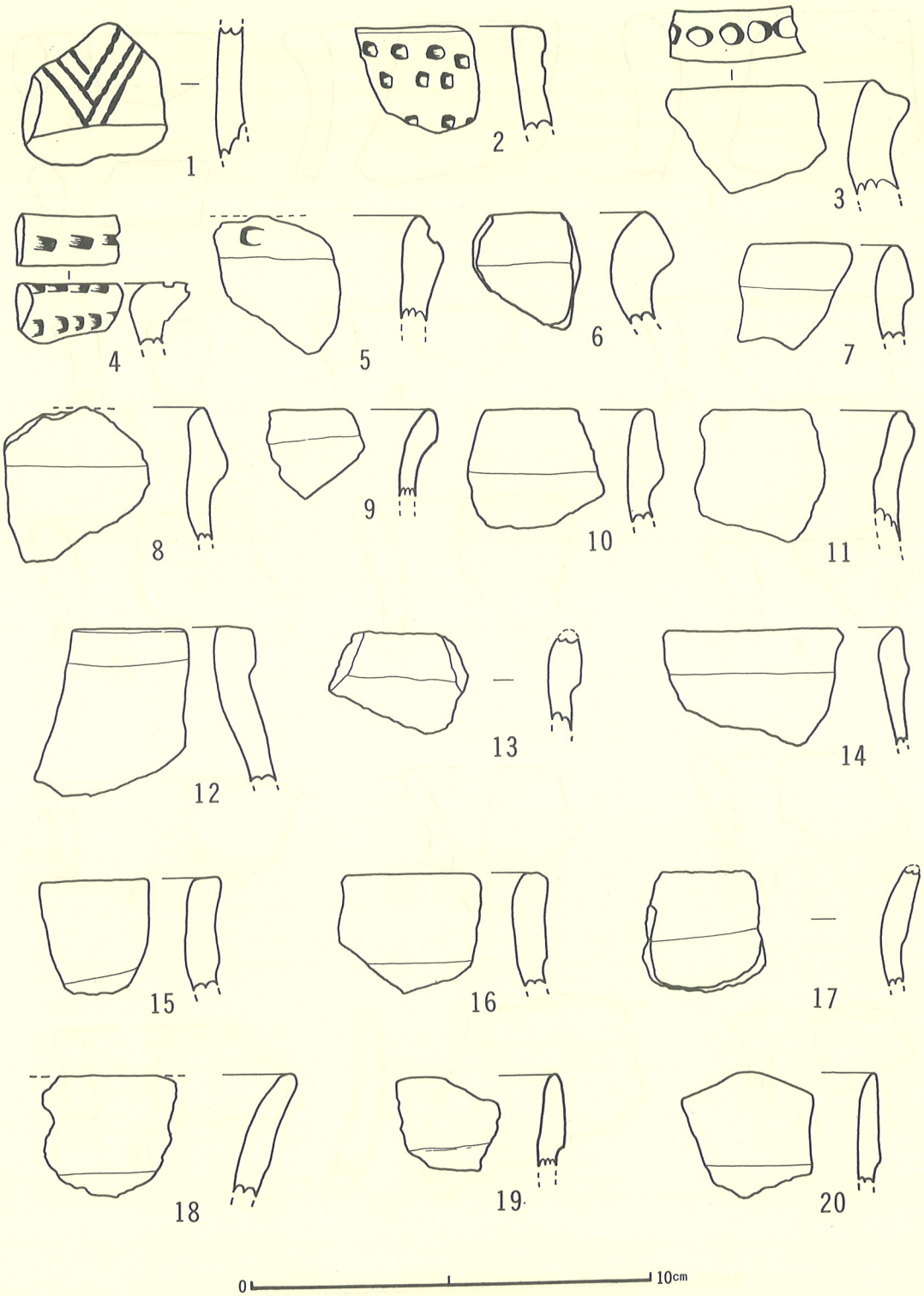
Ⅱ－6図　A地点ピットD東，第Ⅱ層（1～7＝0～15㎝，8～20＝15～30㎝）
（写真は図版Ⅱ－7）



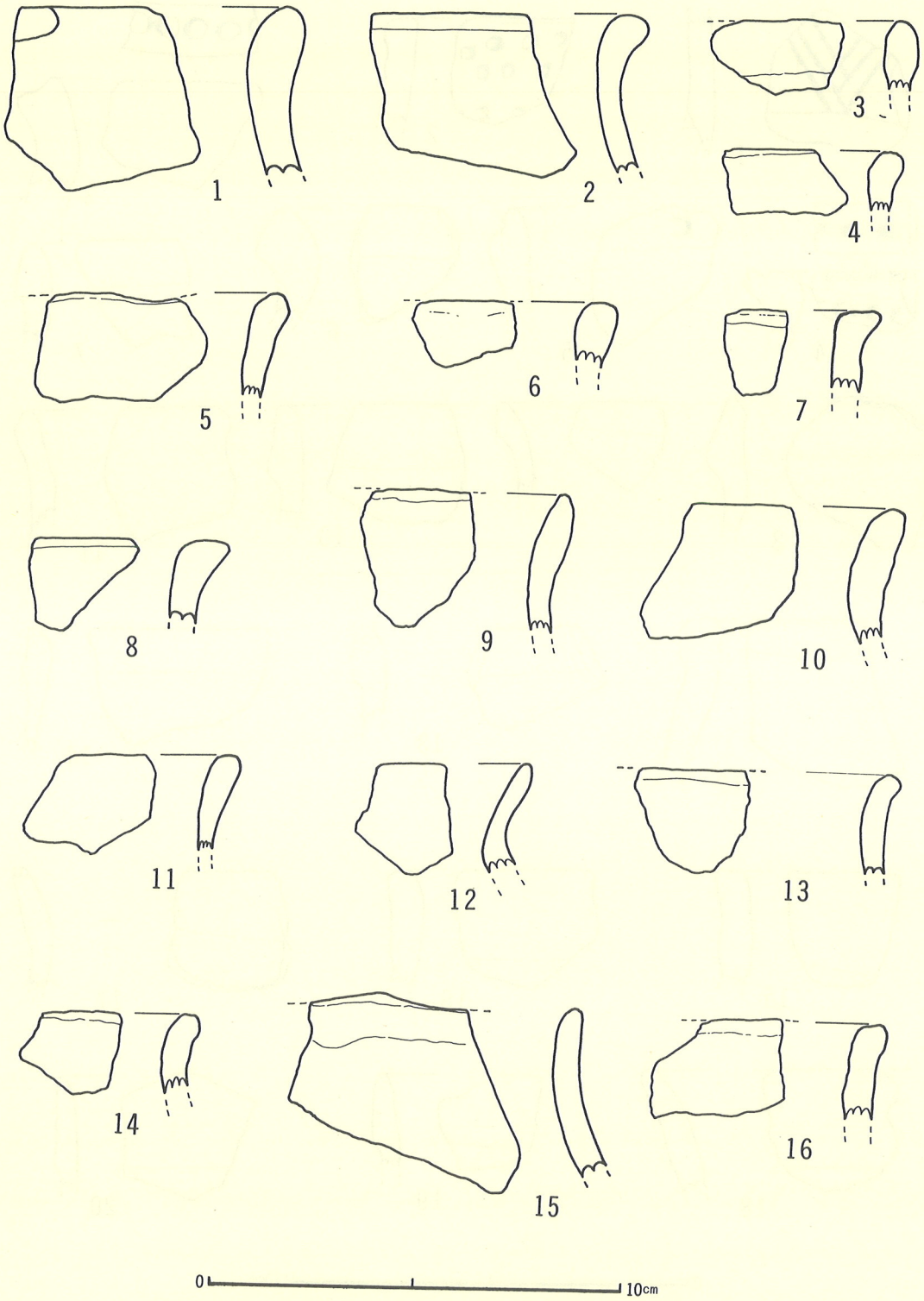
Ⅱ－7図　A地点ピットD東・第Ⅲ層（0～15cm）出土土器
（写真は図版Ⅱ－8A）



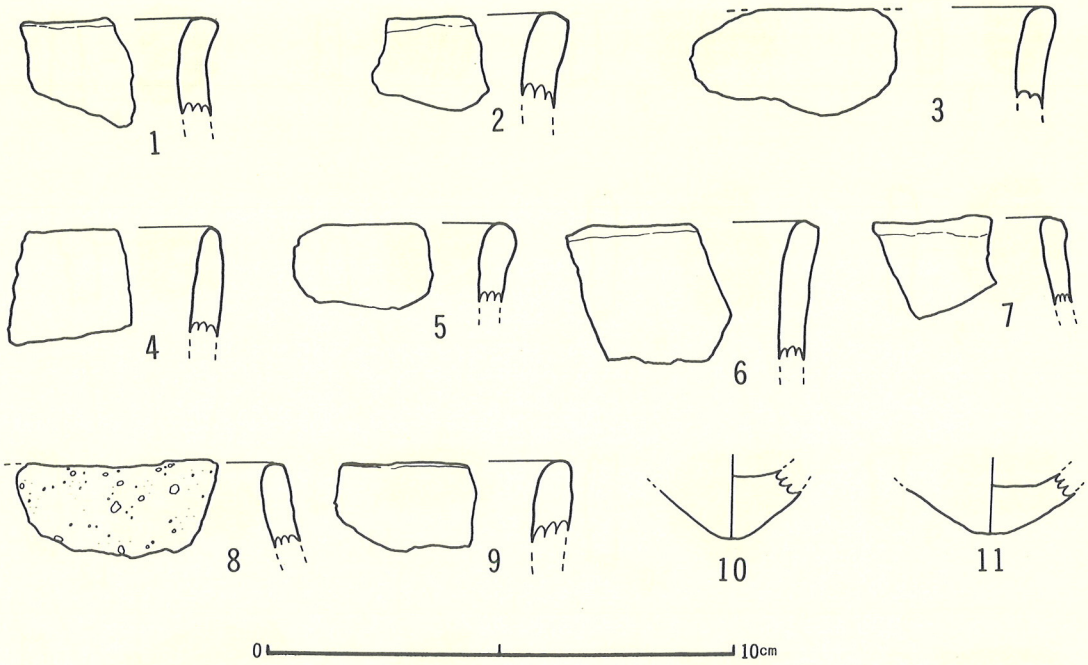
Ⅱ－8図　A地点ピットD東・第Ⅲ層（0～15 cm）出土土器
（写真は図版Ⅱ－8 B）



Ⅱ－9図　A地点ピットD東・第Ⅲ層（15～30㎝）出土土器
（写真は図版Ⅱ－9）

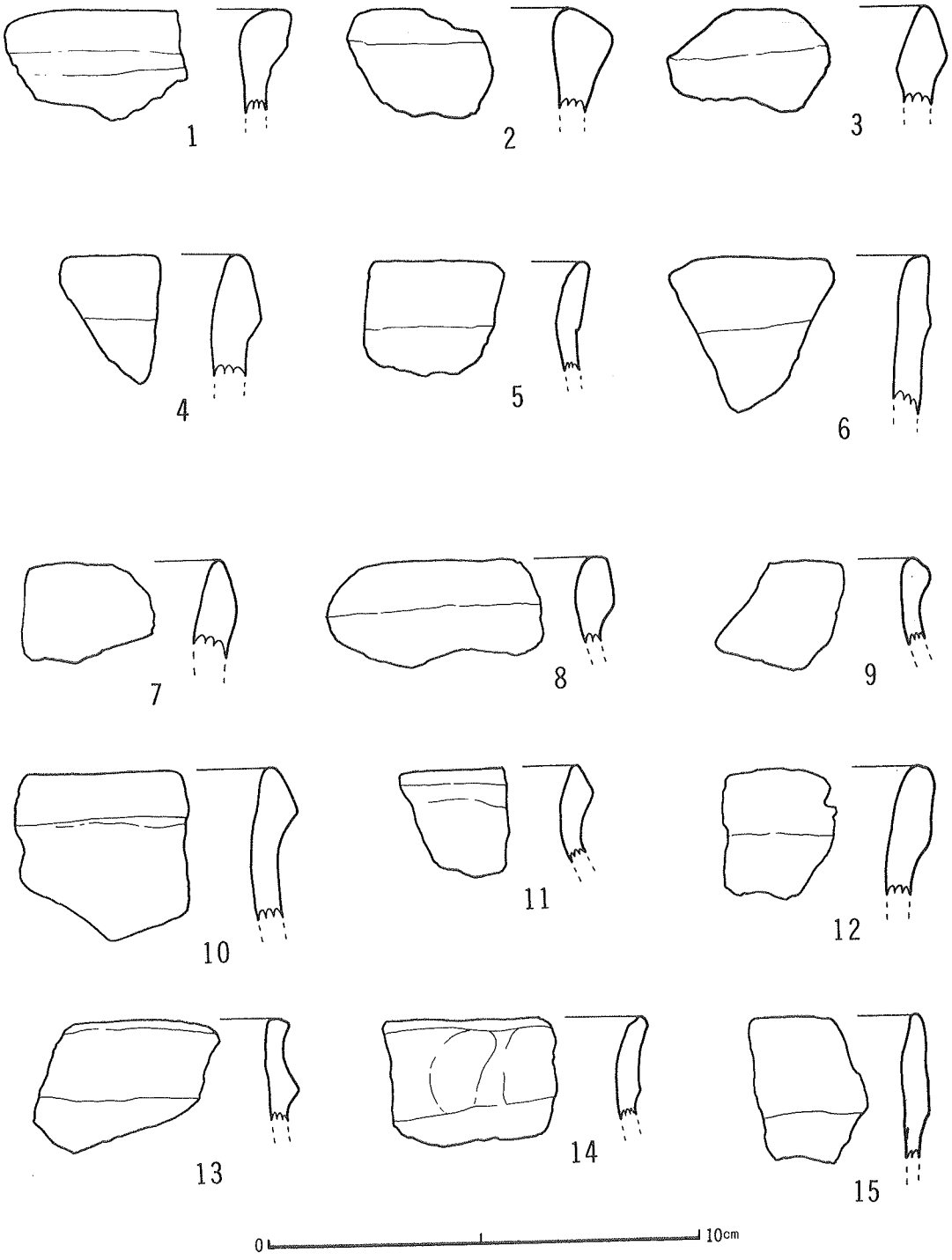


Ⅱ－10図　A地点ピットD東・第Ⅲ層（15～30㎝）出土土器
（写真は図版Ⅱ－10 A）

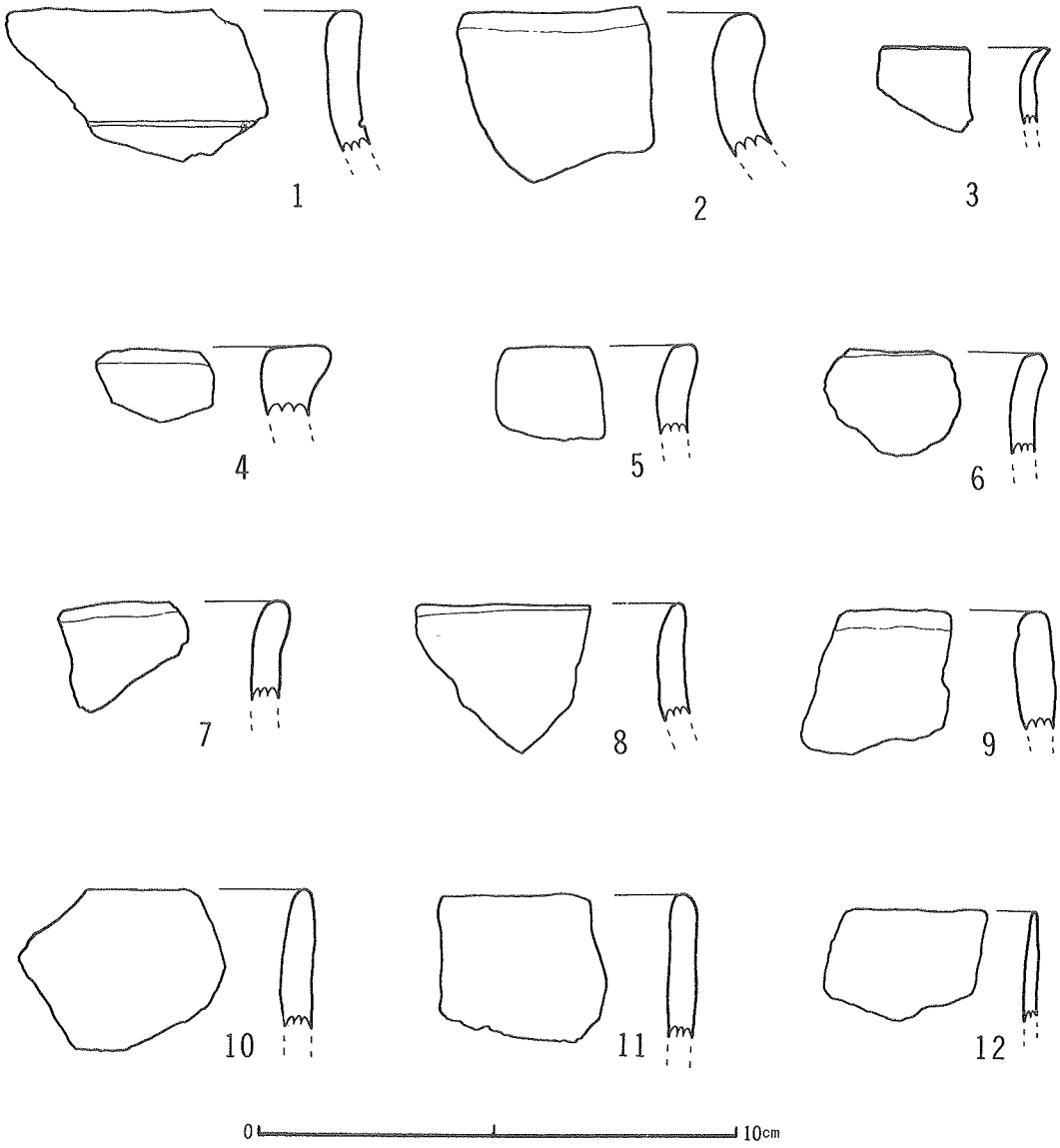


Ⅱ－11図　A地点ピットD東・第Ⅲ層（15～30㎝）出土土器
(写真は図版Ⅱ－10Ｂ)

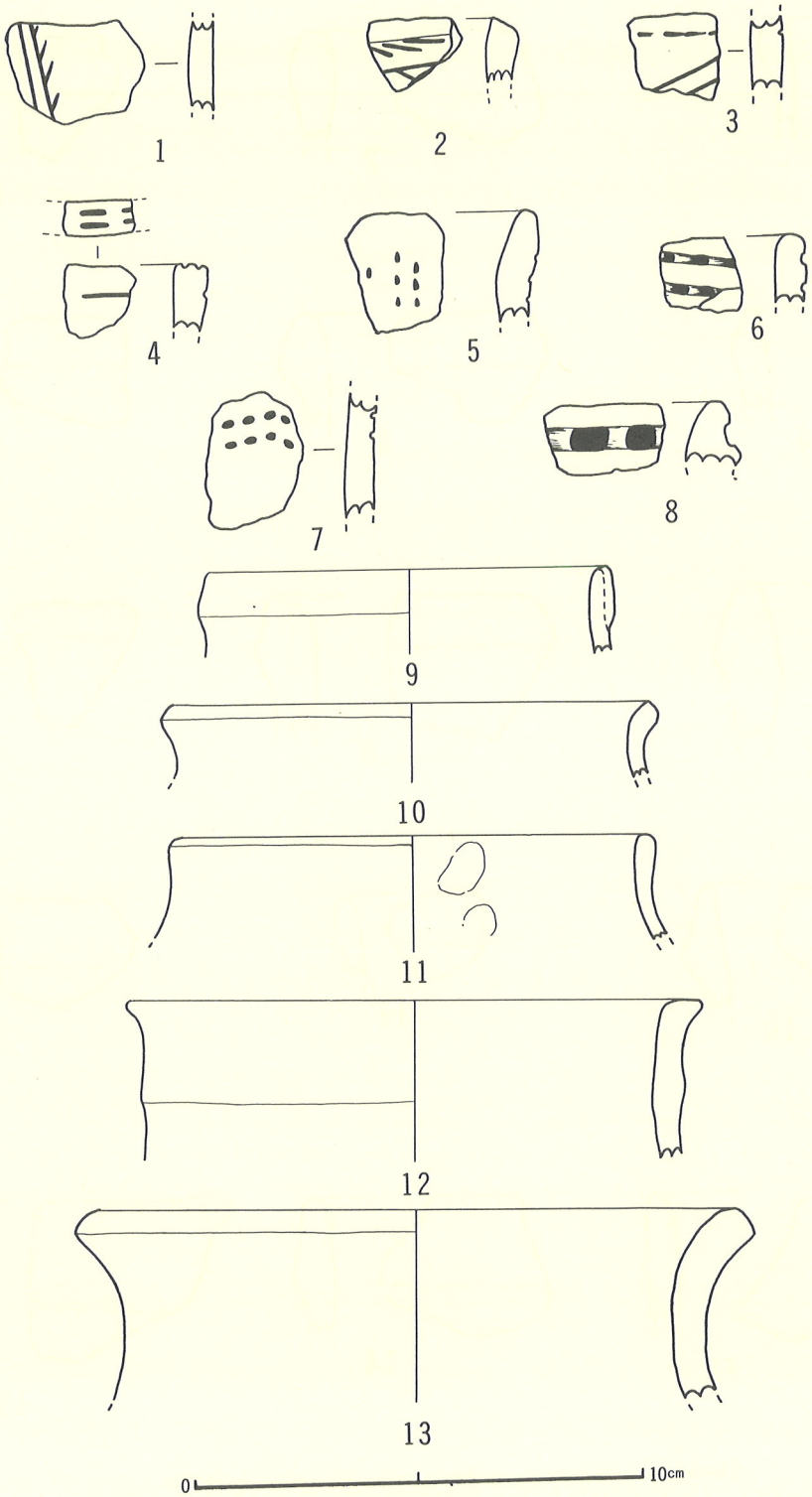
Ⅱ－12図　A地点ピットD東・第Ⅲ層（30～45 cm）出土土器
（写真は図版Ⅱ－11）



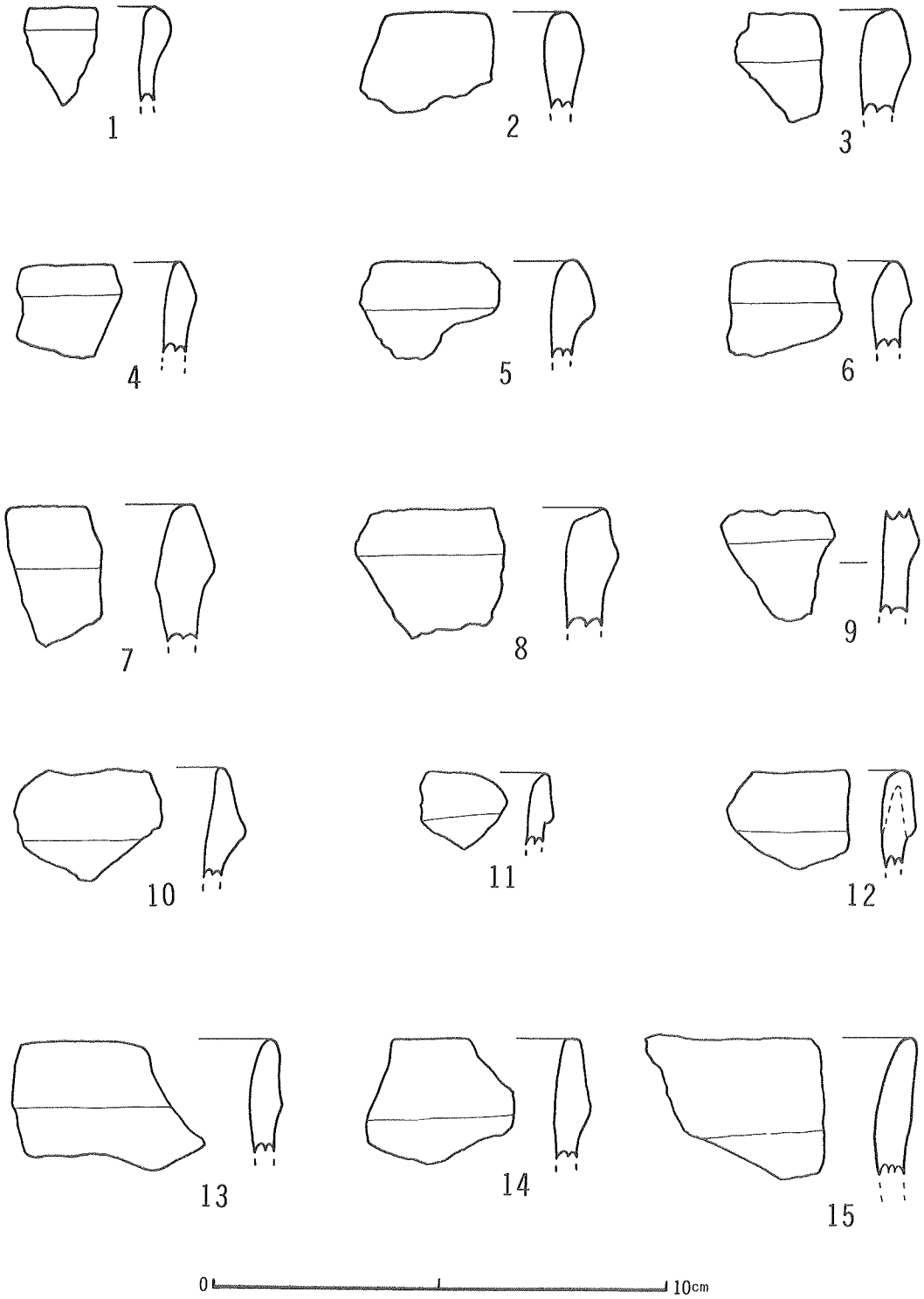
Ⅱ－13図　A地点ピットD西・第Ⅱ層（1～6＝0～15cm，7～15＝15～30cm）出土土器
（写真は図版Ⅱ－12 A）



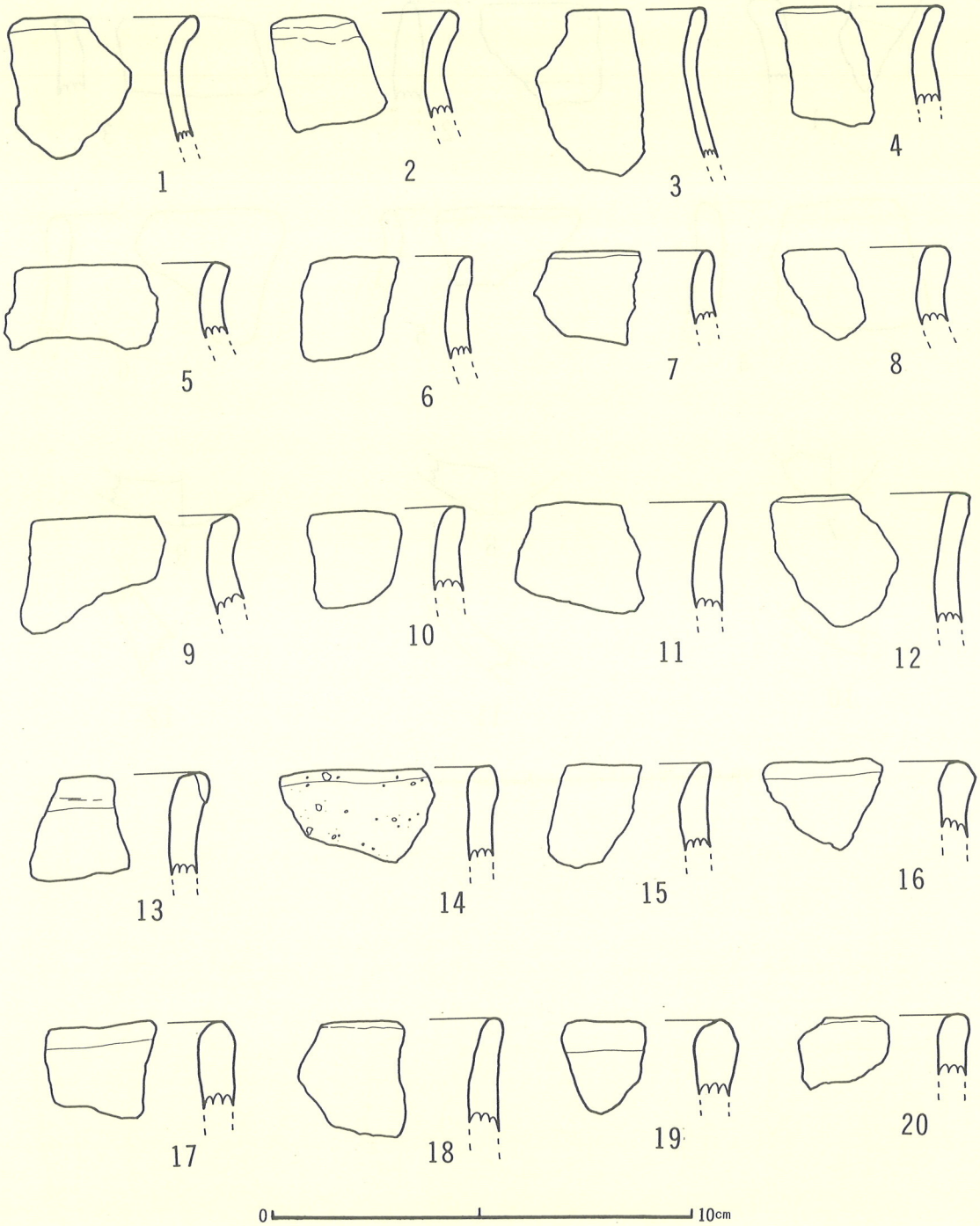
Ⅱ－14図　A地点ピットD西・第Ⅱ層（15～30㎝）出土土器
（写真は図版Ⅱ－12 B）



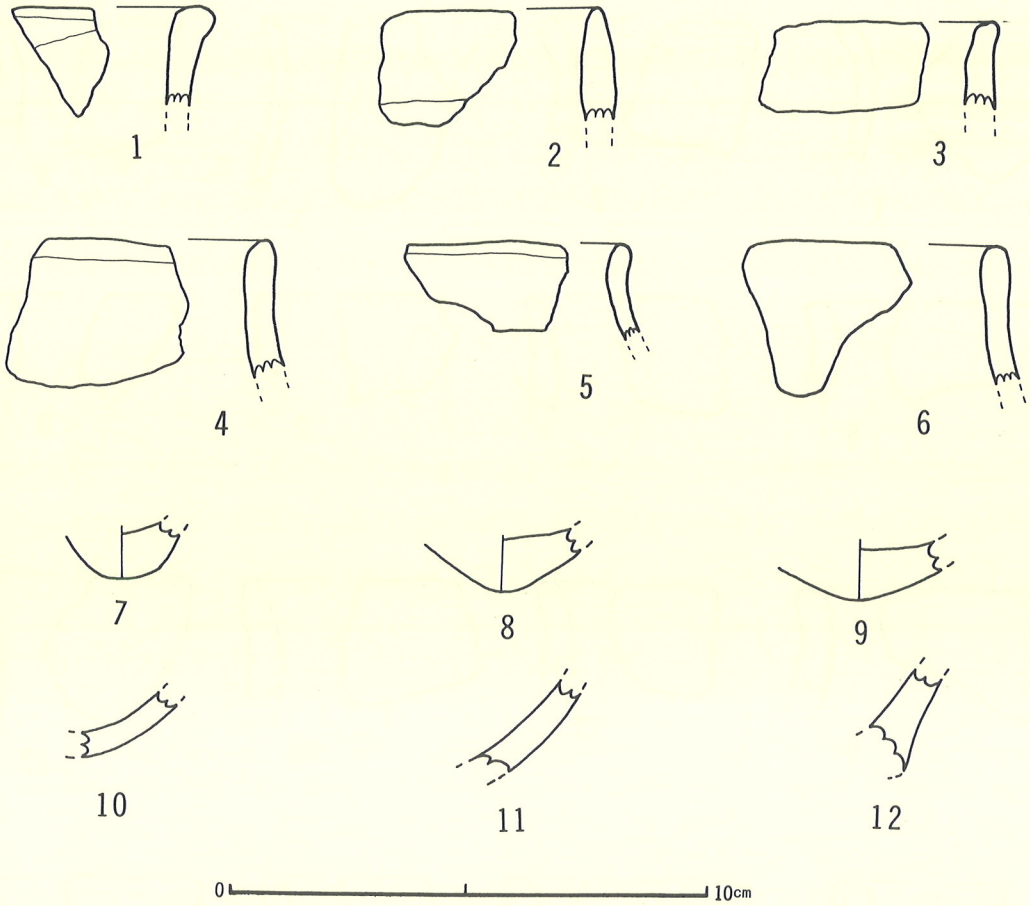
Ⅱ－15図　A地点ピットD西・第Ⅲ層（0～15㎝）出土土器
(写真は図版Ⅱ－13 A)



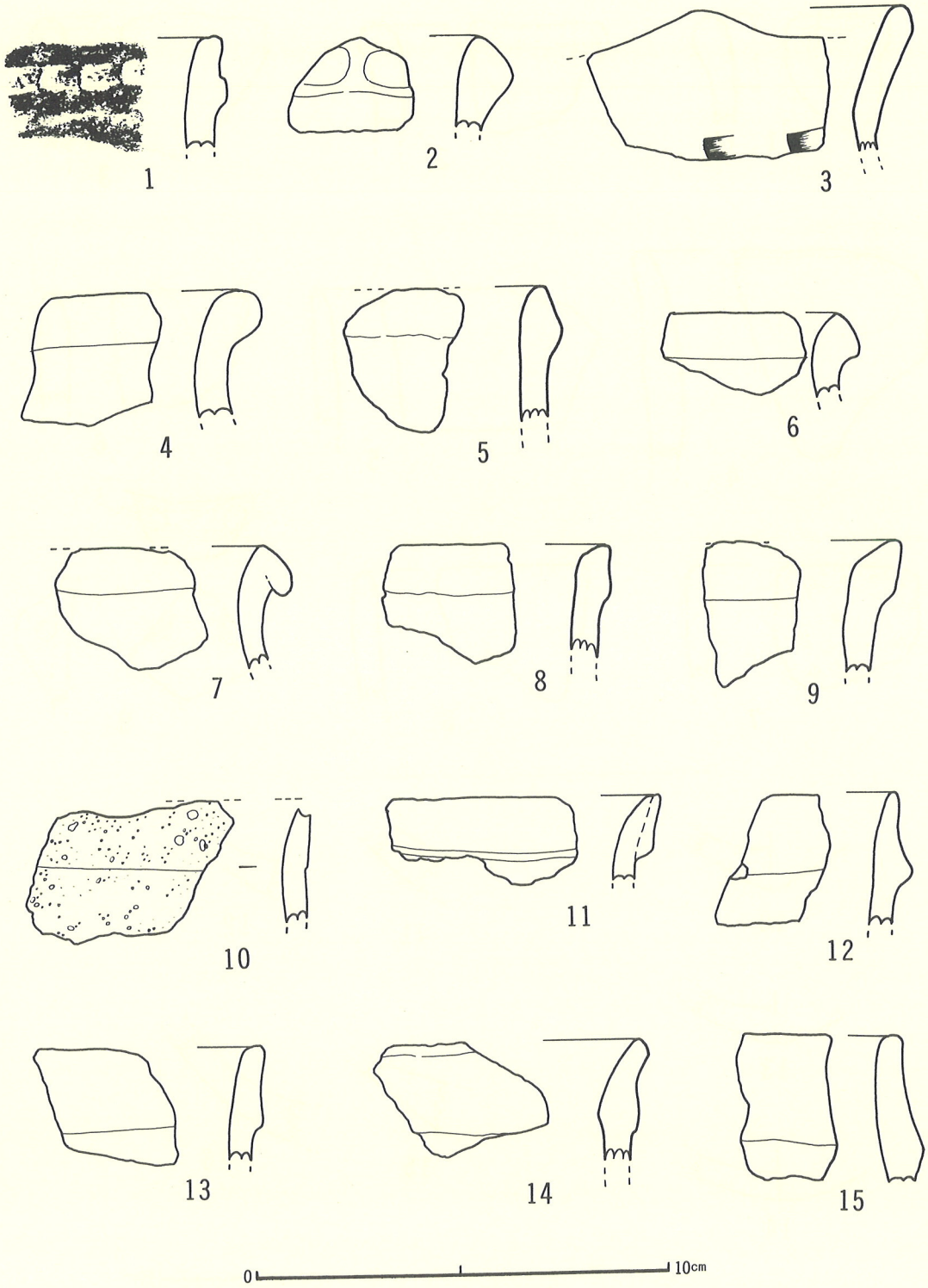
Ⅱ－16図　A地点ピットD西・第Ⅲ層（0～15㎝）出土土器
（写真は図版Ⅱ－13 B）



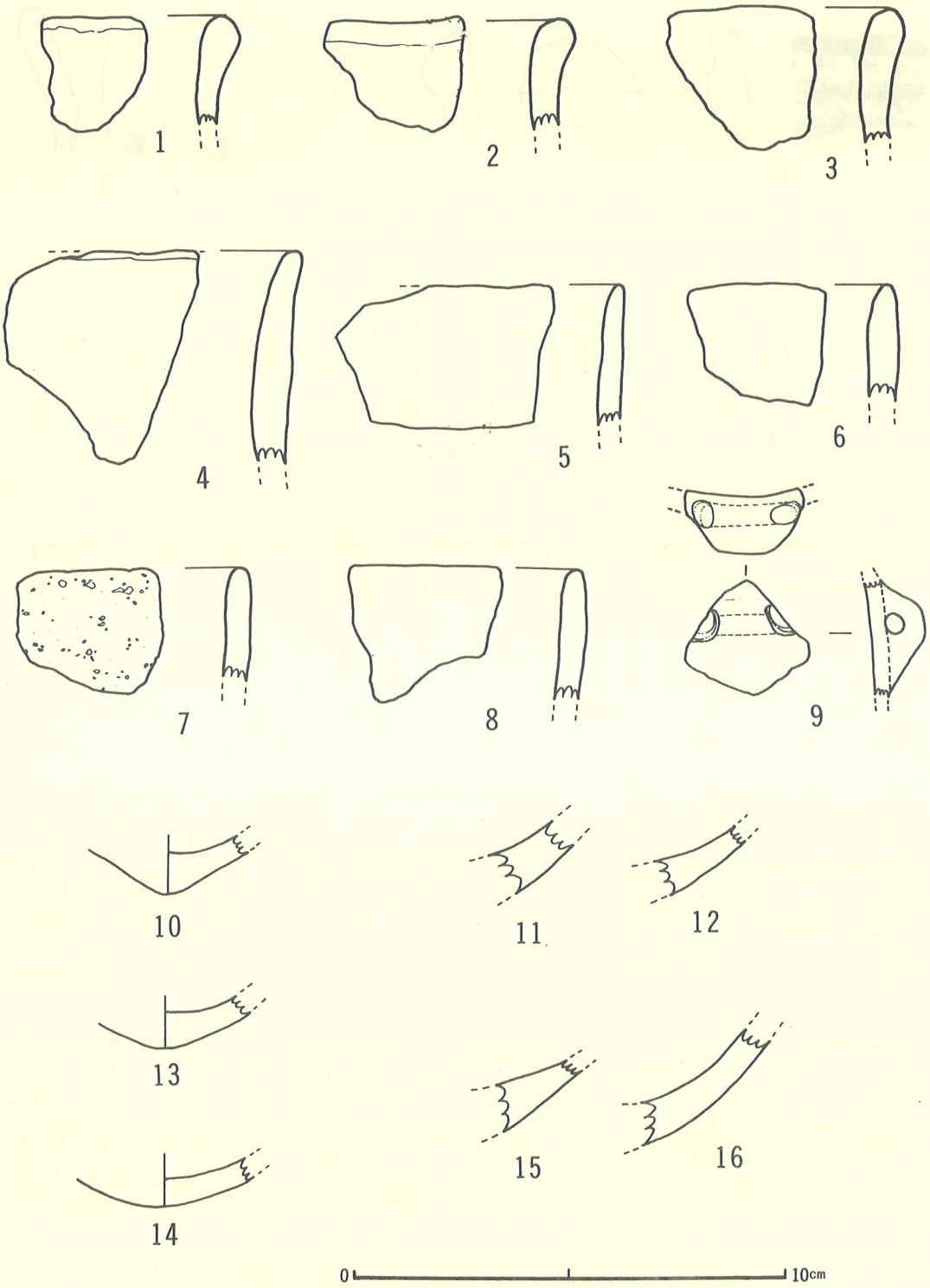
Ⅱ－17図　A地点ピットD西・第Ⅲ層（0～15㎝）出土土器
(写真は図版Ⅱ－14 A)



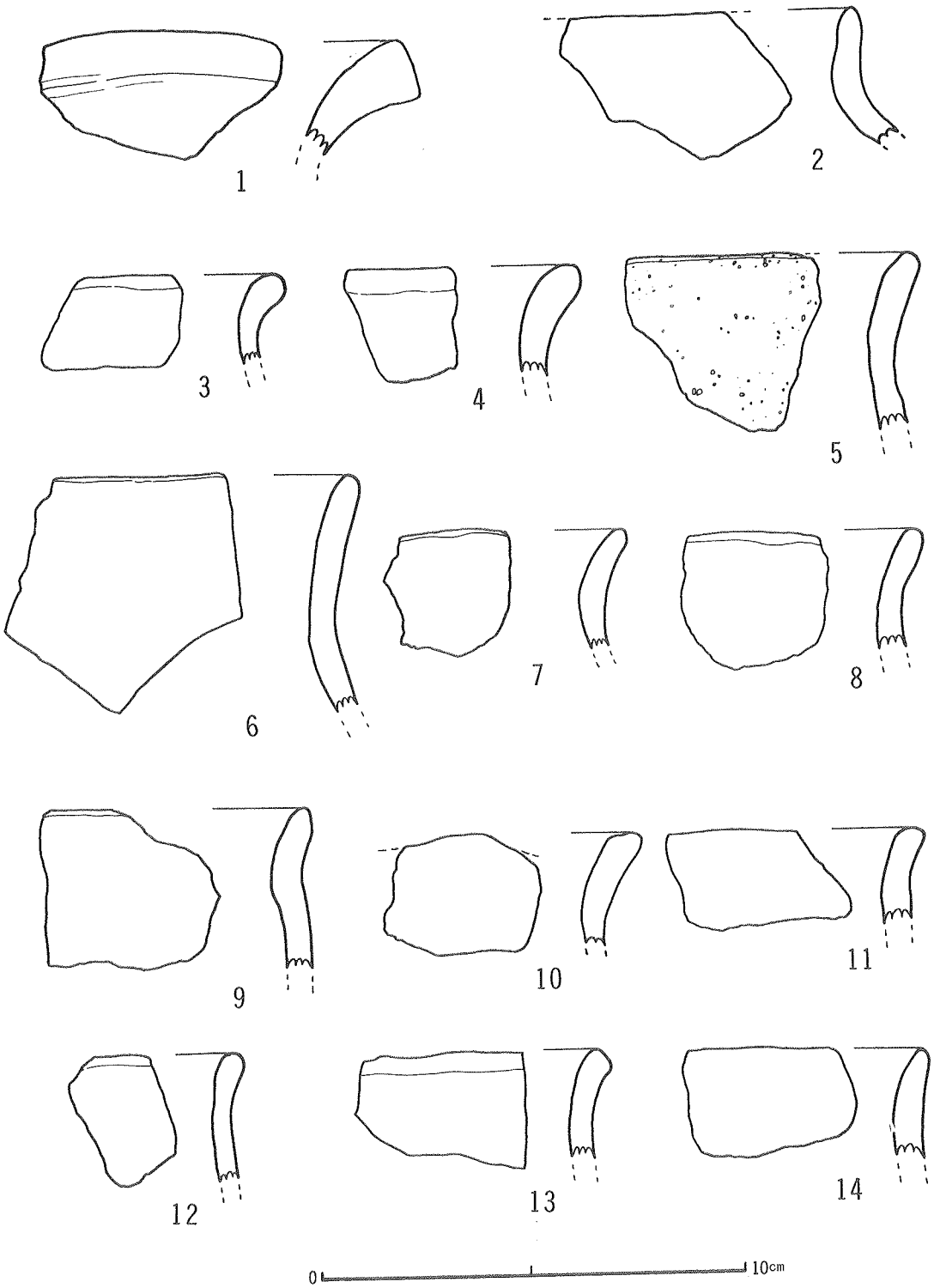
Ⅱ－18図　A地点ピットD西・第Ⅲ層（0～15㎝）出土土器
（写真は図版Ⅱ－14 B）



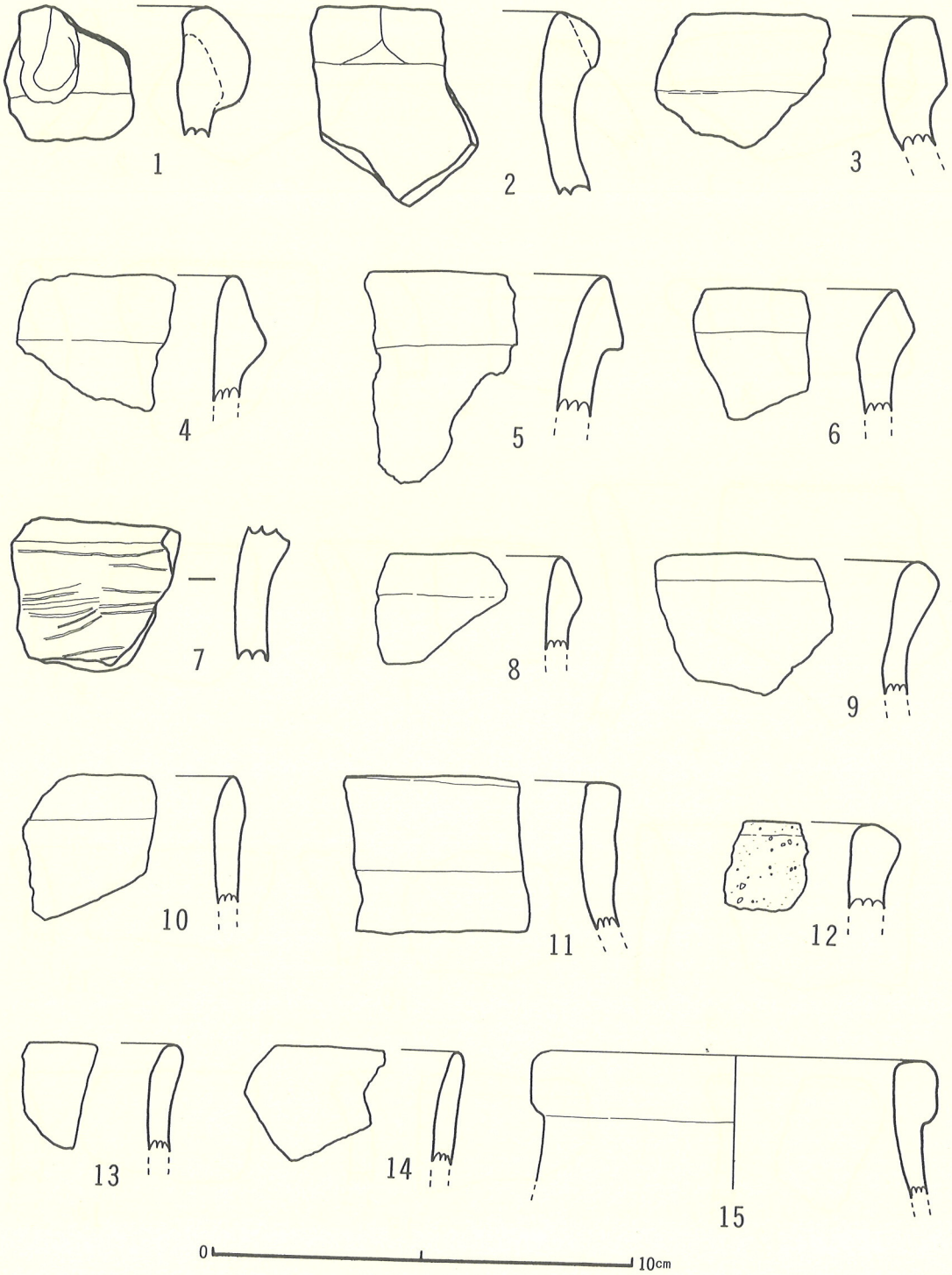
Ⅱ－19図　A地点ピットD西・第Ⅲ層（15～30㎝）出土土器
(写真は図版Ⅱ－15Ａ)



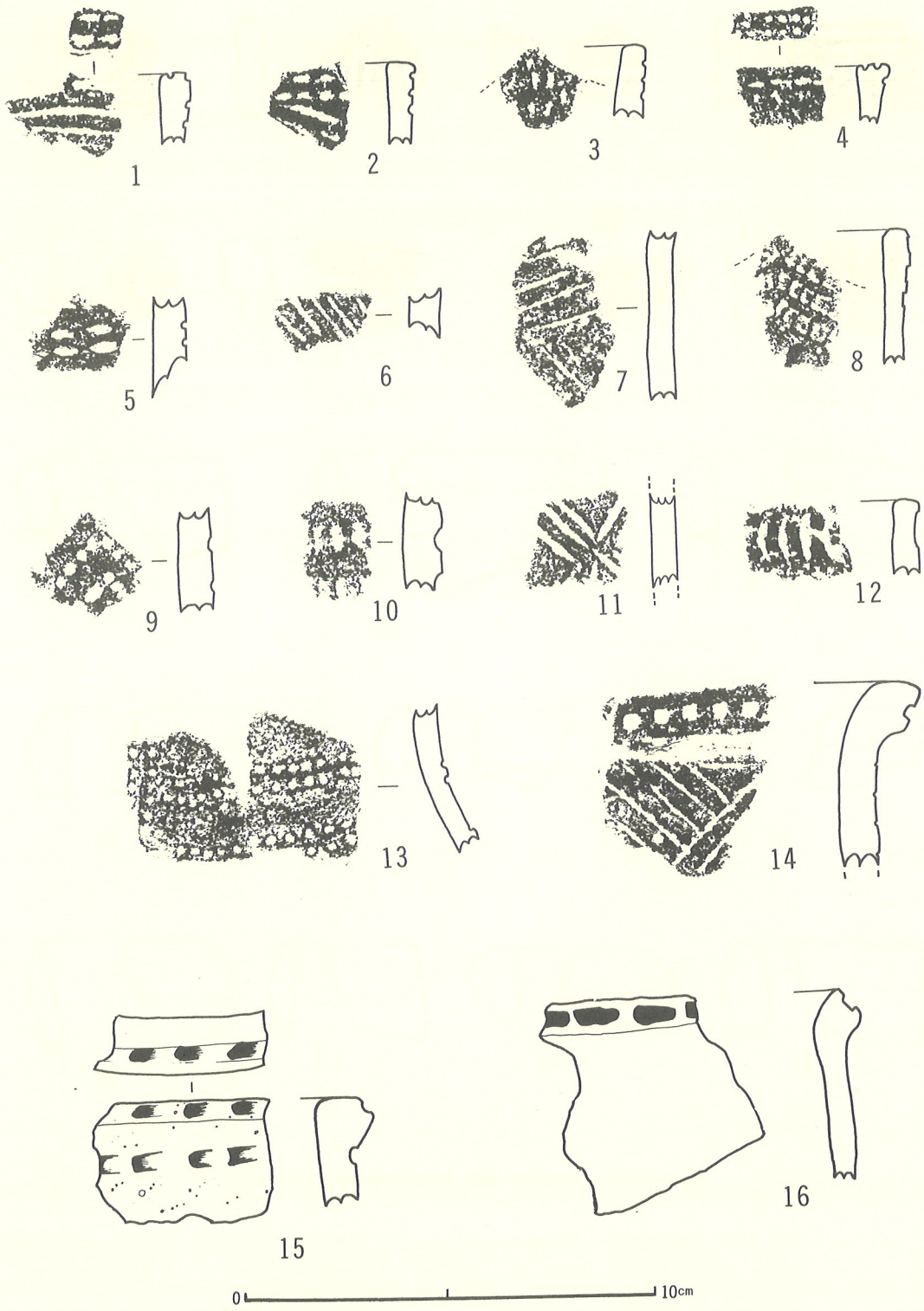
Ⅱ－20図　A地点ピットD西・第Ⅲ層（15～30㎝）出土土器
（写真は図版Ⅱ－15 B）



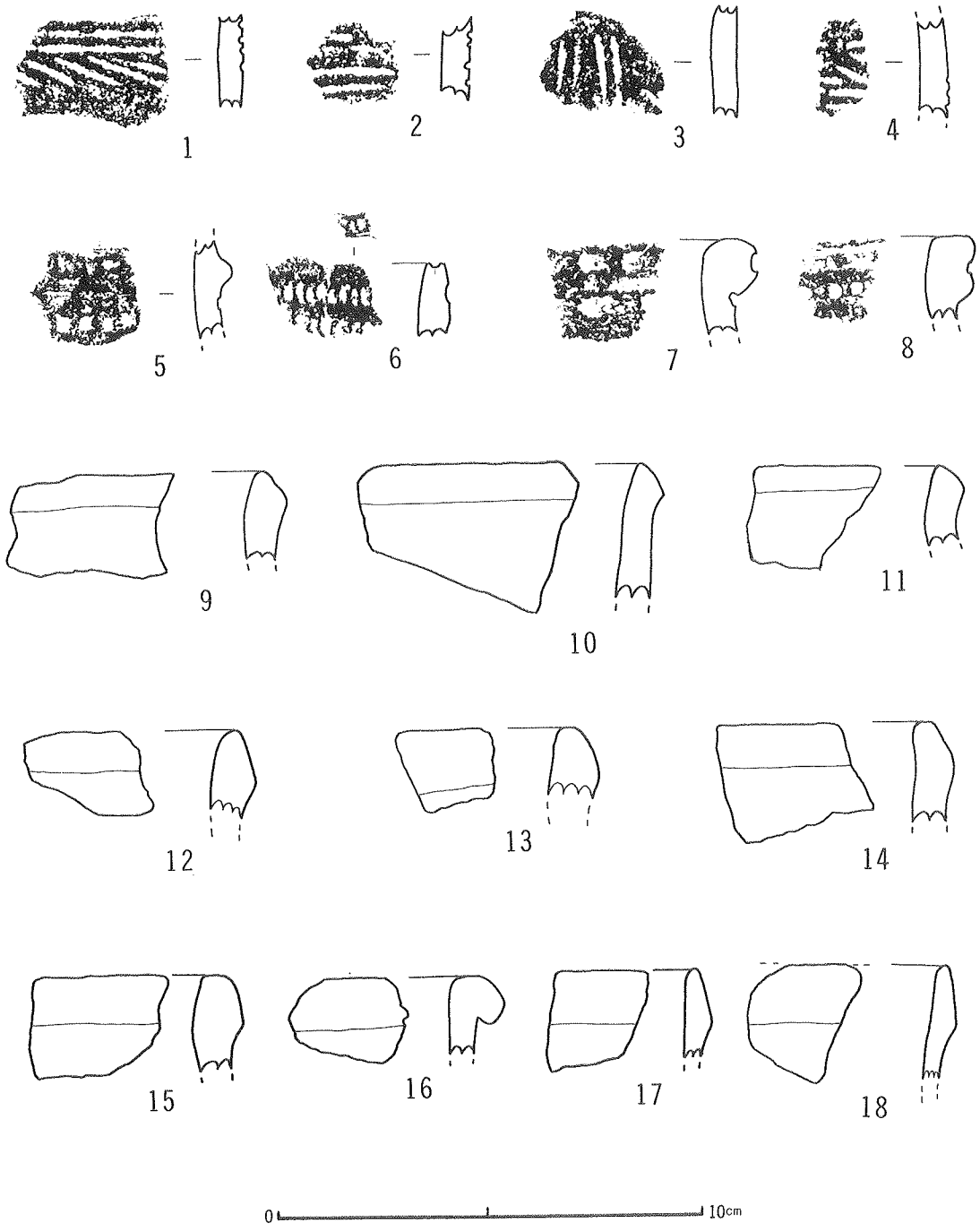
Ⅱ－21図　A地点ピットD西・第Ⅲ層（15～30cm）出土土器
（写真は図版Ⅱ－16）



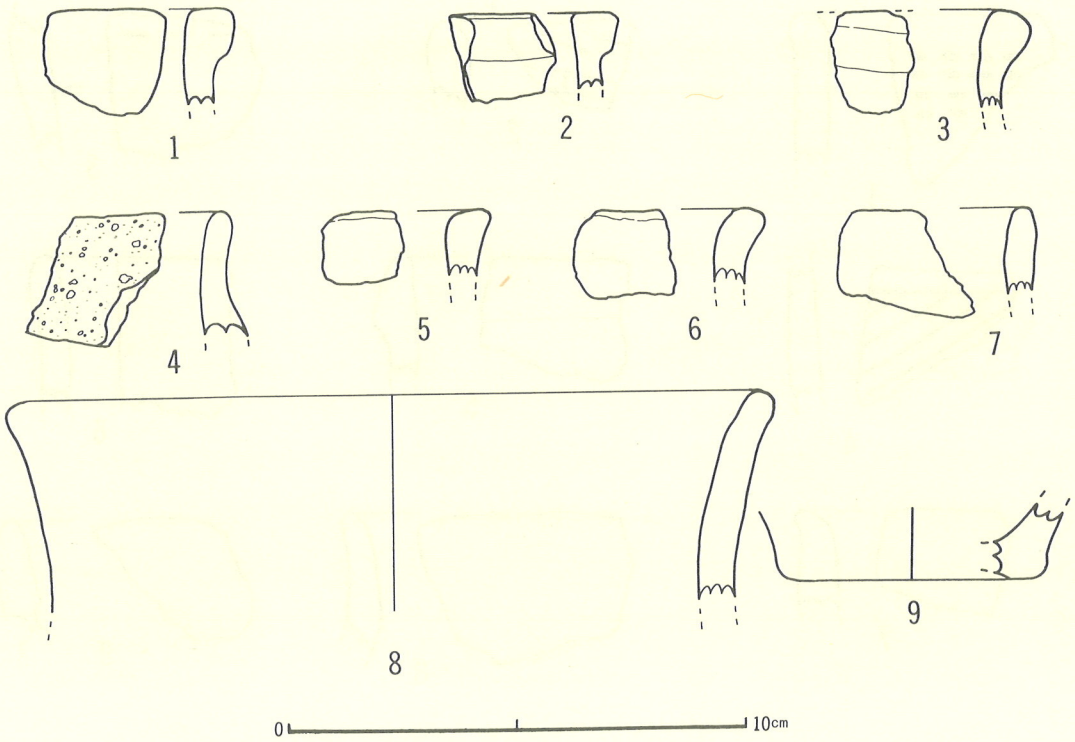
Ⅱ－22図　A地点ピットD西・第Ⅲ層（30～45㎝）出土土器
（写真は図版Ⅱ－17）



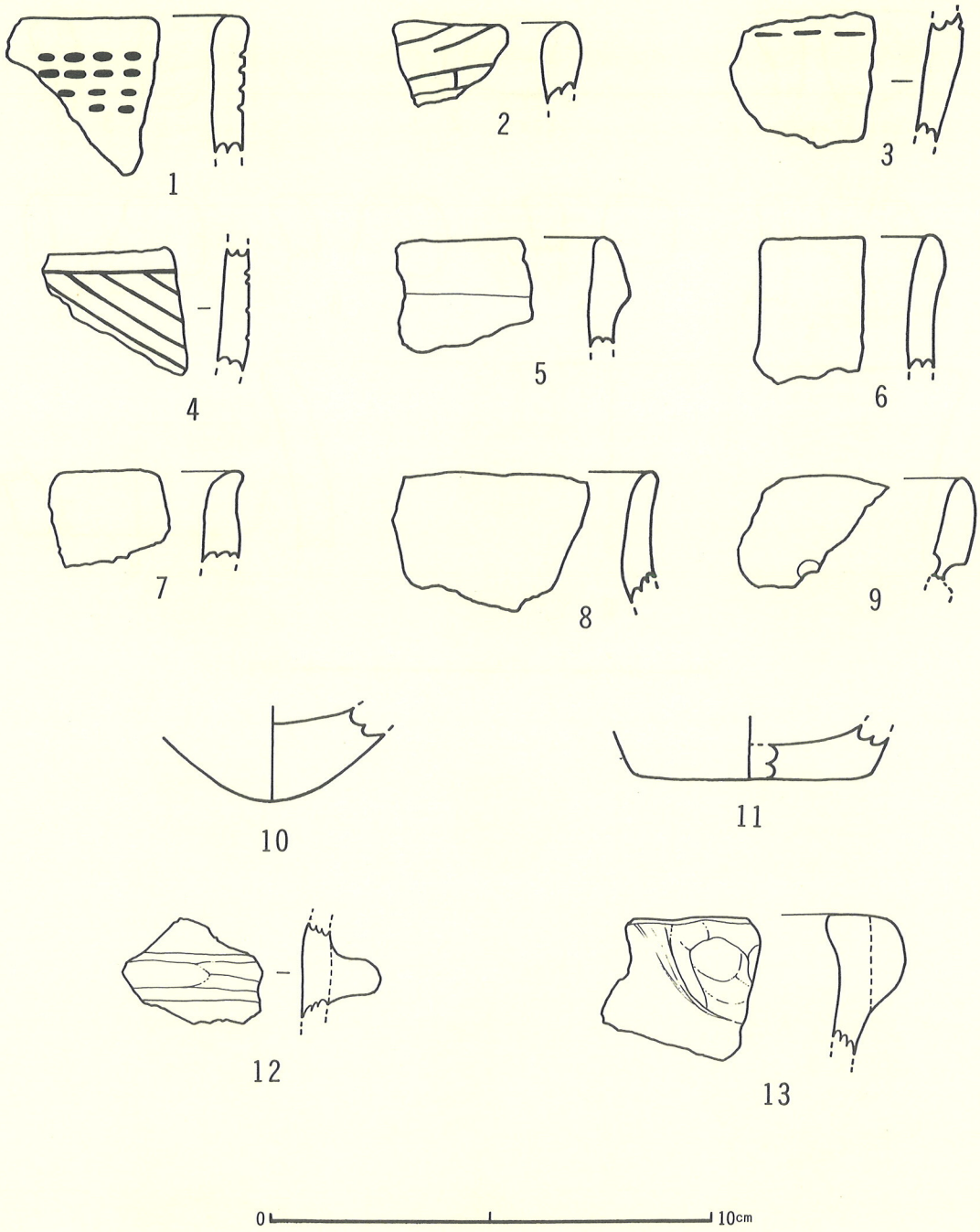
Ⅱ－23図　A地点ピットD西・第Ⅳ層（0～10㎝）出土土器
(写真は図版Ⅱ－18 A)



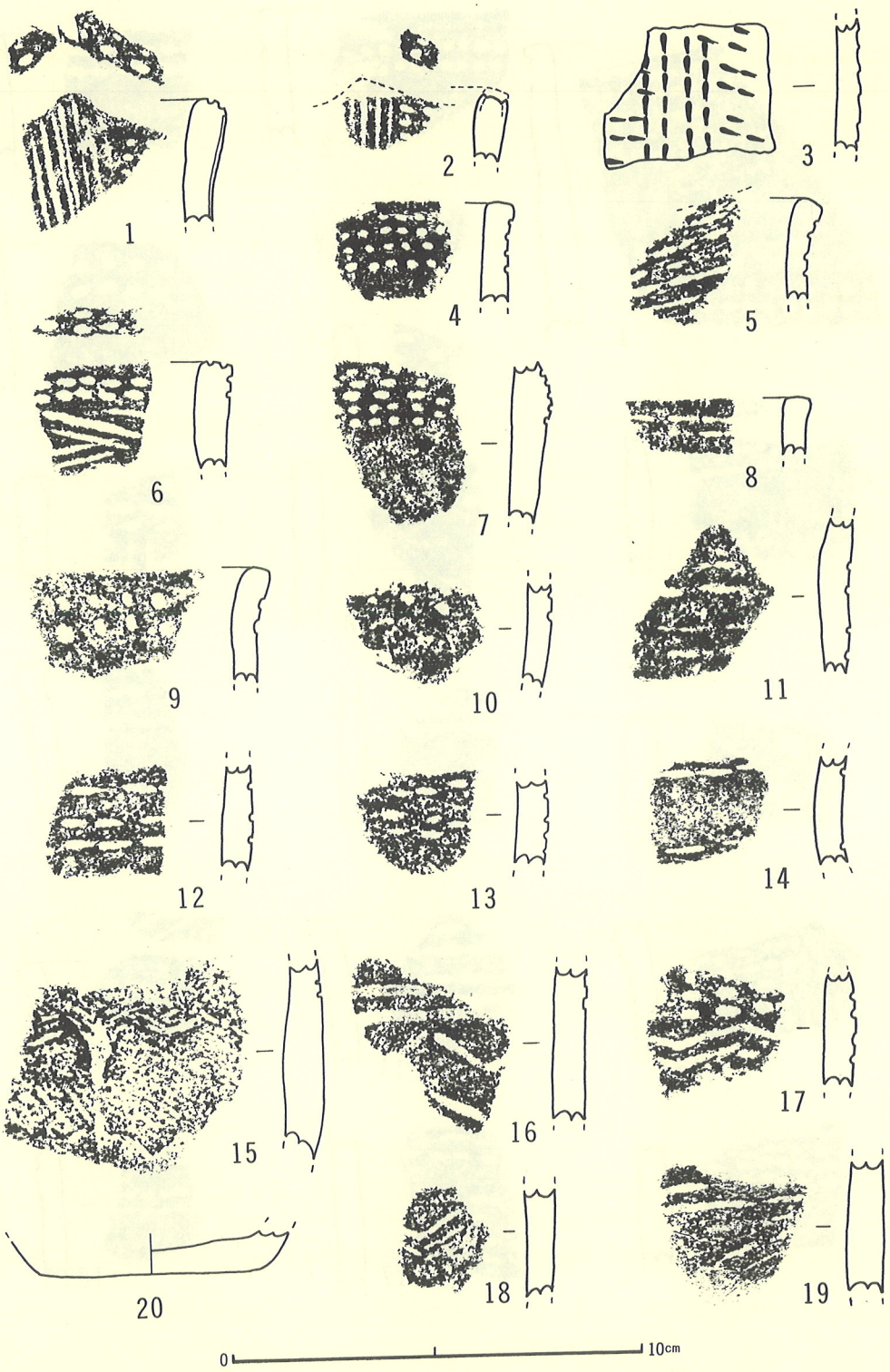
Ⅱ－24図　A地点ピットD西・第Ⅳ層（10～15㎝）出土土器
（写真は図版Ⅱ－18 B）



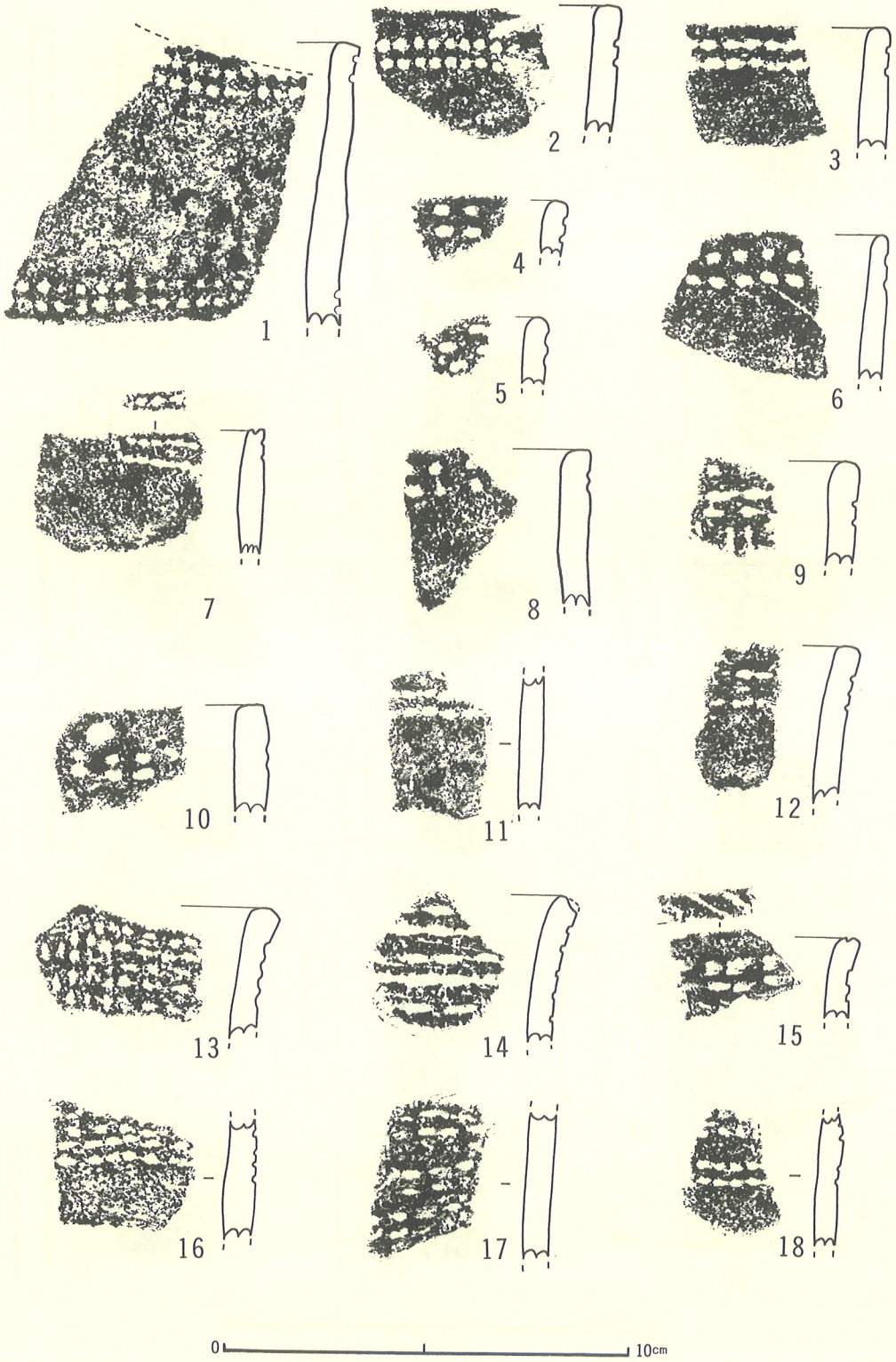
Ⅱ－25図　A地点ピットD西・第Ⅳ層（10～15㎝）出土土器
（写真は図版Ⅱ－19 A）



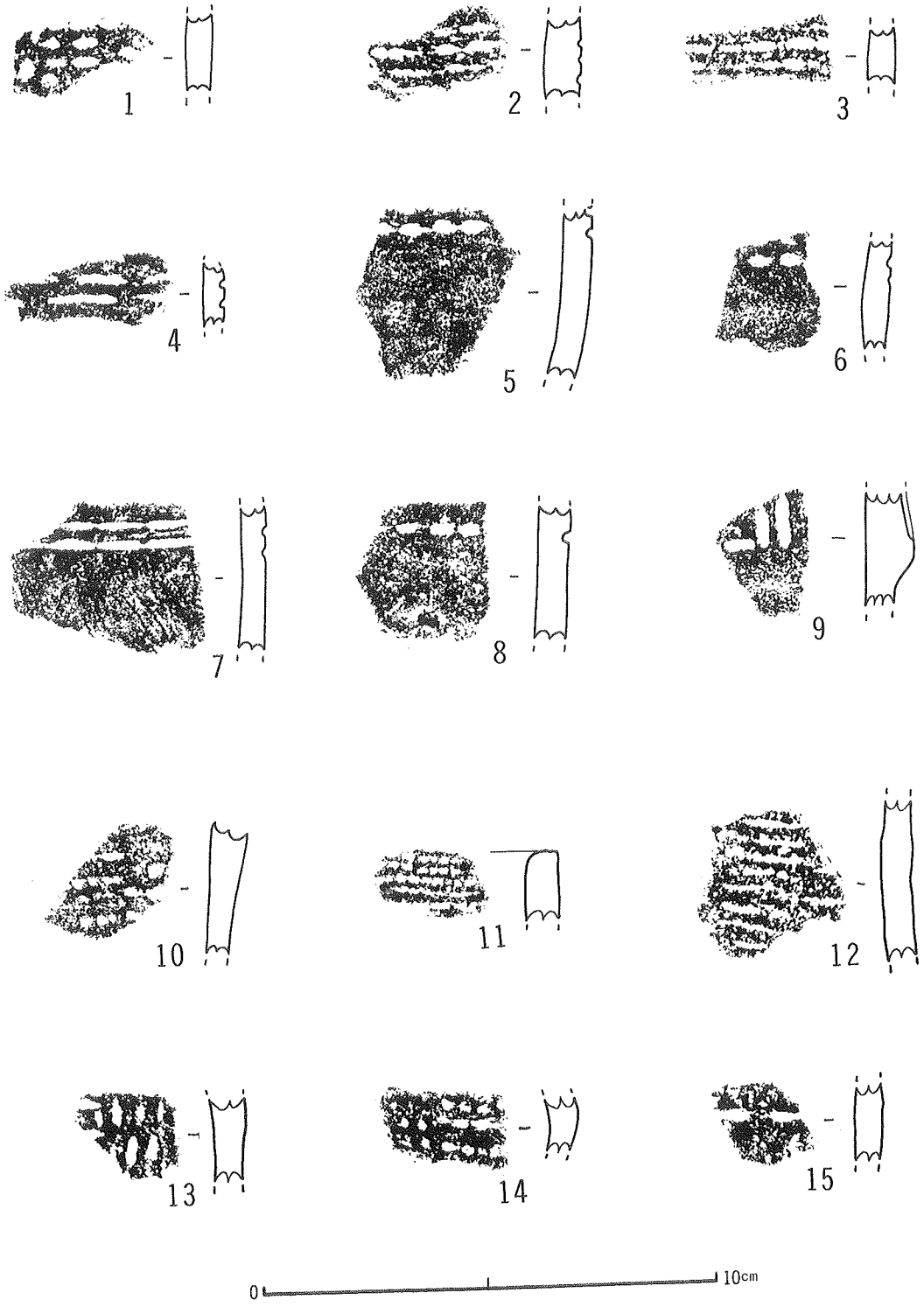
Ⅱ－26図　A地点Aトレンチ出土の土器および表採資料
（写真は図版Ⅱ－19 B）



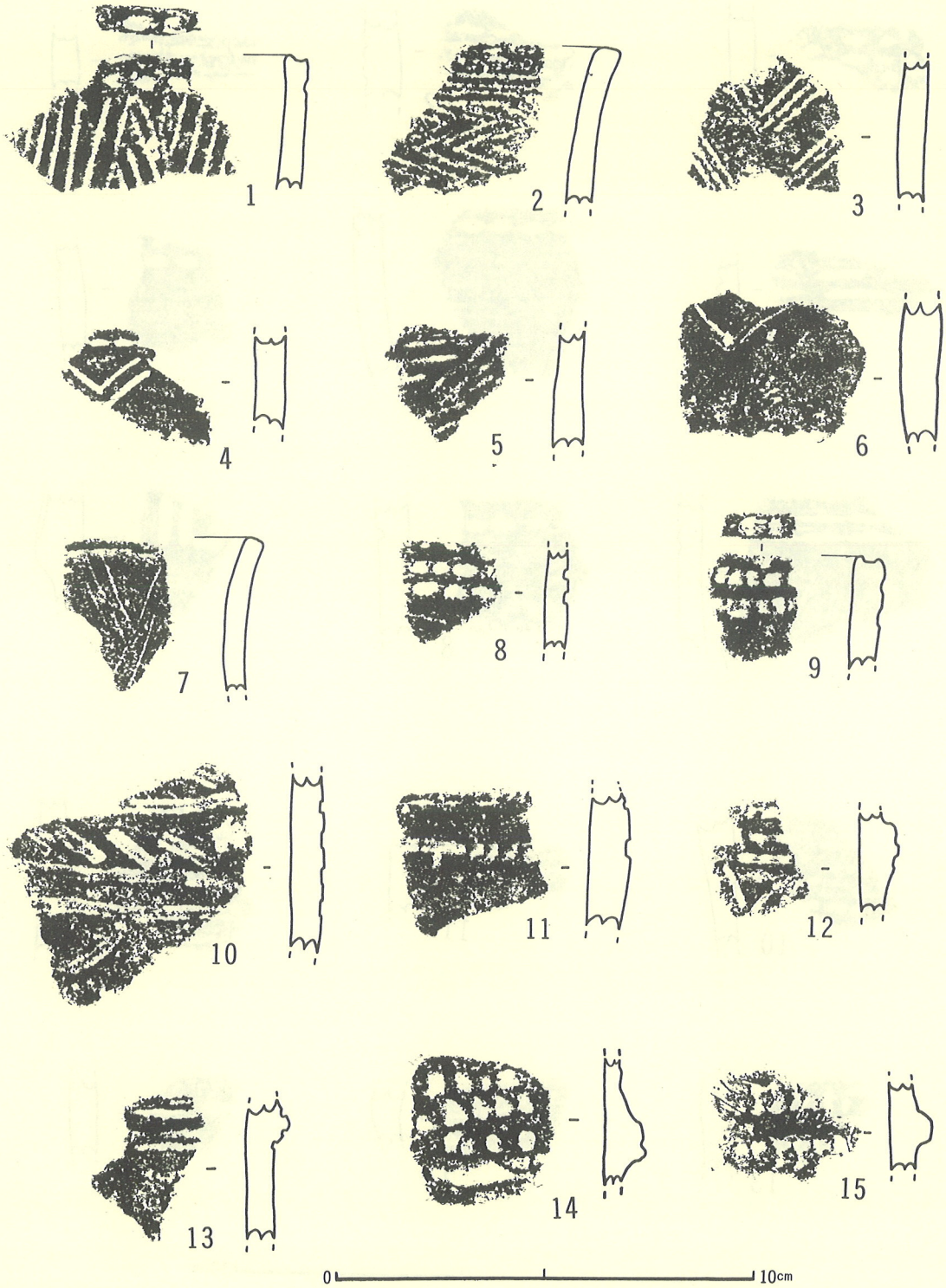
Ⅱ－27図　B地点出土土器



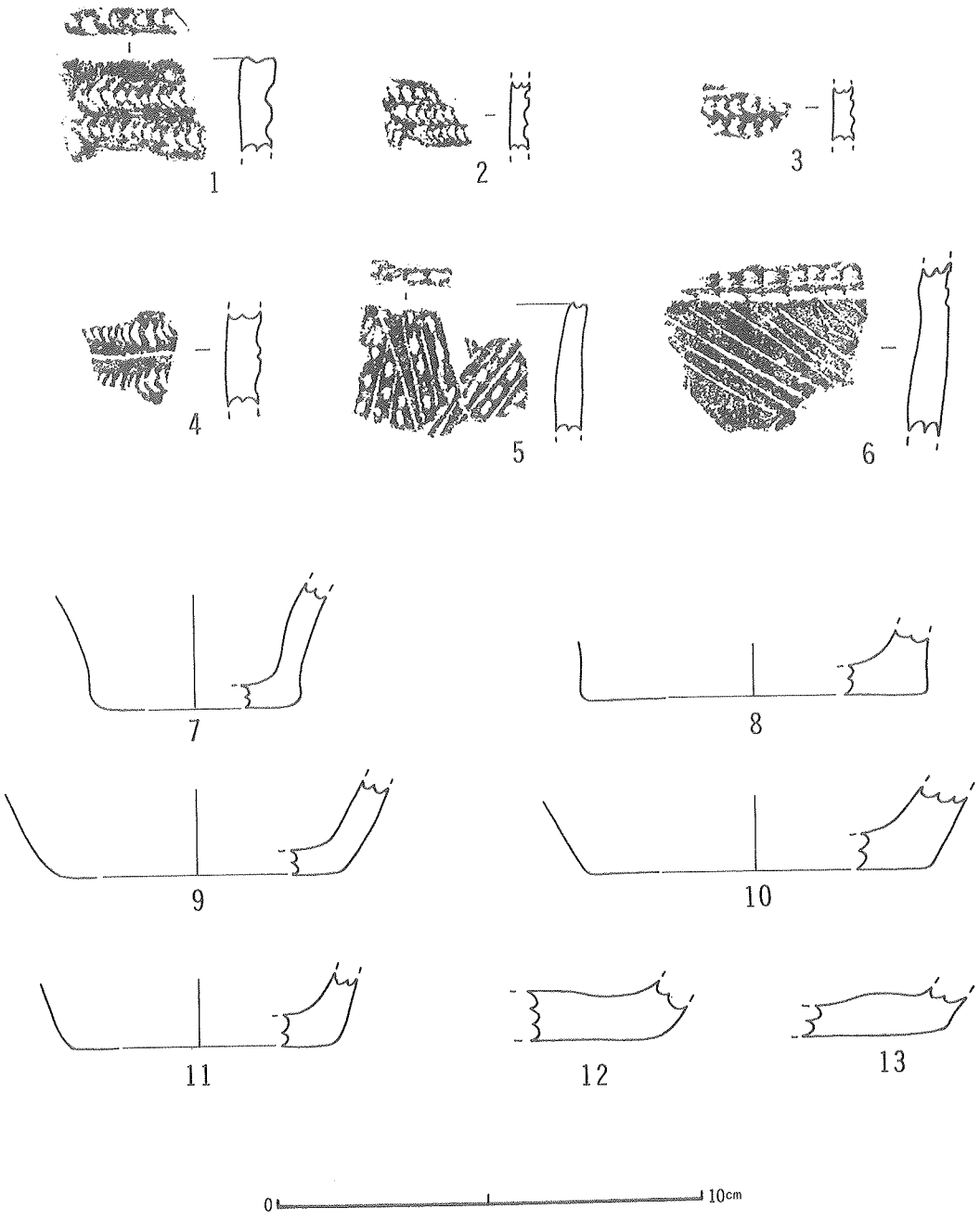
Ⅱ－28図　C・D地点出土土器



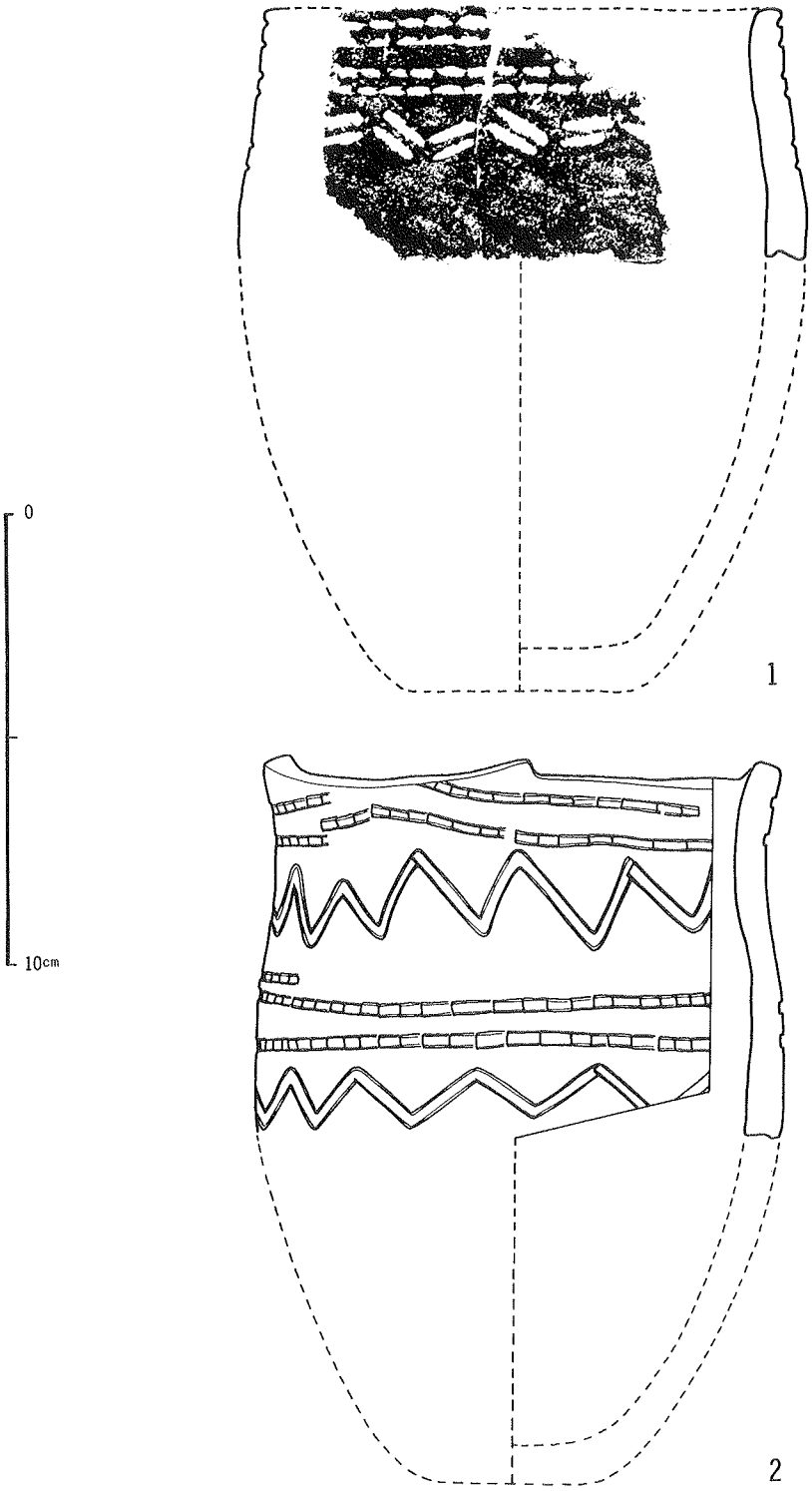
Ⅱ－29図　C・D地点出土土器



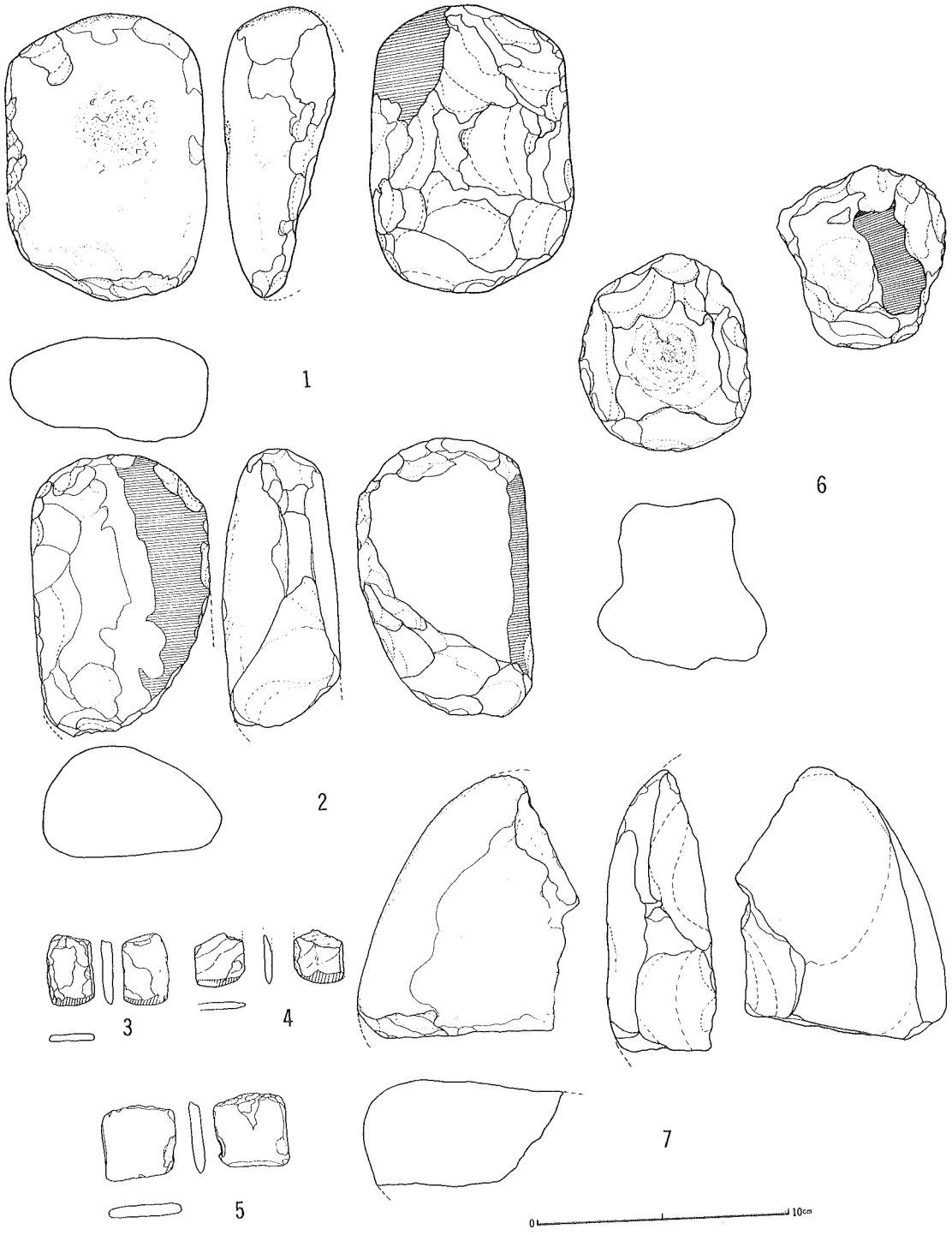
Ⅱ－30図　C・D地点出土土器



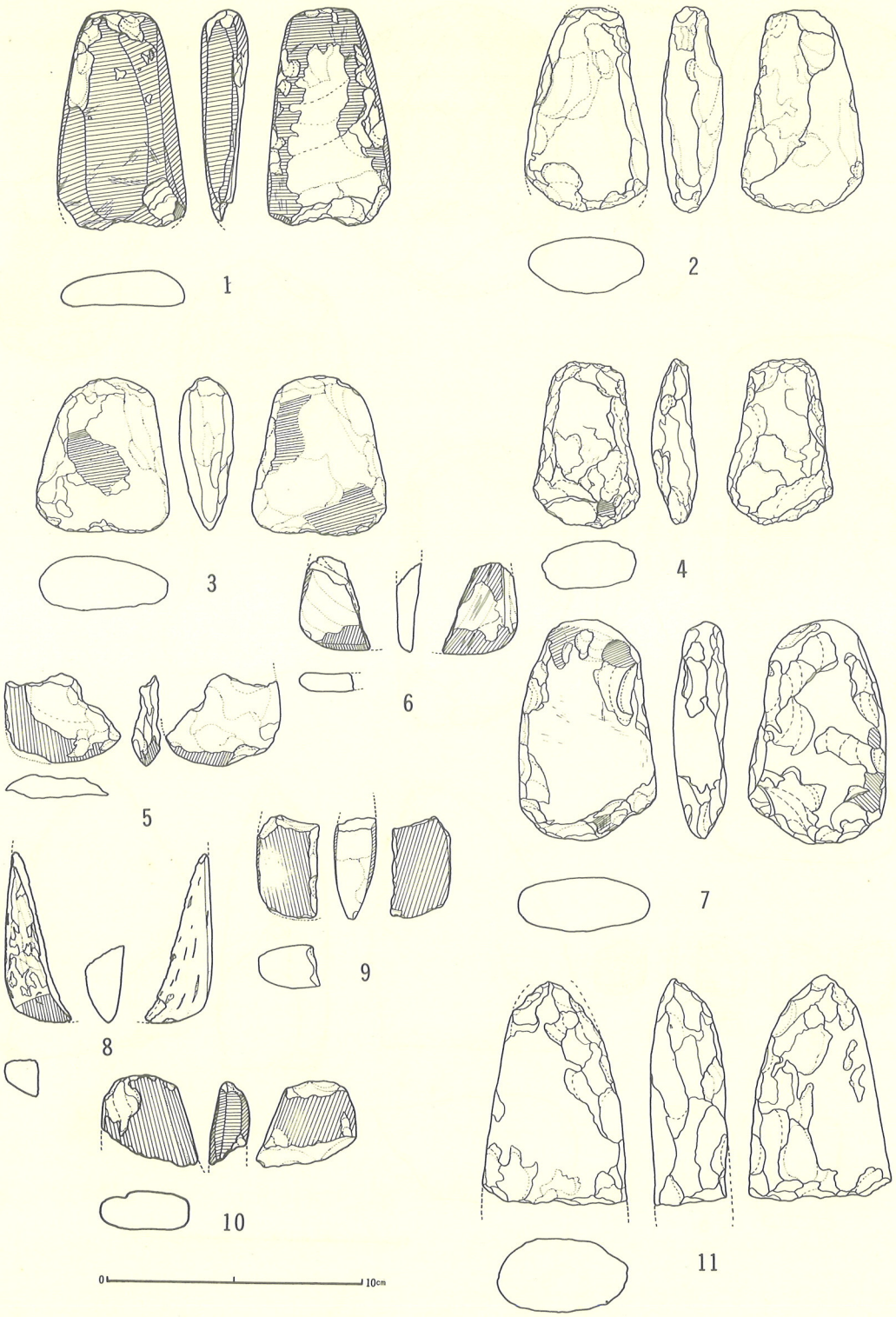
Ⅱ－31図　C・D地点出土土器



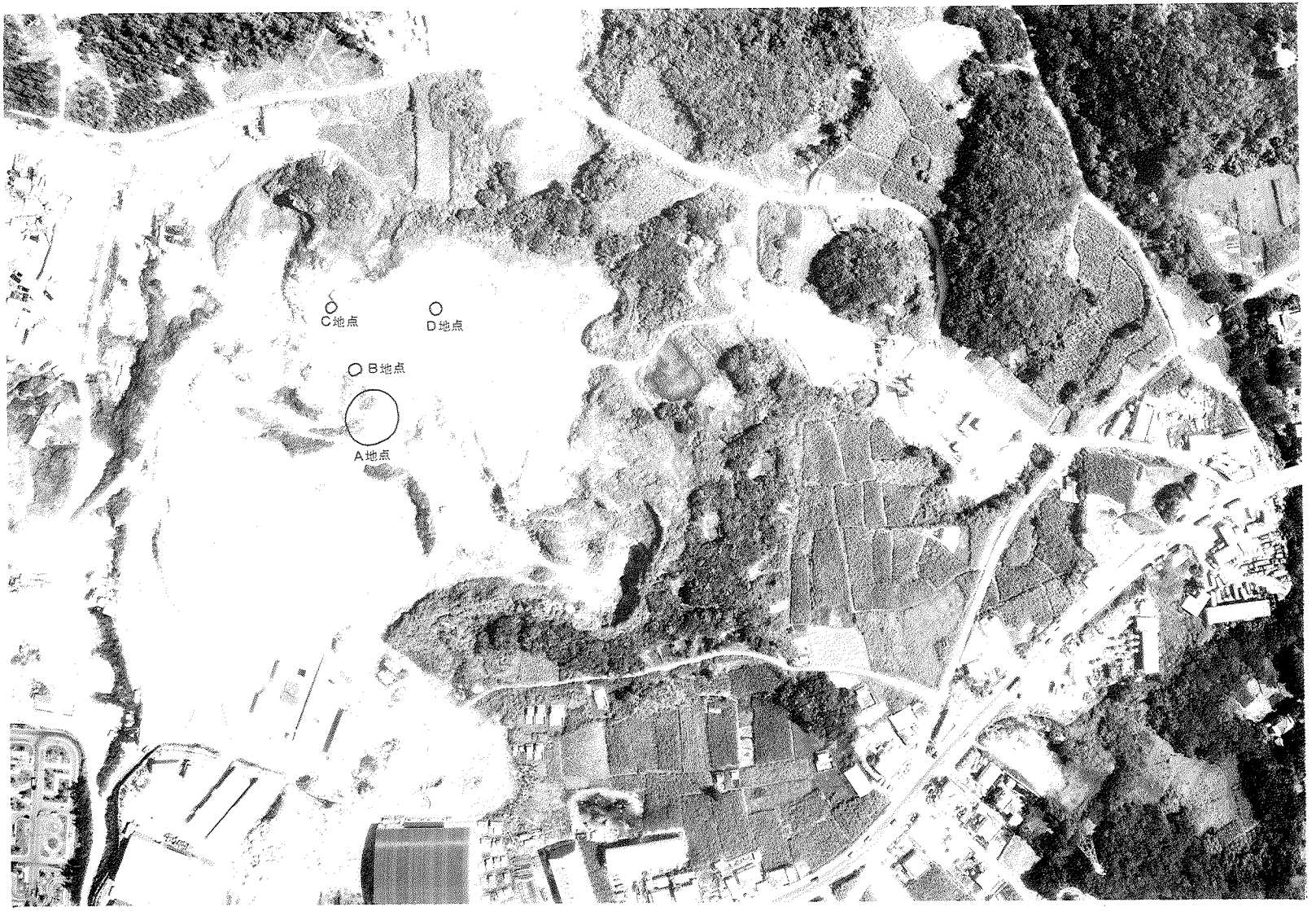
Ⅱ－32図　C・D地点出土荻堂式土器



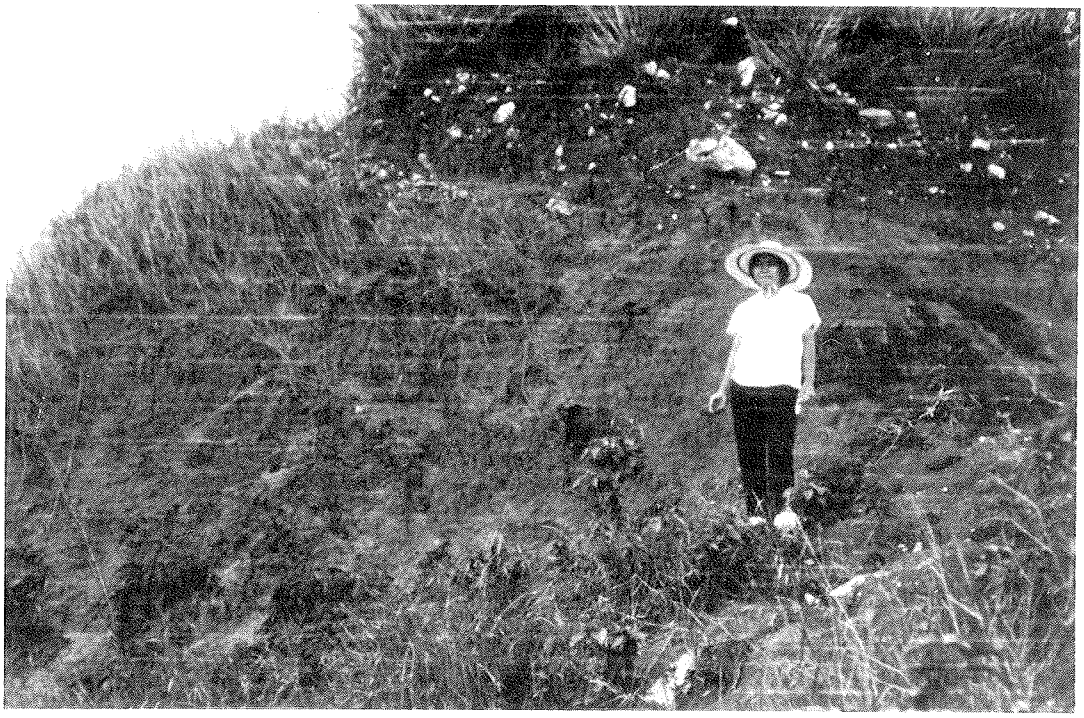
Ⅱ－33図　石器実測図



Ⅱ－34図　石器実測図



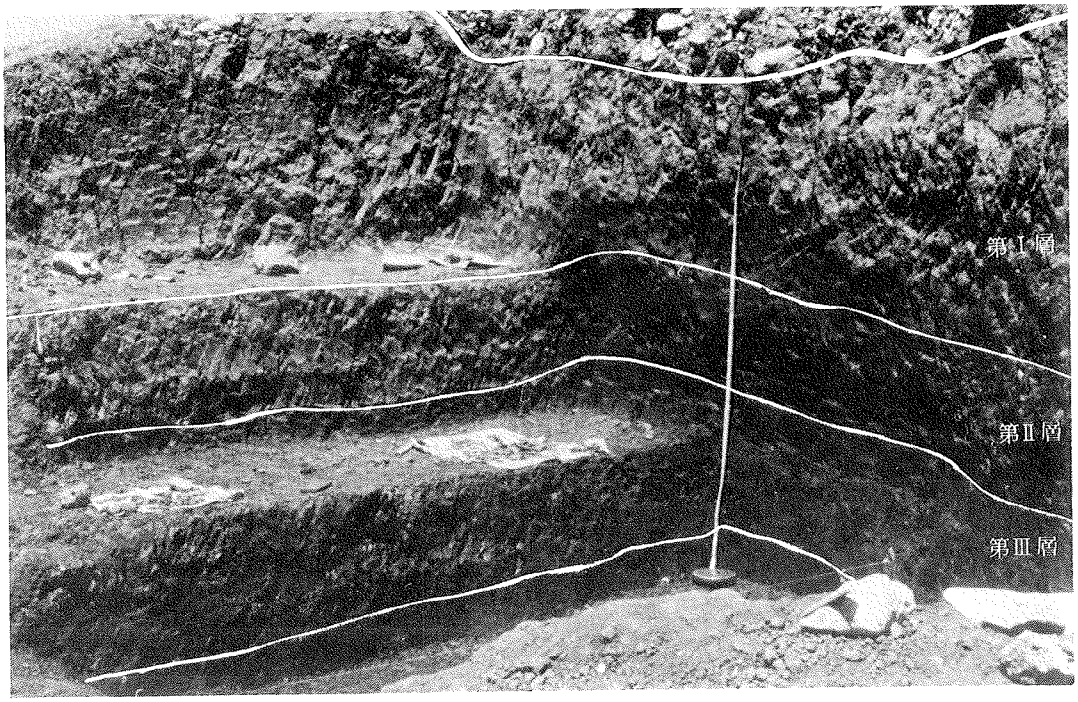
図版 Ⅱ－Ⅰ　知花遺跡の航空写真（A～Dの○印はそれぞれの地点）



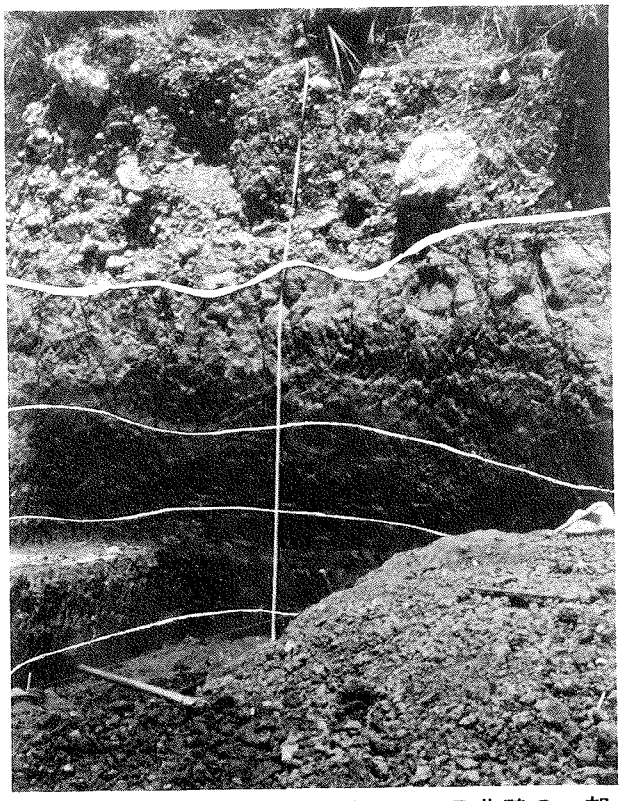
(イ) 発掘前のA地点（ピットD・E）

(ロ) 盛り土除去後のA地点（ピットD・E北壁）

図版Ⅱ－4　A地点ピットD・E

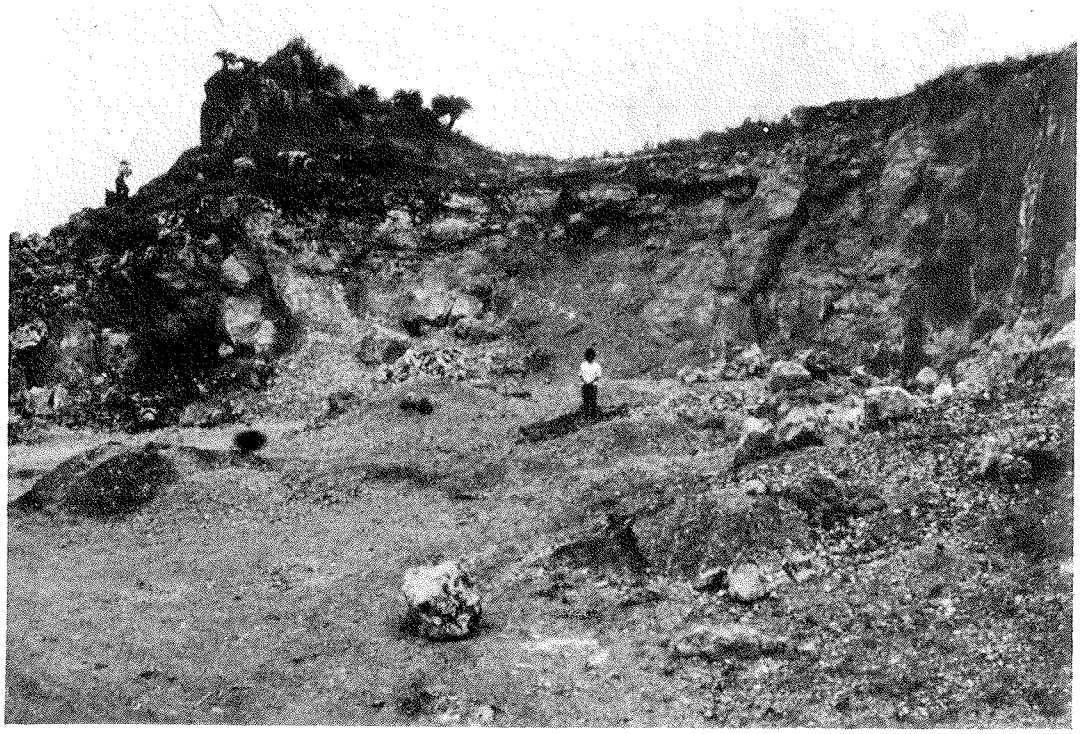


(イ) A地点ピットE西壁（左）およびE・D北壁の一部



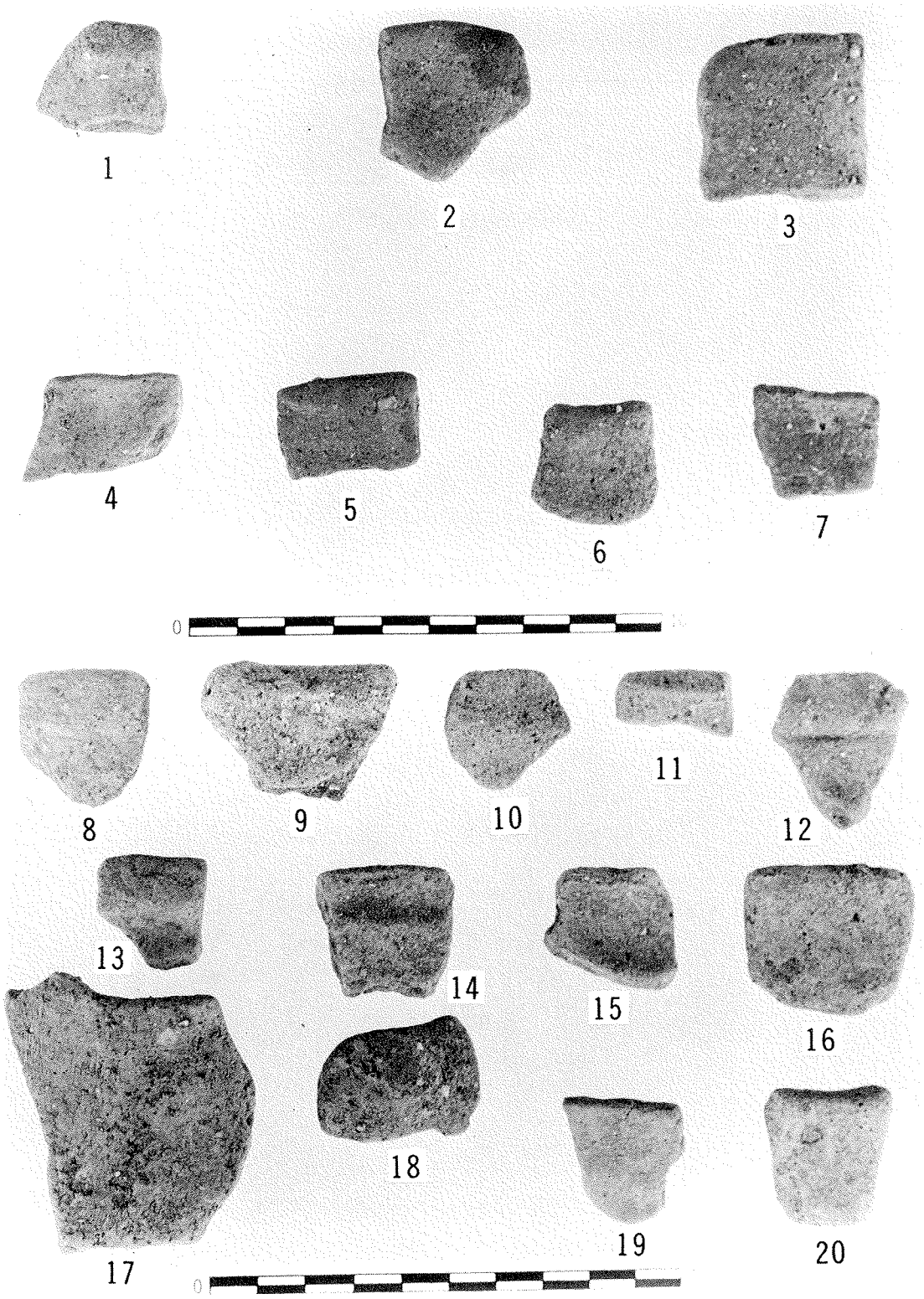
(ロ) A地点ピットE西壁およびE・D北壁の一部

図版Ⅱ－5
A地点ピットDの層序

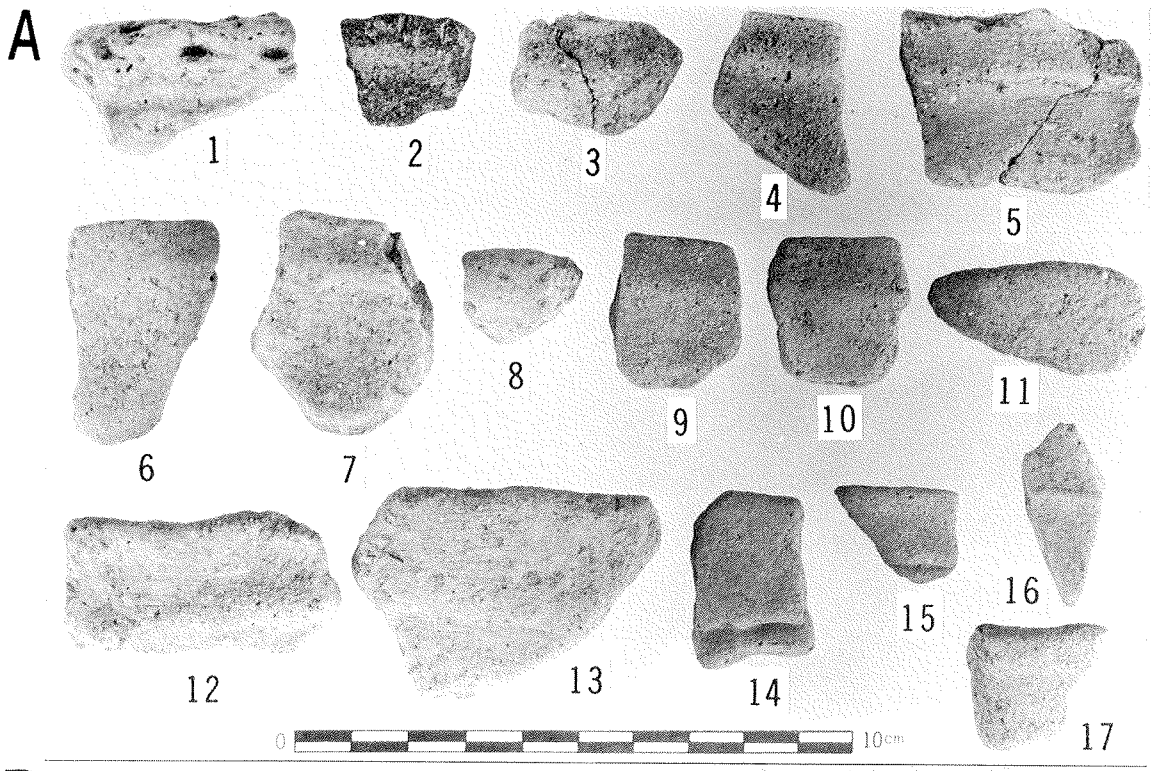


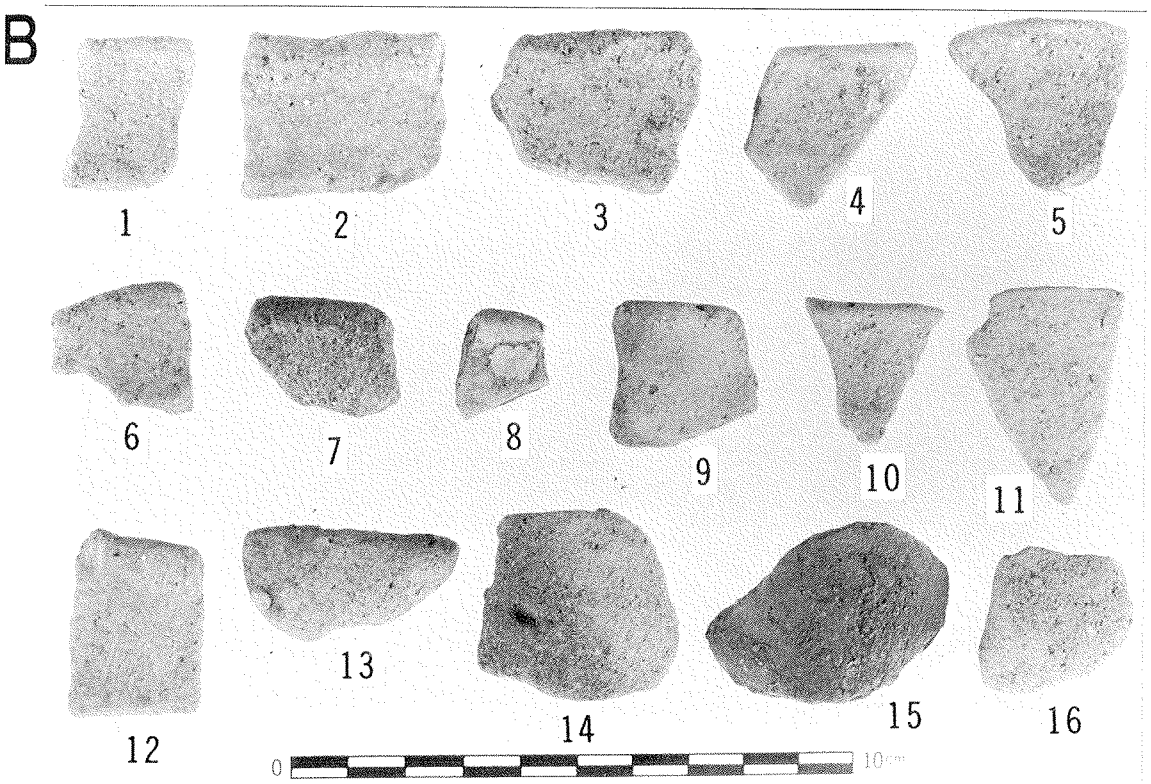
C地点（矢印は発掘場所）

図版Ⅱ－6　C地点近景

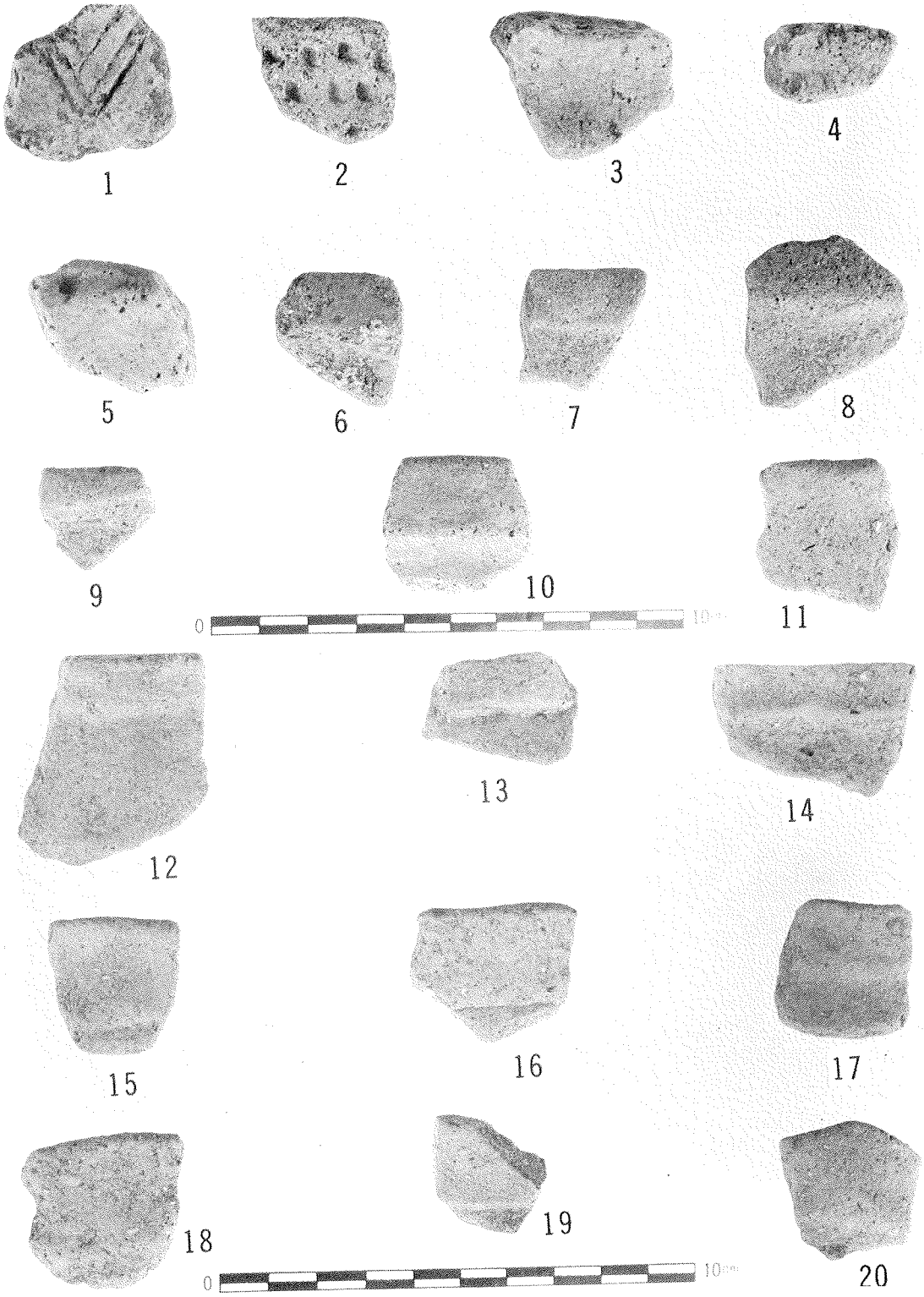


図版 Ⅱ－7　A地点ピットD東第Ⅱ層出土の土器（1～7＝0～15cm，8～20＝15～30cm）

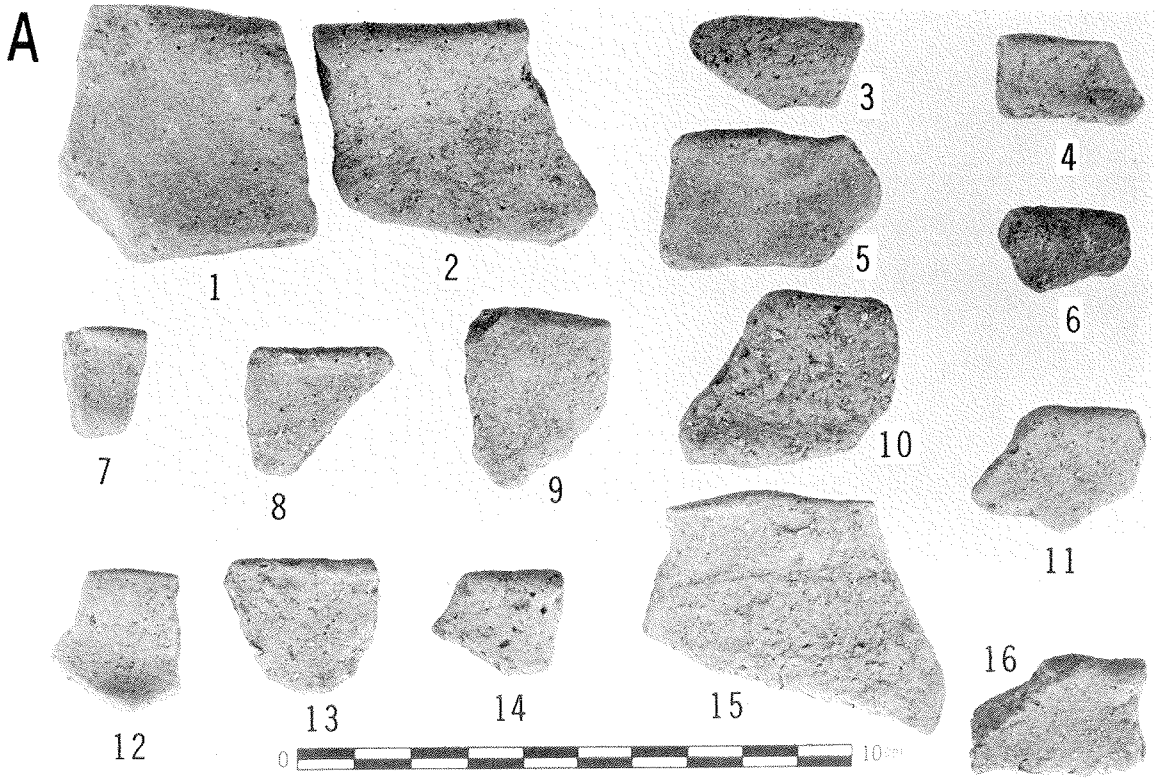


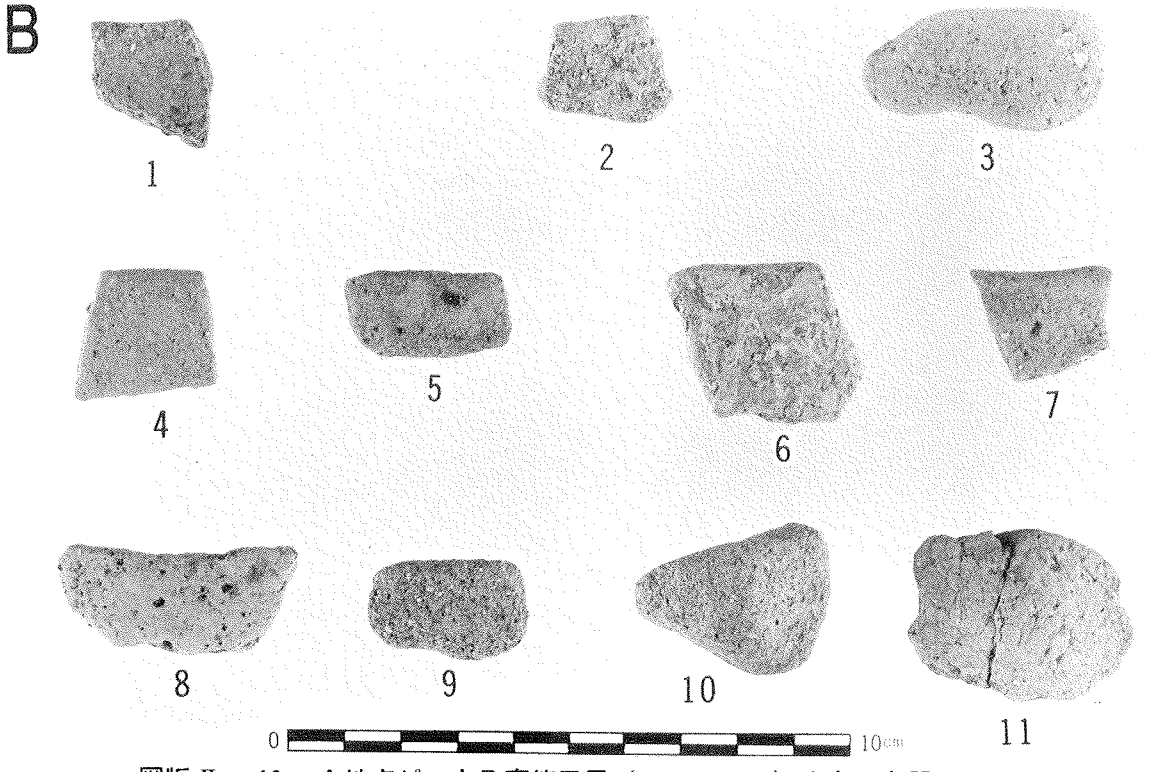


図版Ⅱ－8　A地点ピットD東第Ⅲ層（0～15 cm）出土の土器

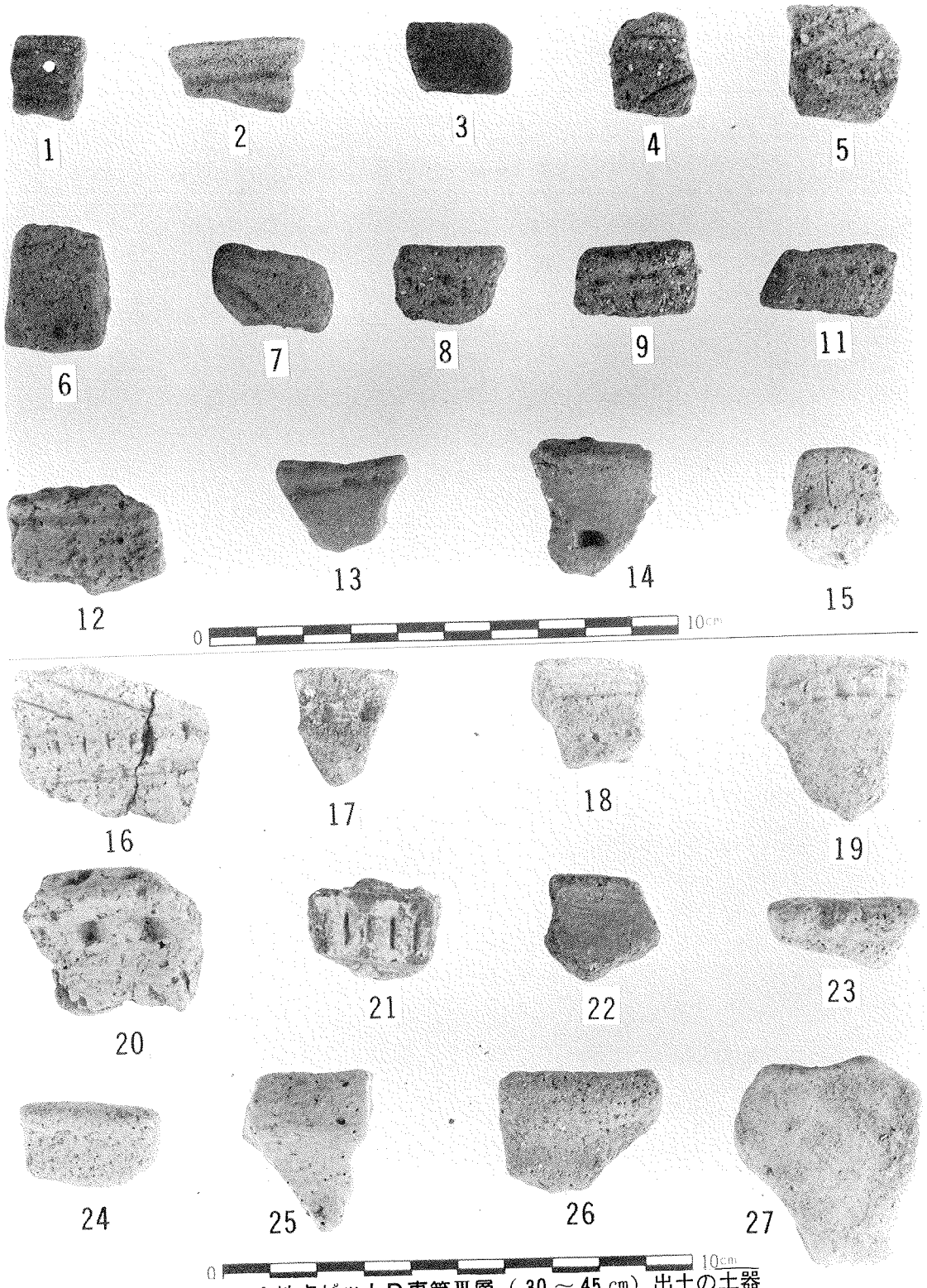


図版 Ⅱ－9　A地点ピットD東第Ⅲ層（15 ～ 30 cm）出土の土器

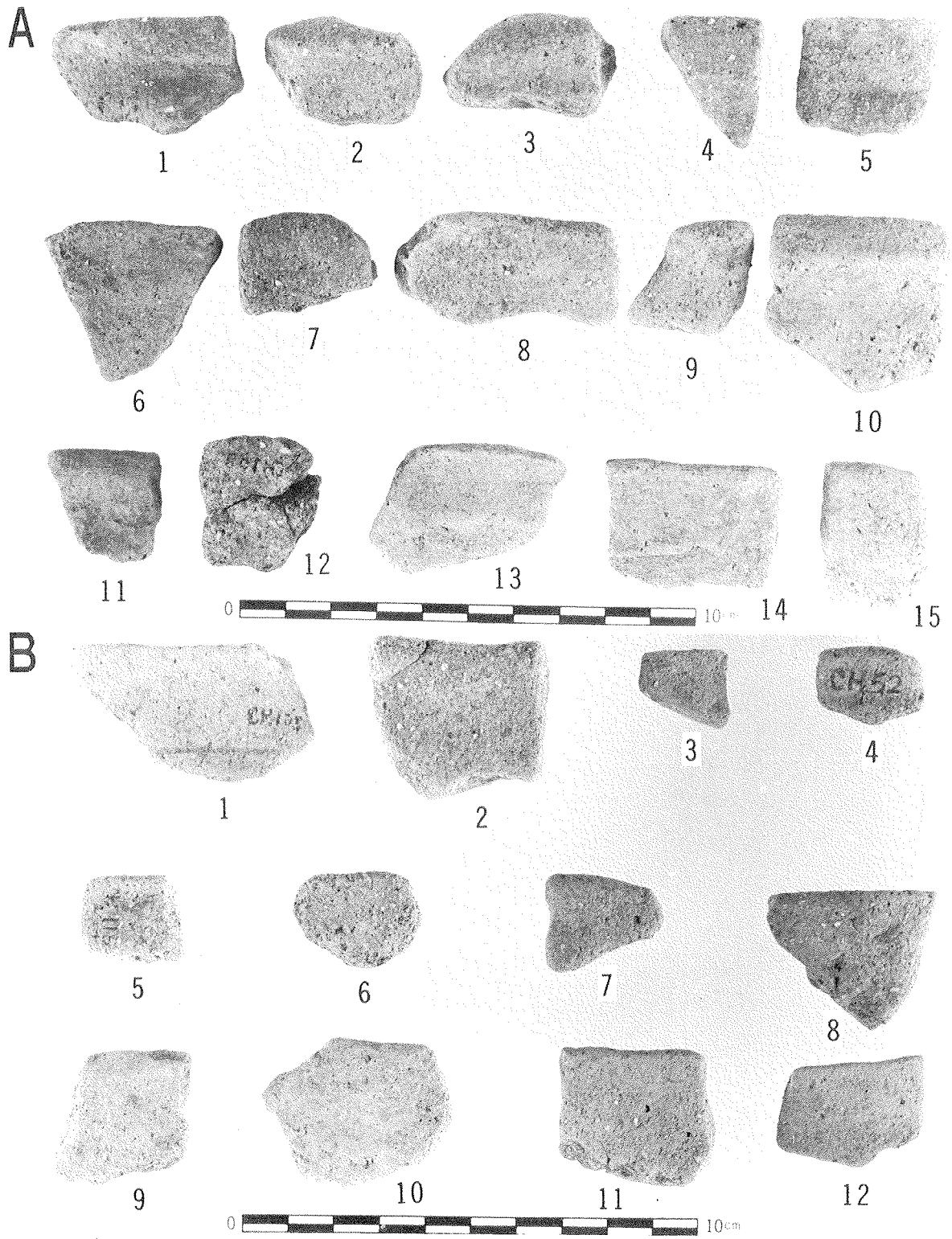




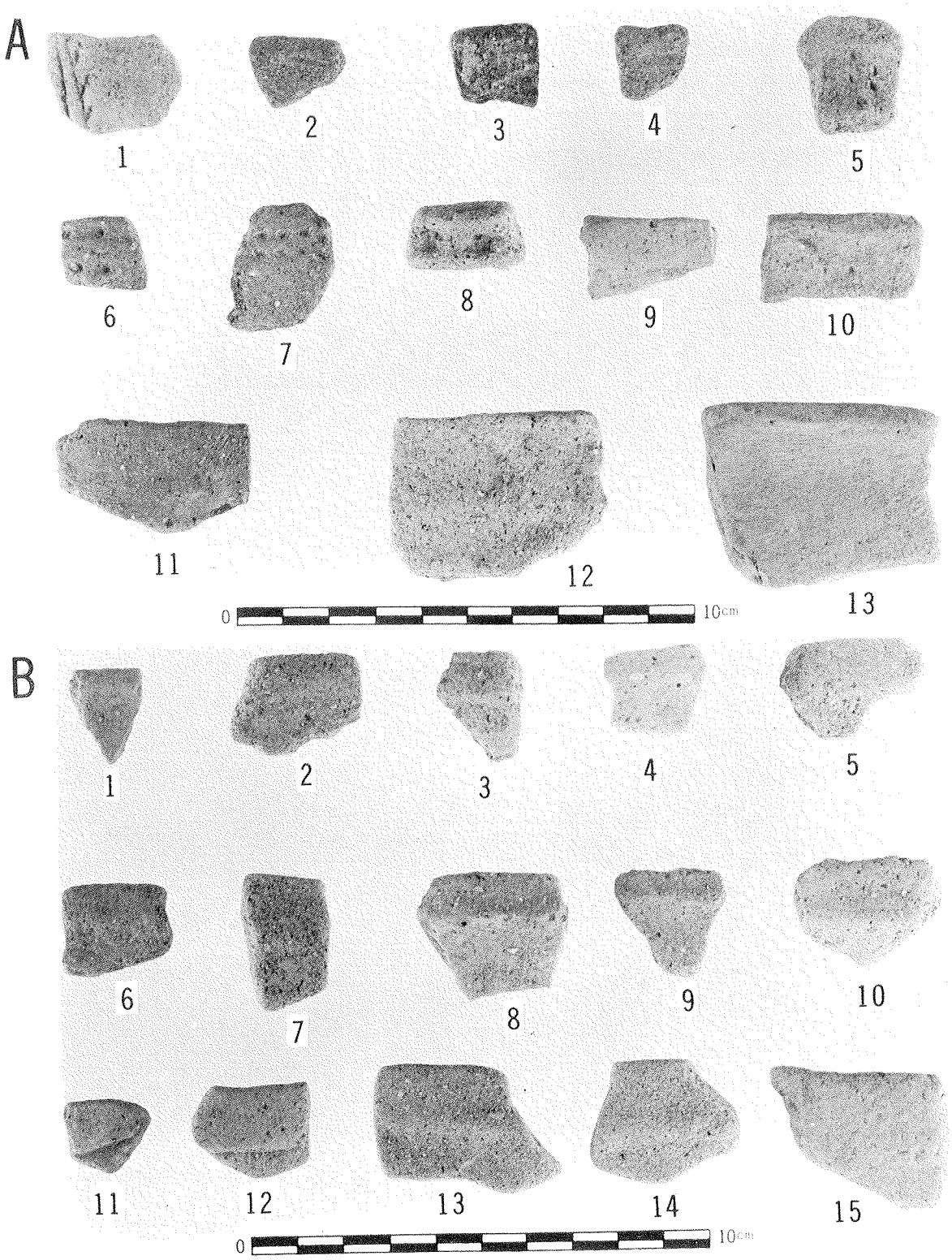
図版Ⅱ－10　A地点ピットD東第Ⅲ層（15～30㎝）出土の土器



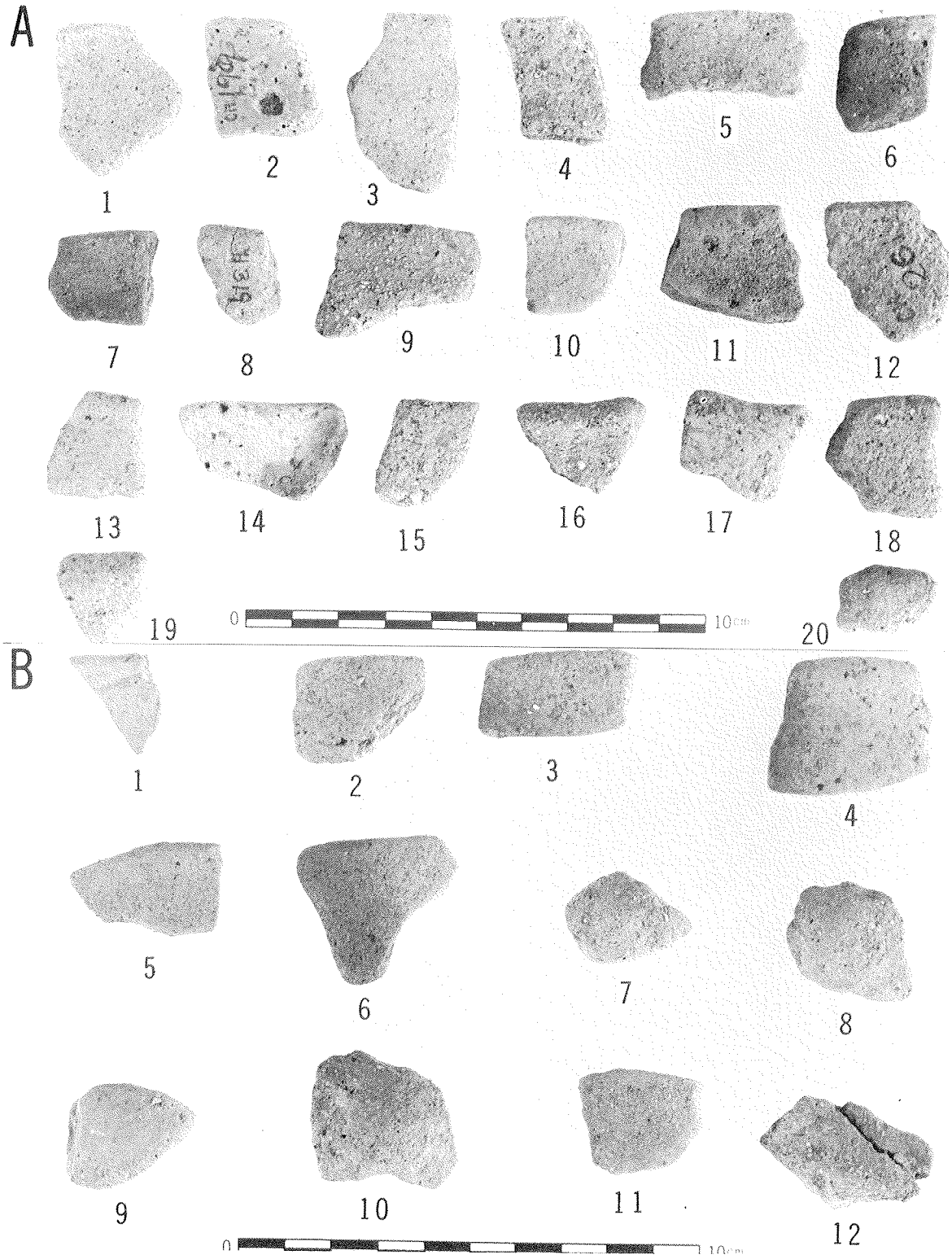
図版 II－11　A地点ピットD東第Ⅲ層（30～45 cm）出土の土器



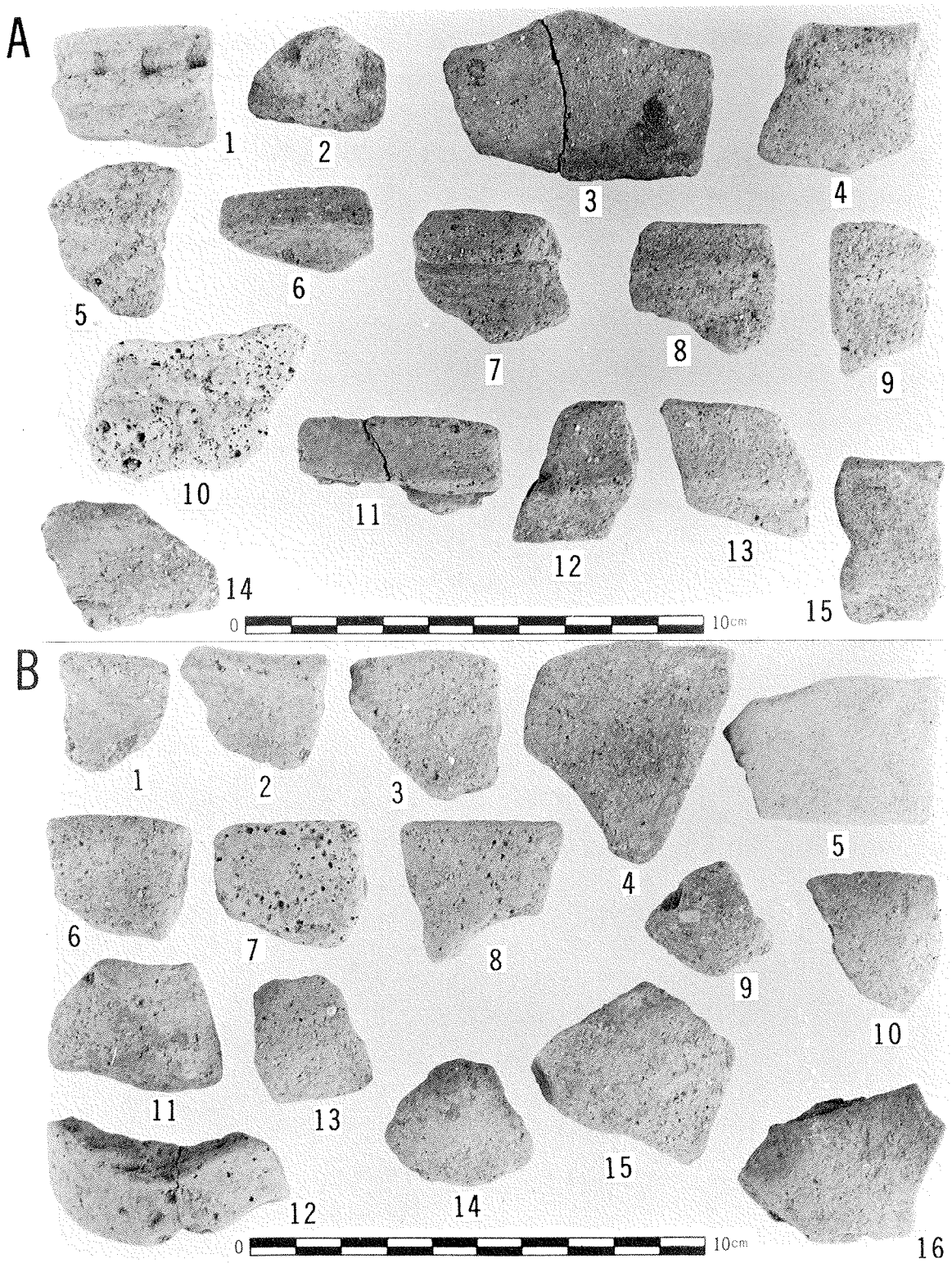
図版 II－12　A地点ピットD西第II層出土の土器
A（上）1～6＝0～15cm，7～15＝15～30cm　B（下）15～30cm



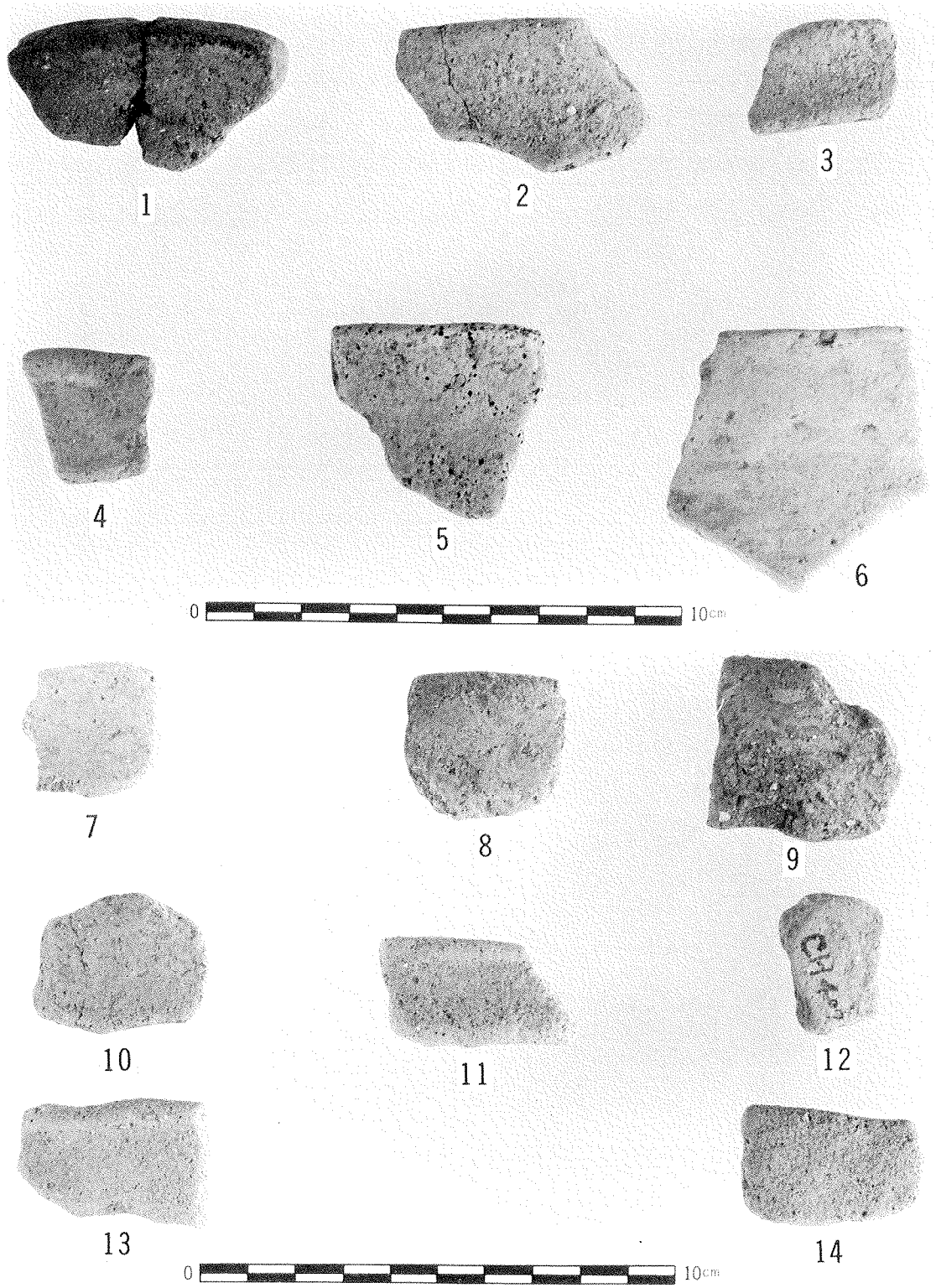
図版Ⅱ－13　A地点ピットD西第Ⅲ層（0～15㎝）出土の土器



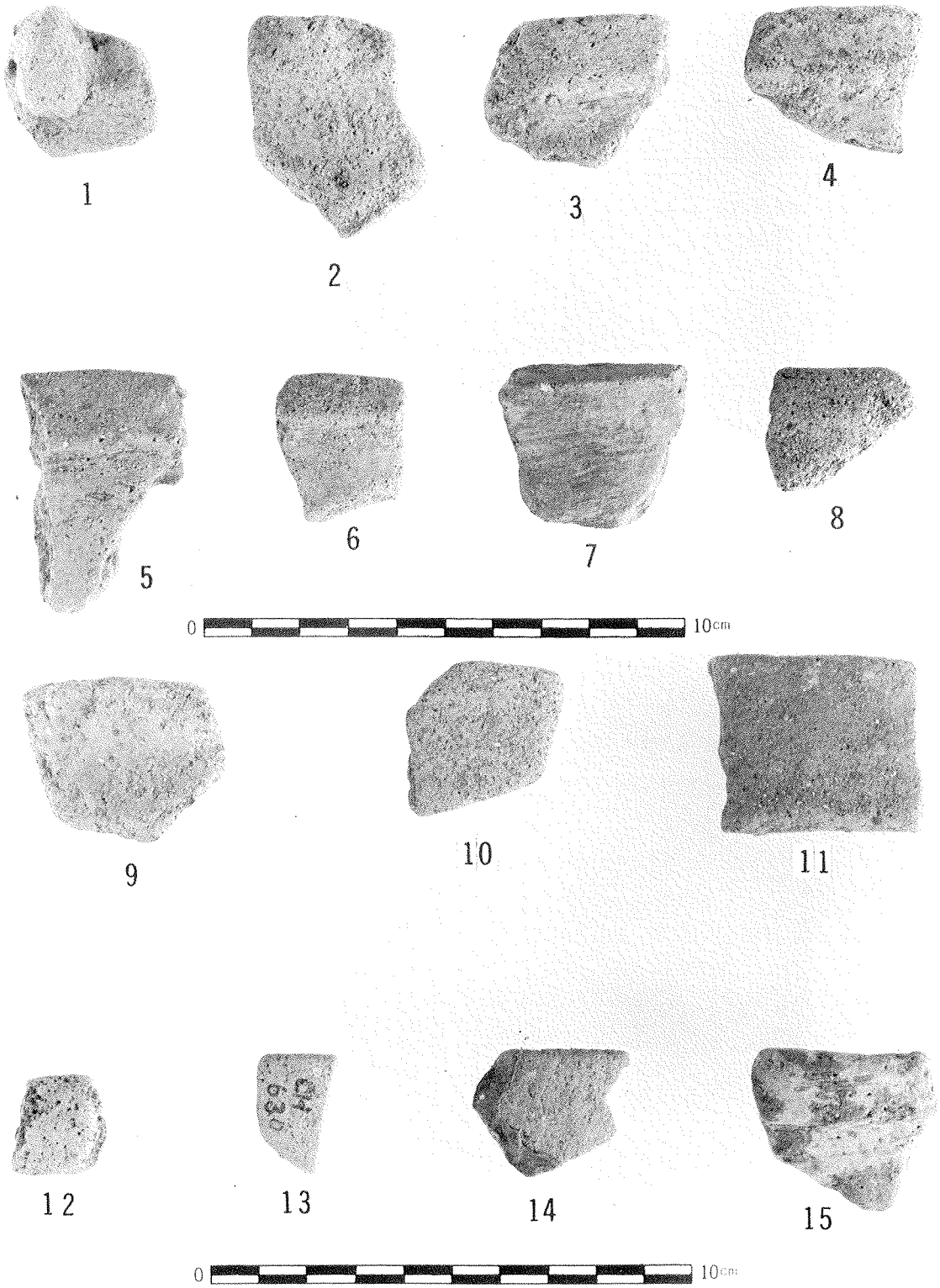
図版 Ⅱ－14　A地点ピットD西第Ⅲ層（0～15㎝）出土の土器



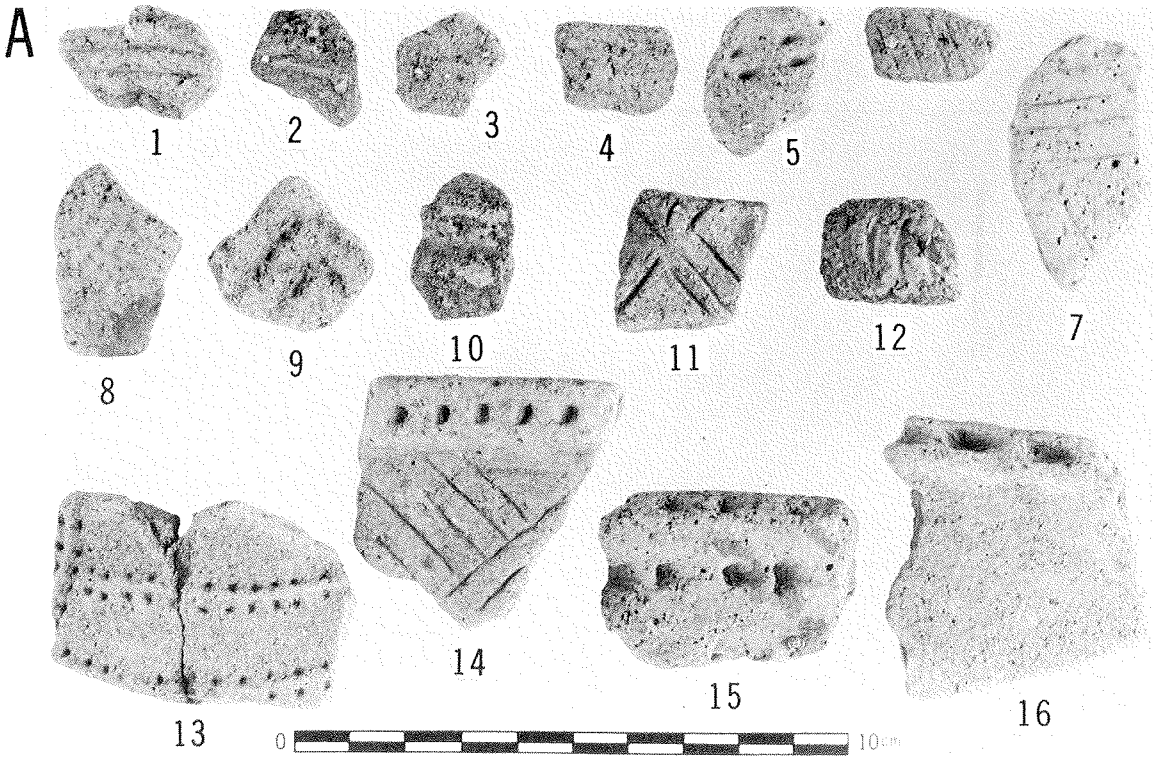
図版 Ⅱ－15　A地点ピットD西第Ⅲ層（15～30 cm）出土の土器

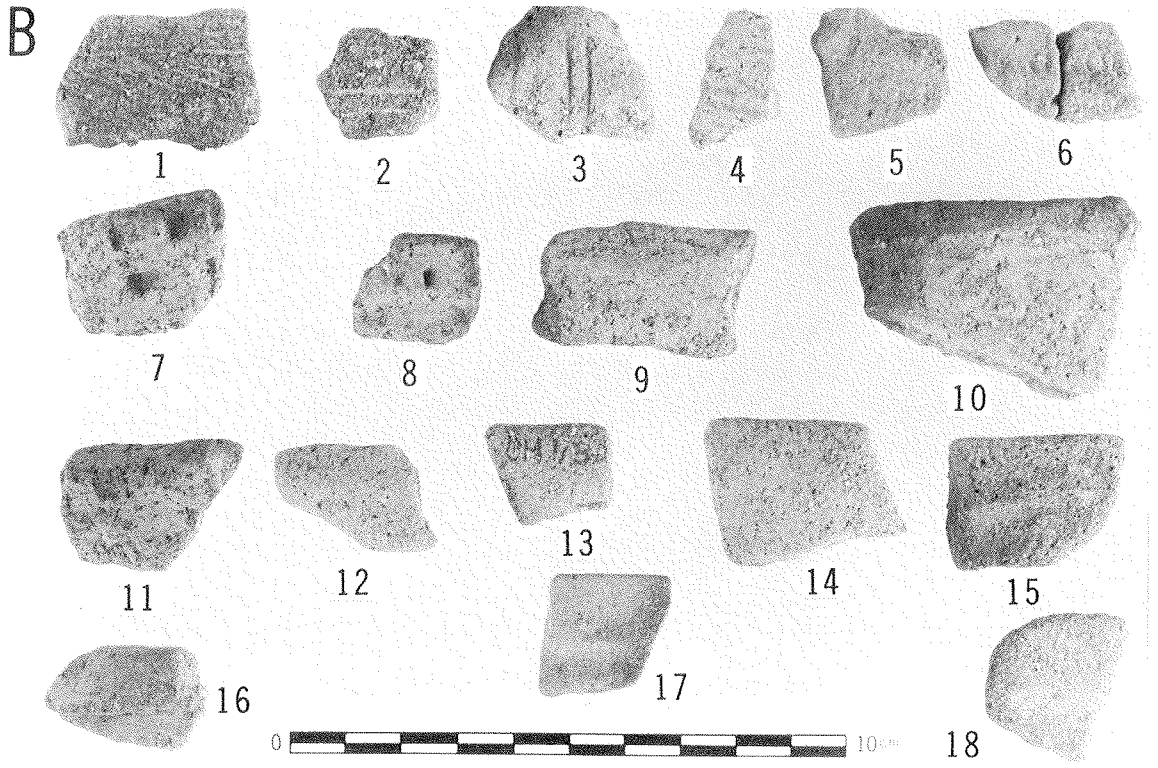


図版 Ⅱ－16　A地点ピットD西第Ⅲ層（15 ～ 30 cm）出土の土器

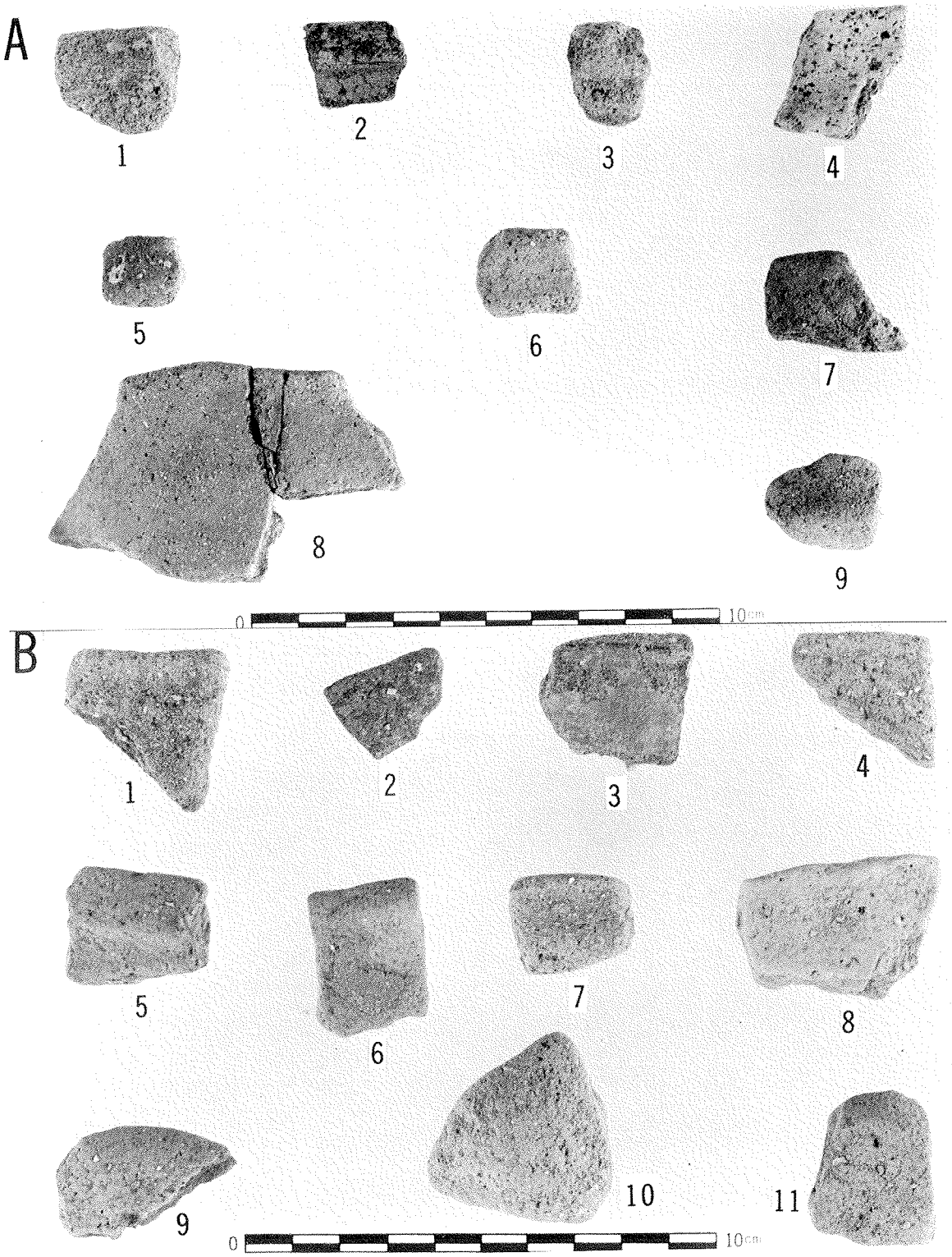


図版 Ⅱ－17　A地点ピットD西第Ⅲ層（30～45cm）出土の土器

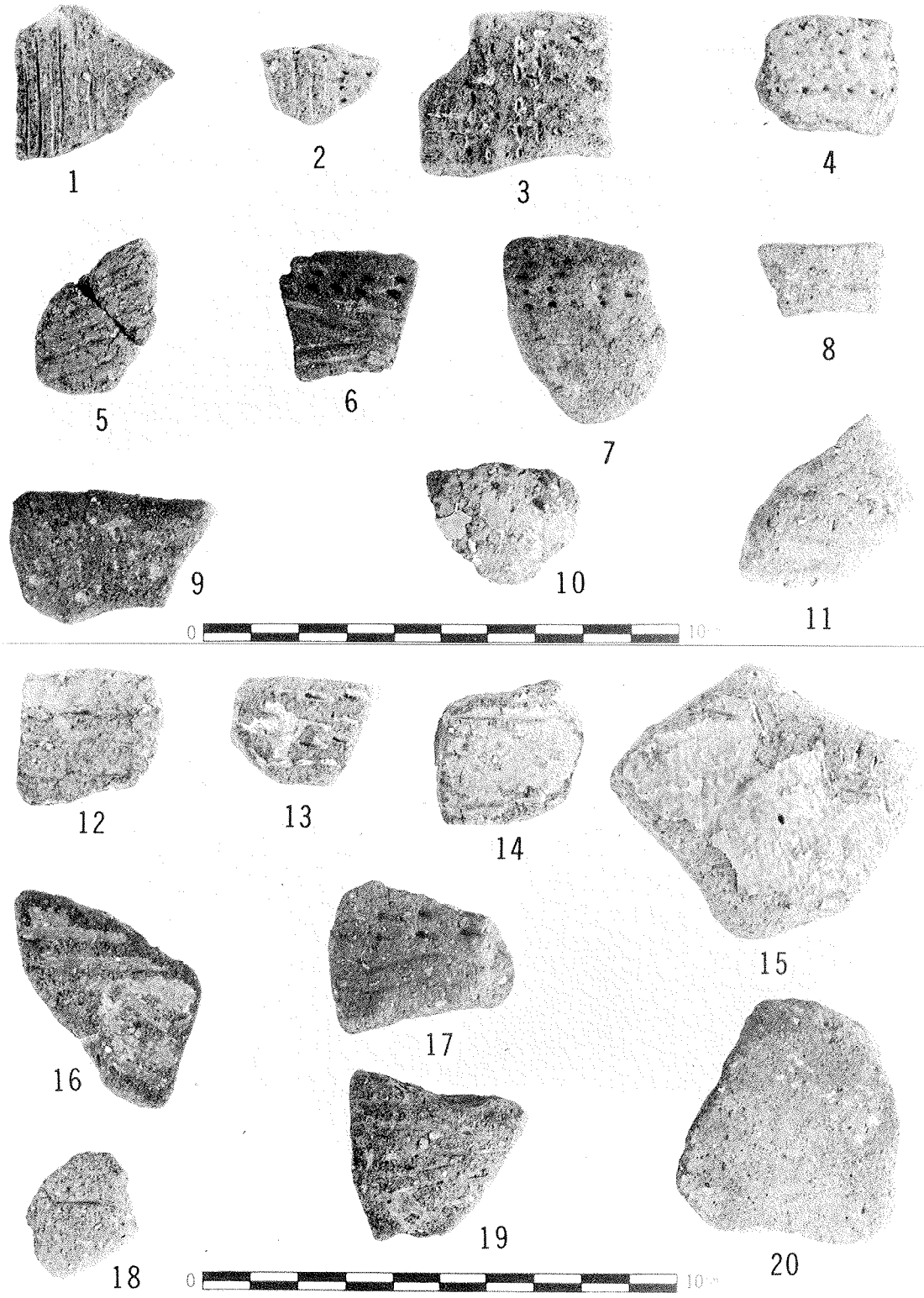




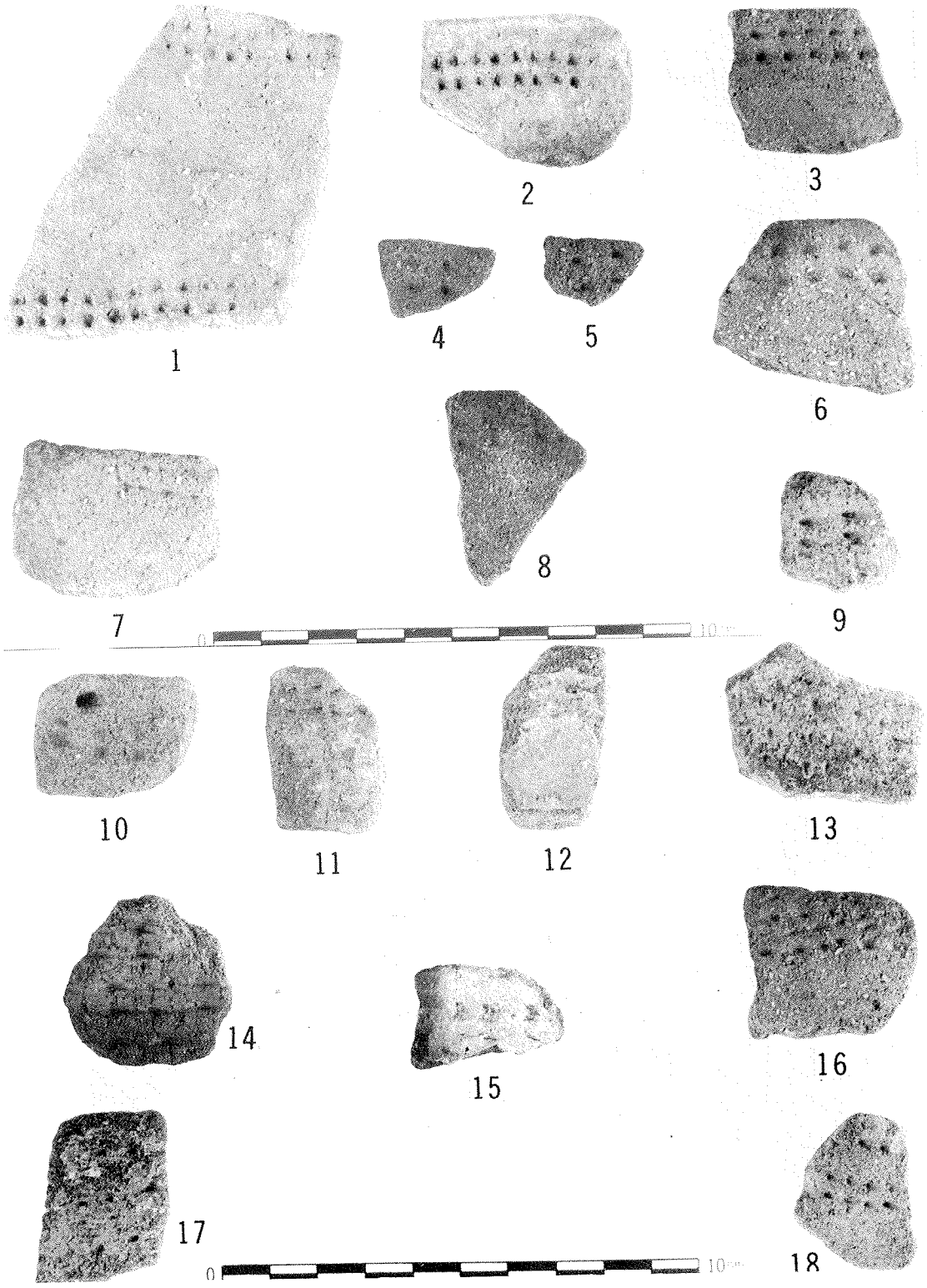
図版Ⅱ－18　A地点ピットD西第Ⅳ層　A（上）0～10cm　B（下）10～15cm　出土の土器



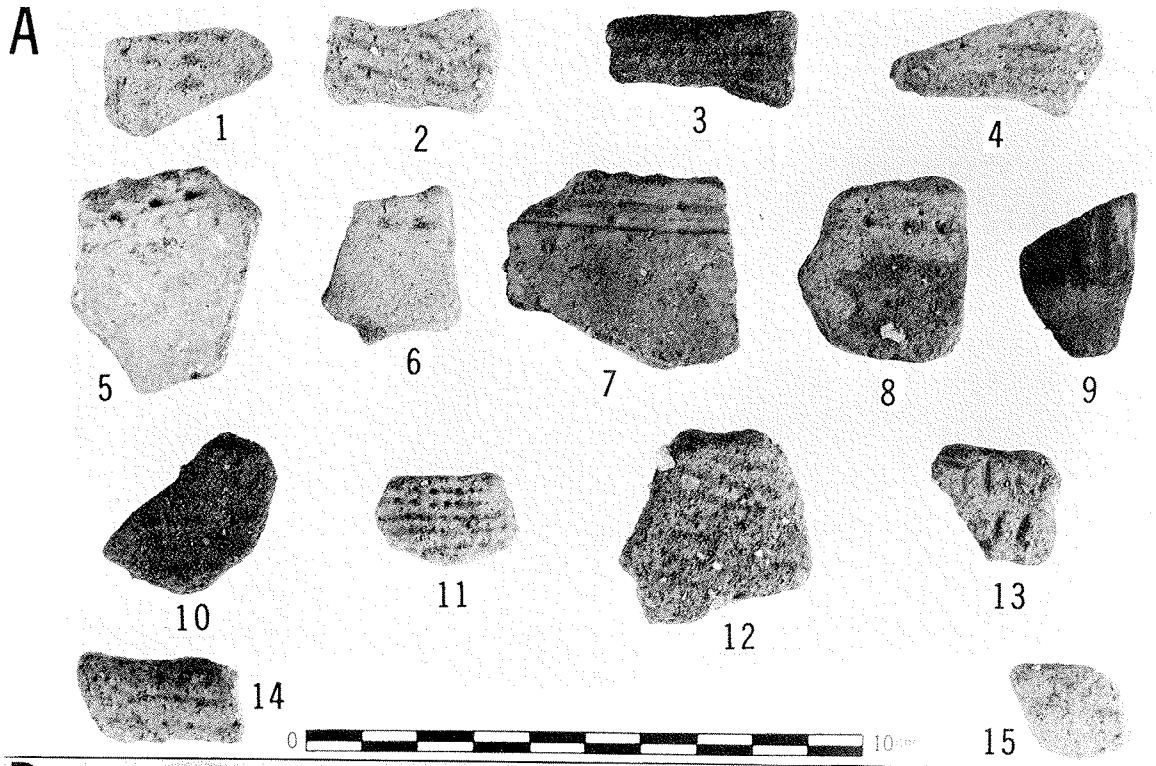
図版 II－19　A）A地点ピットD西第IV層（10～15cm）出土の土器
B）A地点Aトレンチ出土の土器および表採資料

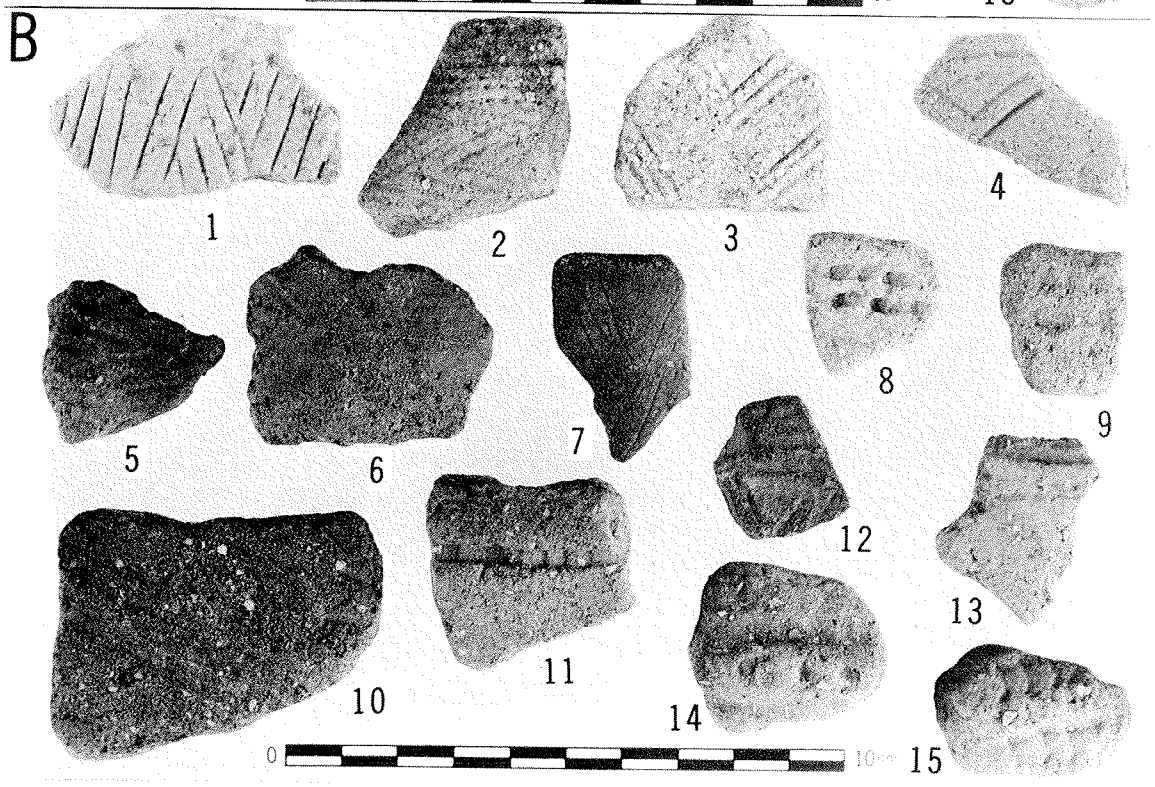


図版 II－20　B地点出土の土器

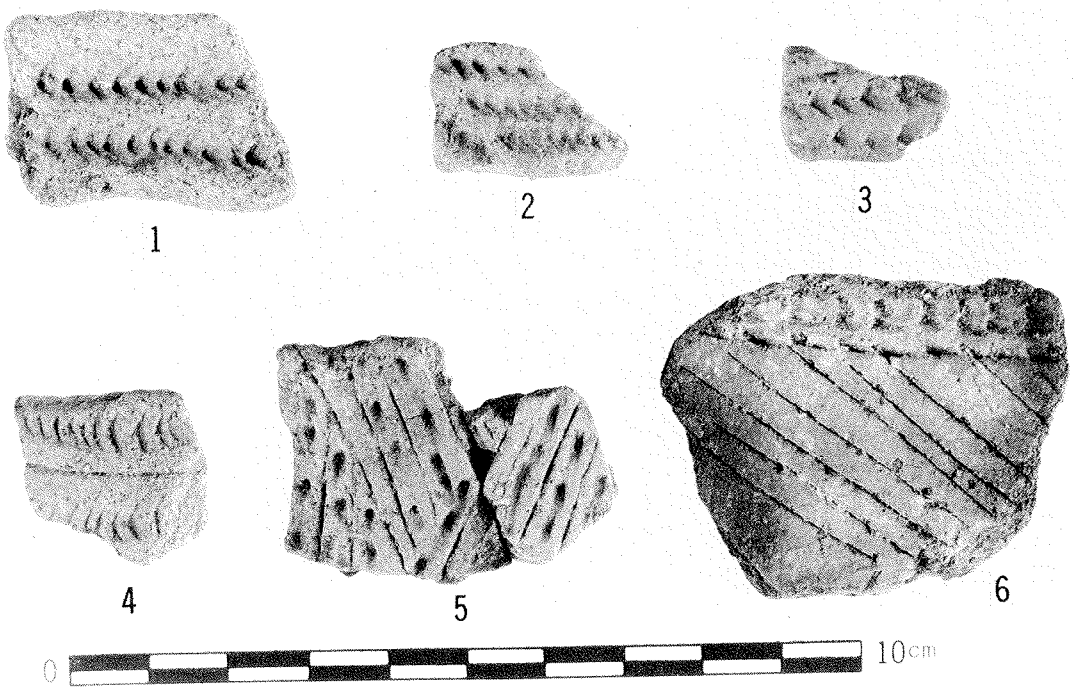


図版Ⅱ－21　C・D地点出土の土器





図版 II － 22　C・D地点出土の土器

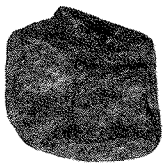


図版Ⅱ－23　C・D地点出土の土器

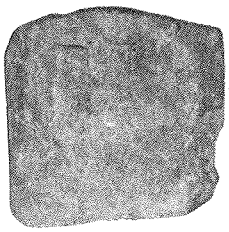
図版 II－24　D地点出土の荻堂式土器

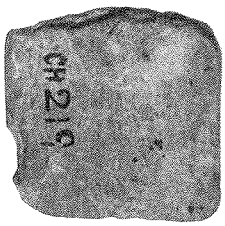
1

3



4

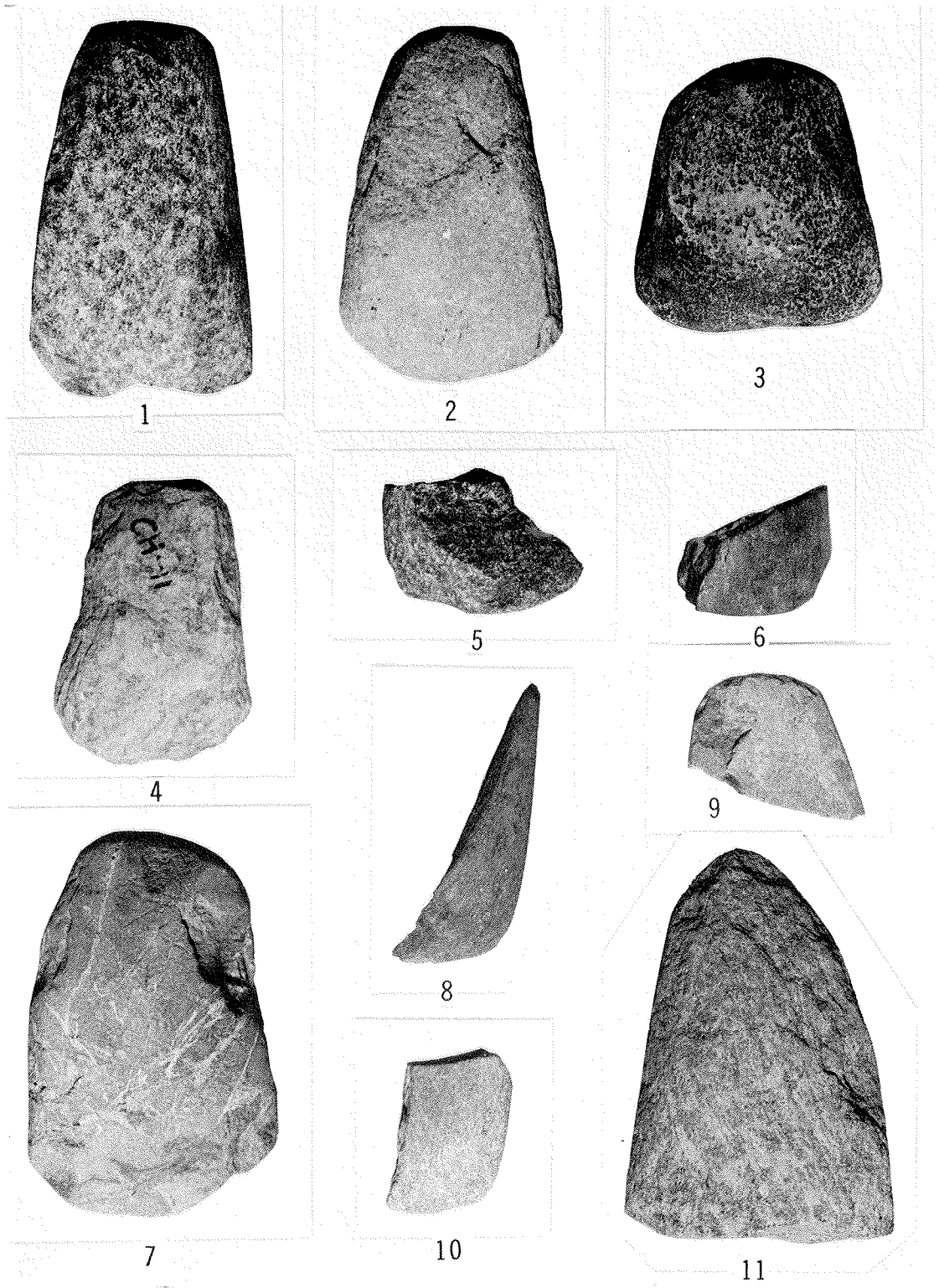




5

6

図版 II－25　知花遺跡出土の石器



図版 Ⅱ－26　知花遺跡出土の石器

Ⅲ　竹下遺跡の発掘調査

目　　次

本文目次

(1)　調査の経過……(101)
(2)　遺跡の状況……(101)
(3)　層の状況……(103)
(4)　出土遺物……(103)
　(イ)　自然遺物……(103)
　(ロ)　人工遺物……(107)
　　土器……(107)
　　石器……(109)
　　須恵器……(110)
　　外国製陶器……(111)
　　磁器……(111)
　(ハ)　人　　骨……(112)
(5)　まとめ……(113)

表目次

Ⅱ－1表　竹下遺跡出土貝類分類集計表……(104)

挿図目次

図Ⅲ－ 1　竹下遺跡の平面および断面地形の概略図……(102)
2　土器Ⅰ類……(115)
3　〃　……(116)
4　〃　……(117)
5　土器Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類……(118)
6　土器底部……(119)
7　〃　（1＝植物葉痕をもつ土器底部）……(120)
8　〃　……(121)
9　〃　……(122)
10　土器調整痕……(123)
11　竹下遺跡出土の石器……(124)
12　須恵器（1，2）外国製陶器……(125)
13　中国製青磁・中国製白磁……(126)

図版目次

図版Ⅲ－ 1　竹下遺跡空中写真……(127)
2　竹下遺跡の近景……(128)
3　竹下遺跡発掘後の状況……(129)
4　竹下遺跡発掘風景……(130)
5　〃　〃　……(131)
6　A竹下遺跡発掘風景，竹下遺跡包含層の断面……(132)
7　イノシシの骨……(133)
8　ウシの骨……(134)
9　鳥骨・イヌの骨・ヒトの骨……(135)
10　ヒトの顎骨……(136)
11　竹下遺跡出土の貝類……(137)
12　〃　……(138)
13　〃　……(139)
14　土器Ⅰ類……(140)
15　〃　……(141)
16　土器Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類……(142)
17　土器底部……(143)
18　A現生のクワズイモ　B土器底部……(144)
19　植物圧痕のある土器底部……(145)
20　土器の器面……(146)
21　石　器……(147)
22　〃　……(148)
23　A須恵器　B陶器類……(149)
24　A外国製陶器・中国製青磁……(150)
25　中国製白磁……(151)
26　A白磁・B刃物傷痕のある獣骨……(152)

Ⅲ　竹下遺跡の発掘調査

(1) 調査の経過

竹下遺跡は今回（1978年1月）の知花遺跡群範囲確認調査で，新たに発見されたものである。これまで知花遺跡群の分布は，Ⅰ項で述べたように，独立丘陵の北半部にのみ限られていた。竹下遺跡の発見によって，丘陵南半部にも遺跡の存在することが明らかとなったわけである。

しかしながら，従来の知花遺跡群より約6百メートルも南に位置し，またちょうどこの付近から行政区域が字松本の竹下原にもあたることから，これを「竹下遺跡」として独立して扱うこととした。

調査は1978年1月から2月にかけて行なった。1月は樹木や表土の除去等を行ない，2月に本格的に発掘を実施した。遺跡の規模はきわめて小範囲であり，2×2mのグリッドを2区画×4区画計8グリッド設定しただけで，全範囲をおさえることができた。　図Ⅲ－1に示すように，これをA～Hの記号で区分し，それぞれ20cm単位でさらに層の中を区切って掘ってみた。表土はごくわずかで，場所によってはすぐに包含層が露出しているところもあった。

後述するように，包含層は岩塊を多く含み，発掘とはいっても専ら丸太等で岩をおこす作業が主体となる状態であった。発掘の結果，遺物包含層はある時期に岩塊と共に崖上よりもたらされて堆積した単一層であることが判明したので，出土品の報告は一括して扱うこととした。

(2) 遺跡の状況

竹下遺跡は松本池武当（いちんとう）三差路の近く，「美里レーンズ（ボーリング場）」へ入る道路付近にある給油所の裏，林の中石灰岩丘の東面する小崖下に形成されている。（図Ⅲ－1，図版Ⅲ－3）

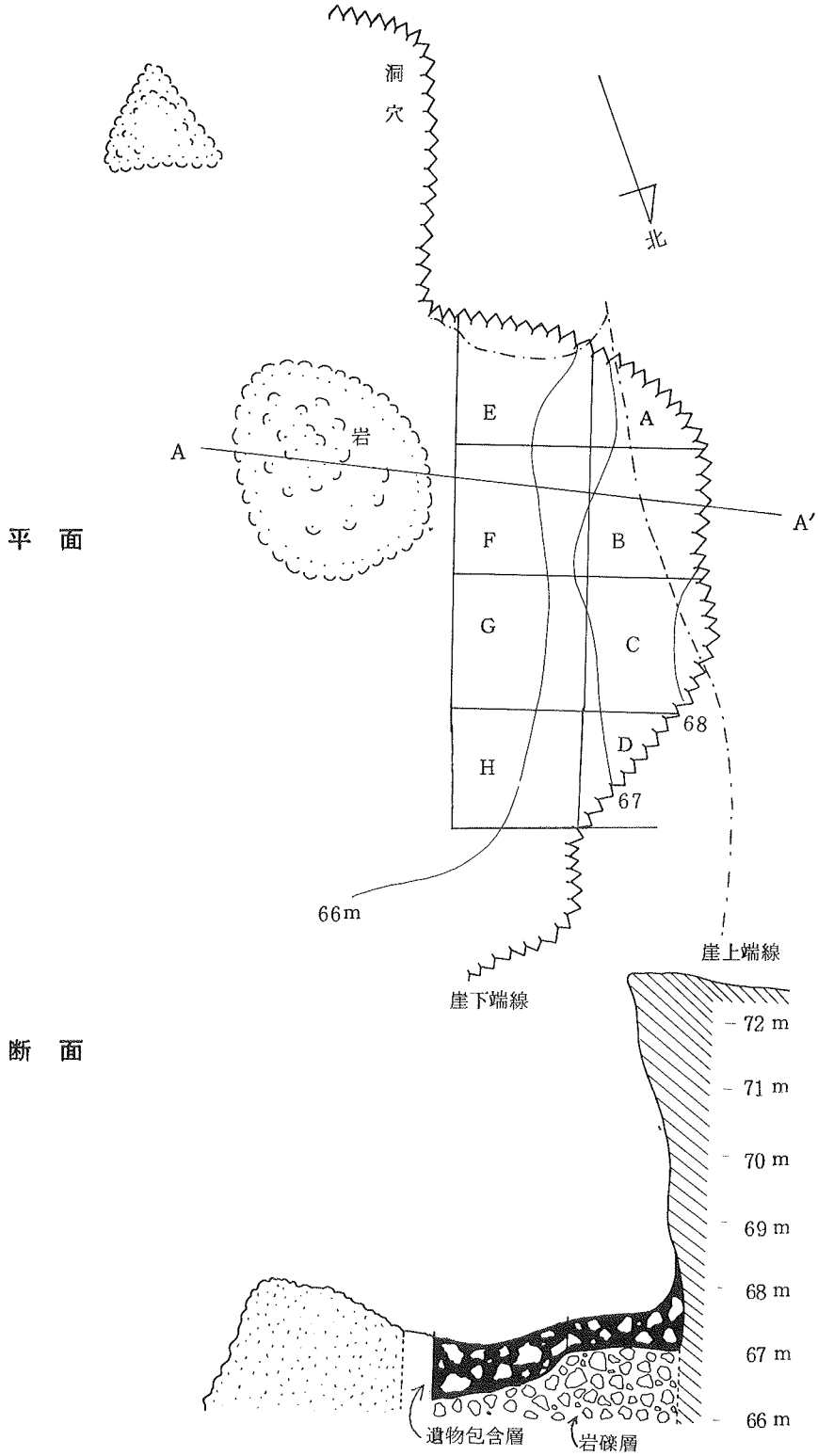
遺跡の規模はきわめて小さく，5メートル余の小崖の下に，斜方向に傾斜して遺物包含層が堆積していた。この崖上の丘はかつて大規模な採石が行われ，崖上の丘の幅わずかに数メートルを残して，原形とは逆に巨大凹地となっている。

竹下遺跡の形成される東面する崖下一帯は，岩陰や洞穴となっている。遺物包含層は洞穴に隣接する岩陰部にある。岩陰の前面はところどころに岩塊があり，平坦地は殆んどない。全体としてさらに東方へ傾斜している。遺物包含層は当初から表土をわずかに覆っているだけで，黒色土が周囲と異って際立っていた。

この遺物包含層の遺物は，明らかに崖上よりもたらされたものと判断された。それは，層の堆積状況が崖壁寄りに高く，前面部に低く傾斜していること，小規模であること，この地点以外に崖下に包含層がないこと，包含層の中に岩塊がかなり混入していることなどによる。岩塊は崖上よりの崩落とみられる。

さて，この場合二つの可能性が考えられる。まずひとつは，この竹下遺跡の包含層は，当時の人間集団がこの地を投棄の場としたために形成されたものか，次には，もともと包含層は崖上にあって，それを近年の採石工事で崖下に押し流して形成されたものなのかということである。

包含層は岩塊をかなり含むものの，黒色土のみの帯をつくっていることから，前者の可能性が強いと考える。包含層の下には白色岩塊層があるので，おそらくこの地が投棄場として使われる



図Ⅲ－1　竹下遺跡の平面および断面地形の概略図

以前から岩塊の崩落があり，遺物投棄中もなおそれは続いていたと解すべきであろう。

このことと関連して，遺物がグシク時代であることから，これらの崩落岩塊は石垣の積石かとも考えたが，その可能性はないと思われる。遺物包含層のある場所以外では，岩塊の崩落がみられないのである。しかし一方では，この地点にのみ集中して岩塊の存在することは奇異であり，まったくの自然石の崩落とは解し難い面もある。

(3) 層の状況

(2)において述べた如く，崖壁に沿って傾斜して堆積した，単一の黒色土層である（図Ⅲ－1）。アラスジケマンガイを主体とする海産貝を含み，グシク土器，中国製陶磁器などを出土する。小規模でもあり，また青磁・白磁が比較的同一型式＝同一時代であるので，ある程度時期幅を限定できる層と考えられる。

層は40～60㎝の厚さをもつ。この中に含まれる人工遺物は，すべて破砕されており，居住活動の場における堆積とは見なし難い。やはり，投棄場における堆積層であると考える。

(4) 出土遺物

出土遺物は小規模遺跡であるためか，量においても種類においても少ない。グシク土器，須恵器，外国製陶磁器，石器，海産・陸産貝類，人骨，猪骨，犬骨，牛骨，鳥骨等が得られている。また，刃物傷のある獣骨も得られている。以下，自然遺物と人工遺物および人骨とに分けて述べる。

(イ) 自然遺物

植物　包含層の黒色土をフルイにかけて水洗いしてみたが，検出できなかった。

動物

イノシシ　（図版Ⅲ－7）

顎骨・尺骨・橈骨・肩甲骨・脛骨・頭椎・上腕骨・踵骨・中手骨・中足骨・寛骨・肋骨が検出された。いずれも残存状態不良で，砕片である。量も少なく，一頭又は二頭相当とみられる。

ウ　シ　（図版Ⅲ－8）

頚骨・胸椎・寛骨が検出された。グシク時代にウシを飼育していたことはヒニ城，勝連城跡，甲斐川原遺跡などで知られているが，おそらく一般化していたであろう。

イ　ヌ　（図版Ⅲ－9 A10～12）

顎骨1個検出された。家犬である。

鳥　類　（図版Ⅲ－9 A 1～9）

種不明だが，鳥の骨が数片検出された。

貝　類　（図版Ⅲ－11～13）

Ⅲ－1表に掲げるとおりである。圧倒的にアラスジケマンガイが多い。これはヒニ城，勝連城南貝塚第Ⅱ層に共通する。グシク時代のある時期に（お

そらく初期に），この貝種が共通するような印象を受ける。シャコガイ・ヤコウガイなどのような大形貝が殆んど検出されないことも，ひとつの特徴といえる。この時期における，海域の何らかの変化を反映しているものと解される。（表中，不明の項はⅠ層とⅡ層のDを混合してしまったことによる）

Ⅲ－1表　竹下遺跡出土貝類分類集計表

図版番号	番号	貝種 ＼ 個数・重量 ＼ グリッド ＼ 層序	Ⅱ A 個数	Ⅱ A 重量	Ⅱ B 個数	Ⅱ B 重量	Ⅱ C 個数	Ⅱ C 重量	Ⅱ E 個数	Ⅱ E 重量	Ⅱ F 個数	Ⅱ F 重量	Ⅱ G 個数	Ⅱ G 重量	Ⅱ H 個数	Ⅱ H 重量	※不明 個数	※不明 重量	合計 個数	合計 重量
		陸産貝																		
Ⅲ—11の1	1	オキナワヤマタニシ	6	13	46	80	174	285	34	56	163	298	14	20			583	1,012	1,020	1,764
2	2	マルタニシ															2	0.4	2	0.4
3	3	アフリカマイマイ															2	12	2	12
4	4	パンダナマイマイ							1	0.1							1	0.1	2	0.2
5	5	イトマン（ケ）マイマイ							4	3	2	1.5					7	5.5	13	10
6	6	シュリマイマイ			2	2	5	9	5	9	49	110	1	0.5			95	198.5	157	329
7	7	ツヤギセル	1	1	1	1	3	2	1	1	2	2	1	0.5			17	15.5	26	23
		淡水産貝																		
8	8	シレナシジミ															1	8	1	8
9	9	カワニナ							1	0.5			1	1			2	1.5	4	3
10	10	スグカワニナ									1	2					1	2	2	4
11	11	マルカノコガイ															3	11	3	11
		海産貝																		
12	12	マアナゴ									1	2					1	2	2	4
13	13	ニシキウズガイ							1	3							5	41	6	44
14	14	ムラサキウズガイ	1	10													1	10	2	20
15	15	ヘナタリ															1	1	1	1
16	16	オキナワイシダタミ			1	3					1	2					2	5	4	10
17	17	カンギク	27	86	46	110	11	32	102	294	167	446	2	5			474	1,349	829	2,322
18	18	リュウキュウアマガイ							1	2	1	3					2	5	4	10
19	19	ニシキアマオブネ									1	8							1	8
20	20	イボウミニナ	1	2							1	1					4	5	6	8

図版番号	貝番号	種 ＼ 層、序 / グリッド / 個数・重量	Ⅱ																合計	
			A		B		C		E		F		G		H		不明			
			個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量
Ⅲ—11の21	21	クワノミカニモリ					1	0.2			2	3.1	1	3			4	6.3	8	12.6
22	22	オハグロガイ							3	12	3	10					6	22	12	44
23	23	マガキガイ							1	11							1	11	2	22
24	24	ウラスジマイノソデ															2	23	2	23
25	25	トミガイ			1	10											1	10	2	20
26	26	リスガイ					1	2									1	2	2	4
27	27	ホウシュノタマ							1	1							1	1	2	2
28	28	ハナビラダカラ					1	0.2	1	2							3	4.2	5	6.4
29	29	ハナマルユキ	4	13.5			1	0.2	2	7	4	16					13	50.7	24	87.4
30	30	ホシキヌタ	1	10					1	11	1	1					3	22	6	44
31	31	ジャノメダカラ							1	6							1	6	2	12
Ⅲ—12の1	32	シオボラ	1	5													1	5	2	10
2	33	ウネレイシダマシ															2	0.4	2	0.4
3	34	アラウネレイシダマシ															1	2	1	2
4	35	コイボテツレイシ							1	13							1	13	2	26
5	36	ウニテツレイシ							1	2							1	2	2	4
6	37	リュウキュウムシロ									1	2							1	2
7	38	イソニナ	1	0.1	1	1	5	7	10	12	11	14					38	45.1	66	79.2
8	39	ツノマタモドキ							1	9							3	19	4	28
9	40	ナンヨウクロミナシ									1	10					1	10	2	20
10	41	マルミミエガイ							6	11	6	17	1	0.3			15	30.3	28	58.6
11	42	ベニエガイ	1	2							2	11					3	13	6	26
12	43	ハナエガイ															1	1	1	1
13	44	エガイ							2	2	1	1					6	5.3	9	8.3
14	45	カリガネエガイ									2	3							2	3
15	46	スエヒロエガイ	1	1			1	0.2			2	0.2					4	1.4	8	2.8
16	47	トマヤエガイ					1	2			1	2					2	4	4	8
17	48	ハブタエエガイ	3	3													3	3	6	6
18	49	クマサカヤドリエガイ							1	2							1	2	2	4

図版番号	番号	貝種 ＼ 個数・重量 ＼ グリッド ＼ 層序	Ⅱ																合計	
			A		B		C		E		F		G		H		不明			
			個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量
Ⅲ－12の19	50	リュウキュウサルボウ							2	18	1	30					3	48	6	96
20	51	ソメワケグリ									1	1					1	1	2	2
21	52	シロアフリガイ	13	11	9	7.3	1	1	18	19	10	4					69	583	120	100.6
22	53	メンガイ	1	5							2	8.5					3	13.5	6	27
23	54	シロザル															2	6	2	6
24	55	ヒメジャコ	2	8	1	8	1	8	4	33	2	5	1	5			14	5,582	25	5,649
25	56	リュウキュウザルガイ	3	14	3	20	2	8	11	62	11	55					45	224	75	383
26	57	カワラガイ	15	84	19	115	20	88	58	295	80	415	17	76			291	1,444	500	2,515
27	58	スダレハマグリ	4	5	4	7	2	2	22	38	15	28					63	84.5	110	164.5
28	59	アサリ							1	5							1	5	2	10
29	60	ヒメアサリ	1	0.1							2	4					3	4.1	6	8.2
30	61	ヒメリュウキュウアサリ							1	2	1	1	1	1			3	4	6	8
Ⅲ－13の1	62	チョウセンハマグリ	3	41	2	11	7	79	19	150	25	282	1	5			68	630	125	1,198
2	63	ヌノメガイ									1	2					1	2	2	4
3	64	ユウカゲハマグリ															1	2	1	2
4	65	イオウハマグリ	7	7.5	5	18	5	10	24	67	38	91	5	5			116	5,579	200	5,777.5
5	66	ホソスジイナミガイ	14	70	13	29	13	28	28	99	48	150	7	18			164	442	287	836
6	67	アラスジケマンガイ	402	2,163	1,178	3,144	653	1,556	3,614	10,919	41.12	11,032	371	951	11	30	14,231	40,246	24,572	70.041
7	68	シラオガイ															1	2	1	2
8	69	オイノカガミ									1	2					1	2	2	4
9	70	ムラクモハマグリ	1	0.5													1	0.5	2	1
10	71	オミナエシ							1	15							1	15	2	30
11	72	オトコエシ							1	5							1	5	2	10
12	73	イソハマグリ							1	1	1	1					2	2	4	4
13	74	リュウキュウバカガイ					1	3									5	13	6	16
14	75	マスオガイ	9	25	3	2	4	8	10	21	11	19	4	10			59	106	100	191
15	76	リュウキュウマスオ	1	9			1	1			1	0.1					5	14.1	8	24.2
16	77	リュウキュウシラトリガイ	26	62	15	33	19	48	46	83	50	139	10	14			475	511	641	890
17	78	モチヅキザラ			1	5			8	35	4	15					18	71	31	126

図版番号	番号	貝種 ＼ 個数・重量 ＼ グリッド ＼ 層序	Ⅱ A 個数	Ⅱ A 重量	Ⅱ B 個数	Ⅱ B 重量	Ⅱ C 個数	Ⅱ C 重量	Ⅱ E 個数	Ⅱ E 重量	Ⅱ F 個数	Ⅱ F 重量	Ⅱ G 個数	Ⅱ G 重量	Ⅱ H 個数	Ⅱ H 重量	不明 個数	不明 重量	合計 個数	合計 重量
Ⅲ—13の18	79	ツキザラ							1	3							1	3	2	6
		その他																		
19	80	チョウセンササエのフタ			1	10			1	5			1	9			3	24	6	48
合計			550	2,651.7	1,352	3,616.3	933	2,179.8	4,053	12,344.6	4,843	13,250.4	439	1,124.3	11	30	16,975	58,141.2	29,156	93,338.3

重量の単位はグラム（g）

(ロ) 人工遺物

土器

土器はすべてグシク系土器に限られる。比較的多量に出土した。すべて破片のみの出土で，全器形を窺えるものはない。

器形は破片から推して，概ね壷形・碗形・鉢形の三種に分けられるようである。底部はいずれも安定した平底である。

器面には長石・石灰岩粒などの混入物の脱落痕・擦過痕がよくみられ，いわゆるアバタ状を呈するものが主体を占める。また焼成が良好で，ヘラ調整の痕跡のみられるものもあるが，一方では泥質で粉末が手につくものもある。以下，主として胎土・色調・器形等について述べる。

胎土および器面

胎土・器面をみると，次の各種が確認できる。

① 混和材をあまり含まず，胎内および器面に無数の極細小の気泡がある。器面には混和材の脱落痕・擦過痕は認められない。

② 手ざわりのザラザラした砂質で，気泡・混和材の脱落痕・擦過痕は認められない。微小な長石粒が点在するほか，きわめて微細な雲母とみられる黒い光沢を放つ細粉を無数に含む。黄赤色〜黄褐色を呈する。

③ 上記②とほとんど類似するが，そのうち黒い光沢の細粉を伴わないもの。

④ 比較的大きな長石粒などの混和材を含み，器面にはそれらの脱落痕がみられる。一部に擦過痕もある。また，しばしば器面や破面に粗い長石粒が露出している。器面はザラザラしている。焼成はあまり良好ではない。

⑤ 器面の混和材のほとんどが脱落し，アバタ状になったものである。器面は全体的には平滑である。器面がうすく剥離する傾向があるものもみられる。擦過痕の著しいものもある。

⑥ 焼成がかなり良好で器壁は薄手，極細な気泡がある。サンゴ石灰岩の微粒を含む。 器面には混和材の脱落痕や擦過痕が認められる。

⑦ 泥質で粘性のあるもの。胎土に赤茶色の1〜3㎜大の粒子が斑点状に認められる。気泡・混入物の脱落・擦過痕はない。

⑧　軟質で，手に触れると器面の粉末が遊離する。比較的薄手に属する。アバタ状の混和材脱落痕・擦過痕が著しい。

以上である。

これらの土器の色調は概して赤褐色〜黄褐色である。一部には全体が黒色の底部片，内面のみ黒色，外面のみ黒色〜灰色を呈するもの等もある。泥質の土器は桃色状，黒色細粉（雲母？）混入土器は岩干黄褐色気味の傾向をもっている。他は赤褐色あるいはその上に，部分的に黒色を有するものである。

器面調整をみると，とくに⑤・⑥の土器はヘラや草茎の如きもので撫でているようである。また，混和材の擦過痕は，器面に対する何らかの方法での調整がなされていることを意味しよう。

黒色細粉混入土器は器面が均質で凹凸がなく，よく調整されている。アバタ状の器面をもつものには，ヘラの如きもので平滑に調整されたものと，岩干の凹凸のみられるものとがある。また磨石の如きものによる調整も考えられるが，それを示すものの確認は困難である。

器形

口縁から底部に至るまでの器形を示すものは得られていないので，完全形は確定できない。口縁片から推すと，壷・碗・鉢・その他に分けられる。底部片でみるとすべて平底である。

①　土器Ⅰ類（図Ⅲ－2〜4，図版Ⅲ－14・15）

壷形は出土品中最も多い器形である。短頸の壷で，直口の壷口縁が2〜3㎝程度あって，それが頸部で直角〜120度に肩を張る。破片であるので，この肩の張り出しまでしか明らかではない。

一方，底部をみると立ちあがりの角度が130〜145度と，比較的外向きである。

すなわち，胴の張る器形である。以上の口縁と底部の形態，およびグシク土器に影響を与えたもののひとつとみられる須恵器を参考にすると，図Ⅱ－2の如き復元形が想定される。

簡単にその特色を記せば，短頸広口壷で肩胴部が張り，底部の安定した土器ということになる。

この器形の胎土・器面は，前述した項のほとんどを含んでいる。それは他の器形においても同様と見なし得る。したがって，特定の器形に特定されるテンパーというのは存在しないようである。

しかし，グシク土器全体としてみた場合，砂粒・石灰岩・長石等のやゝ粗粒の混和材を多用していること，その脱落痕・擦過痕が著しいこと，しばしば泥質土器がみられることなどは大きな特色であり，それによる区分は目的によって大いに有効である。（図版Ⅲ－ 20 ）

また，ヘラの如きものによる器面調整も，ひとつの特色といえるかも知れない。

②　土器Ⅱ類（図Ⅲ－5の1〜4，図版Ⅲ－16の1〜3）

碗形である。4片得られたのみで，きわめて少量である。

口縁で若干外反し，胴部はふっくらとした感じで底部に至る。一見中国製磁器の碗の器形を思わせる。比較的薄手で器壁の厚さは均一である。微細な石灰岩・長石粒を胎土に含み，器面内外には微細な気泡が無数にみられる。

③　土器Ⅲ類（図Ⅲ－5の5・6・9・10，図版16の4・5・6・7）

わずかに4片の出土で，かつ細片であるため器形は不明だが，口縁部が直口であること，他のグシク系遺跡の類例等から推して，鉢形になるのではないかとも考えられる。口径は20～30㎝程度とみられる。胎土に微砂粒を含み，器面にはそれらの脱落痕が無数にみられる。

④　土器Ⅳ類（図Ⅲ－5の8，図版Ⅲ－16の9）

1片の出土である。鉢形土器かともみられるが，頸部でわずかに張り出し，「く」の字状の断面形を呈する。比較的硬質で，器面はヘラ（石？）又は草茎の如きものでよく調整され，平滑である。石灰岩の微粒片を含むが，器面にはその脱落痕はみられない。

⑤　土器Ⅴ類（図Ⅲ－5の7，図版Ⅲ－16の10）

1片の出土である。器形および部位は明らかでない。一辺は縁辺になっているので，口縁の一部ともみられるが，弧状をなさず直線状をなしている。あるいは片口注口の一部であろうか。

⑥　土器の底部（図Ⅲ－6・7・8・9，図版Ⅲ－17・18 B・19）

前述したように，土器の底部はすべて安定した平底である。その立ちあがりの角度は130度～145度であり，胴部最大径に対して½又はそれ以上の径を有するものとみられる。したがって，正立の状態における安定度はかなり高いといえる。

胎土は前述したとおりである。底部の内側壁に対しては，草茎の如きもので拭くような形で器面を整えた痕がみとめられる。色調は土器の項のはじめに触れたように，概して赤褐色～黄褐色である。1例のみ，底部内外すべてが黒色を呈するものがある。

底部の断面をみると，大部分は平行であるが，一部には中央部で厚さが薄くなる例もある。グシク土器によくみられる断面形である。底部外縁における，裏面と立ちあがりとの接点でつくられる角は，比較的明瞭な角をもつものと，境目の不明な，若干なべ底状に漸次弧状に立ちあがっていくものとがある。ただし，両者とも全体的な立ちあがりの角度に差はなく，接点付近にのみ見られる形態差である。

※植物葉痕をもつ土器底部

底部の裏（外）に，植物の圧痕のみられるものが2例得られている。(図Ⅲ－7の1，図版Ⅲ－19)ひとつは葉のかなり広いもので，底部全体がこの葉に載っていたとみられ，底部全面に一枚の葉の圧痕がみられる。この一枚の葉は明らかに底部をはみ出しているので，葉の面積のかなり広いものが推定される。これを今日の植物で照合してみると，クワズイモの葉にほぼ合致した。この植物は，竹下遺跡付近に生育している。あとのひとつはあまり明瞭な痕跡ではなく，小さな雑草の如きものの茎枝かとみられる。

土器底部に葉痕がある場合，しばしば回転台としての植物葉の利用が想定されているが，前者の例はその可能性がある。後者の例は偶然に付着したものであろう。

石器

石器は3例得られた。いずれも他遺跡での類例に乏しいため，適当な呼称を決め難い。

①　石器Ⅰ（図Ⅲ－11の3，図版Ⅲ－22の1）

墨石状を呈し，全面よく研磨されている。角はわずかに丸味をもたしてある。下端が欠失

しているが，残存部でごくわずかに斜内側へ研磨面とみられる部分が確認できる。これが刃面であるとすれば，ノミ状の利器とみなし得ると考えるが，研磨面残存部が微少なため不明である。石質は砂質頁岩。

② 石器Ⅱ（図Ⅲ—11の2，図版Ⅲ—21）

砥石とみられる。約半分が欠失しているものと考えられる。方柱状を呈し，全面に砥研痕が明瞭にみられる。とくに長方形各面においてそうである。

砥研痕は2種識別される。ひとつは面全体としての砥研痕であり，あとのひとつはその面の中にある溝状の砥研痕である。面の砥研痕は各面とも端が厚く（高く），中央へいくに従って薄く（低く）なっている。これは今日の使用例でも観察されるように，砥石の使用頻度が高いほど中央部が磨耗し，全体として弧状の面を形成するようになることに相通ずるものであろう。

一方の溝状の砥研痕は，二面は舟底形を呈しあとの二面は沈線状の凹部が数条形成されている。また，この沈線状凹部が前者の舟底形溝の中にも1例みられる。

この二種の砥研痕については，次の如く考えられるのではなかろうか。すなわち，この砥石は現存部の長軸の約2倍強の長さをもっていたものと解される。それは砥研面の反復使用によって形成される弧状面よりの推定である。この時点では，この砥研面には溝状砥研痕は未だ形成されていなかったはずである。これを第一次砥石とする。

第一次砥石の各面に対しては，刀子・包丁・鎌等のような類の刃物の砥研が行われたのであろう。この結果，面全体として磨耗が進行し，とくにそれは中央部で著しかった。

その後何らかの理由により，ほぼ中央近くから折損したため，一方の半分に対して二次的な再使用が行われた。これを第二次砥石とする。二次使用とする根拠は，現存部は明らかに一方が欠失しているにもかかわらず，溝状砥研痕はすべて現存部面内で完結していることによる。また欠失部の角への研磨も若干行われているが，これは現存部をひとつの石器として角とりを施したものと解される。

すなわち，本標品は第一次石器としては一部欠失しているが，第二次石器としては完形品であるといえる。第二次石器における溝状砥研痕の形態は，錐・ヤス・針・鏃等の類の先端尖鋭な利器の砥研が行われたのであろう。石質は凝灰質砂岩。

③ 石器Ⅲ（図Ⅲ—11の1，図版Ⅲ—22の2）

大部分は欠失している。比較的大形のものとみられる。概ね長方形で板状を呈していたとみられ，現存部はその一角と解される。二面に平滑な研磨痕がうかがえる。石質は砂岩。

須恵器

須恵器の出土は少ない。細片が4片得られただけである。（図Ⅲ—12の1・2，図版Ⅲ—23A）。そのうち1片は壺の口縁部破片で，他は胴部破片である。

口縁部破片は最短頸部で径推計6.6㎝で比較的細い。断面でみると口唇にいくに従って反りつつ，器壁の厚さはうすくなっている。

これらの須恵器破片はいずれもかなり硬質で，通常の陶器類と同程度の硬度を有している。

胎土は内外面ともに均質な灰色を呈し，胴部破片の場合は芯部が茶色を呈している。

器壁の厚さは6㎜～8㎜。内外面に水平方向のうすい条痕が無数にみられる。内面にはタタキ目が点々とみられる。格子状をなさず，不定形である。

外国製陶器

陶器はすべて外国製とみられるもので，従来「南蛮陶器」と称されていたものである。出土量は少なく，かつ細片のみの出土であり，全体の器形を窺えるものはない。

四類に分けられる。

① 陶器Ⅰ類（図Ⅲ—12の3～6，図版Ⅲ—23B）

胎土に微砂粒を含む，内外面とも暗灰色を呈し芯部は茶色を呈している。内面には輪積み接合部にタタキ目がみられる。ロクロ成形痕がみられる。釉は施されない。

器形は口縁部が壷形の頸部とみられるもの1例と，平底の底部1例とがあるだけで，特徴的な点を把握できない。

外面に，水平方向に沈線が一条施されるものが1例ある。器面を囲繞するものとみられる。この破片は断面よりみると，底部に近い位置に相当するものとみられる。

② 陶器Ⅱ類（図版Ⅲ—24A1・2）

胎土に微砂粒（石英）を含む。硬質で焼成は良好である。

内外面に鉄釉が施され，とくに外面は黒色を呈する。外面にはタタキ目が部分的にみられる。細片が2片得られただけなので，器形は全く不明である。

③ 陶器Ⅲ類（図版Ⅲ—24A3～5）

胎土に砂粒を含む，胎土はすべて赤褐色である。外面に鉄釉が施され，黒灰色を呈している。内面にも施釉されているが，全面には及んでいない。輪積みである。

④ 陶器Ⅳ類（図版Ⅲ—24A6・7）

胎土に黒い粒子を無数に含み，それが内面では班点状にふき出ている。胎土は灰色を呈し，砂っぽい感じである。

外面は鉄釉が施され，茶黒色を呈する。内面は無釉である。

器壁の厚さは，四類中最もうす手に属し，6㎜の厚さで均一的である。

磁器

磁器類の出土は少量である。すべて中国製とみられるものである。青磁と白磁とがあり，それぞれいくつかに類別されるので，それに従って記述していきたい。

① 青磁Ⅰ類（図Ⅲ—13の1～5，図版Ⅲ—24B1～5）

胎土は粘性があり，へき開面がガラス状を呈する。器形は腕である。胴部外面には篦による蓮弁が彫られ，鎬が明瞭に残っている。蓮弁の先は尖がっている。

② 青磁Ⅱ類（図Ⅲ—13の6・7，図版Ⅲ—24B6・7）

胎土に若干気泡がみられ，やゝ砂状の粒子を含む。釉は青味がかっている。器形は口縁部が水平近くまで，外側に折れ曲がる小形の皿である。内面には先端の丸い，蓮弁状の文様が凹みをもって施される。

③ 青磁Ⅲ類（図Ⅲ—13の8・9，図版Ⅲ—24B8～13）

胎土がやゝ砂っぽい。器形は腕とみられる。釉は透明で気泡を含んでいる。外側に篦彫りの大形の蓮弁が施されるが鎬は無い。

④　その他の青磁

※碗類の胴部破片。胎土はやゝ砂っぽい。細片のため全面は窺えないが，文様は施されていないものとみられる。釉は茶色に近く，くすんでいる。

※※皿の底部破片。胎土は気泡が多い。外側は無釉で篦削りの痕がのこっている。釉は淡青色で貫入がある。

⑤　白磁Ⅰ類（図Ⅲ—13の10・11，図版Ⅲ—25の1・2）

胎土は粘性のあるへき開面をなし，気泡，不純物が多い。釉は透明で，やゝ青味がかっている。釉は内側は全面，外側は高台の脇近くまで施されている。

器形は碗である。口縁部はやゝ内湾する。高台は篦で粗雑に削られている。

⑥　白磁Ⅱ類（図Ⅲ—13の12・13，図版Ⅲ—25の3）

胎土は砂っぽく，微砂粒，気泡が多い。釉は透明で貫入がある。やゝ陶質の胎土である。釉は内側は全面，外側は高台脇近くまでかかっている。

器形は碗である。高台は篦で粗雑に削られている。内側見込部に輪状の小さな円をかき，さらに同じ内側口縁近くにも文様を施すが，全体の展開は不明である。

口縁部はわずかに外反し，口唇は無釉である。この無釉部は焼成前の拭き取りではなく，使用中の磨滅によるものとみられる。

⑦　白磁Ⅲ類（図Ⅲ—13の14，図版Ⅲ—26A）

胎土に気泡がみられる。釉は不透明でやゝ青味がかっている。器形は碗である。外側にロクロ成形時の痕が段状に残っている。口縁部はやゝ内湾する。内外面に気泡のふき出した小孔が多くみられる。

(ハ)　人　骨

佐　野　　一（琉球大学保健学部教授）

本人骨は昭和53年2月発掘され，所属時代は城（グシク）時代であるという。

出土状況に関しては担当者の記載にゆずる。

①　保存状態

骨の保存状態は良好であるが，欠損部が多く，1個体に属すると考えられる下顎骨，上肢骨等の他，若干の別個体の骨が混じっている。

②　性及び年令

1個体分と考えられる個体は筋肉の発達した身長152㎝程の熟年男性と推定される。

③　各部分について

i）下顎骨：左関節突起，正中及び右側歯槽部，右下顎角部を欠く。歯は左第1大臼歯のみ残存している。磨耗度はBrocaの3°。第2及び第3大臼歯は生前に脱落し，歯槽は閉鎖している。その他の歯は死後脱落し，行方不明である。右側は破損のため不明。

ii）上顎骨：左側の小臼歯部より内側の歯槽突起部の破片で，側切歯のみ残存し，他は死後脱落して行方不明である。第2小臼歯は生前に脱落していたらしい。咬合型は鋏状咬合で

あったらしいことが側切歯の磨耗状態から推定される。

iii) 左上腕骨：骨頭部を欠く。骨壁は頑丈で筋附着部の発達は良い。推定全長 280㎜，下端巾54㎜，中央最大径22㎜，中央最小径16㎜，中央周径62㎜，中央断面示数 72.7，骨体最小周径57㎜で男性としては小さい方である。骨体の扁平性は筋の発達の結果である。

iv) 右上腕骨：両骨端部を欠いている。iii)と対をなすものであろう。中央最大径，最小径及び周径はそれぞれ23㎜，17㎜，64㎜である。

v) 右上腕骨骨体中央部破片：上記のものとは別個体であるが，筋附着部の発達，大きさ等は良く似ている。

vi) 左尺骨：遠位端を欠く。骨間稜は強く，骨体下半部は外側に強く湾局している。推定全長 225㎜，骨体中央径は17㎜及び12㎜，上部径は23㎜及び20㎜である。

vii) 左橈骨：両骨端部を欠く。上記尺骨と対をなすらしい。推定全長 200㎜。

viii) 右尺骨：遠位端と後面を欠く破片のみ。vi)の反対側である。

ix) 左鎖骨：両骨端部を欠く。前後径12㎜，上下径10㎜。

x) 右第一肋骨：上面の破片のみ。

xi) 右肩甲骨：外側縁の一部のみ。

xii) 大腿骨：骨体中央部破片で左右不明。

④ まとめ

以上，本人骨は，保存状態は良好であるが欠損部が多く，v)を除くと一個体に属していたと推定される。そして，この個体は身長 152㎝程の小柄な熟年男性と推定される。

(5) まとめ

竹下遺跡は標高約70ｍの，石灰岩丘東面小崖下に形成された遺跡である。遺跡は比較的小規模，略８ｍ×４ｍの範囲である。単一の黒色土包含層をなすが，岩塊がかなり混入している。このことから，当時の居住活動の場は丘の上であり，この崖下遺物包含層は投棄場であったと考えられる。

出土遺物はグシク土器を主体とし，少量の須恵器，外国製陶器，中国製青磁・白磁，それに石器，牛・猪・鳥・人骨およびアラスジケマンガイを主体とする海産貝類等であった。

これらのうち，蓮弁鎬の明瞭な青器および白器などから，ある程度時代を限定し得るものと考える。概ね14世紀か？。

家犬はすでに古くから出土しているが，ウシ骨はこのグシク時代に至ってはじめて出土するようになる。おそらくこの時期に，外部よりもたらされたものであろう。ウシはいかなる役割を果たしたのであろうか，興味深いものがある。おそらく，グシク時代に，非海岸・非河川流域→内陸部ジャーガル（島尻層の風化土壌），マージ（石灰岩地帯平坦地の赤土）地域への進出の過程で，ウシの使役が重要な役割を果たしたのではなかろうか。すなわち，グシク社会が成立・発展するためには，これらの内陸地域における農業生産の定着という保障を必要としたと考えられる。このことを，一面ではウシの使役という技術的な革新が推進したものと解したい。ここで詳述するゆとりがないので，このことに関しては別の機会に触れたい。

人骨が一体出土しているが，一個体完全なものではなく，かつ散乱状態の検出である。いかなる経緯によってここに混入したか不明だが，仮に当時崖葬が行われていたのであれば，混入の可能性は十分にある。

海産貝類の出土は隣の知花グシクにおいても見られるが，いずれも中部地域ではもっとも内陸部に位置していることから，興味深いものがある。高宮廣衛氏の御教示によれば，すぐ近くを流れる比謝川が，先史時代における内陸部への進入経路ではないかということである。すなわち「沢伝い」である。必らずしも舟を必要としない。大いに傾聴すべき着想として支持したい。

グシク時代には沢だけでなく，さらに別の道も開けていた可能性もあるが，沢伝い経路は先史時代以来一貫して，重要な役割を担っていたものと考えられる。

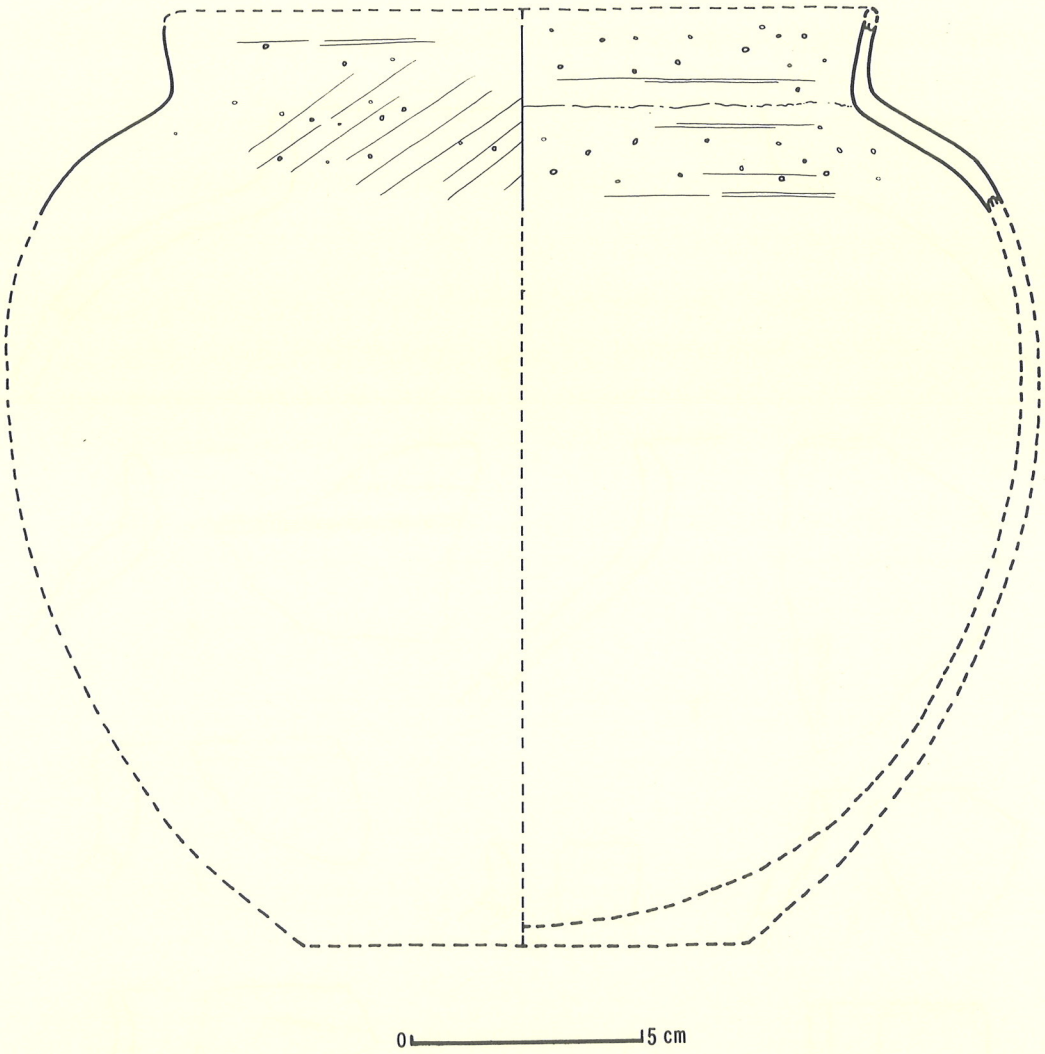
さて，本文で述べたように，竹下遺跡はアラスジケマンガイが際立って卓越している。グシク時代遺跡において，このような例のみられることは周知のとおりである。このことから，二つの作業が進められないかと考えている。ひとつは，この貝の卓越するグシク時代遺跡の層における他の遺物…とくに土器…との共伴関係を検討することによって，何らかの共通性がみられないだろうか。すなわち，編年上の手がかりのひとつにできないだろうかということである。

あとのひとつは，すでに安里進氏も触れているが，海域の何らかの変化（珊瑚礁の海の深さ，海底の状態又は，人間の漁撈活動との量的関係）を反映しているのではなかろうかということである。二つとも現段階では未だ資料不足であり，なお多くの遺跡の調査報告をまたねばならない。

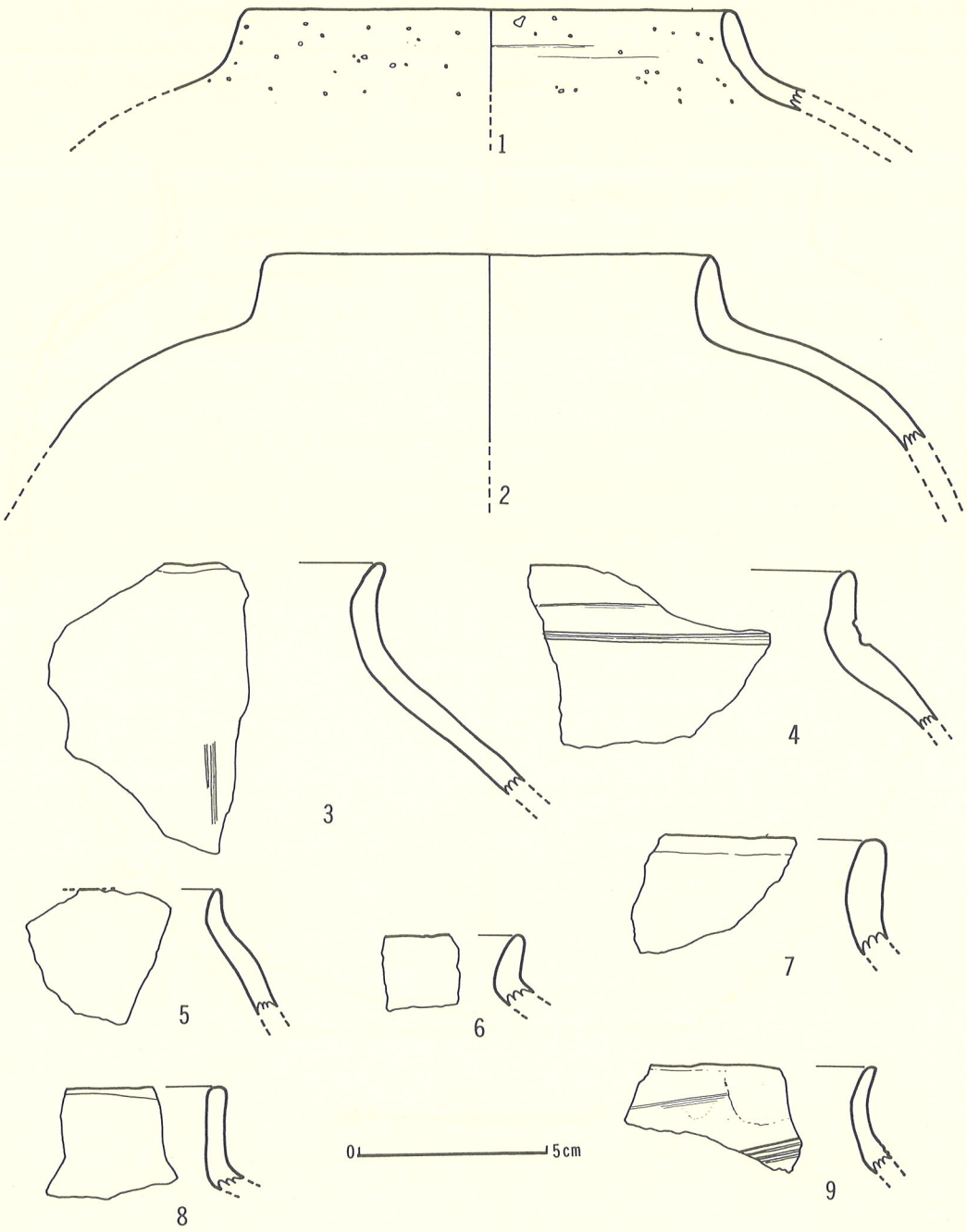
獣骨に刃傷痕のみられるのは，おそらく鉄器によるものと考えられる。鉄器は検出できなかったが，石斧等の出土がないこと，傷痕が鋭利な道具によると考えられることに拠る。鉄器は，この時期にはある程度普及していたものと解される。

竹下遺跡は一応掘り尽くしたとはいえ，なお下の岩塊下および洞穴一帯は未調査である。いずれ，これらの地点についても精査の必要があると考える。

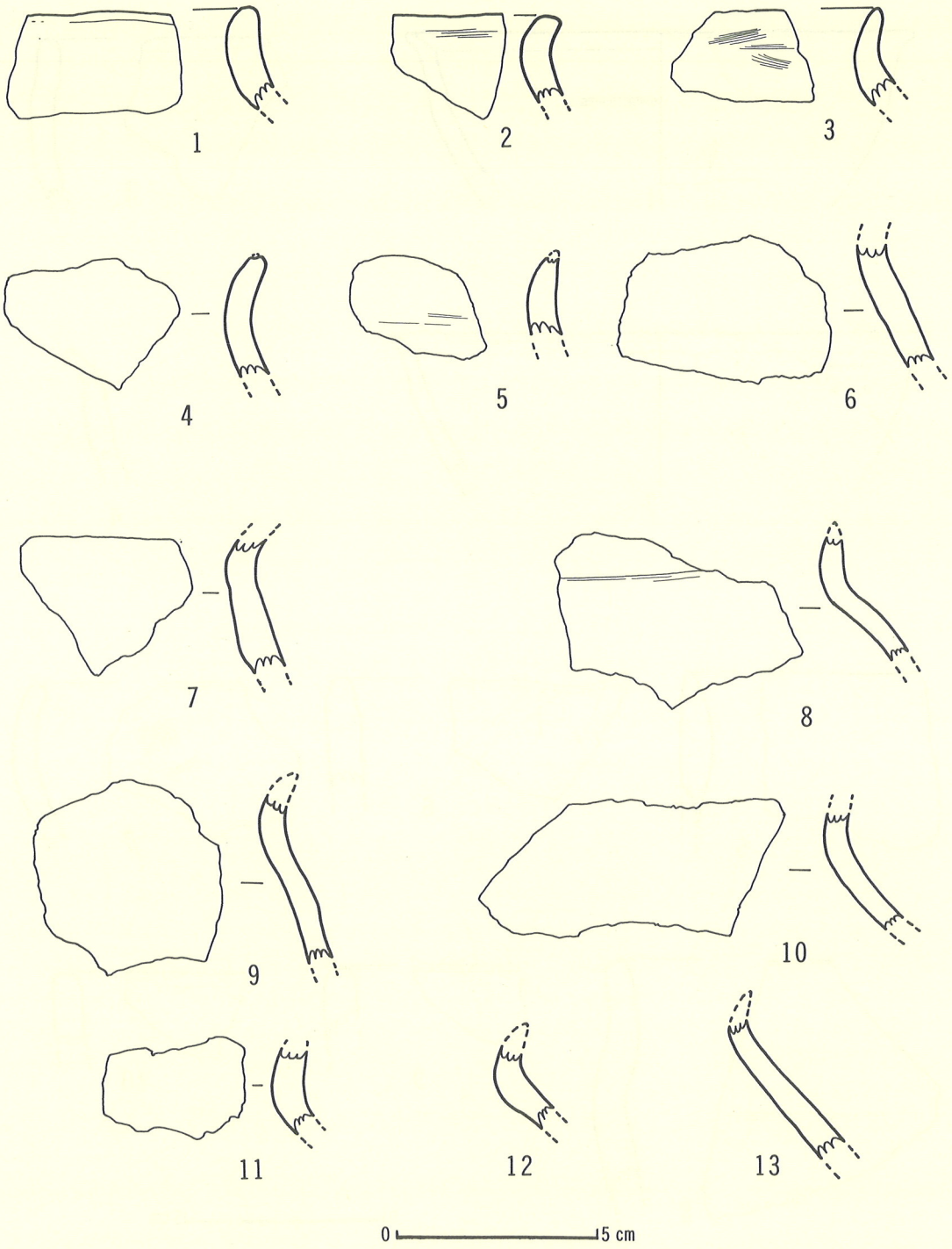
（安　里　嗣　淳）



図Ⅲ－2　土器Ⅰ類



図Ⅲ－3　土器Ⅰ類



図Ⅲ－4　土器Ⅰ類

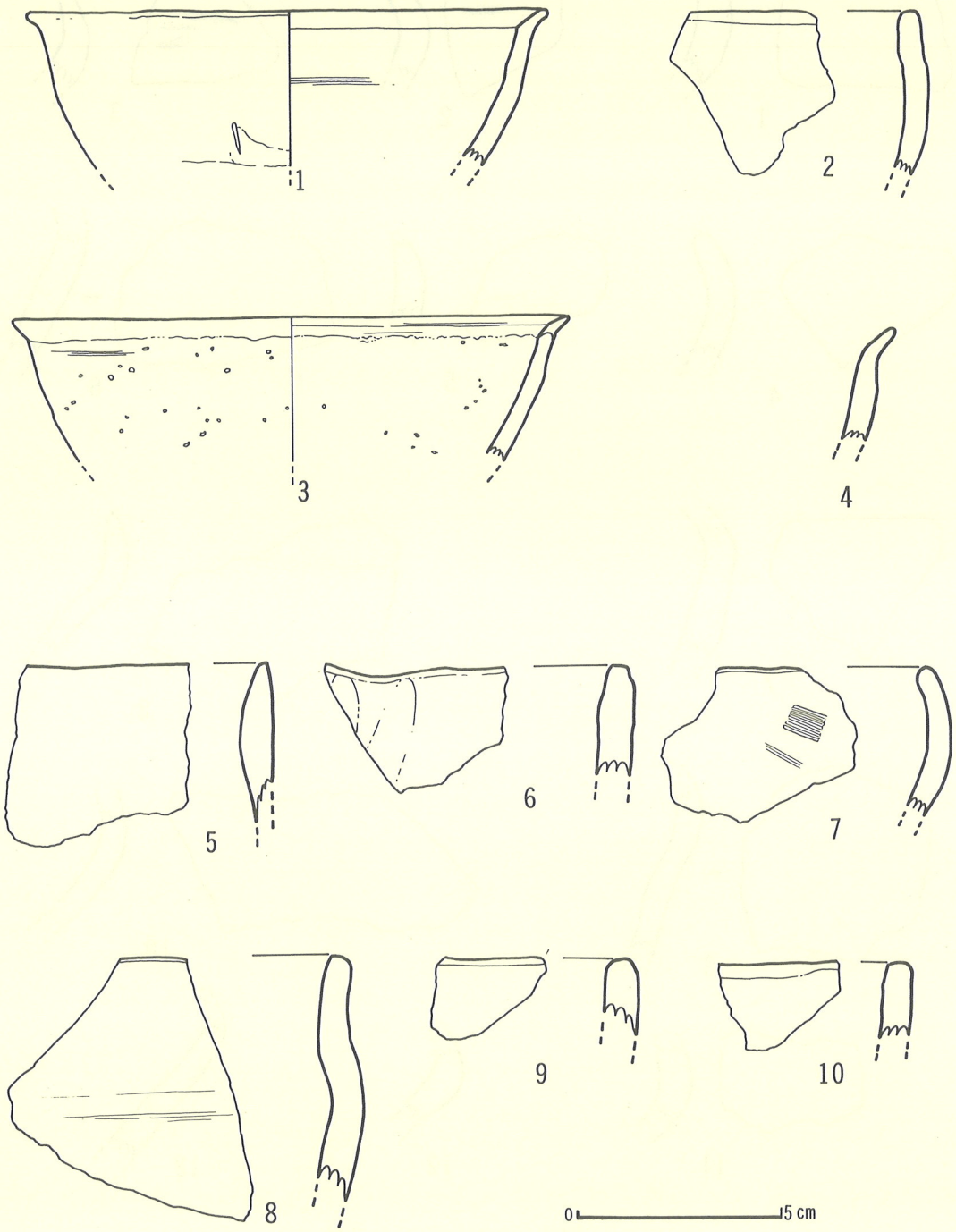
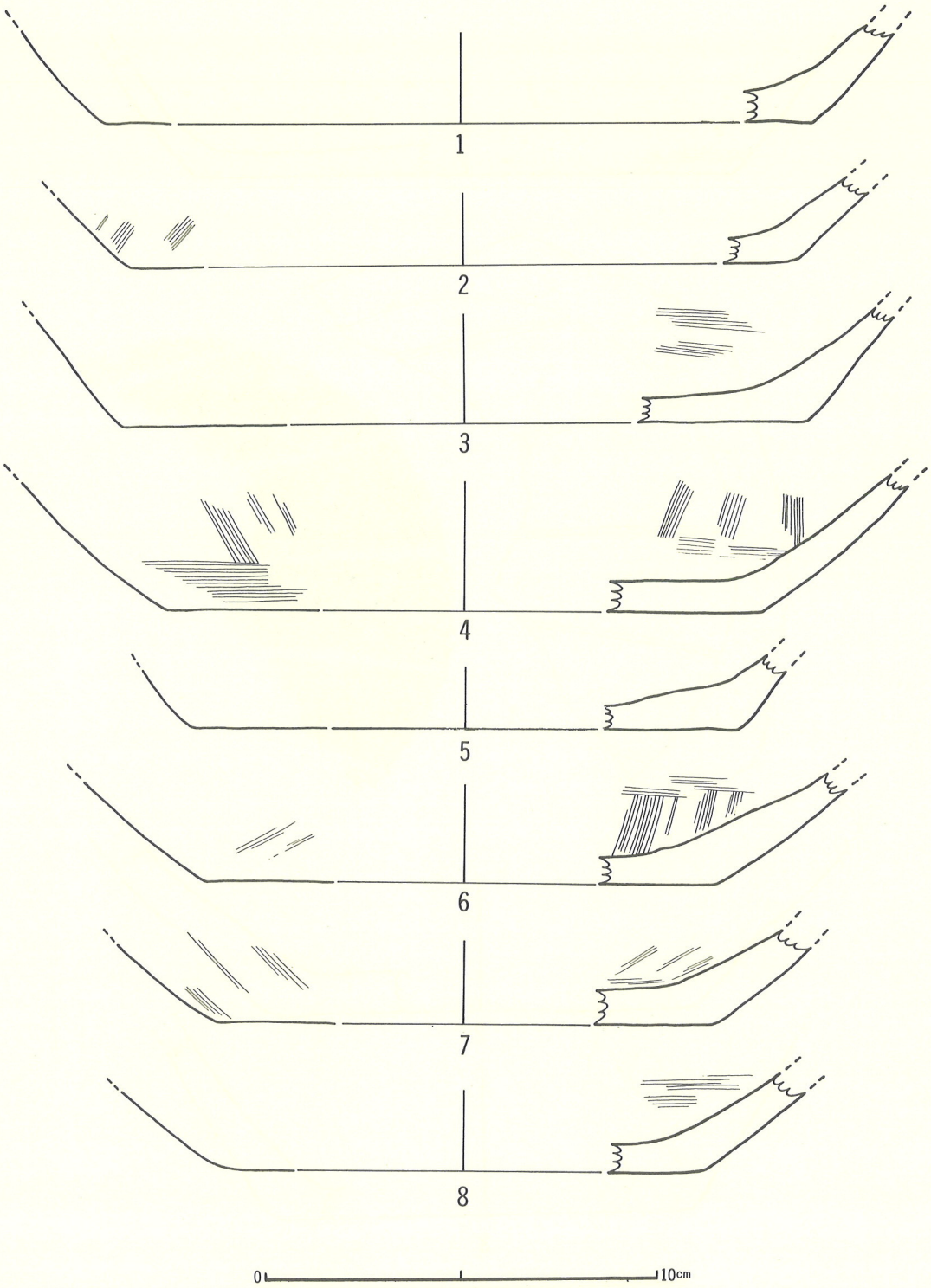


図 Ⅲ－5　土器Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類



図Ⅲ－6　土器底部

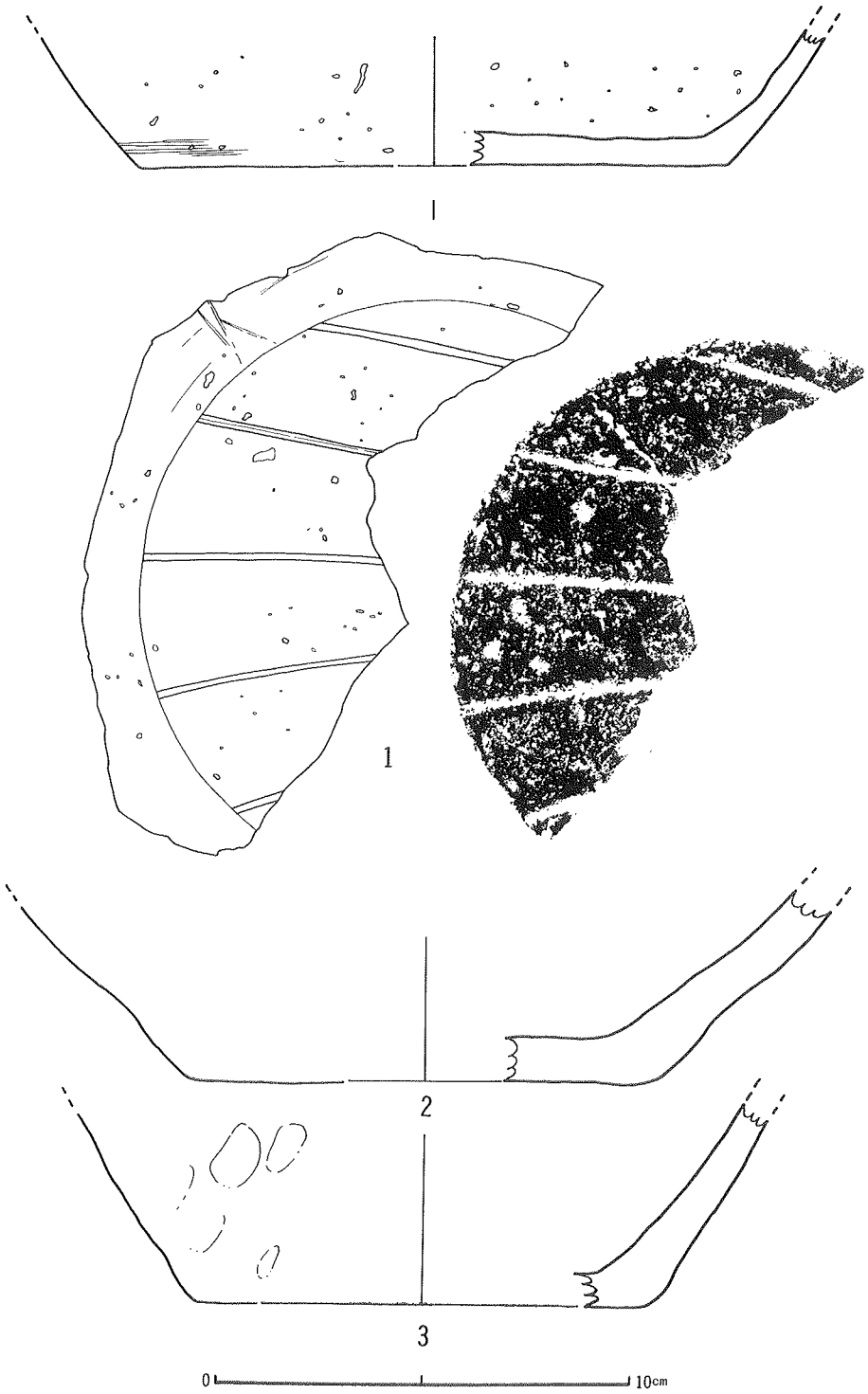
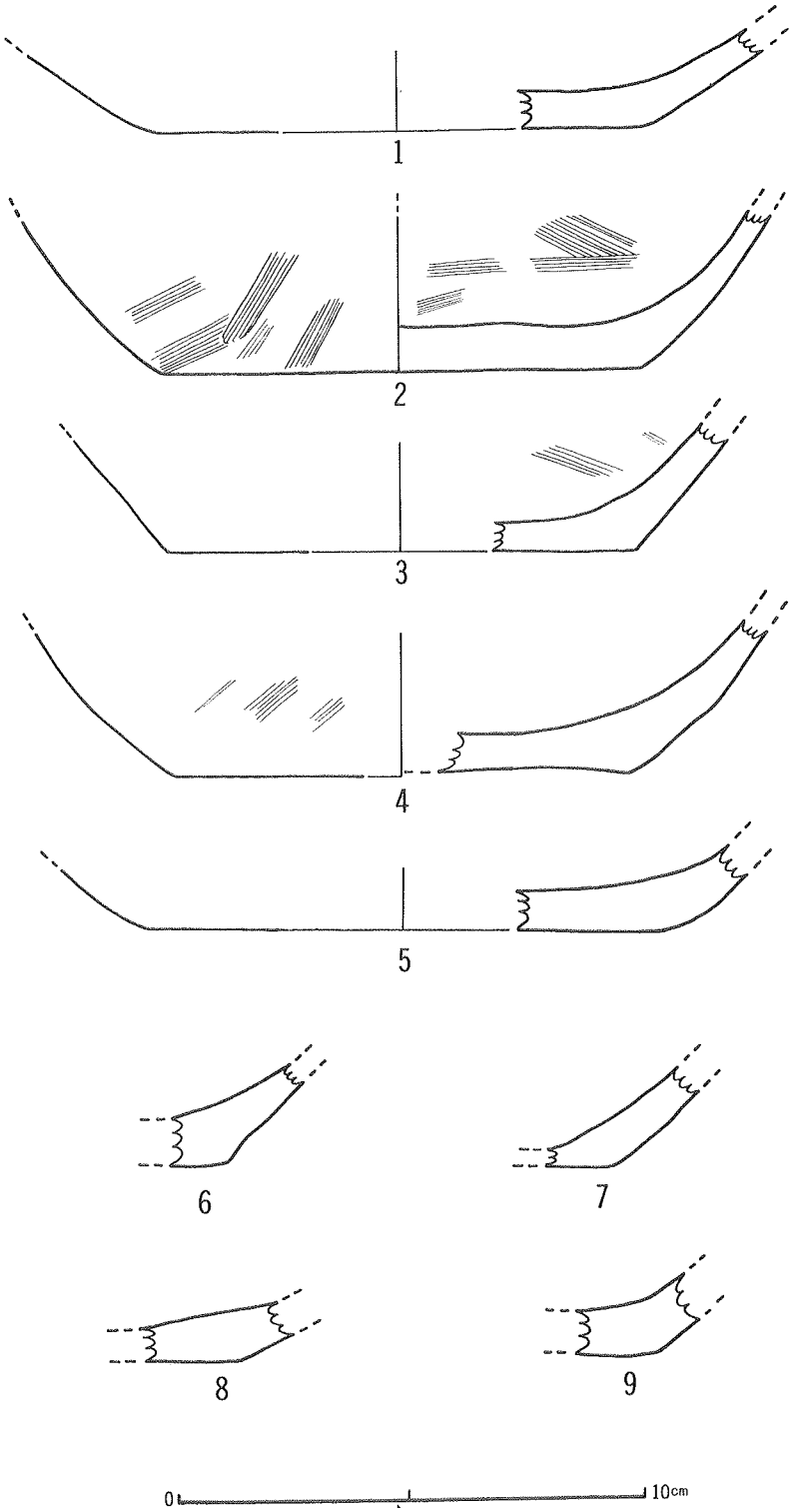


図 Ⅲ－7　土器底部（1＝植物葉痕をもつ土器底部）



図Ⅲ－8　土器底部

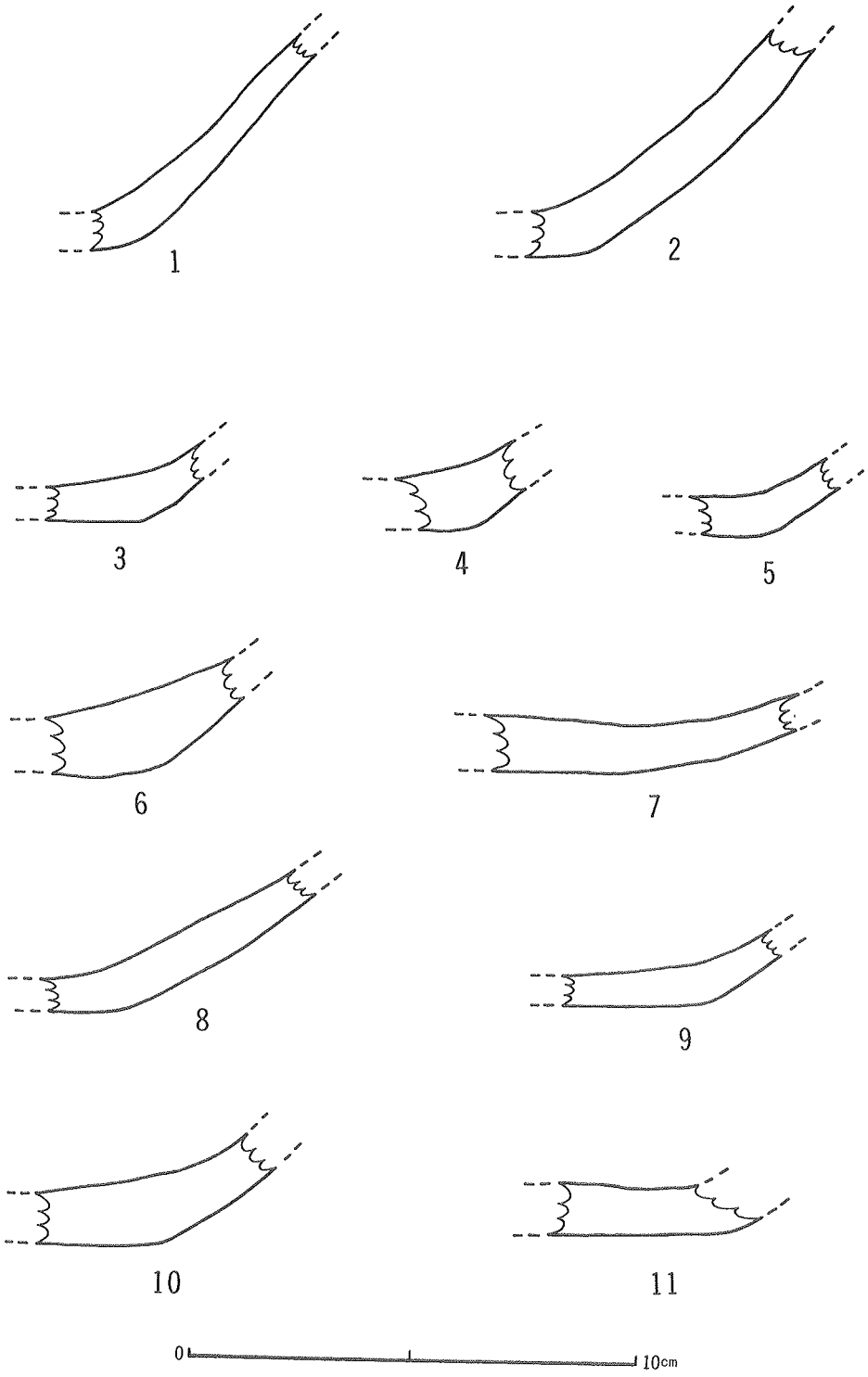


図 Ⅲ－9　土器底部

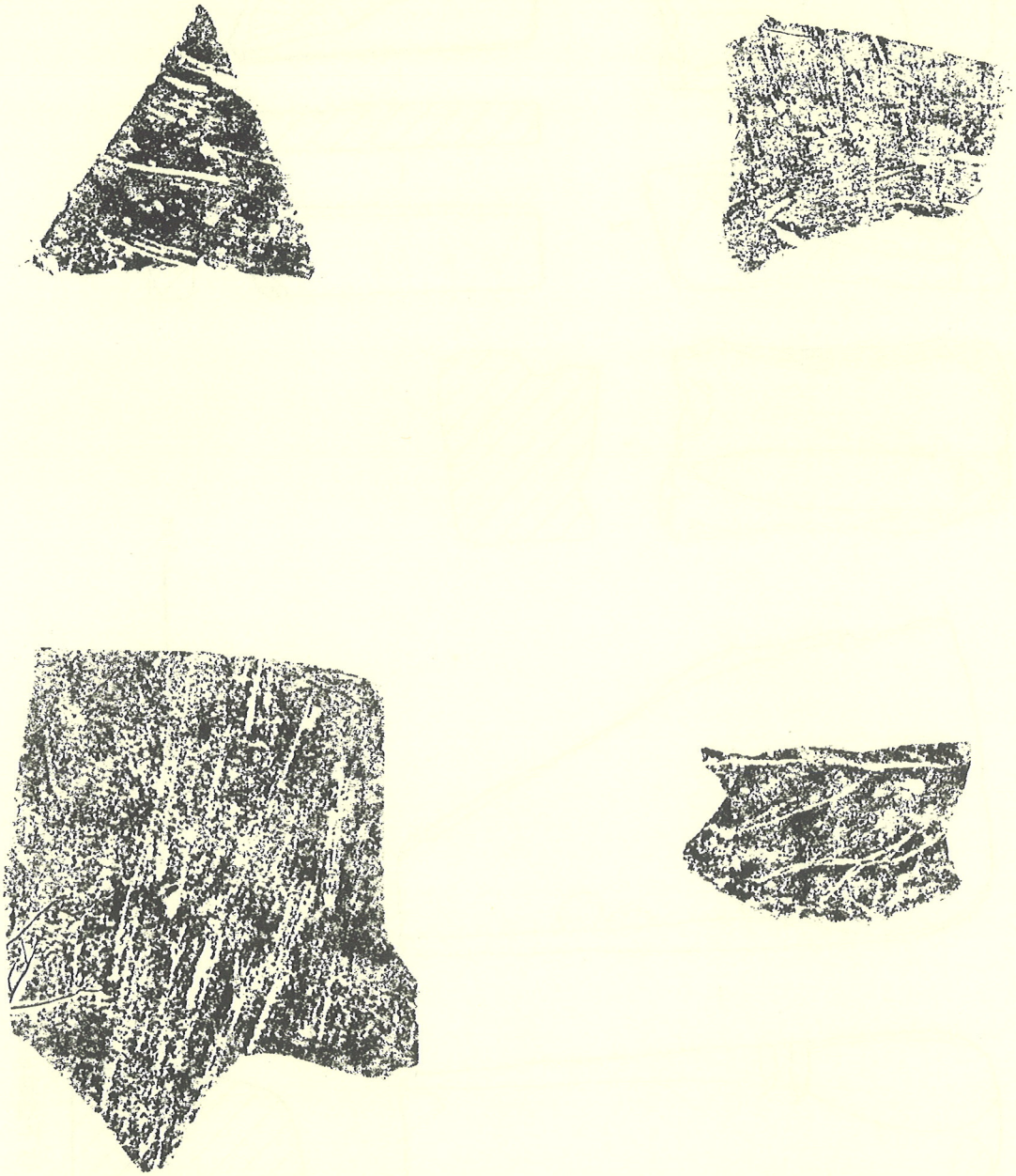
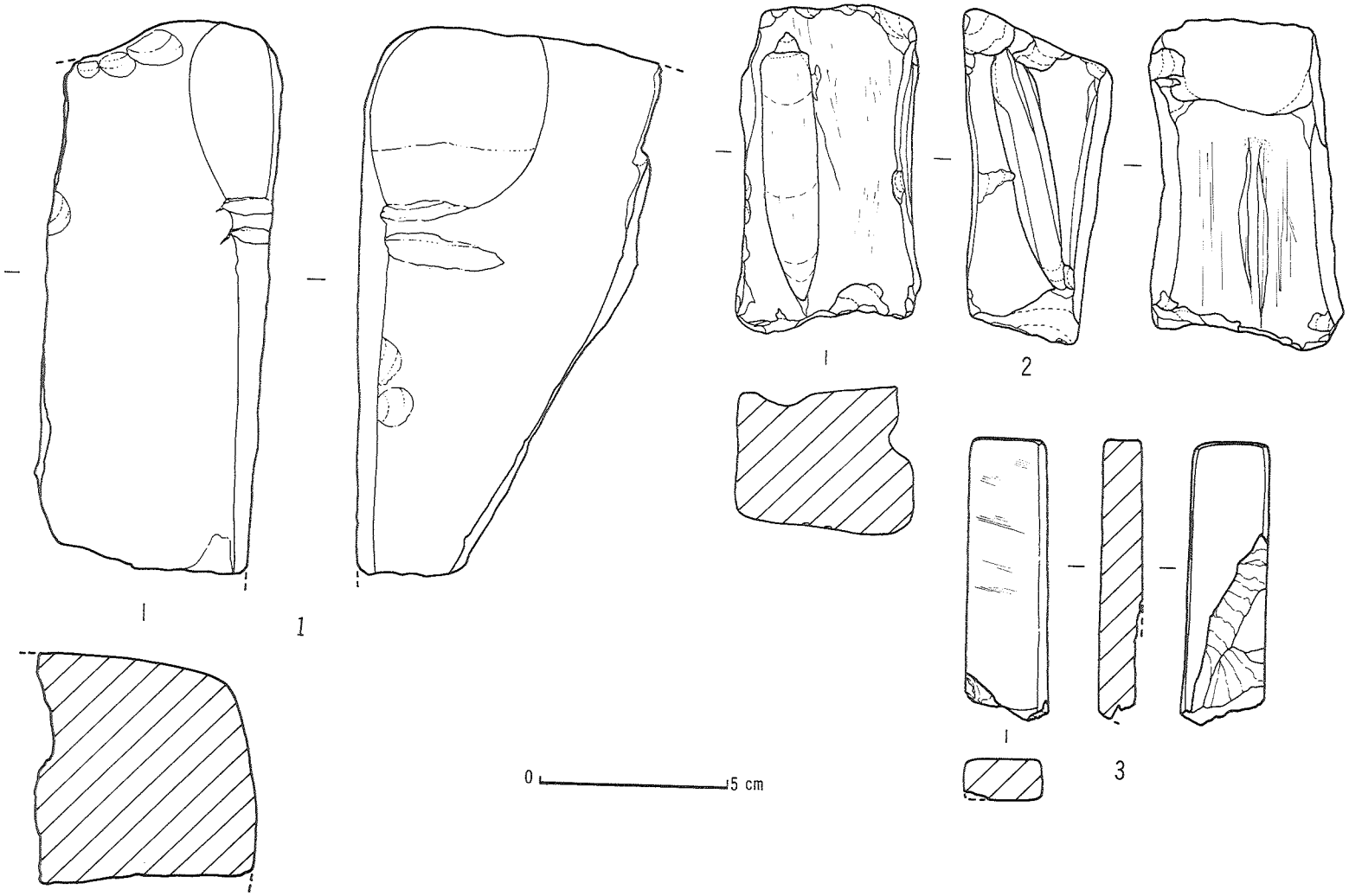


図 Ⅲ－10　土器調整痕



図Ⅲ－11　竹下遺跡出土の石器

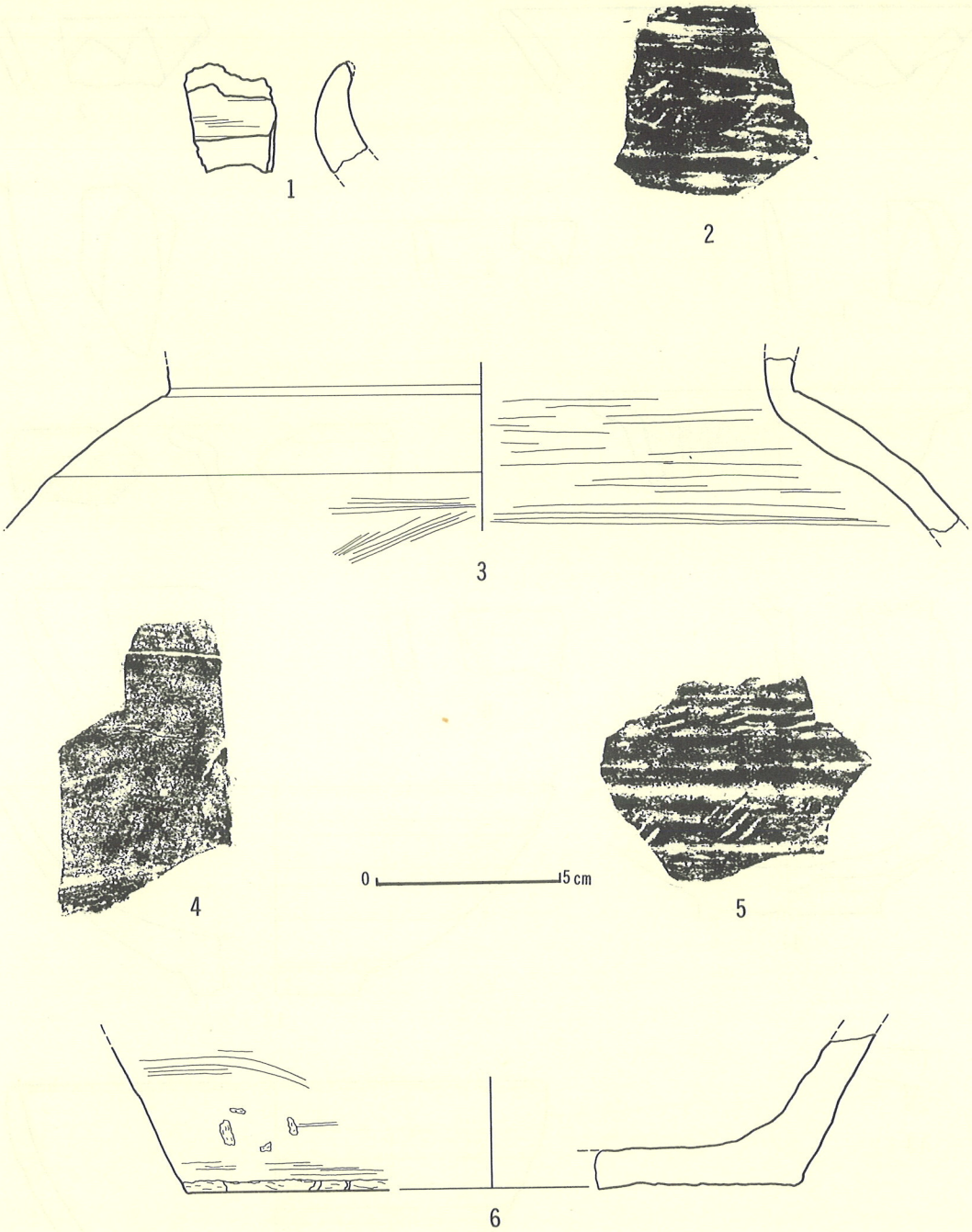


図 Ⅲ－12　須恵器（1，2）外国製陶器

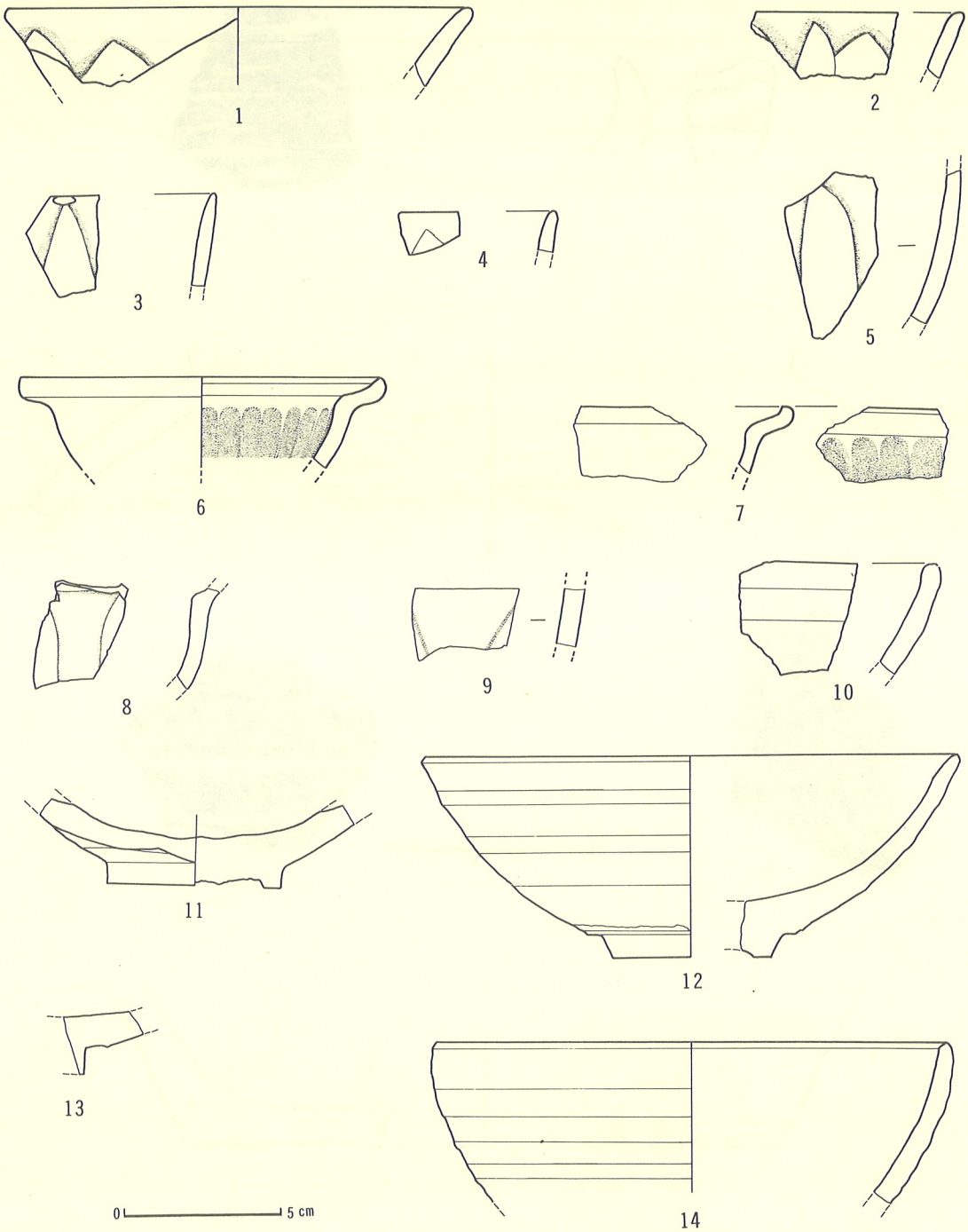
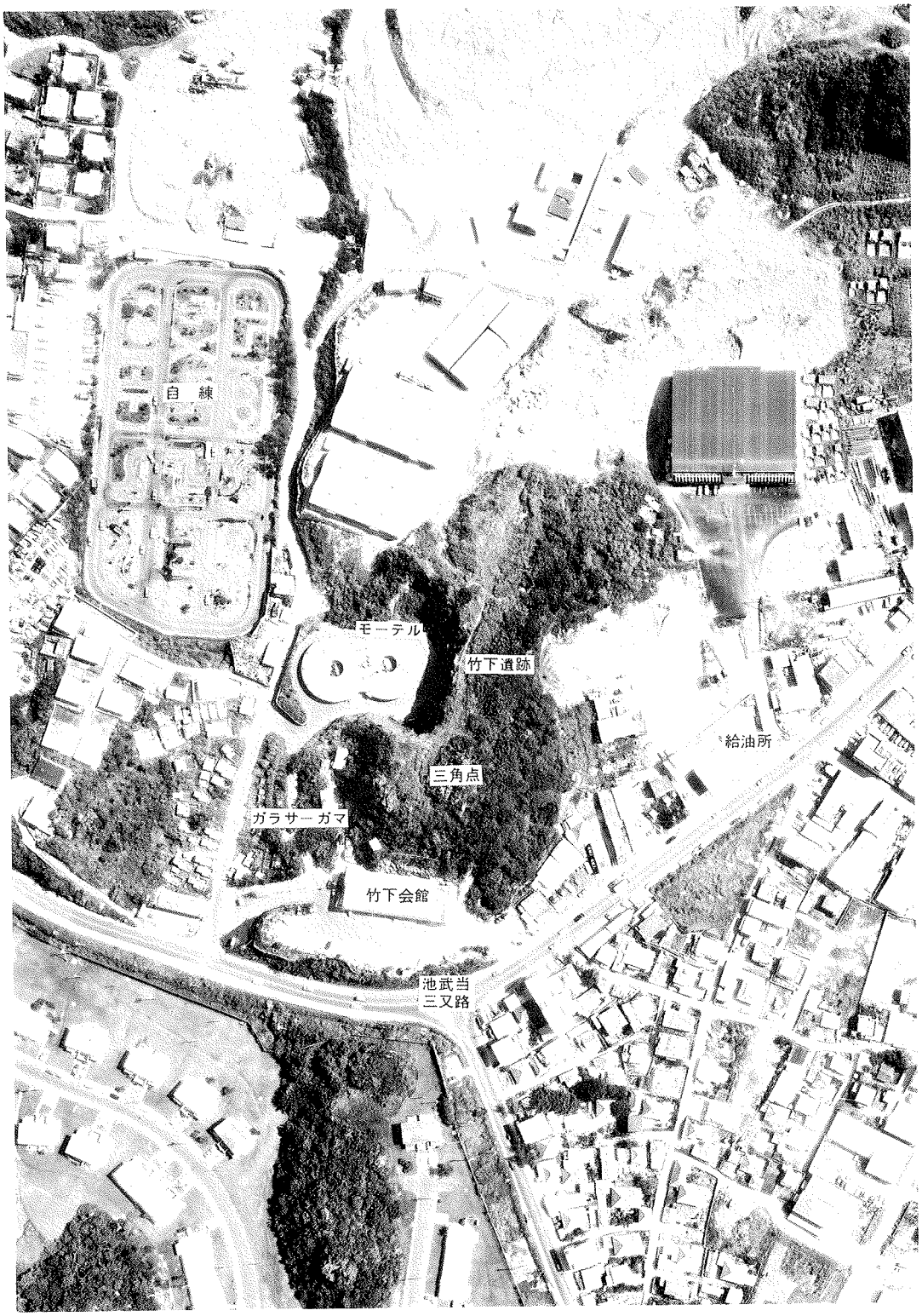


図 Ⅲ－13　中国製青磁（Ⅰ類－1～5，Ⅱ類－6・7，Ⅲ類－8・9）
中国製白磁（Ⅰ類－10・11，Ⅱ類－12・13，Ⅲ類－14）

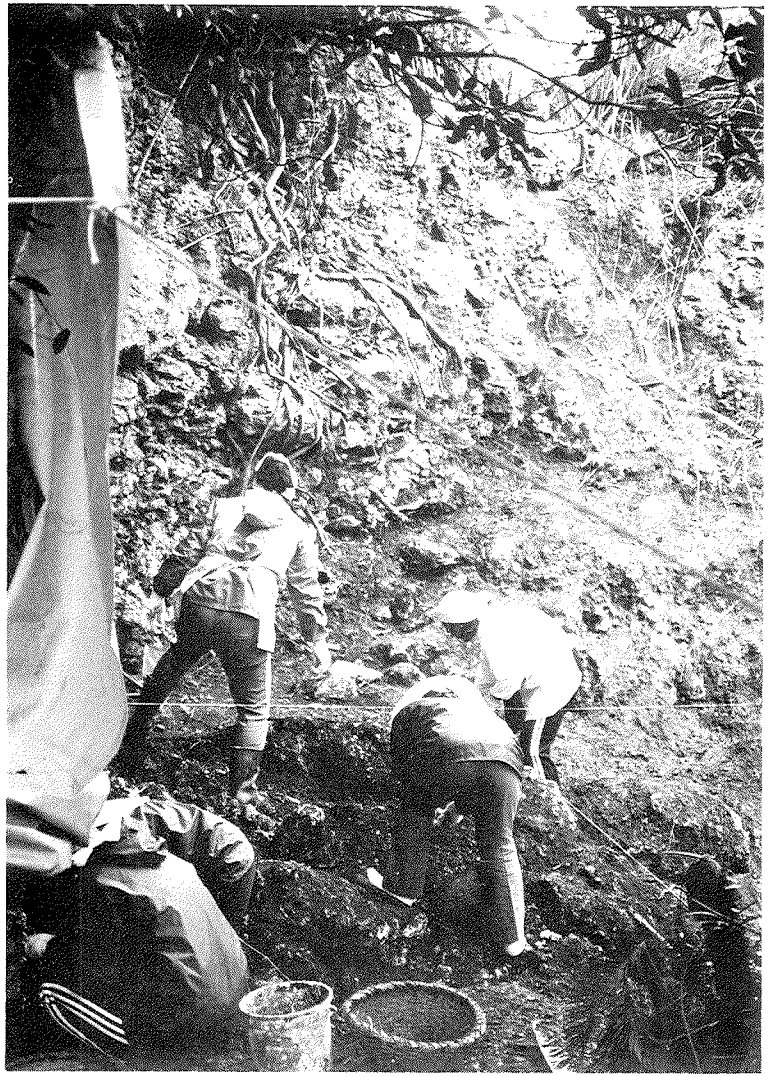


図版 Ⅲ－1　竹下遺跡空中写真

図版Ⅲ－2　竹下遺跡の近景（矢印）東側給油所裏より望む

図版Ⅲ－3　竹下遺跡発掘後の状況

A



図版Ⅲ－4　A竹下遺跡発掘風景（崖下南より）

B

B　竹下遺跡発掘風景（崖上北より）

A

B

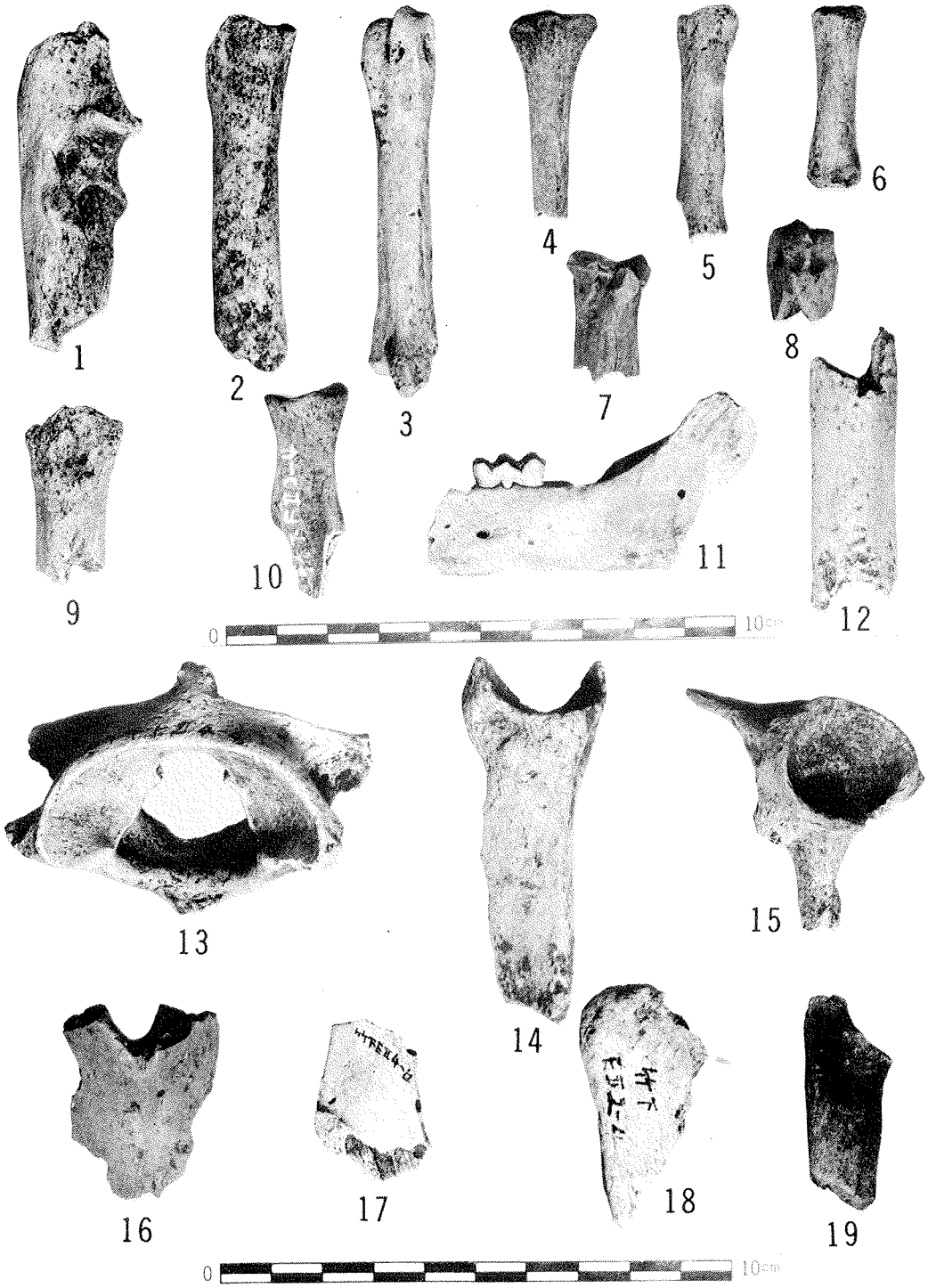
図版Ⅲ－5　竹下遺跡発掘風景　A崖上よりみる　　B崖下よりみる

A

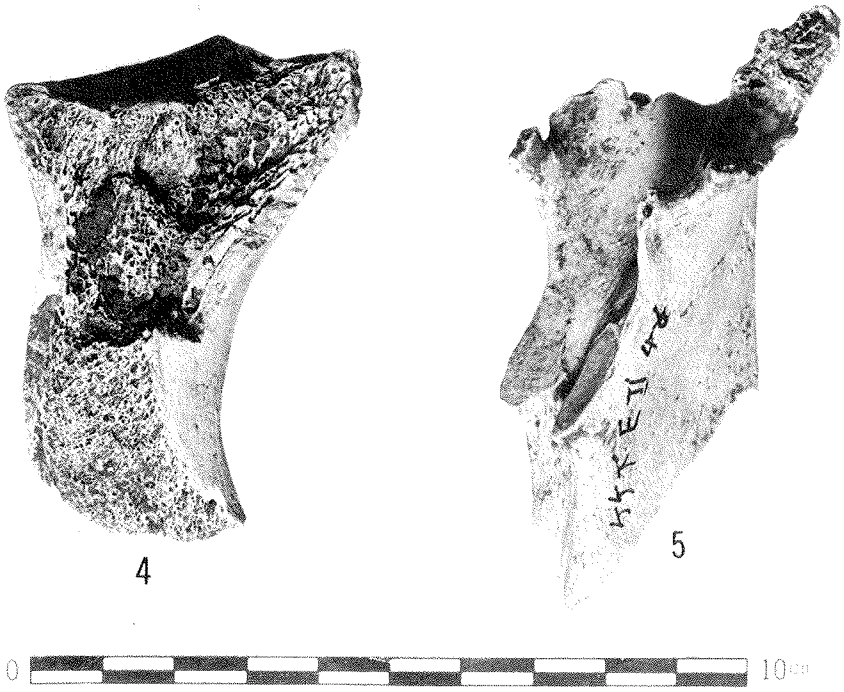
B

図版Ⅲ－6　A　竹下遺跡発掘風景（東より）

B　竹下遺跡包含層の断面

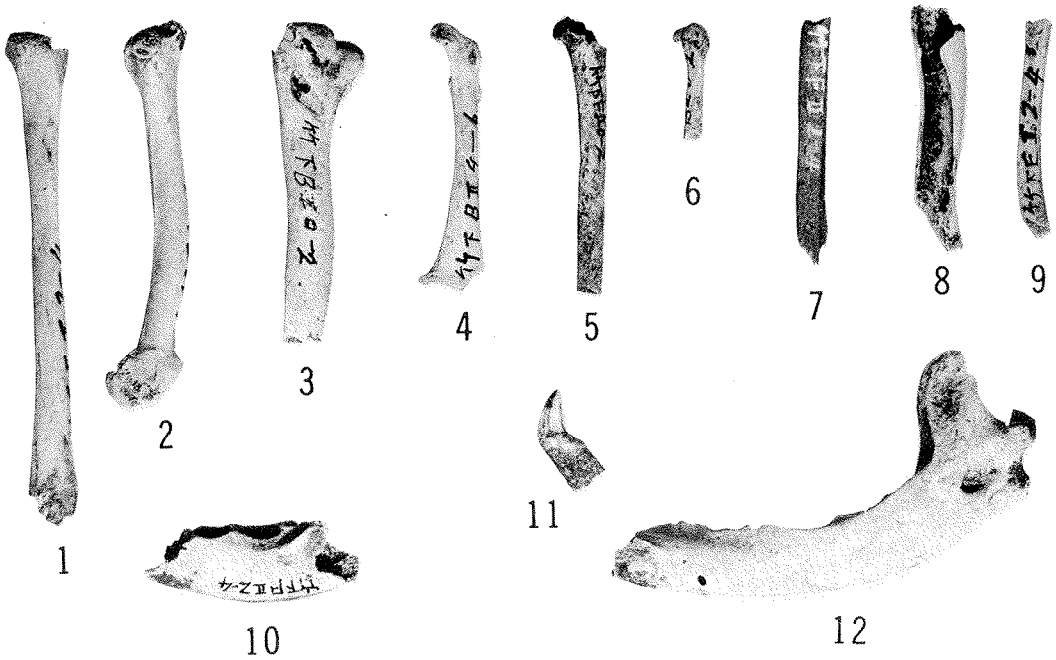


図版Ⅲ－7　イノシシの骨

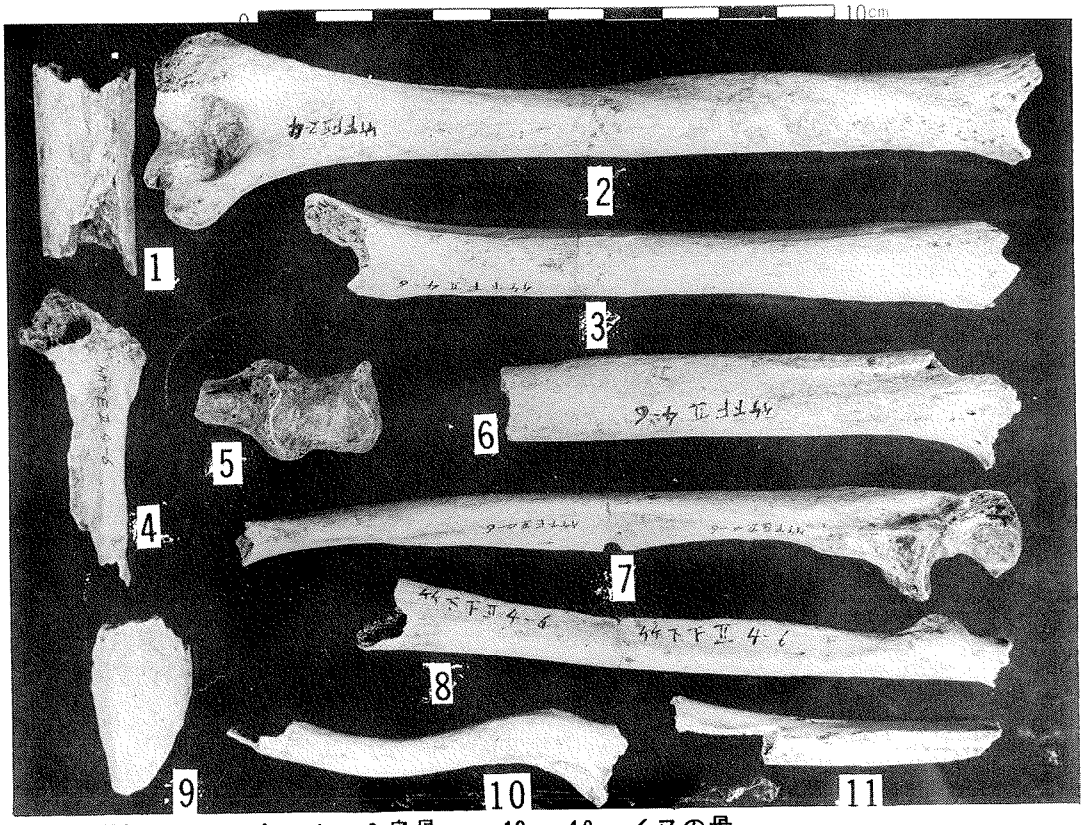


図版Ⅲ－8　ウシの骨

A



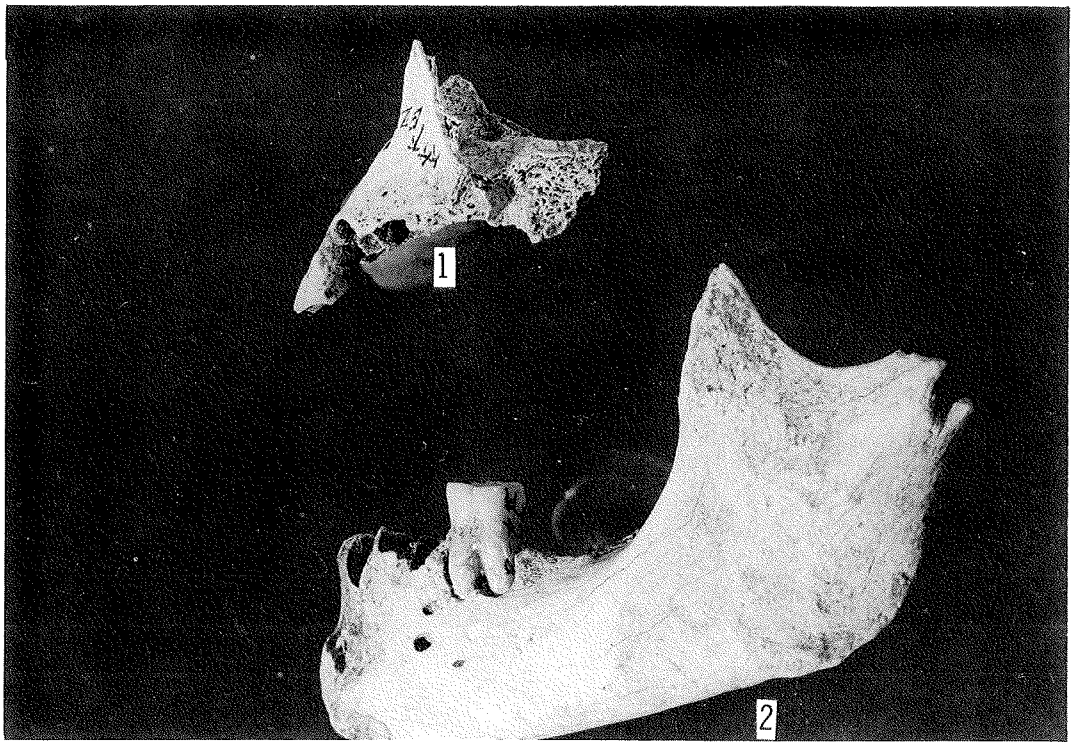
B



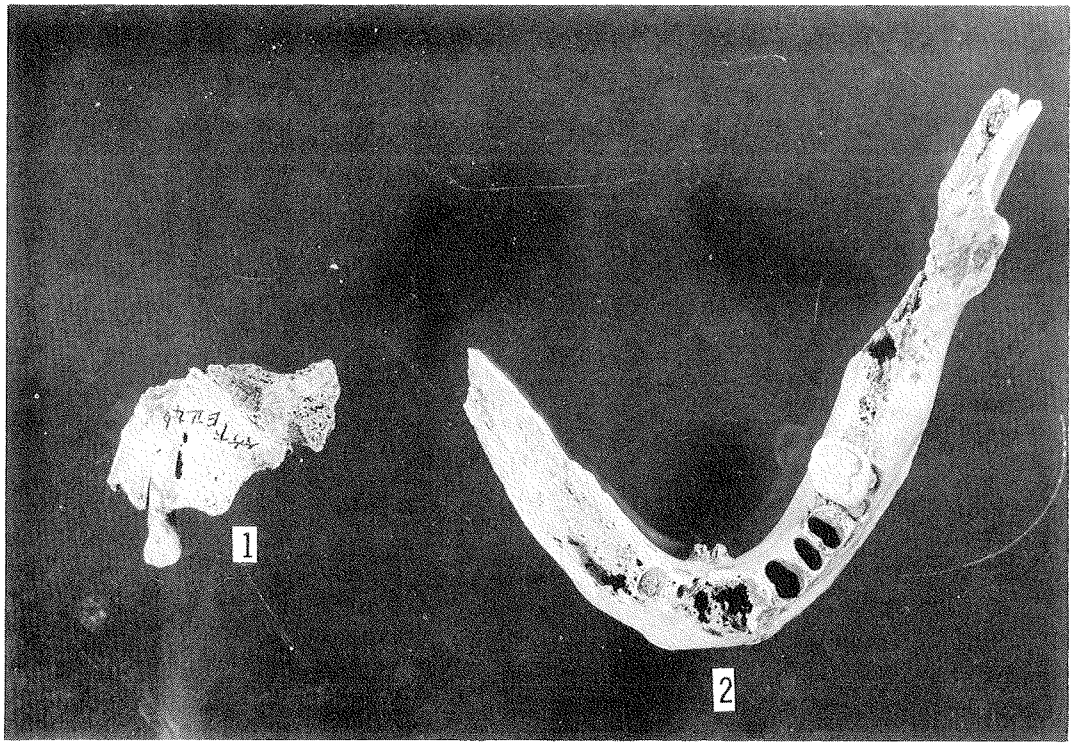
図版Ⅲ－9　A　1～9 鳥骨　　10～12　イヌの骨

B　ヒトの骨

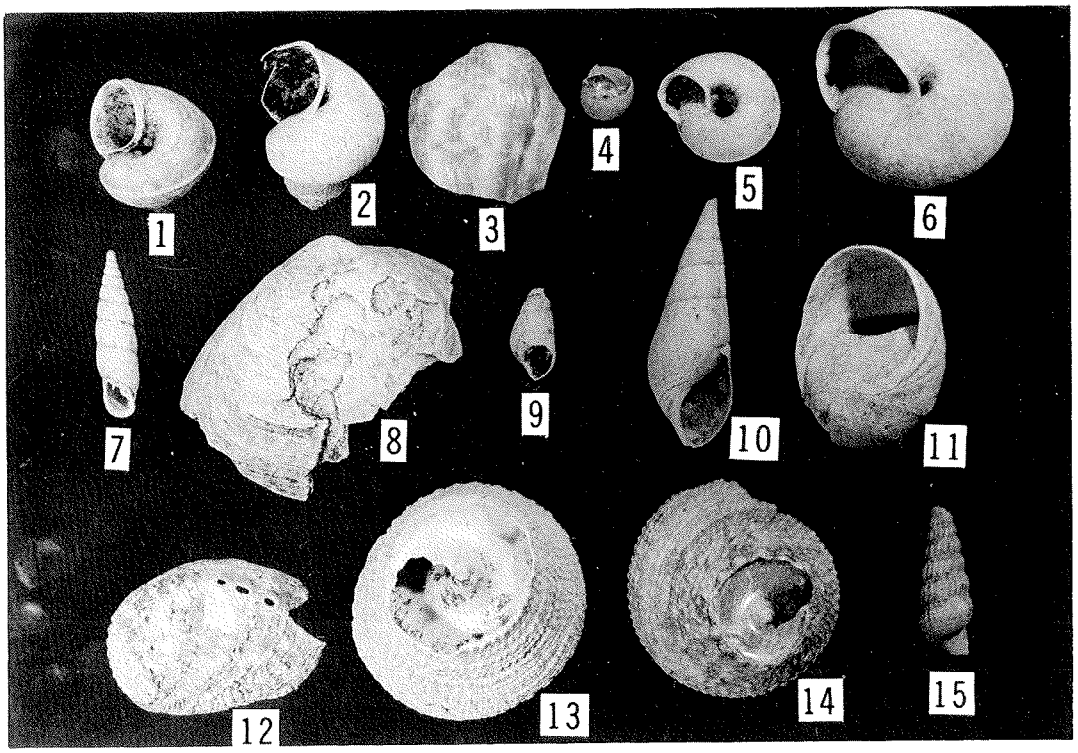
A

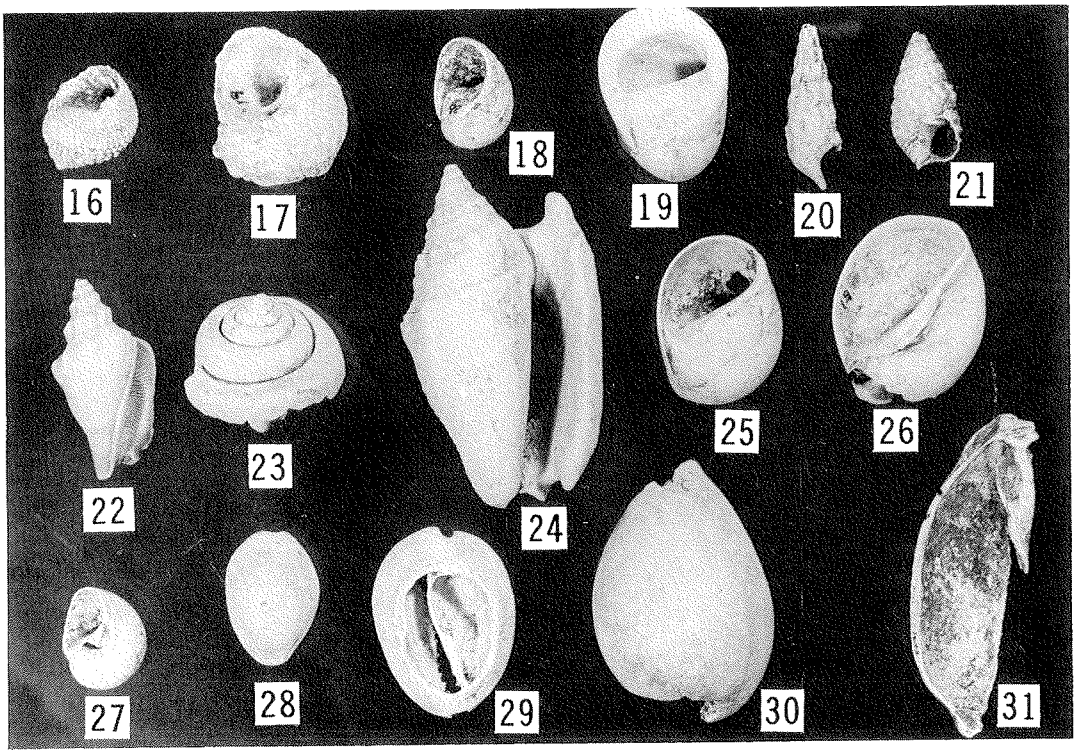


B

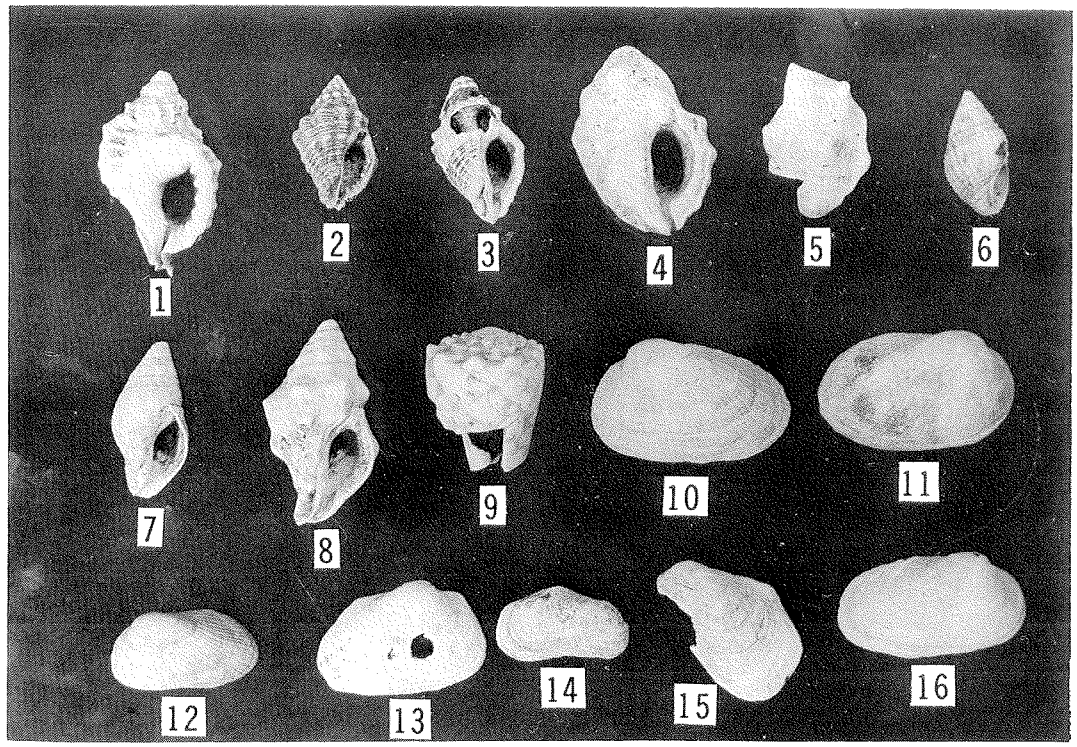


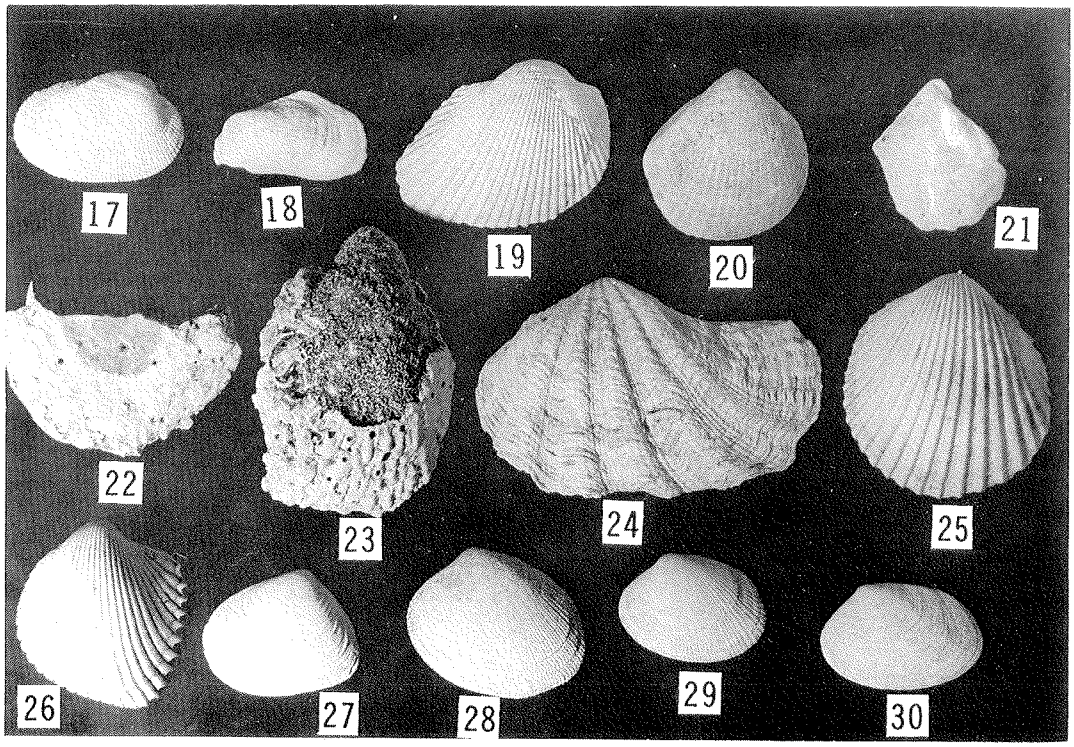
図版Ⅲ－10　ヒトの顎骨，A　左側面観　　B　上面観



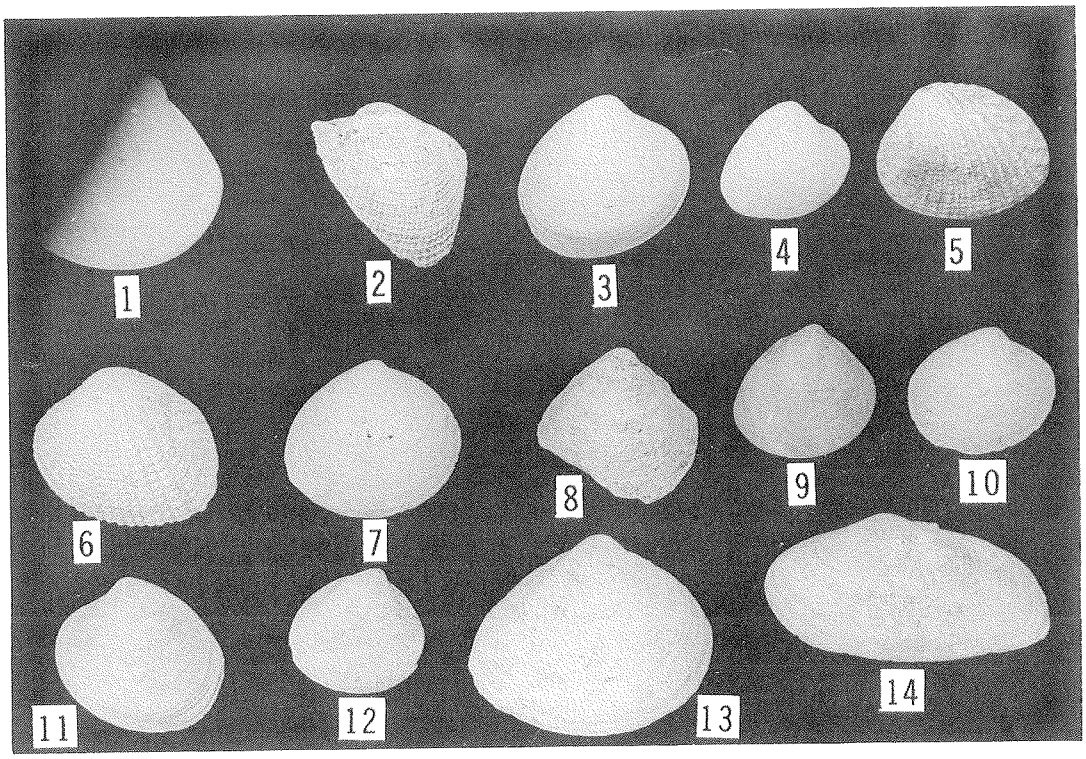


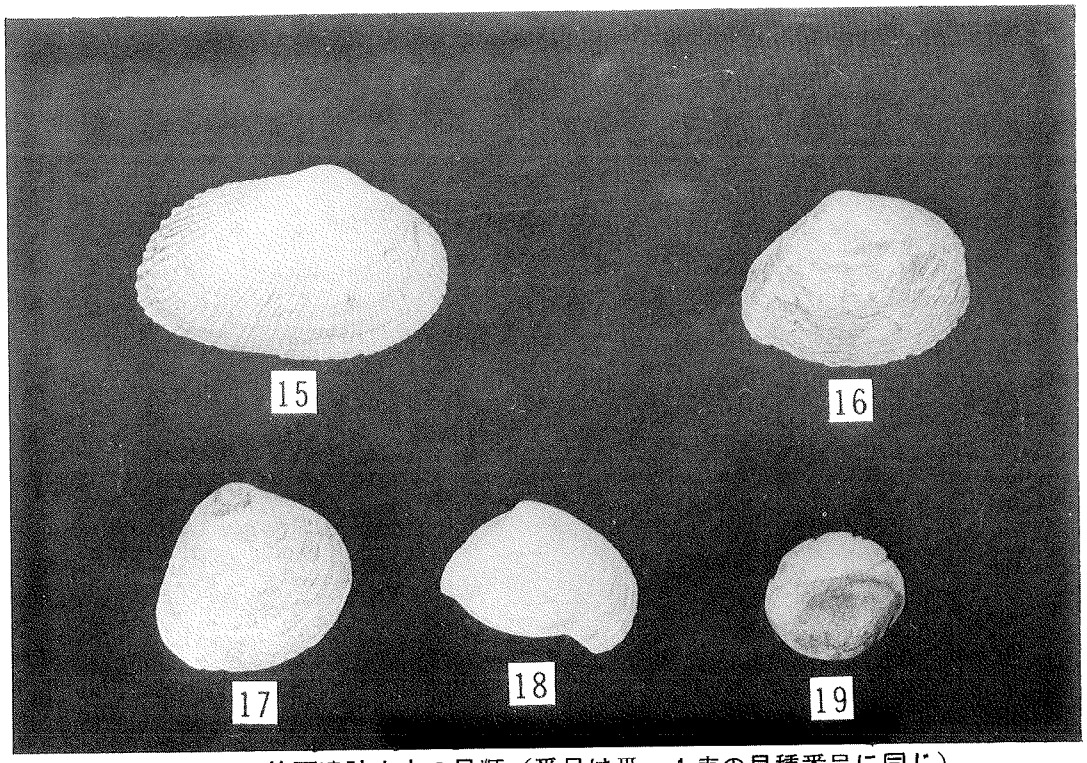
図版Ⅲ－11　竹下遺跡出土の貝類（番号はⅢ－1表の貝種番号に同じ）





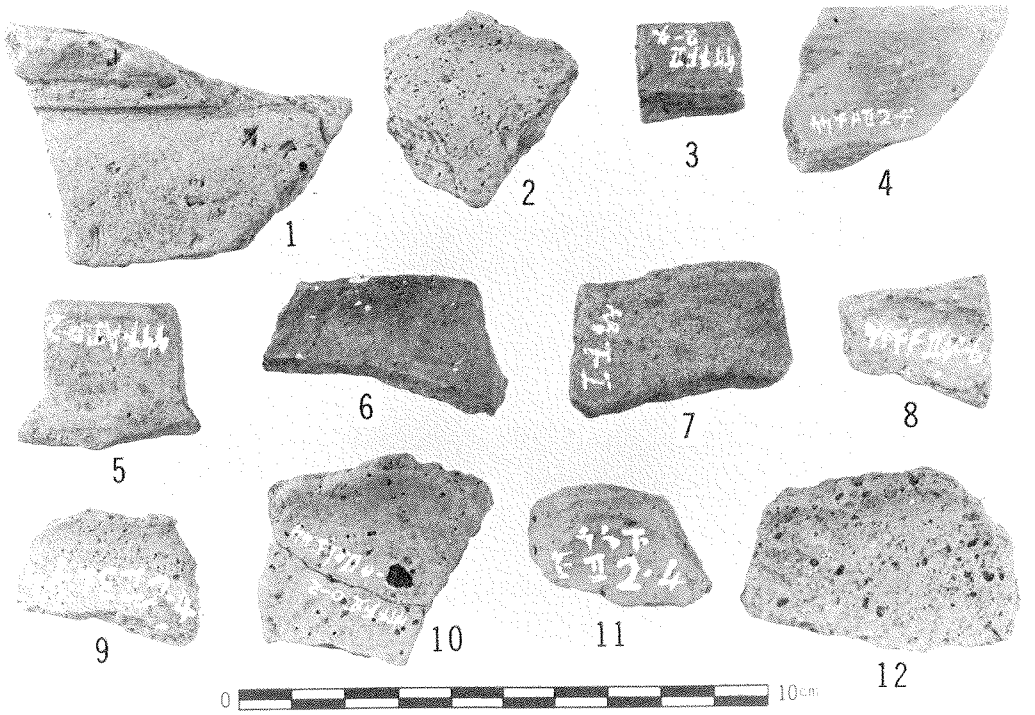
図版Ⅲ－12　竹下遺跡出土の貝類（番号はⅢ－1表の貝種番号に同じ）

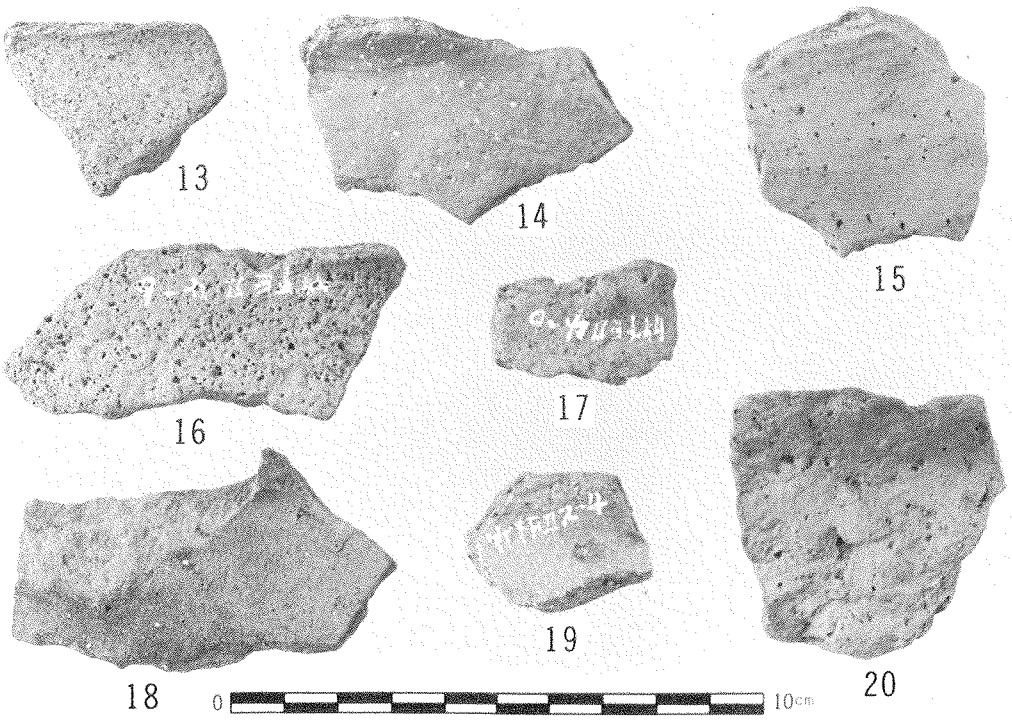




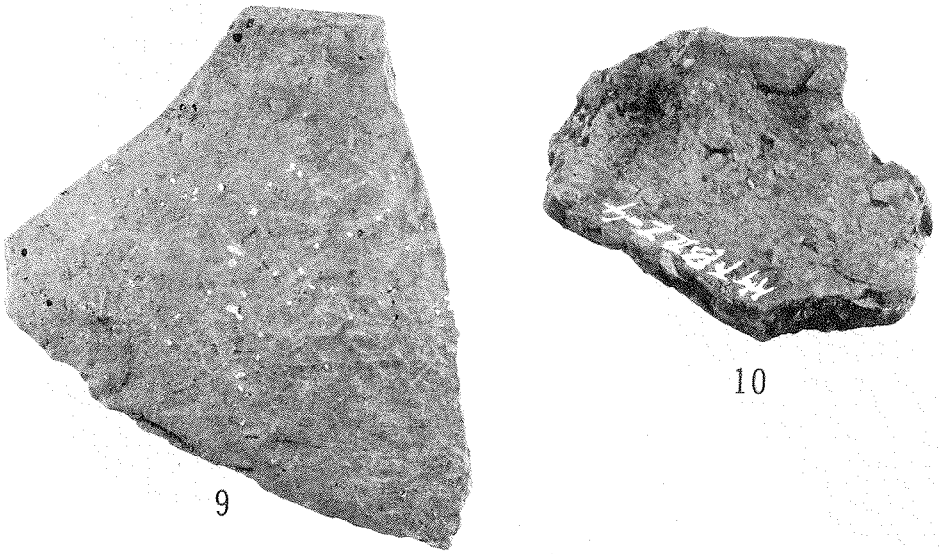
図版Ⅲ－13　竹下遺跡出土の貝類（番号はⅢ－1表の貝種番号に同じ）

図版Ⅲ－14　土器Ⅰ類



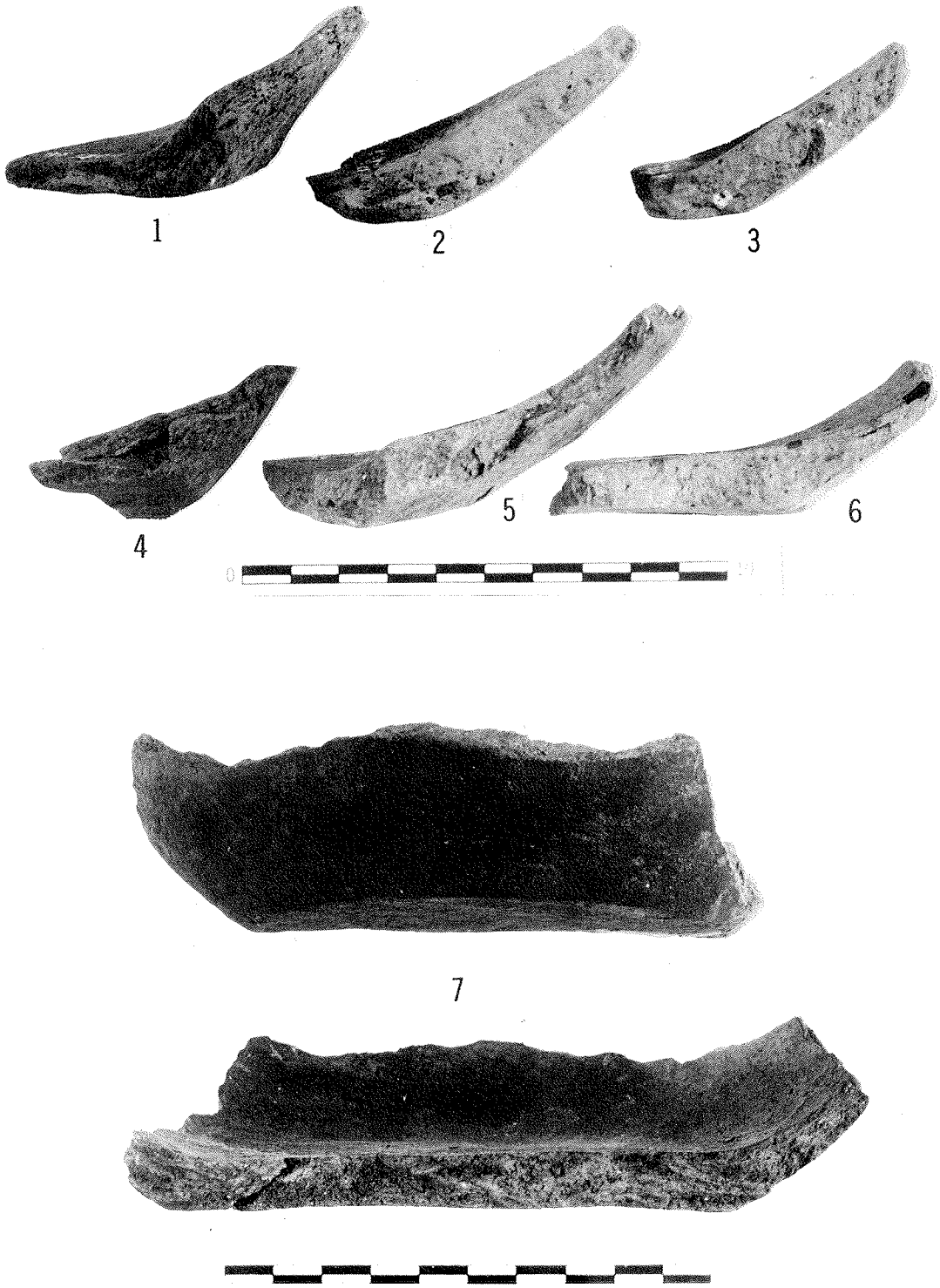


図版Ⅲ－15　土器Ⅰ類



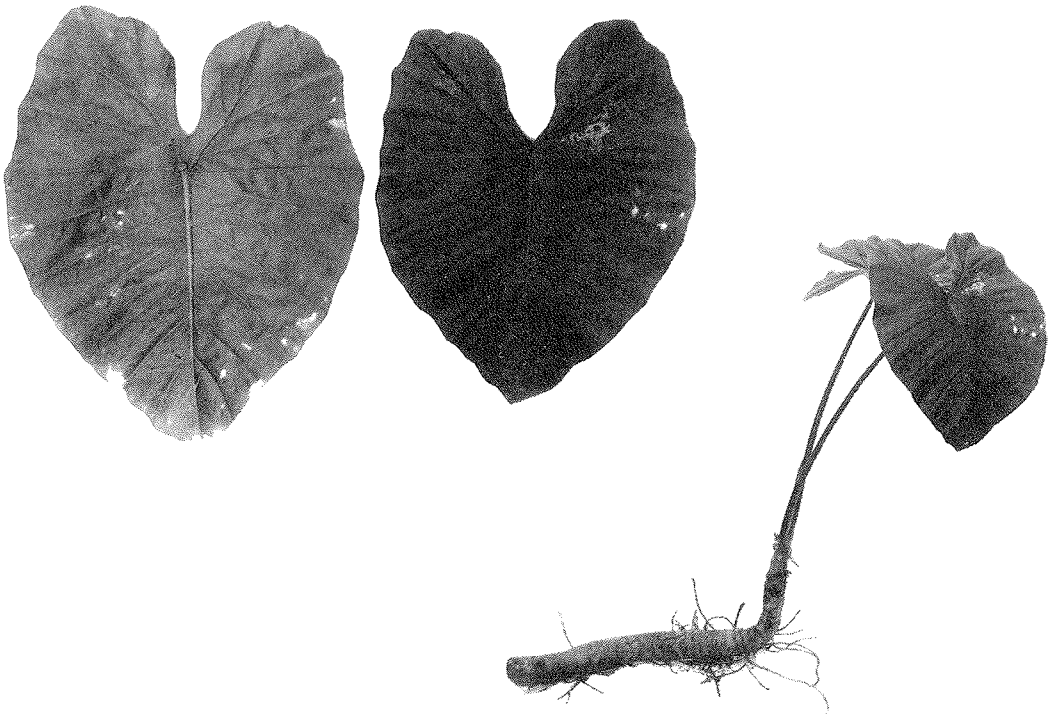
0 10cm

図版Ⅲ－16　土器Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類

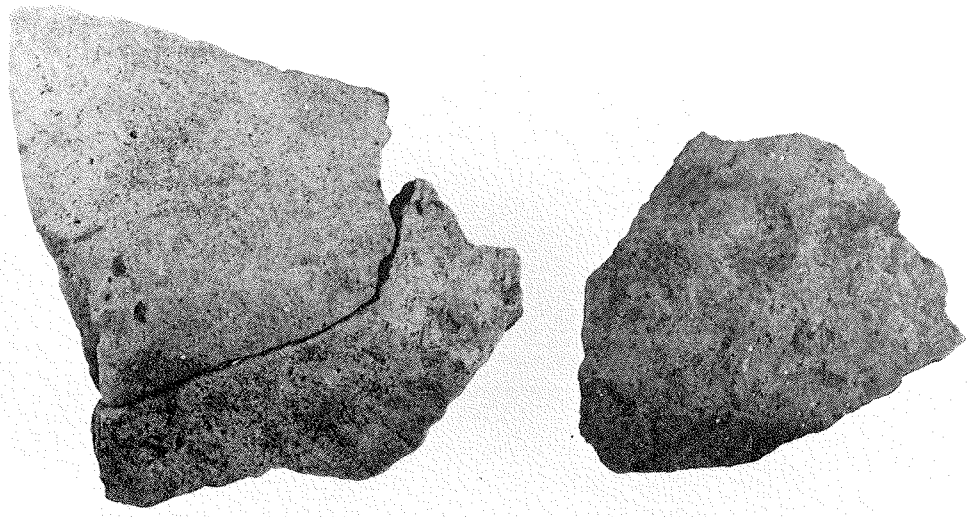


図版Ⅲ－17　土器底部（底部縁が明瞭なもの）

A



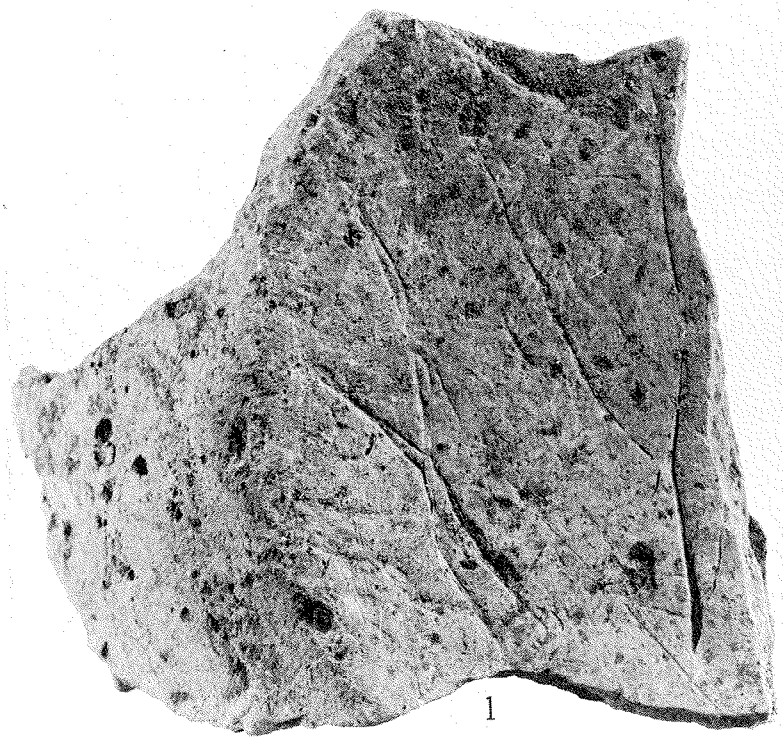
B

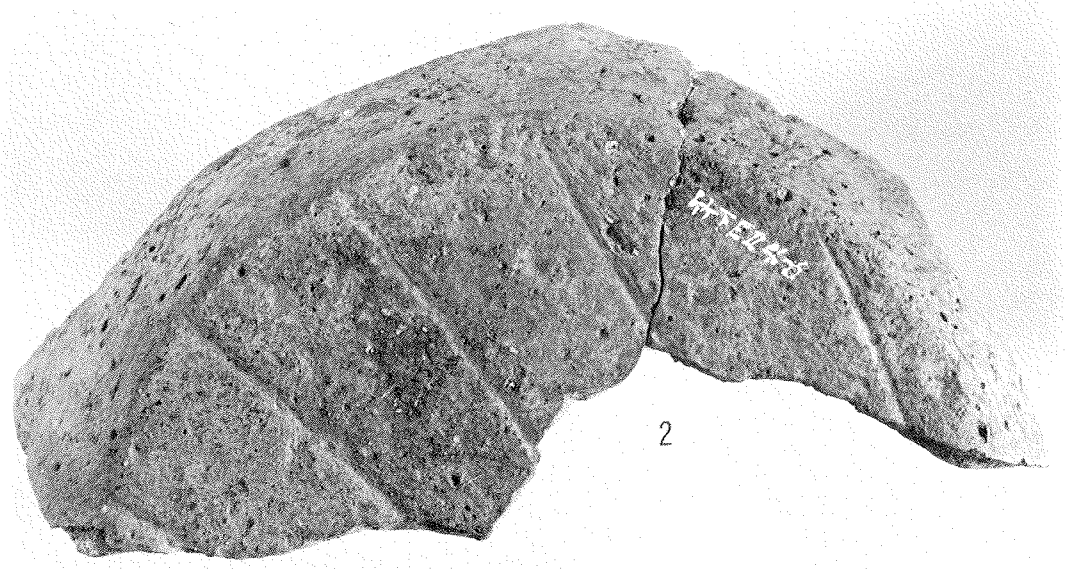


0 10cm

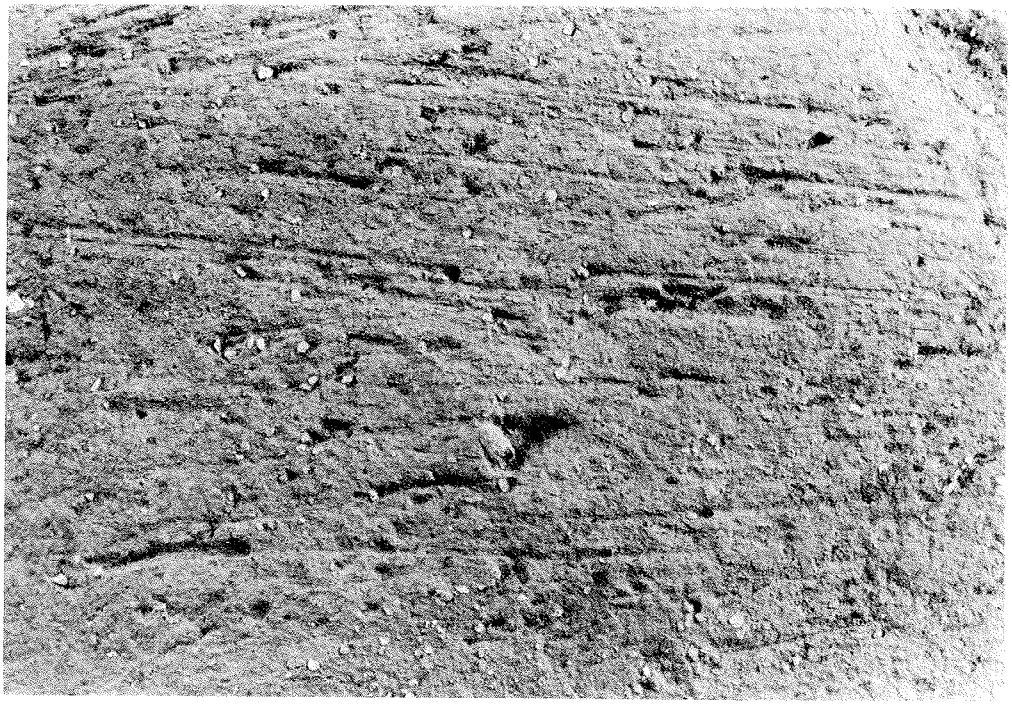
図版Ⅲ－18　A　現生のクワズイモ

B　土器底部（底部縁がなだらかなもの）



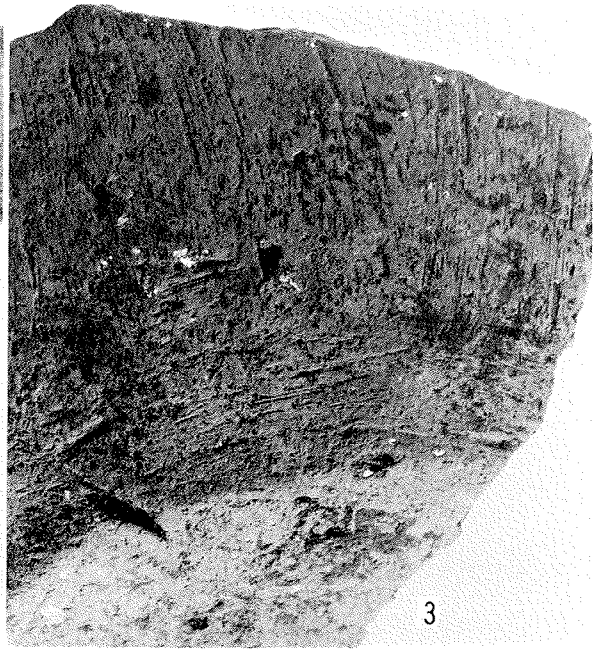


図版Ⅲ－19　植物圧痕のある土器底部（2はクワズイモの葉脈痕？）



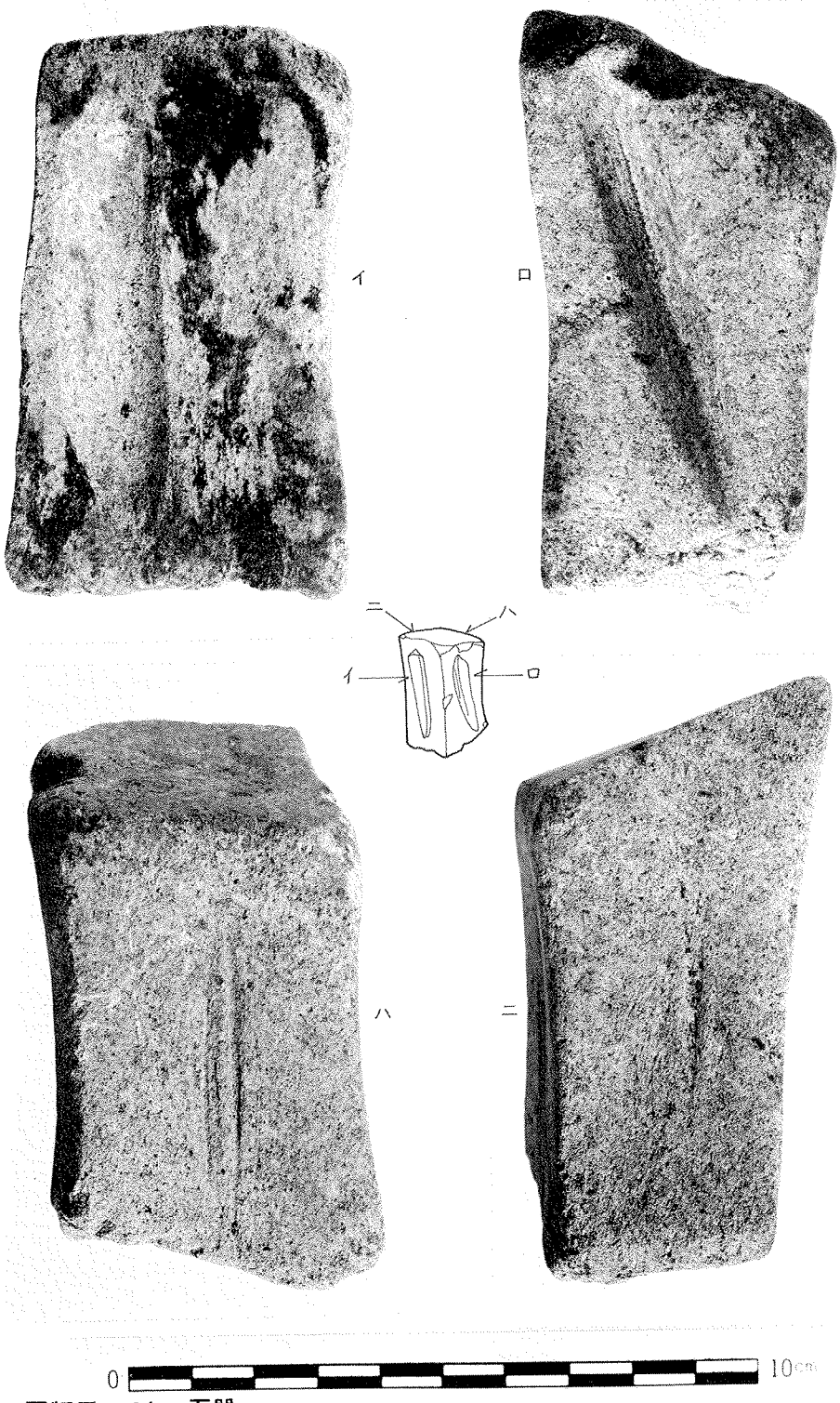
1

2

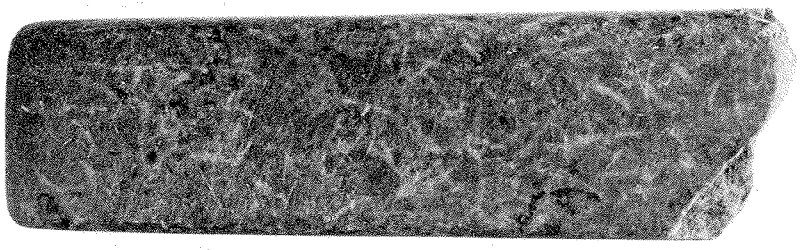


3

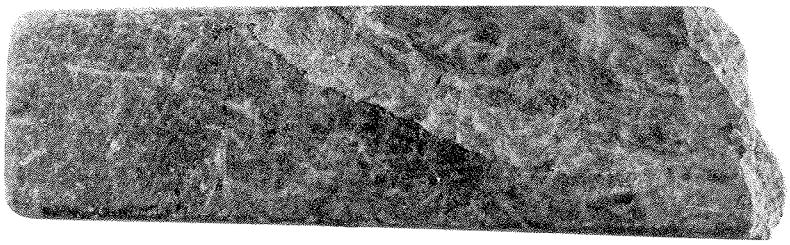
図版Ⅲ－20　土器の器面（調整痕のみられるもの）



図版Ⅲ－21　石器



1

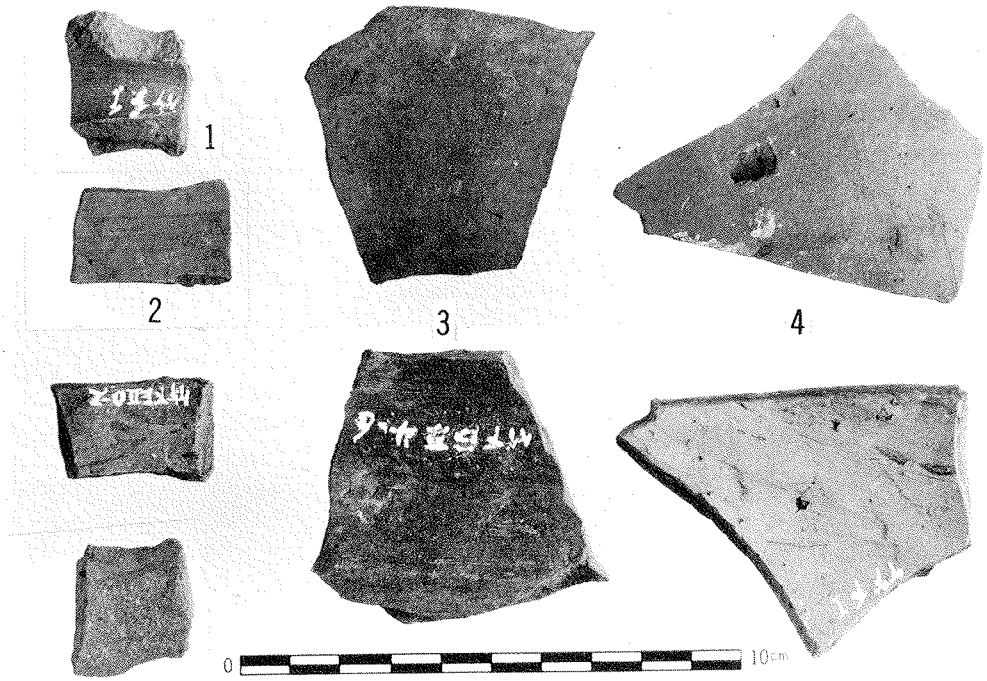


0 10

2

図版Ⅲ－22　石器

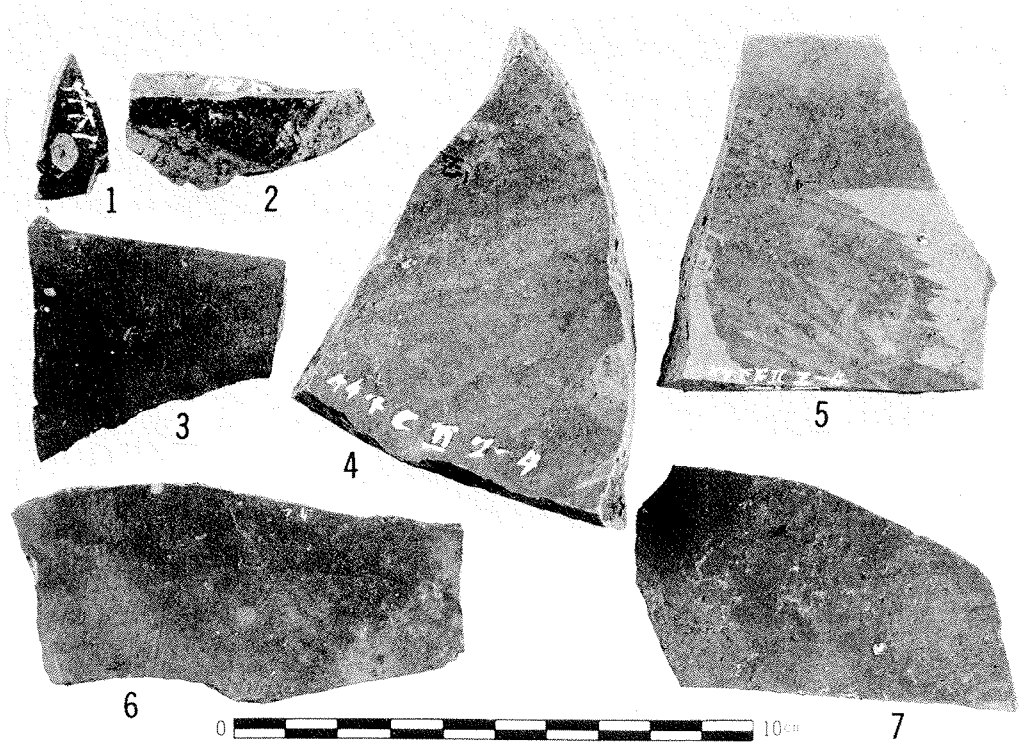
A



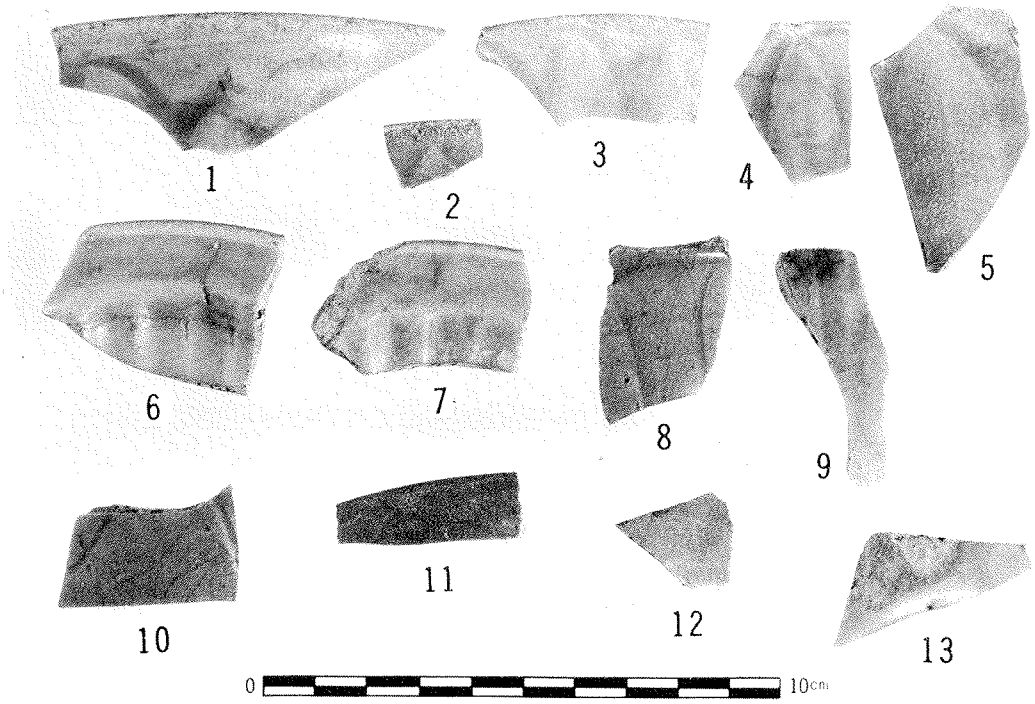
B

図版Ⅲ－23　A　須恵器　　B　陶器類

A

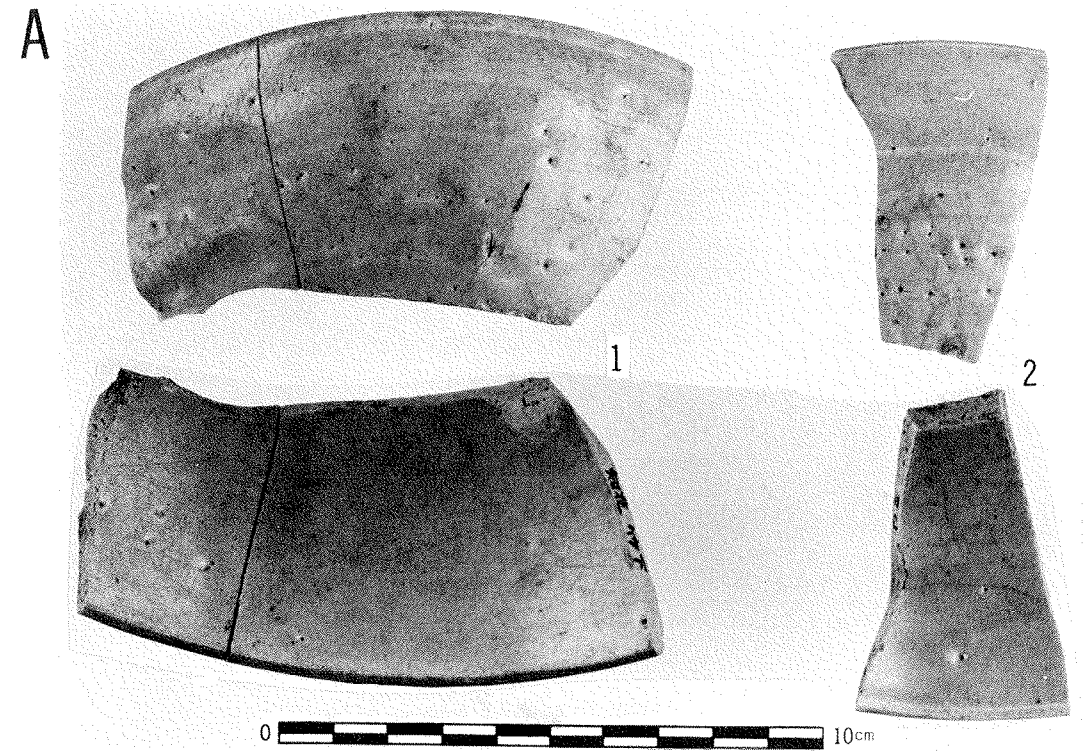


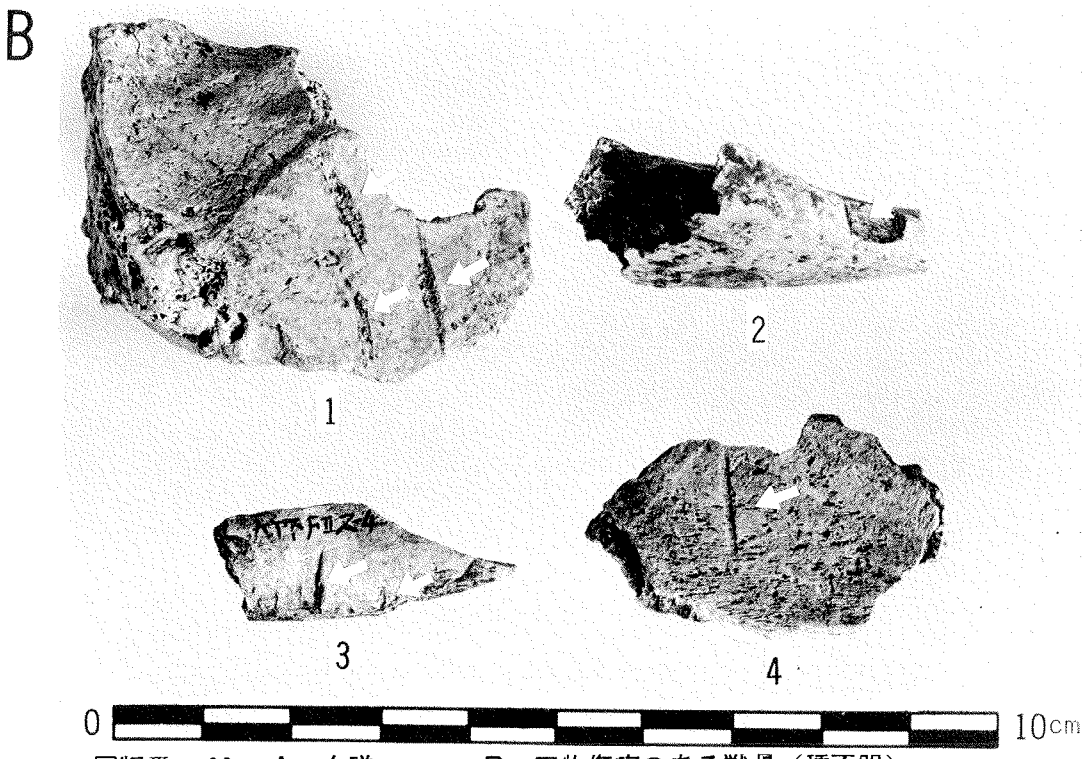
B



図版Ⅲ－24　A　外国製陶器（Ⅱ～Ⅳ類）
　　B　中国製青磁（Ⅰ～Ⅲ類）

図版Ⅲ－ 25　中国製白磁





図版Ⅲ－26　A　白磁　　B　刃物傷痕のある獣骨（種不明）

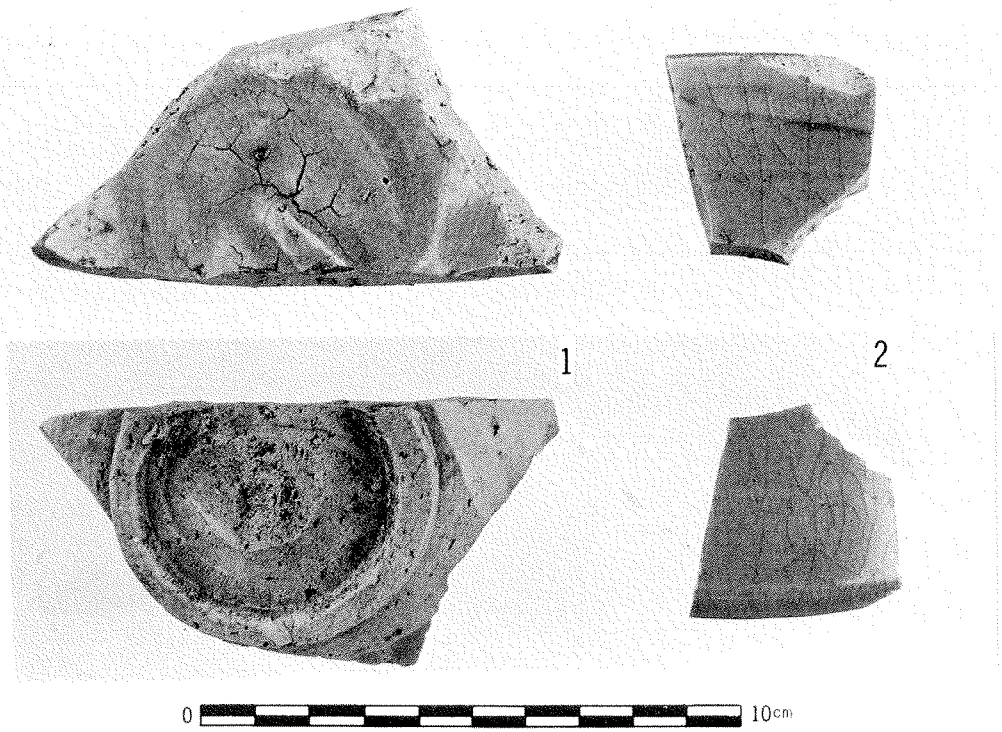
おわりに

知花遺跡群は，1960年の発見当時すでに採石工事が始まり，1962年の緊急発掘調査の段階では，かなりの破壊を蒙っていた。その後もなお工事は続き，今日見るような岩肌がムキ出しの荒野に変わっていった。

今回の範囲確認調査にあたり，わずかながらも遺物包含層の未だ存在することを期待したのであるが，結果としては予想以上に遺跡が破壊されていることを確認することとなった。今，確実に昔日の面影を留めるのは，丘陵北端に位置する尖塔状の岩山だけである。

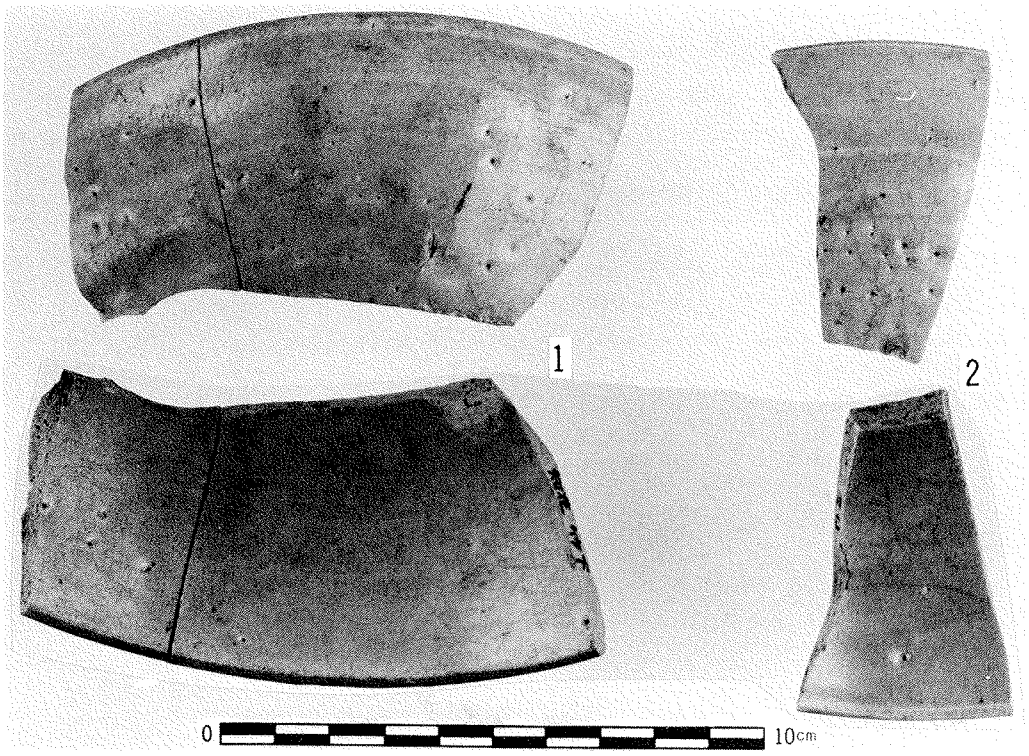
一方，今回の調査において丘陵南半部で，新たにグシク時代遺跡＝竹下遺跡が発見されたことは収穫であった。遺物の上から，その時期をある程度限定し得ることも意義深い。

知花遺跡については，1962年8月の調査内容を収録することとしたが，琉球政府文化財保護委員会時代の調査成果が，ここにやっと陽の目を見ることになったのは幸いである。遺跡が失われてしまった現在，その刊行の意義はより大きいものと考える。

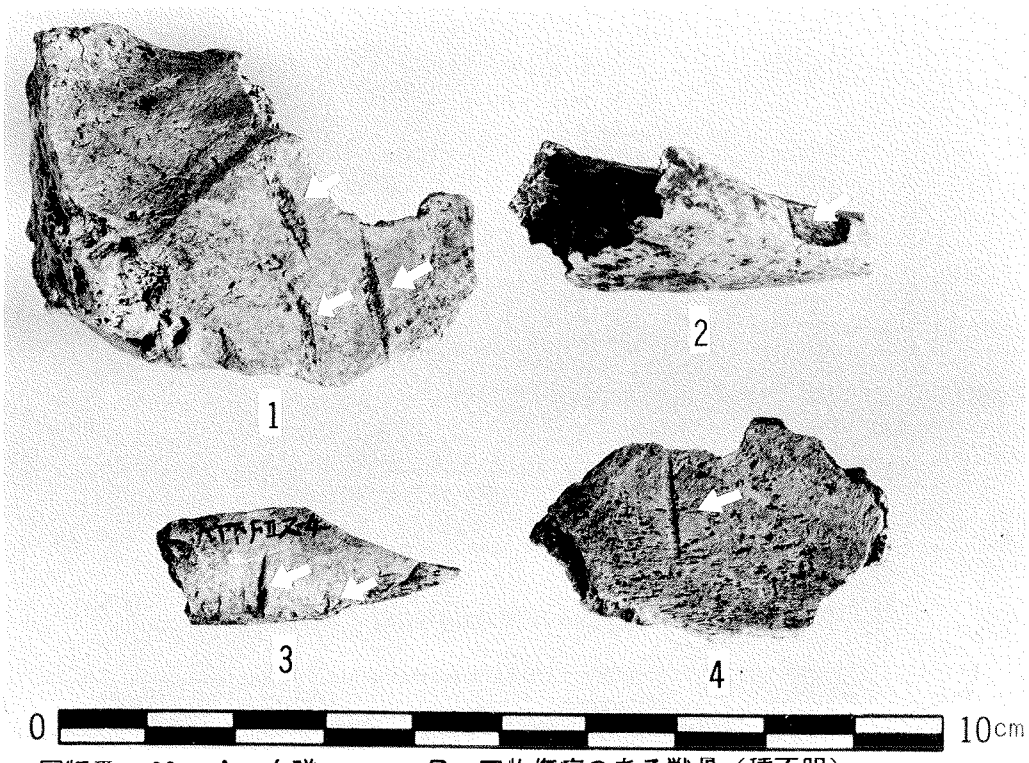


図版Ⅲ－ 25　中国製白磁

A



B



図版Ⅲ－26　A　白磁　　B　刃物傷痕のある獣骨（種不明）

おわりに

知花遺跡群は，1960年の発見当時すでに採石工事が始まり，1962年の緊急発掘調査の段階では，かなりの破壊を蒙っていた。その後もなお工事は続き，今日見るような岩肌がムキ出しの荒野に変わっていった。

今回の範囲確認調査にあたり，わずかながらも遺物包含層の未だ存在することを期待したのであるが，結果としては予想以上に遺跡が破壊されていることを確認することとなった。今，確実に昔日の面影を留めるのは，丘陵北端に位置する尖塔状の岩山だけである。

一方，今回の調査において丘陵南半部で，新たにグシク時代遺跡＝竹下遺跡が発見されたことは収穫であった。遺物の上から，その時期をある程度限定し得ることも意義深い。

知花遺跡については，1962年8月の調査内容を収録することとしたが，琉球政府文化財保護委員会時代の調査成果が，ここにやっと陽の目を見ることになったのは幸いである。遺跡が失われてしまった現在，その刊行の意義はより大きいものと考える。

沖縄県文化財調査報告書第16集

知　花　遺　跡　群

発　行　沖縄県教育委員会
編　集　沖縄県教育庁文化課
那覇市旭町1
0988－66－2731
発　行　1978年3月31日
印　刷　（株）文　進　印　刷
電話（0988）33－2531
55－3838